生命と仏法を語る 下巻

池田大作

下巻目次

第八章 全体[健康]と安楽の欠如[病気]の間 9
医学的治療を生かしきる「力」　これから多くなる食中毒　科学性に富んだ「先人の知恵」　「利他」の実践がストレスを解消　クーラーによる冷房病は文明病　心がけたい子供の健康管理　自殺や事故の根本的内因　現代病を最大限に防ぐ法　より深き人生を志向する健康観

第九章 「平健康人」時代に考える 63
世界の縮図・ハワイで平和の祭典　病魔との闘いだった青春時代　人生観の昇華につながる「病」　生きることの〝質〟が問われる時代　仏法の寿命観、延命観　寿命の長短と人生の価値　「八」がもつ多様な意味　法華経は「開結」合わせて「八万四千字」　世界の蓮華を一堂に咲かせる夢　「八葉の蓮華」の意味するもの　広々とした境涯を開く仏法　世界平和は民衆次元の交流で

第十章 「生命」と「環境」を考える 119
環境世界と人体の関係　仏法が説く「依報」と「正報」　宇宙の運行も「わが身」に関連　この地球は全生命共通のオアシス　血液循環にも影響あたえる環境の変化　人間生命誕生の本来的意義　あらゆる生命を育む慈悲の法則性　仏法根底に文化の創造

第十一章 人間の「生と死」のドラマ ——— 169
医の根本は医者と患者の信頼関係　航空機事故の連鎖反応で思うこと　仏法では「死」をどうとらえるか　仏における難の意義　仏法の根底は「因果論」　「宗教」とは生命根本の教え

第十二章 現代語のルーツ「法華経」 ——— 211
人間のための宗教　仏教は「唯心」「唯物」を超克　現代科学も「生命」に接近あこがれの地「敦煌」　大英博物館で「ブッダ展」　「法華経」を志向した明治の文人　日常化している仏教用語　最先端の学問を修学された大聖人

第十三章 ミクロとマクロ・「生命」の不可思議 ——— 249
はじめての精密検査　健康の基本は食事と運動　遺伝を決定するＤＮＡの正体　二十一世紀は余暇の時代　新たな価値観求められる生命の世紀

第十四章 仏法の眼・医学の眼 ——— 277
医学に必要な確固たる生命観　生命のすばらしき力用と創造性　人間の営みと大宇宙の運行　戦争こそ地獄の行為　宗教は「生命」の病気を治す

第十五章 ストレスと「衆生所遊楽」の境涯 303
科学の進歩が仏法を証明　現実社会を変革しゆく本源の「法」　「九識論」と大脳生理学の成果　「宇宙即我」の次元まで広がる境涯　胎児の最大のストレスは「家庭環境」　人生を楽しむために生まれてきた

第十六章 「宇宙即我」と「一念三千」の法理 333
宇宙の情報が集約している人間の脳　「信仰」と「理性」の関係　仏教があたえたキリスト教への影響　仏典に説かれた「死」の姿　子供は何歳から「死」を意識するか　仏法は「三世の生命観」が大前提　西欧の学者が迫った生命の「我」

注解 366

索引 i

生命と仏法を語る　下巻

第八章　全体（健康）と安楽の欠如（病気）の間（あいだ）

医学的治療を生かしきる「力」

――今後、とくに仏法で説く「*依正不二（えしょうふに）」論について、掘り下げていただければと思います。

池田　そうなると、「色心不二（しきしんふに）」論も当然含まれてくることになるでしょう。

屋嘉比　これはすごいことです。医学との関連においても、どうしても知りたいし、私にとっては、いわゆる精神と肉体のかかわり合いを深く勉強できる、よい機会と思っています。

――当然、屋嘉比さんの研究とも深い関連があるわけですね。

屋嘉比　これは、私がもっとも興味をもっているテーマです。

十九世紀のドイツ医学界の有名な病理学者、ロキタンスキーが指摘したように、〝胃の病（やまい）は脳の病〟といわれます。これは、心理的ストレスが胃の働きにたいへん影響することからもわかります。

池田　たしかに現実でしょうね。胃の働きは、心の座である脳と密接不可分であることは、多くの医学者が一致して論じていますからね。

屋嘉比　おっしゃるとおりです。

池田　どんなに美味しいものでも、目かくしして食べた場合、本当のうまさはわからない（笑）。いや、私はいっぺん試したことがあるんです。（大笑）

屋嘉比　実際そうなんです。食事をするのは、じつは胃や口ではない。本当は脳が食べるんです。（笑）

池田　ですから、空腹感は、いちおう胃袋であるには違いないが、根本的には脳の命令であり、脳の働きである。

要するに、そうなると満腹感もまた胃ではなく、脳が味わうことになってきますね。（笑）

屋嘉比　ええ。ですから交通事故などで、脳のなかの食欲中枢や満腹中枢をやられてしまうことがあります。

そういう場合、まったく食欲を失ったり、あるいはいくら食べても満足しない状態になる人が、実際いるんです。

池田　具体的にどういう……。

屋嘉比　私が知っている症例は後者の例で、体重四十八キロの若い男性が、約四か月間で九十六キロにもなってしまったそうで、たいへんに驚いたことがあります。

池田　そうですか。

こうなると、いわゆる「心」と「身体」という関連性も医学の基本となる。また仏法の基



対談中の池田名誉会長（右）と屋嘉比氏。

本ともなってくるように思いますが。

屋嘉比　本当にそのとおりと思います。ストレスもそのひとつの例です。心理的なストレスが起こると、血圧、肩こり、声などにも影響が直接的にあらわれますからね。

池田　そうでしょうね。

屋嘉比　現在、日本でもガンによる死亡が第一位ですが、ガンなどの病気においても、その人の生きようとする意欲の差によって、病気の経過に違いがあらわれるというデータも、ハッキリとでています。

池田　たとえば具体的に……。

屋嘉比　いくつもの例がありますが、ロンドン大学の医学者の研究では、六十九人の初期乳ガン患者に対し、手術後、医師がガンの宣告をしたときの患者の心理的な反応と、その後の闘

病の経過を分析しています。

――欧米では、ガンを本人にも教えるんですか。

屋嘉比　多いようです。知る権利が強いんでしょうか。

そこで、患者の反応には四つのタイプがあったわけです。

一つは、否定した人、自分はガンではなかったと本心から思った人。

二つは、病気に対してファイティング・スピリットをもやした人、ガンを打ち負かすぞと意欲を示した人。

三つは、平静さをよそおって驚きをみせないが、心のなかで強くショックを受けたと思われる人。

四つは、落胆した人、絶望感を示した人。

池田　その結果は……。

屋嘉比　五年後に追跡調査した結果によると、「一」と「二」の人の場合は、生き抜いている人、またガンが再発しなかったケースが多いという分析データがでたそうです。

これは、私が診（み）た患者にも、似たケースがあって、私自身も納得いく気がします。

池田　そうですか。「三」と「四」の場合は……。

屋嘉比　やはり結果は芳（かんば）しくなかったようです。

池田　要するに、病気をも乗り越えようとする自分自身の強靭な意志が、どうしても大切となる。これが医学的にも重要であるというわけですね。

屋嘉比　そう思います。

池田　しかも、その意志力というものは、単に意志が強固というだけではない。それは〝自分はまだ生き抜けるんだ〟という、自分自身の存在全体に対する確信にちかいものであると思います。

屋嘉比　それはたしかにあります。本然的な、生命のもつ生きゆく力といえるかもしれません。

池田　つまり、要は、その人自身の全生命力の問題ではないでしょうか。

いまの調査結果は、その一分のあらわれでしょう。

そこで、人間の身体は、母親の胎内にいるときは、本来、母親の免疫によって守られた汚れなき世界である。だがひとたび、そこから誕生した場合、外界のあらゆる病原菌と戦いながら成長していくわけですね。

屋嘉比　ええ。たとえば、人体の体液性免疫をつかさどるリンパ球のB細胞は、なんと約十億種類もあります。

これが、どのような病原菌が侵入してきても対応して抗体をつくります。この免疫力も、

細菌との戦いによって発達し、成長していきます。

池田　また人間は、精神的にもさまざまな苦難や試練をへてこそ、人格も磨かれていくことは、当然の道理である。これだけをみても、「生き抜いていく」ということは、つねに、なんらかのものへの挑戦の連続であることがわかるものです。

屋嘉比　そのとおりです。

池田　いわば人間の身体は、それこそ多くのホルモンやタンパク、免疫抗体などをつくりだす。さながら、生命それ自体が〝一大製薬工場〟である。

その工場をみずから懸命に回転させながら、あらゆる病原菌と戦い、みずからを維持し、発現していくのが、生命の本然的姿であるといってもよいでしょう。

――その偉大なる生命の力を、生活にも、社会にも、すべて発揮できればすばらしい。

池田　ですから、「妙」とは「開く義」「具足（円満）の義」「蘇生の義」というがごとく、この人間生命全体を、完全に発現、躍動し、人生を無限の価値へと志向せしめていく。さらには社会の蘇生へと連動、開きゆく一法が「妙法」である、というわけなんです。

屋嘉比　すると、「妙法」とはすべての「蘇生」への普遍的法となるわけですね。

池田　そうです。ですから、この「妙法」とは、ありとあらゆる人間の苦悩、煩悩というものを、菩提へと転じせしめゆく、人間生命全体の強さの本源といってよいかもしれない。

これが、病気というものをも克服しゆく力となって、あらわれていくと思うのです。

屋嘉比　現代医学の最前線でも、人間の体内それ自体の働きに焦点をあてています。たとえば、ガン克服も、*インターフェロンやキラー細胞のように、体内においてガンを防ぎ、治癒（ちゆ）させていく物質の発見に全力をあげているわけです。

したがって私は、そのもう一歩深い仏法のとらえ方もわかる気がします。

池田　ですから私は、信仰をすればただそれだけで病気が治るというような、飛躍した見方はしておりません。

つまり、自身に内在する強靭な意志力、つきつめれば〝生命力〟を無限に発現し、あらゆる医学的治療を最大限に生かしきっていくのが、仏法の信仰と思っております。

これから多くなる食中毒

池田　そこで、この章では屋嘉比さんに、病気という問題について、いくつかおたずねしたいと思っております。当然、専門医の見解もあるでしょうし、また専門書にも、さまざまな次元からの解釈があることを知っておりますが、きょうは、町の〝赤ヒゲ医者〟という立場からお願いします。（笑）

――たしかに、現代の生活にスポットをあてながら、うかがいたいことがたくさんありますね。

屋嘉比　私個人の見解として、思ったまま、感じたままを、述べさせていただきます。じつは、この対談を始めるにあたって、いつかは論ずるであろうと思って用意した資料もありますので、それも使わせていただきます。（笑）

池田　そこで、いよいよ暑い夏にはいりますが、屋嘉比さん、どういう病気が多くなるんですか。

屋嘉比　いや、統計的には、いわゆる脳卒中、心臓病、腎臓炎などによる死亡数は、夏がいちばん少ないというデータがでています。

池田　すると、昔は、夏に亡くなる人が多いといわれていたが、いまは冬のほうが多い……。

屋嘉比　そのとおりですね。抗生物質などの出現により、夏多かった結核や肺炎、腸炎などの疾病死（しっぺいし）が戦後、急激に減少したことも大きな要因です。

池田　しかし、食中毒なんかは初夏から起こる可能性がたかい。

屋嘉比　そのとおりです。初夏から秋口にかけてと思います。

――先生は食中毒の経験がありますか。



電子顕微鏡で見たポツリヌス菌。

池田　あります。小学生のころ、一、二回激痛をともなったことを覚えている。

また戦後、外食券食堂でサバの煮つけを食べて、全身ジンマシンになって、苦しんだことをよく覚えています。屋嘉比さんはどうですか。（笑）

屋嘉比　たびたびあります（笑）。二、三年前の夏に、病院の当直をしてて、夜中にシュークリームを食べて、脱水症状を起こし、足腰が立たなくなったこともありました。（笑）

池田　ああ、そうですか。医者たりともあるんですね（爆笑）。どうして治したんですか。

屋嘉比　脱水症状がひどいので、一日入院し、水分を補うため六本の点滴をうちました。

池田　食中毒には、どういう菌があるんですか。

屋嘉比　腸炎ビブリオ、サルモネラ、ボツリヌス菌、病原性大腸菌、ブドウ球菌などがあります。

たとえば、魚介類などの腸炎ビブリオという、食中毒の半数以上を占める細菌は、温度が二十度以上だと盛んに増殖します。

これが発病するときは、一億ほどの菌が口からはいっているといわれます。

――九州の辛子蓮根の中毒は、痛ましかったですね。

屋嘉比　あれは初夏でしたが、このボツリヌス菌はたいへん危険です。この中毒による死亡率は、報告によれば約三〇から五〇パーセントにものぼります。

また、赤痢やチフスなどの伝染病は、十か二十の細菌が口からはいるだけでも発病します。

池田　テレビなんかで見ますが、予防はやはり、「清潔」「低温保存」「加熱」の三原則となりますか。

屋嘉比　そのとおりです。さらにボツリヌス菌などは、発生しやすい特有の食品がありますので、注意してください。

――こうした病因についても、仏法では何か説かれていますか。

池田　いくつかあります。そのひとつの例として、御文には、われわれの生命の「三十六物」にはいりこみ、その機能を狂わし、蝕む働きについて説かれている。

――その三十六種とは……。

池田　それは、

「糞と尿と唾と肉と血と皮と骨と五蔵と六腑と髪と毛と気と命等」（「日女御前御返事」一二四六）

であるとあります。

屋嘉比　科学的ですね。

――つまり、伝染経路ということにもなりますね。

池田　そこで仏法は、この三十六種類を要約して、三つの次元からとらえている。

一つは、「糞」や「尿」や「唾」などからくる赤痢菌やチフス菌のような外からの働き。

屋嘉比　いま流行の、B型あるいは非A・非B型ウイルス性肝炎も血液感染です。

池田　また仏法で説く「気」というのは、ひとつには呼吸のことでしょう。

ですから、「気」は呼吸器感染のカゼのようなものをさしていると私は思います。

二つは、人体の「肉」や「骨」や「皮膚」、また「五蔵」や「六腑」などの機能を狂わすもの。これはガンや心臓病なども含まれるわけです。つまり、身体の内部から生じるもの。

三つには、精神という意味の「気」、そして「命等」、つまり生命をも蝕む働きがある、とも仏法では説かれています。

屋嘉比　医学的にも、この三つの次元からとらえることは適切です。まことに鋭い把握です。

池田　そこで食中毒になったら、ヒマシ油などを飲ませ、下せとよくいいますが。

屋嘉比　そのとおりです。とにかく吐いたり下したりして、食べた物を体外へ出すことです。そして点滴や解毒剤、場合によっては強心剤などを必要とすることもあるので、すぐ医者に診せることが大事です。

また感染しないよう、触れたもの、使ったものをアルコールや消毒剤などで消毒することも大切な心がけです。

池田　薬で治りますか。

屋嘉比　ボツリヌス菌による場合は、抗血清療法が必要であり、早期に行えば有効です。しかし食中毒の場合、脱水症になることが多いので、点滴などで水分やミネラルを補給することが大切です。

池田　そこで屋嘉比さん、夏にケガをした場合、膿みやすいが、どうでしょうか。

屋嘉比　気温が上がると、細菌が繁殖しやすくなります。さらに季節的にみると、病原菌に対する身体の抵抗力は、夏にもっとも低下しているようです。

たとえば、血液中の白血球の数が減少したり、貪食能（白血球が菌を食べる働き）も低下するといわれます。

――では、どういう応急手当がいいですか。よくツバでいいといいますが。（笑）

屋嘉比　ええ。たしかに唾液には免疫抗体があり、傷口の粘膜の再生をうながすホルモンもあります。しかし口の中の細菌もまじっています。普通は傷ができたら、すぐ水洗いし、家庭常備の消毒薬を塗ってください。

科学性に富んだ「先人の知恵」

池田　夏バテはどうですか。

屋嘉比　夏は食欲低下のため、カロリー不足となり、栄養のバランスがくずれがちになります。

たとえばビタミンAが不足すると、目がたいへん疲れやすくなります。また粘膜が弱くなり、カゼに対する抵抗力が衰えてしまうんです。

またビタミンB_1はスタミナをつけます。Cはバテ気味の体力を回復させ、とくにストレスの多い人や運動をする人に不足がちになるので、補給すべきです。

池田　すると、何を食べたらいいんですか。よく〝土用のウナギ〟とかいわれますが。（笑）

屋嘉比　ビタミンAはウナギとかレバー、ニンジン、ホウレン草、ニラ、マーガリン、バター、抹茶などに多いようです。

池田　ビタミンB1やCはどうですか。

屋嘉比　B1の豊富なのは、胚芽米や豚肉、ノリ、落花生、枝豆、エンドウ豆などですね。Cは、パセリやピーマン、キャベツ、サツマイモ、夏ミカン、キウイなどに多く含まれています。

池田　夏は、豆腐やコンニャクなども食べやすく、身体にいいといわれますが。

屋嘉比　豆腐は植物性タンパク質の固まりで、脳卒中や動脈硬化を防ぐ効果があります。コンニャクはアルカリ性食品で、やはり動脈硬化を防ぎ、便秘を治し、腸内の有害物を除きます。

――仏法では法門を牛乳の〝五味〟（乳味・酪味・生蘇味・熟蘇味・醍醐味）に譬えられていますが、牛乳はどうですか。

屋嘉比　牛乳は、もっともバランスのとれた飲み物で、ビタミンも豊富です。また胃を保護し、さらに最近のアメリカ医学会の研究では、大腸ガンの発病を防ぐ効果があるといわれています。

――夏バテといえば、たしか『万葉集』でも大伴家持のユーモアあふれる歌がありました

ね。やせている友人に対して、

「夏やせに　よしというものぞ　鰻（むなぎ）とりめせ」（笑）

同じ「う」のつくもので「梅干し」「梅酢」。これはどうですか。（笑）

屋嘉比　民間療法ですが、腹痛や下痢、また病気の予防に効くといわれています。ただし、梅干しは、塩分がたかいので、食べすぎは、血圧のたかい人、心臓病、腎臓のわるい人には、あまりよくないようです。

――〝梅干しと友だちは古いほどよい〟ということわざがありますが。（笑）

屋嘉比　いや、それは理にかなっているんですよ。（笑）

五年ぐらい経った古い梅干しは、ナトリウム（塩分）が少なくなるようです。しかも、梅自体の効用はそのまま残っており、安心して食べられます。

池田　私はいつも感心するんですが、洋の東西を問わず〝昔の人の知恵〟は、科学性に富んでいる。梅干しが疲労回復によいとか、キンカンがノドにいいとか、ゴマが疲れ眼によいとか、ジャスミン茶が脂肪を溶かすとか、ショウガやワサビは毒消しとか、ともかくいろいろありますね。（笑）

屋嘉比　そう思います。

池田　そこでアメリカのビタミン研究の先駆者、マッカラムの母親の有名なエピソードを

なにかで読んだことがある。

屋嘉比　マッカラムは生化学史上に残る著名な研究者です。

池田　彼が一歳のころ、ビタミンC不足による壊血病で死にかかった。むずかる彼を、なんとか鎮めようとした母親は、たまたまむいていたリンゴの皮を食べさせた。すると、彼はそれを喜んで食べた。

そこで彼女は、〝食べたがるのは身体が必要としているからだ〟という、昔からのいい伝えを思い出すわけです。そしてリンゴ以外にも、生野菜や野イチゴのジュースなども食卓にだすようにして、病気を治したというのです。

この話は、まだビタミンが発見されない、十九世紀後半のころのことのようですが。

屋嘉比　たいへん示唆に富んだ話ですね。

池田　ボタ餅も、昔の人はよく考えてつくったようですが。

屋嘉比　アズキのなかにはビタミンB_1が多く含まれているからです。これは脚気にいいんです。ただしボタ餅は炭水化物も多いので食べすぎはいけません。（笑）

池田　そうそう、江戸時代には、

「江戸わづらひ（脚気）を治すには、あづきめし」

ともいわれた。（笑）

屋嘉比　ところが最近、独身生活者や単身赴任のサラリーマンのなかに、インスタント食品などの偏食で、潜在的脚気ともいえるビタミンB_1欠乏症がひろがっている、と心配する学者もいます。こうした人たちには、慢性疲労や不定愁訴（ふていしゅうそ）の傾向があるようです。

――野菜はビタミンが豊富なんですね。

屋嘉比　ええ。新鮮なものほどいいんです。これはビタミンを、壊れないうちに多く体内に吸収できるからですね。

たとえば、ビタミンCは、トマトを二個食べると、一日の必要量は満たされるんです。

池田　まあ、トマトは、昔は赤ナスといって軽蔑（けいべつ）されていたようだ。（笑）

屋嘉比さんなんかご存じないでしょうね。

――いや、私たちは知っています。（笑）

池田　昔は、国によっては、トマトのほかにも柿、キュウリ、カボチャ、ニンジン、オレンジ、レモンなども、一時期、毒物扱いされたこともあったようですね。

しかし、時代というものは、さまざまなものを変化させていく。食べ物の評価の変化も、そのひとつのあらわれでしょう。

――あまり変わるので、困ってしまう場合もありますね。

イワシなんか、最近は見直されていますが……。

屋嘉比　イワシは、動脈硬化によいといわれます。ビタミンDも豊富です。それに北海道などでとれるサンマ、サバ、サケ、また秋田で有名なハタハタなどもいいようです。

池田　昔、イワシはバケツ一杯で十銭ぐらいだった（大笑）。食べ物は、生活の基本だから影響が大きい。私どもは、あまり医学的には考えていないが、年齢とともに、たいへんに影響があることはわかりますね。

「利他」の実践がストレスを解消

池田　そこでこんな話もある。

十九世紀の初めごろになりますが、ナポレオンの海軍とイギリス海軍とが戦争していた。そこでいちじ、イギリス軍がフランスの全港湾を封鎖（ふうさ）することに成功した。その封鎖は、たいへんに長期間にわたったようである。当時は、そのような場合、船上の兵士は壊血病になっていく場合が多かったようだ。

屋嘉比　ええ、そのとおりです。

池田　ところが、それを防いだのが、兵士の飲みつづけていたレモンジュースだった。

つまり、弾薬の力ばかりではなく、病気を防ぐ力によったといわれている。

――ところで、昔から「夏は熱いものが腹の薬」といわれますが。

屋嘉比　あまり冷たいものを飲みすぎると、胃腸の蠕動運動に刺激をおよぼし、消化不良を起こします。また発汗の繰りかえしの度がすぎると、体力を消耗します。ともかく、食事内容と体調とは密接な関係にあることを、もっと認識することが健康の第一歩と思います。

池田　そうでしょうね。当然の道理と思います。ある著名な評論家との対談でた話に、第二次世界大戦のなかで、ポーランドかチェコかの兵隊が、まことに強かった。その原因を調べてみると、毎日、ゴマを食べていたということでした。

屋嘉比　たしかにゴマは、植物性脂肪やタンパク質がたいへん豊富です。またビタミンB_1も多く含まれています。

池田　ともかく、日常生活にあって、食事をはじめ規則正しいリズムが、健康の大事な要素となることは間違いない。

屋嘉比　それとともに、これは病気全般にいえるんですが、とくに現代人に多いストレス病について、カナダの著名な医学者であるセリエ博士は、解決法としては、人から感謝され

るような自分になるのが大切である、といっています。

――よくいうストレス解消法というのは、仲間と酒を飲んだり、マージャンやったり(笑)旅行とかいろいろありますが、やはり、これは刹那的ですね。終わったあとは、またストレスがたまったり。(大笑)

池田　さきほどのセリエ博士の見解は、要するに、自分自身の「一念」または「我」の拡大の重要性をさしていると思いますが。具体的には、どう書いてありますか。

屋嘉比　「利己的衝動を利他主義に変形させる」。また「他人に感謝の気持を起こさせることが、われわれの安全を的確に保障することになりそうだ」といっています。

池田　そうでしょうね。私はよくわかります。

仏法では「利他」とは菩薩の「一念」、菩薩の「我」をさしている。

そのセリエ博士のいわんとする真髄は、*大乗仏教のなかにあると、私は結論したい。

私どもがこの規範にのっとり、日夜主張し、行動しているのはご存じのとおりです。

ともかく一流の人の見識は、みな仏法にちかい。

――「利己的衝動を利他主義に」とは、抽象的にはわかるが、具体的にはなかなかむずかしい。

そこに、確かなる法とそれにのっとった行動とが、必要不可欠と思いますね。

池田　仏法では、「喜とは自他共に喜ぶ事なり」（「御義口伝」七六一）と説いている。また「*慈悲」を、行動の最大の視点としてとらえている。

ともあれ、宇宙の森羅万象ことごとく、単独の現象はありえない。なんらかの連関性があるものだ。

また、人間の細胞も単独では存在しえないし、活動しない。と同様に、人間の社会もまた同じ方程式となる。そうした意義からも、私どもが信奉する「法」とその「行動」はまったく正しいと、私は断言せざるをえない。

クーラーによる冷房病は文明病

池田　話は変わりますが、夏カゼは、どう注意したらよいんですか。

屋嘉比　じつはカゼ・ウイルスは、人間の生活環境内の暑さ寒さとはあまり関係ないんです。

実験では、部屋の湿度が低いと、インフルエンザ・ウイルスの感染力が長時間つづくことが証明されています。

池田　すると冬にカゼが多いのは……。

屋嘉比　まず空気も乾燥しますし、部屋の暖房によって室内の湿度も低下するからです。

――やはり、うがいが大事ですね。（笑）

屋嘉比　簡単なことのようですが、いちばん理にかなっています。

――カゼは万病のもととよくいいますが。

屋嘉比　こじれると肺炎、さらにリューマチ熱、腎炎などを併発（へいはつ）する場合があります。夏カゼの主な原因は、高湿度に強いエンテロウイルス、アデノウイルスなどです。とくに子供たちが寝冷えしたりしないよう、細かい心くばりが大切と思います。

池田　たしかに、人生万般にわたって小事が大事ですね。そこで私はいつも思うのです。私たち大人は、未来に生きゆく大切な青少年に対して、もっと細かいところまで注意をはらってあげねばならないと……。いまは商業主義などの氾濫（はんらん）で、健全なる成長への正しき軌道を、忘れがちになっていく傾向が強いからです。

もう三十年以上も前になるでしょうか。青年たちの会合が、屋外で行われたことがあった。雨が激しく降ってきたとき、戸田*前会長は即座に、「新聞紙をいっぱい集めて、カゼをひかないよう服の中に入れろ」といわれたことがある。ささいなことのようであったが、われわれはそれでずいぶん助かった記憶が、鮮明に残っています。

屋嘉比　それは保温作用ですね。誰も気がつかない細かい配慮が、多くの人を守ってますね。まことに立派な先生と思います。

――池田先生もまったく同じと思います。

会合の前、疲れていないか、おなかがすいていないか、いつも気をくばっておられる。

屋嘉比　本当の指導者は、このようにまことに細かい視点で、人々を見守っていくものでしょうね。

池田　いや、私は平凡な人間で、もっともっと修行しなければならないと思っております。ただ大事なことは、みなが安心感をもち、心から納得し、次の行動をとっていけるように願っていくことではないでしょうか。

――頭が下がります。できることのようで、できないことです。

池田　ところで、クーラーによる〝冷房病〟はどうなんですか。

屋嘉比　これは問題です。いわゆる温度の急激な変化がストレスとなって、人間の気温適応能力をくずす、肉体的ストレスと考える学者もいます。

池田　いったい、何度ぐらいにすればいいんですか。

屋嘉比　外気との温度差五度以内が理想的といわれます。症状としては、ご存じのように、頭痛、だるさ、イライラ、胃腸の不調、さらに神経痛、リューマチなどになる率が多い。

池田　すると冷房病は、完全に現代病となってしまった。また文明病といえるかもしれない……。

屋嘉比　別の面でいえば、クーラーが外に出す排気熱が、都会から〝夕涼み〟を奪ってしまった、という人もいますからね。

池田　冷房病は、若い人と年配者では、影響は違うでしょうね。

屋嘉比　とくにお年寄りは厚めの靴下をはくとか、薄着しないことが大事です。

池田　子供の場合、将来に影響がありますか。

屋嘉比　あると思います。たとえば、人間の汗腺の数は、幼児期に育った場所の気候条件に左右されます。ですから、冷房のなかだけで育てると、自然の影響を受けにくくなり、汗腺の数が減ることも考えられます。

また女性は、ビル勤務者の七〇パーセントが、なんらかの症状を訴えた調査結果もありますから、要注意です。

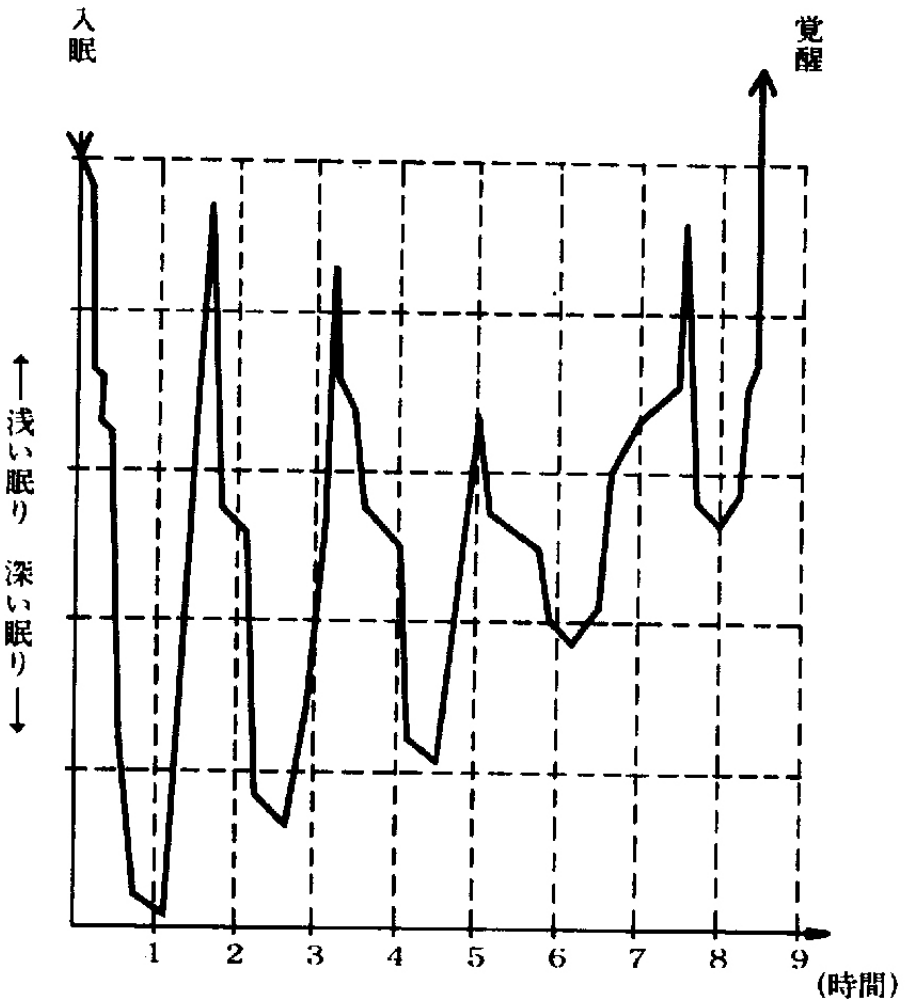
池田　そういえば、京都は盆地である。暑さがひどい。不快指数八十五以上の日数もとくに多い。ですから昔もいまも、風通しがよくなるよう〝風の通り道〟をつくっている家が多いと聞いて、私はうらやましいと思った。

生活の知恵を、それなりに生かしていくことは大切でしょう。

そこで暑いと睡眠不足になる。いったい睡眠時間は、どれくらいとればいいか。

屋嘉比　個人差もあるでしょうが……、一般的に成人で、七、八時間、赤ちゃんは十六時間から二十時間、小学生ですと、九、十時間と思います。

池田　十二世紀のある学者が「人は二十四時間の三分の一を眠るべきだ」と提唱したのは有名ですが、医学的にみてどうですか。



健康な眠りの曲線

屋嘉比　はっきり断定できる根拠はありません。しかし、最低でも五時間は必要と思います。

池田　当然、熟睡が大事でしょうね。

屋嘉比　そうです。また、不眠症に対して過眠症というのがあります。これは寝ているわりには元気がなく、肩がこったり、疲れがとれないなどと訴えます。

私の患者さんにも「よく寝てるんですが」と聞いてくる人がいます。ところがその人の場合は、寝すぎも体調が不調になる原因のひとつになっていたんです。

ですから、いくら寝ても寝足りないのは、身体のどこかに異常があることが多いので、病気の有無をチェックする必要があります。

時間の長短より、疲れをとり、活力を補充する睡眠がどうしたらできるか、眠りの質を工夫することが大切と思います。

池田　では、どうすれば安眠できますか。

屋嘉比　いろいろあるようですが、一般的には、室温が、夏で二十二、三度、冬で十二、三度が基準になっています。

池田　そうでしょうね。二十五度以上になると熱帯夜ですが、扇風機やクーラーのつけっぱなしは、絶対にいけない。

屋嘉比　そのとおりです。かえって疲れたり、体調をくずします。

池田　寝具はどんなものがいいですか。

屋嘉比　ほどよき硬さと、大きめのサイズ。

枕（まくら）は肩幅ぐらいの大きさで、通気性があるのが、快眠の条件といわれています。

池田　すると、枕の高さはどのくらい……。

屋嘉比　昔から「寿命三寸、楽四寸」といわれています。

これは長生きしたかったら、枕を楽な状態から一寸（約三センチ）低くするのがよいということですね。「枕を高くして寝る」というのは、身体にはよくないようです。（笑）

池田　その理由は……。

屋嘉比　肩や首の筋肉に負担がかかりますし、また脳波も落ち着かないようです。このことは医学的にも実験されています。

心がけたい子供の健康管理

池田　そこで夏休みは、親子の生活時間が多くなる。少し身近なことをおうかがいしたい。

ムシ歯の原因は、わかっていますか。

屋嘉比　じつは、医学的にはまだ完全に解明されてはいないんです。ただ、歯垢（歯の汚れ）のなかの細菌が原因になるようだといわれています。

池田　そうですか。甘い物とムシ歯の関係は、よく指摘されますが……。

屋嘉比　それは、原因のひとつになります。敗戦後、甘い物が不足したとき、ムシ歯が激減しました。ところがその後、激増し、日本の子供のムシ歯はおそらく世界一ひどいといわれています。

それをみても、糖分のとりすぎがムシ歯の発生にもっとも都合のよい条件になっていることは、事実のようです。

池田　ムシ歯は、エジプトのミイラや古代ギリシャ人の骨にも残っているという文献もありますが（笑）。甘い物が好きな人は、みんなムシ歯になりますか。

屋嘉比　いや、そうとは限りません。その人の歯の質と歯垢が問題になります。ですから、食後の歯みがきの励行が大事です。

池田　歯の質は、先天的なもんですか。

屋嘉比　多少は、それもありますが、胎児のときから十歳ぐらいできまってしまうという説があります。

池田　そうすると、母親の心がけが大事ですね。

屋嘉比　ええ、歯も身体の他の器官と関連していますから、丈夫な身体をつくるためのバランスのとれた食事が、また丈夫な歯をつくることになります。

池田　それでは最近、眼鏡（めがね）をかけているお子さんが多いが、その原因はどうですか。

屋嘉比　たしかに小学生や中学生に増えています。これは、〝学校近視〟ともいわれ、卒業すると、あまりすすみません。

この点をみても、眼を酷使（こくし）する生活環境が原因ともいえます。

池田　それはやはり受験勉強やテレビ、漫画の見すぎですか。

屋嘉比　それもありますが、現代っ子は、屋外のひろびろとしたところで運動したり、遊んだりする機会が少なくなっていることも、影響があるようです。

それに、緊張感や不安感も眼に影響するという、アメリカの眼科医もいます。

池田　近視は予防できるんですか。

屋嘉比　遺伝的な要因もありますが、あまり眼を疲労させたり、緊張させないことが大事です。

池田　たとえば……。

屋嘉比　長時間テレビなどを見つづけないこと、姿勢をよくすること、照明に気をつける、つとめて戸外で運動する、といった細かい点に気をくばることです。

池田　テレビを見るのは、一日何時間ぐらいが適当ですか。

屋嘉比　これはなんともいえませんが、眼のためには少ないにこしたことはないと思います。

また、あまり近くで見ないこと。カラーの調整を正しくすること。それから三十分ないし一時間の間に、十分ほどテレビから目を離し、遠くを見たりすることですね。

池田　それと、年配になると、どうしても眼が疲れやすくなるが……。

屋嘉比　これは、眼の負担をできるだけ減らすことしかないようです。眼の機能も、年齢とともに低下してくることを、自覚しなければいけませんね。（笑）ただ、糖尿病や高血圧などの病気から、眼の病気を併発している場合もありますから、医者の診断も大事です。

――仏法では、医者にかかるとか、輸血とか、手術とか、どうとらえますか。

池田　結論して申しあげれば、全部自由です。なぜならば、

「三千大千世界にみてて候財も・いのちには・かへぬ事に候なり」（「白米一俵御書」一五九六）

という生命を、どのように維持するかが、仏法の目的である。その目的を助けるための手段として用いるのは、当然のことです。生命蘇生への最大の力を与え、またすべてをその方

向へ動かしゆくのが、仏法の信仰だからです。

屋嘉比　おうおうにして宗教は、なにか制限したり、非科学的、反社会的になる場合がありますが、仏法は根本的に納得できますね。

池田　これから夏休みは、家族で旅行する機会も多い。そんなとき、幼児が急に「ひきつけ」を起こした場合、どうしたらいいか。

屋嘉比　ひきつけを起こす子供はわりと多く、十人に一人は経験しているようです。まず、うろたえないことです。部屋を暗くして静かに寝かせておけば、普通は数分で回復します。

池田　舌を噛み切らないよう、ハンカチやガーゼなどを前歯で噛ませろといいますが。

屋嘉比　歯をガクガクさせて、舌を噛み切る可能性のある場合は、なにかを噛ませたほうがいいと思います。そうでない場合は、ムリにこじあけてまでする必要はありません。

私も、子供が四十度ちかい高熱を出して、ひきつけを起こし、あわてたことがありました。そのときに、本当に自分のこととなると、医者とはいえども、やはり心細くなるものと、しみじみ思いました。(笑)

ともかく、熱がでてきたら、ひきつけを起こすまえに、小児用の解熱剤をあたえ、頭を冷やすなどして、熱を下げることが大事です。

池田　なぜこんなことを聞くか、じつは理由があるんです。とくに若いお母さんに知って

いただきたいからなのです。

それは、もう十数年前になりましょうか。大阪へ向かう車中だったと記憶していますが、私の五つくらい前の座席で、子供がひきつけを起こしたらしいんです。若い母親が突然、「子供がたいへんなんです。誰かきてください。お医者さんいませんか」と動転して、大きな声で叫びだした。すぐに連絡をした車掌さんも、大声で「どなたかお医者さんはいませんか」と呼びかけながら、車内を走っていく。周りにいた人も、どうしようもない。やっと二、三十分して、応急手当をしておさまったことを、まざまざと覚えています。

屋嘉比　そんなことがあったんですか。

――ぜんそくの発作の場合はどうですか。

屋嘉比　ぜんそくは、夏がいちばん少ないようです。ぜんそくの場合、座った姿勢のほうが、呼吸が楽になります。ふとんを積み重ねて、うつぶせに寄りかかれるようにしてあげ、背中をなでると楽なようです。

池田　法華経では、ぜんそくを「短気（たんけ）」、また御書には「せひせひ」ともいっていますが、私の父親もぜんそくであった。また私も、軽いぜんそくなんです。ときどき、胸をさすったり、背中をさすってもらう理由も、それなんです。

屋嘉比　ふつう、よくゼエゼエするんですが、先生の場合、何回お会いしても、わかりま

せんね。

池田　ところで子供が火傷（やけど）した場合、家庭でできる手当はどんなことがありますか。

屋嘉比　まず、ただちに患部（かんぶ）を冷たい水につけ、冷やすことです。これはどんな火傷にも共通した処置です。

池田　それは、私がよく知っている夫婦がいる。これも十数年前でしたか、女の子がつまずいてヤカンをひっくり返してしまい、熱湯（ねっとう）を浴びた。それを聞いて、本当に私は痛ましい思いをした。

屋嘉比　ああ、そうですか、気の毒ですね。

池田　若い母親はどうしていいかわからない。そこにお婆ちゃんがいて、応急手当をしたそうだ。その手当があったので、ほとんどよくなったようです。ともかく母親は賢明でなければならない。

――男は外にでていることが多いし、母親に任せる以外ないし……。

池田　先日、イギリスのサッカー場で、痛ましい火災事故がありましたね。火だるまになって、芝生の上に逃げだしていった人が、テレビに映しだされていたが、こんな場合の応急処置はどうですか。

屋嘉比　あわてて脱衣させますと、皮膚がはがれたりして、かえって悪化します。服の上

からどんどん水をかけ、そのあとで衣服をはさみで切り開くのが賢明な方法です。

池田　どれくらい、冷やす必要がありますか。

屋嘉比　症状にもよりますが、三十分から二、三時間くらい、冷やしたほうがよいといわれています。

また子供の場合、全体表面積の七分の一火傷しても、生命に危険があります。広範囲に火傷した場合は、至急に医師の治療を受けねばなりません。

池田　そこで夏休みは、海などでお子さんが溺れる場合もある。そんなときの応急手当は……。

屋嘉比　まず、〝気道〟つまり口、鼻から肺までの空気の通路の確保が、大事な処置になります。片方の手で、首の後ろを持ち上げながら、もう一方の手で頭を後ろにそらす。これが基本的な形です。

呼吸停止の場合は、一分でも早く人工呼吸を行います。また心臓停止があれば、心臓マッサージを加えます。しかし、とくに水をはかせる必要はありません。

池田　子供のころかかる病気にハシカがあるが、これは何歳ぐらいまでにかかるもんですか。

屋嘉比　一歳から五歳にかけてかかるのが、もっとも多いようです。

一度かかると免疫を獲得しますから、二回以上かかることはまれです。

池田　なぜ子供のころかかる病気なんですか。

屋嘉比　それだけ、伝染力が強いといえます。新生児の場合は、母体から免疫体を受けているので生後三か月くらいまでは罹患しません。その後、四か月から六か月ごろまでは、かかっても軽くすみます。しかし、それ以後は免疫体もなくなりますから、ほとんどの人が幼児のころかかりますね。またハシカの流行は二年から四年ごとにあります。

池田　有名な「立正安国論」にも論じられている鎌倉時代の疫病のひとつに、このハシカがあったと研究した医学博士がいます。

それによると、ハシカの古名は「のけくさ」とも「のけほろし」ともいっておったが、鎌倉時代はすでに「はしか」と呼んでいた、とある。当然のことでしょうが、現在のような医学もないので、多くの生命が失われていったと記録されています。

屋嘉比　昔は、ハシカは肺炎なども併発したようです。この病気は「冷やしてはいけない」とよくいわれてきました。

池田　いまは、ハシカは少ないようですが。

屋嘉比　ええ。ワクチンの普及によるものです。

――いわゆる小児結核や、日本脳炎、ポリオ（脊髄性小児麻痺）なども少なくなりましたね。

屋嘉比　しかし現代は、新しい〝弱い子〟が増えてきています。関東地方のある県での調査でも、小学生の九・六パーセントは、こうした傾向があることがわかりました。

池田　特徴的な症状は……。

屋嘉比　カゼをひきやすい。ぜんそくや湿疹などのアレルギー。

また、腹痛、頭痛、食欲不振などの小児神経症的な症状。

さらに、寝起きがわるい、顔色がわるいといった自律神経失調症的な症状などです。

池田　最近よく聞きますね。原因は……。

屋嘉比　これは、都市化がすすみ、子供の遊び場がなくなってきていること、また心身ともにストレスが多くなっていることなどが指摘されています。

池田　具体的な解決方法はありますか。

屋嘉比　これはさまざまな要因がからみ合い、むずかしい問題です。ただ、こうした問題に取り組んできたある小児科医は、〝丈夫な子を育てるためには、放任は別として、戸外（こがい）で元気に遊ばせることが大事だ〟といっております。

自殺や事故の根本的内因

池田　この（一九八五年）五月二十九日の新聞に、厚生省の調査では、日本人は国民の約八〇パーセントが、健康や病気に関心をもっている。また自分の健康状態が、よくないと思っている人が一六パーセントにものぼる、とでておりましたが、実際どうなんですか。

屋嘉比　そうなんです。しかし、私は現実にはもっと多い気がします。

――われわれサラリーマンも、とくに中高年層は、将来に対する不安を意識する人が増加しているというデータもでています。

池田　屋嘉比さん、最近の大企業の診療所には、精神科医も担当するところが少なくない、と聞きましたが本当ですか。

屋嘉比　そのとおりです。これは以前にはなかったことです。

――そういえば、この八年間ぐらい、自殺は年間二万人以上がつづき、戦後のワースト記録をつづけていますが、とくに昨年は管理職が多かった。また、お医者さんに多い……。

屋嘉比　医師もやはり責任が重いし、ストレスのたまる職業です。

池田　そこで医療を論ずる場合、忘れてならないのは、看護婦さんの存在である。ある人いわく「看護婦さんはお医者以上に大切な存在である」と――。

しかし、看護婦さんも、どうも過重労働の傾向が強まっているようですが。

――ええ。あるアンケート調査では、九六パーセントの看護婦さんが、「起床後も疲れが残る」「いつも疲れている」といった慢性疲労感を訴えています。

これは根本的には、政治の問題にもつながると思います。

屋嘉比　われわれだけではどうしようもない。世論の盛りあがりを期待します。

ともかく、健康という問題が、ますますクローズアップされる時代と思います。

池田　そこで現代病に関連して、もう少したずねたいことがあるんです。

現代社会の大きい問題に、交通事故がある。

そのなかで自動車事故の原因には酒酔いとか、技術の未熟とか、わき見運転とかいろいろあると思うが、その根本的傾向性を医学的にどうみますか。

屋嘉比　たいへんむずかしい問題です。医学の問題を通り越して心の問題になってくるのではないでしょうか。

池田　そうですね。屋嘉比さんは車に乗れるんですか。

屋嘉比　よく乗ります。先生はどうですか。

池田　いや、まったく運転できません。

――最近の交通安全白書によると、スピード違反、不注意、酒酔い、過労などの運転者の違反が、事故死の約九割を超えているようです。

――それで、二十年間無事故で、警察からも表彰されたドライバーにも聞いてみましたが、彼は長年の経験から、もちろん不可抗力もあるが、事故は注意すればほとんど防げる、と強調していました。

屋嘉比　そうでしょうね。

池田　それとともに、交通事故の問題は、政治、経済、また科学や医学、心理学、法律等々のあらゆる角度から、総合的な解決の方途を探り出さなければならない現代病の一種といってもよいでしょう。

昨年も自動車事故で九千二百六十二人もの方が亡くなっている。まことに痛ましい。

私は専門家でないので詳しくは論じませんが、ただひとついえることは、交通事故は、当然、根本的には「生命軽視」の風潮のひとつのあらわれであるにちがいない。

だがもう一歩深くみれば、そうした受動的な見方だけでは問題はいっこうに解決しない。

要するに私がいいたいのは、高度な技術進歩の時代というものは、裏を返せば、人間が「生命の尊厳性」を根本的に自覚していくことが、もっとも要請されると申しあげたい。

つまり、科学の進歩が人間を手段化するようなことがあってはならない。社会の進歩とあいまって、過去のいかなる時代よりも、人間が生命という至上の価値を能動的に知悉し、行動していかねばならない。それなくしてなんの進歩か。ここにも「依正不二」という、仏法の重大な規範があるわけです。

――覚醒剤も大きな社会問題ですが、これはどんなものですか。

屋嘉比　本来、神経症や抑うつ症の治療に使います。これは薬理学的には、中枢神経系興奮薬といいます。

眠気や疲労感をとったり、多幸感、気分昂揚、活動性を増すといわれます。私は使ったことがないのでよくわかりませんが。（笑）

池田　第二次大戦でドイツ空軍が用いたということを聞いたことがあるが。

屋嘉比　ええ、パイロットにベンゼドリンというのを用いたようです。

――最近でも、オリンピックなどでもスポーツ選手の覚醒剤使用が問題になりますね。

屋嘉比　これは一時的に効きますが、その後は、強い疲労倦怠感、無気力などが生じます。それで、また使いたくなり、中毒性精神病症状を起こします。これは恐ろしいもので、幻覚妄想による殺人、放火などの犯罪を生むこともあるのはよく知られているとおりです。

池田　法的規制は、どうなっていますか。

屋嘉比　厚生大臣または都道府県知事から指定を受けた者しか、扱うのは認められません。しかし、この問題は、とくに青少年間でますます深刻化しており、重大な社会問題になっていますね。

池田　まったくそのとおりと思う。これは大人の責任です。絶対に覚醒剤は阻止しなければならない。個人の滅亡、国家の滅亡、人類の滅亡に通ずるからです。

そこで、もうひとつおうかがいしたいのですが、一九八三年の統計によれば、自殺が交通事故死の二倍にもなっている。自殺の、医学的な、また本質的な原因をどのようにみますか。

屋嘉比　これはむずかしい問題です。

精神医学的には、自殺する人には直接の動機とは別に、自殺傾向があるといわれます。この自殺傾向を形成する要因は、大別して、社会的・環境的要因、また個人の性格や生活、既往歴などの要因、また自殺を企てる心理的要因などが考えられます。

池田　そうでしょうね。現代社会にこうした自殺傾向を助長する要因が増えていることは事実でしょう。ただ私は、もっと深い要因を考えなくてはならないと思いますが。

屋嘉比　そうですね。数年前、同じ医学を志す私の知人が自殺した。ふだんは、まったくそんな気配もなかったんですが……、ショックでした。

これは医学的次元では、どうしてもとらえきれない問題があると思います。

池田　つまり潜在する内因に対して、なんらかの外縁があったとき、自殺という行為があらわれてくるということもいえるんでしょうね。

――自殺の予防策はあるんでしょうか。

屋嘉比　先進国では、道徳論のうえから自殺防止を訴えたり、法律をつくったり、福祉を増進させたりしましたが、いっこうに予防できないのが現状です。

――ＷＨＯ（世界保健機構）の発表では、世界中で毎日一千人が自殺し、未遂は一万人を上回るとあったんですが、多いですね。

池田　ですから、制度や社会的側面からの努力も当然大切である。とともに、人間に不幸をもたらす根本的内因を変革しゆくことが、ここでも重要な課題と、私は思いますね。

ともかく、人間の「死」の姿というものも、これまたさまざまである。

先日も南大夕張炭砿の痛ましい事故があった。私は仏法者ですから、こうした事故などで亡くなった方々に、いつも唱題させていただいています。

仏法は、さまざまな姿で亡くなったとしても、追善という深き方軌により、すべての人がまた次の新しき蘇生への道を歩みゆくことができる法理を、提示しております。

これはまことに意義があると、私は思っている。

現代病を最大限に防ぐ法

池田　日本人の三大死因は、ガン、脳卒中、心臓病ですが、これを最大限に防ぐ方法はどうですか。

屋嘉比　予防となれば、やはり食事がポイントになりますね。三年前、アメリカの国立ガン研究所も食事内容がガンになる因子を排除する基本であると、報告しています。

池田　他の二つの病気はどうですか。

屋嘉比　脳血管疾患と心疾患の原因となる高血圧症や動脈硬化症を防ぐのも、食生活の配慮が第一歩になってきます。

池田　すると具体的には、どのように気をつければいいのか。

屋嘉比　第一に、肉食を少なくして野菜を多くとる。第二に塩分はひかえめにする。第三に過度の飲酒、喫煙など刺激物を避けて、睡眠をじゅうぶんにとるよう心がけること。これが基本になります。

池田　でしょうね。私は目下のところ、全部落第ですね。（大笑）

よく生野菜を食べるように、女房からいわれますが。

屋嘉比　ビタミンAやCやEは発ガンを抑制するといわれています。とくに緑黄色野菜は、ガンの予防にいいようです。

また動物性脂肪を多量にとる人は、ガンの発生、また血管、血圧の疾病にかかりやすいといえます。

池田　ほかにも注意することはありますか。

屋嘉比　やはり、精神的要因も重要になってくると思います。ストレスと病気という問題も、現代医学の大きなテーマです。

池田　たまに、友人などが心筋梗塞になったことを聞いたりする。この発作の場合は、どう対応したらよいか。

屋嘉比　心筋梗塞は、発病初期の危機を乗り越えることができれば、多くは助かります。ですから、一刻も早く救急車の手配をし、ＣＣＵという特別な設備のある病院に運ぶことです。

池田　なにか注意することは……。

屋嘉比　この病気は発作を起こすまえに、なにか前兆があるはずです。たとえば、スポーツや階段を駆けのぼったりしたときに、前胸部の痛みや圧迫感などを感じたら、ムリをせず、医師に診てもらうことが大事を防ぐことになります。

池田　そこで現代人はあまり歩かない。足の退化は健康によくない。（笑）一日、何歩ぐらい歩けばいいのか。

屋嘉比　その人の健康状態にもよりますが、最低一万歩とする意見があります。

池田　なるほど。これもまったく落第だ（爆笑）。どのくらいの時間、歩けばいいのか。

屋嘉比　散歩ていどですと、百五十分くらいかかるようです。ただ、誰もが毎日そんなに散歩の時間をとることはできません。主婦の場合は台所や買物、またサラリーマンは社内や通勤などで、身体を動かしている時間が百五十分を超えると、一万歩くらいになるようです。

池田　では一万歩が、医学的になにか裏づけがあるのか。

屋嘉比　信頼できる統計によりますと、一日一万歩歩いている人は、循環器系の成人病が抑えられていることが明らかです。

もちろん、心臓の負担には個人差があります。その人の体調や年齢の差もありますから、いきなり一日一万歩を歩いても、逆効果になる場合があります。

池田　でしょうね。私も万歩計をもって、努力するか……。（笑）

屋嘉比　ただ同じ歩くんでも、速足のほうが効果があるようです。また歩幅をとる歩き方のほうが、新陳代謝や心臓の働きの強化になると、同僚の専門医も強調しています。

池田　では足の話のついでに、水虫の人が意外と多いが（笑）、治療はどうしたらよいか。

屋嘉比　水虫は、カビの一種である白癬菌が原因となる皮膚病です。治療法は、カビですからまず乾燥させること。そして塗り薬を根気よく塗ることが大切となります。

――市販の薬をつけて、かえって、わるくなったという人もいますが。

屋嘉比　それは薬の使い方が適切でなかったため、かぶれたり、余計に刺激したりして、二次感染を起こしたためでしょう。

足の指の間が割れて、ジクジクしている場合は、専門医に診てもらうべきです。

池田　もう少し身近なことをうかがいますが、当然、これも個人差があるでしょうが、お風呂は何度くらいが適温なんですか。

屋嘉比　ふつうは、四十～四十二度くらいが適温とされます。

ただ、体調によって適温も変わるようです。

池田　よく、〝一番湯〟はよくないといわれますが。

屋嘉比　まだ誰もはいってないお湯は、熱の伝わり方が強いので、心臓に負担をかけることになるからです。

――〝江戸っ子は熱湯が好きだ〟なんていうんですが。（笑）

屋嘉比　お年寄りや病気の人は、避けたほうがよいでしょう。同じ意味で、高血圧や心臓

病の気のある人などは、ぬるい湯のほうがよいようです。また、不眠症の人は、寝るまえにお風呂にはいって体を温めると、寝やすくなります。これは筋肉をほぐすことによって、自律神経のバランスが変わるからです。

――では、老化の問題で多少ふれましたが、よく政治家は七十歳を過ぎても元気だといわれる。これはどうなんですか。(笑)

池田　いや、そういう人もいるが、むしろ政治そのものが高齢者の仕事となってしまってきた。ですから、激しい生存競争に勝ち抜いた人が残ったと、私はみたい。

どこの世界でも全員がまったくの健康というわけにはいかないでしょう。どうでしょうか。

屋嘉比　そう思います。ただ、人よりも頭を使い、大きい仕事をしているという精神的側面が、その人の健康を支えていることはあると思います。

――俗に〝悪人は長生きする〟などといいますが(笑)、私はどうも、善人よりも悪人のほうが丈夫なような感じをもちますが。(笑)

池田　そうかもしれない(笑)。文化が発達する以前は、人間性よりも武力、いわば獣性を強くもっていた人間のほうが勝ち残っていったのは事実だ。

ですから高度な教養性、精神性、また文化的なものが従になっているあいだは、真実の意味の進歩的社会とはいえない。

また、もうひとつの側面としては、現代のような文化・文明の進歩が、逆に人間のなかの攻撃性を誘発し、獣性に対する歯止めがきかなくなってきているということも、鋭く見ていかねばならないでしょう。

より深き人生を志向する健康観

――ところで、家庭常備の医学書がよくある。うちにもあります。こういうハウツウものはたいへん便利です。ただそれだけの素人判断では、むずかしい場合があると思いますが。

屋嘉比　そのとおりだと思います。

ひとつの病にもさまざまな複合的な問題があるわけです。

たとえばタンに血がまじっていただけで、本に出ているからと、すぐ肺ガンと勘違いする人もいます。やはり医師の診断が大事でしょう。

池田　そのへんの賢明な使いわけが、大切となってくるわけですね。

ま、一事が万事で、これは人生万般にも通ずることでしょう。

――健康書がよく読まれるのも、裏返せば、それだけ健康に対する不安感が増大している証左でしょうね。

池田　これは現代と未来の重大な課題でしょう。いわゆる「身体的健康」「心の健康」「社会的健康」。この三つの問題は、社会が複雑になればなるほど、むずかしくなる。

――まったく「健康とはいったいなんなのか」ということが、問われる時代にはいってきた。この点、仏法者である池田先生はどうみますか。

池田　いや、これはもう屋嘉比さんの専門分野でしょう。（笑）

要約していえば、法華経*では「命濁（みょうじょく）」（生命自体の濁り）、「見濁（けんじょく）」（思想の濁り）、「煩悩（ぼんのう）濁（じょく）」（本能的な迷い）、「衆生濁（しゅじょうじょく）」（人間社会の濁り）、「劫濁（こうじょく）」（時代の濁り）の「五濁（ごじょく）」という、多重なる次元の連関性と全体観のうえから、人間の「病」ということもとらえているわけです。

屋嘉比　よくわかります。

池田　そこで、一般論的にも「健康」、つまりhealthという英語の語源には「全体」、また「完全」という意味もあるようだ。ですから、まず「色心」ともに、つまり「身体」と「心」がともに健康でなければならない。

屋嘉比　単に検査で異常がないというだけでなく、生きいきと社会のなかで活躍していく姿に、本来の健康の意義があると思います。

――では「病気」という言葉はどうでしょうか。

池田　いや、これも屋嘉比さんの分野ですが、また専門的にはいろいろな定義があると思いますが、「病気」（disease）とは「安楽の欠如」という、古代フランス語に由来していることから考えていただきたい。

屋嘉比　医学者としても、両方ともなにかしら深い人間生命への思索と、直観がこめられているように、私は強く感じられてなりません。

池田　この「安楽」という言葉は、法華経の「安楽行品（あんらくぎょうほん）」という経典にあります。これには甚深（じんじん）の義がありますが、人生、生活の一次元でいえば、「安楽」とは苦難を避けていくことではない。その苦難の連続をも悠々と乗り越えゆくなかにこそ、じつは真実の人生の「安楽」があるという、達観した境涯のことと思います。

屋嘉比　仏法は、一つひとつの言葉のなかに、じつに深い意義が込められていますね。

池田　ともかく屋嘉比さん、生命の「生*」と「老」と「病」と「死」という問題は、いつになっても永遠の課題であり、もっとも重大な問題ですね。

屋嘉比　私は、その「病」の問題解決に、一生を賭（か）けようと思って医者になりました。しかし、探究すればするほど、医学の限界を感じてならないんです。

池田　謙虚な言葉です。

屋嘉比　人間なにをするにも、行動の根本は健康でなくてはならない。

池田　まったく同感です。

＊ベルグソンの言葉ではないけれども、健康とは「行動への意欲をもち、社会生活に柔軟に適合しながらさらに歴史創造への理想をもつ」ということになりますからね。

このベルグソンの言葉は、私が青春時代から大好きな言葉でした。

そこで入信当初、仏法の奥義のひとつに「上行（じょうぎょう）」「無辺行（むへんぎょう）」「浄行（じょうぎょう）」「安立行（あんりゅうぎょう）」という法華経の経文がある。この意義について、たいへんに感動したことをよく覚えております。

つまりこれは、別しては、仏の「＊常楽我浄（じょうらくがじょう）」の「四徳（しとく）」。総じては、いっさいの生命がもつ徳用（とくゆう）をあらわしている。

屋嘉比　たしかに、文字だけを見ても、なにか生命自体のすばらしい躍動感を感じますね。ぜひ、この「上行」「無辺行」「浄行」「安立行」ということについても、生命論のうえから、なにかの機会に論じていただければ、ありがたいと思いますが。

池田　よくわかりました。またいつかいたしましょう。たしかに、これを解釈するには、重々の論議が必要となってきます。

ただ、ベルグソンの思索が、この奥義の一端に近づいていることだけはいえると思うんです。

また、仏法の、

「浅きを去って深きに就くは丈夫の心なり」（「顕仏未来記」五〇九）

という言葉も、私が感銘した一節です。

「浅き」とは浅き教えである。「深き」とは法華経である。末法においては「妙法」である。またこの大法を、世界に流布しゆく行動の意義も含まれている。

ですから、次元を変えてみれば、浅き人生観からより深き人生観へと、つねに志向しゆくことが大切なこととともとらえることができる。

そこに、自身の人生の確かなる充実感と向上があるということにもなるでしょう。

第九章　「半健康人」時代に考える

世界の縮図・ハワイで平和の祭典

――ハワイでの第五回世界青年平和文化祭、まことにおめでとうございました。連日の多忙なスケジュールのもようは、機関紙で拝見しておりました。

屋嘉比　たいへんに盛大だったようですね。私も、行かせていただきたいと思ったんですが、遠慮しまして。（笑）

――今回は、日系官約移民百年の記念行事ということで、アリヨシ州知事からの招待もあったようですが。

池田　そのとおりです。知事夫人が実行委員長をしている、「アロハの木百万本」の記念植樹式にも出席してまいりました。

――七月四日の文化祭当日は、アメリカの独立記念日で、カラカウア通りでは一万数千人のパレードが行われ、たいへんにすばらしかったようですね。

屋嘉比　私も、テレビのニュースで見ました。アメリカ人はパレードが好きですね（笑）。国民性の違いというのは、たしかにあります

ね。

池田　歴史書によると、ハワイの中心である「オアフ」という島名には〝人々が集まるところ〟という意義があったそうです。

だからかどうか知りませんが、ハワイにさまざまな民族が融合し、共存共栄している事実は、世界国家の縮図といってよいでしょう。

――そのとおりですね。

ともかく地元の新聞を見ても、相当数の市民が沿道をうずめ観覧していた。テレビも初めから終わりまで、パレードのもようを約二時間にわたり実況中継したようですね。

池田　いや、私は見ていません。（笑）

ハワイの地は、日本との関係にあって、真珠湾の奇襲などで本当に不幸なこともあったが、私は好きです。

ともあれこの移民百年祭は、過去の歴史の総括とともに、新しい百年に向かっての、ハワイの平和と繁栄への新たなる出発の意義がある、と私は思っております。

――パレードや文化祭は、世界四十五か国の代表が参加しての行事だったようですが。

池田　そのとおりです。



「アロハの木100万本」の記念植樹をする池田SGI会長。

総本山第六十七世・日顕上人猊下の御臨席をいただきました。

また多くの著名人の出席もあり、ともかくなごやかで、うれしかった。

――アリヨシ州知事夫妻のほかにも、ロスのブラッドレー市長夫妻、パナマのノリエガ長官など、また、ハワイ各界の多数の名士が参加していましたね。

屋嘉比　東関親方（元高見山）もいたようですが。

池田　ええ、参加してくれました。ハワイへ向かう飛行機の中でも、いっしょになったんです。

たいへんに純な、いい方ですね。

――パンチボールの国立記念墓地では、第二次大戦でヨーロッパに遠征し、勇敢に戦った日

系二世の〝パイナップル部隊〟（四四二部隊）をはじめ、戦没者への献花もされたようですが。

池田　いたしました。彼らは、二つの祖国のはざまで、犠牲になって戦死していった。ハワイの日系人が、アメリカ社会において信頼を勝ちとっていくのに、彼らの存在は大きかったといわれる。

――ブラッドレー市長やノリエガ長官も参列しておりましたね。

平和への厳粛な祈りに、私は深く感銘しました。

池田　かつてのパイナップル部隊の方々も九名参列し、かたい握手をしました。お一人は義手でした。

ともかく、戦争は絶対にあってはならない。

戦争は、国家の勝者と敗者はあっても、人々には、ただ悲惨と不幸しか残らないからです。

病魔との闘いだった青春時代

屋嘉比　いつかおうかがいしたいと思っていたんですが、先生は、終戦の年はおいくつでしたか。

池田　昭和三年生まれですから、十七歳です。

屋嘉比　たいへんにお身体が弱かった、ということを読んだこともありますが。

池田　そのとおりです。小さいころから病気がちで、健康な人がうらやましかった。

屋嘉比　そのときは、どこにおられたんですか。

池田　昔の蒲田区（現在の大田区）糀谷におりました。

屋嘉比　お兄さんが出征されたようですが。

池田　三人の兄が出征し、養子にいった兄も出征しました。

屋嘉比　すると当時のお勤めは……。

池田　若いものがブラブラしていると〝非国民〟といわれるので、兄が勤めていた、家の近くの新潟鉄工所に行きました。

しかし身体が弱いので、なかなか満足な出勤もできず、ずいぶん悩んだものです。

戦時中で、会社では、たまたま予防注射があった。ところが、注射をうつと、かならずといっていいほど四十度くらいの熱が出て、たいへん困ったものです。

屋嘉比　どのような病気でしたか。

池田　肺病です。肋膜炎なんかも、八回ぐらい繰りかえしました。健康でなくてはならない時代に、病気というのは本当につらい。風呂にはいると、あばら骨が見えて悲しかった。

これでは現場はとてもムリだということで、事務のほうにまわされてしまった。現場がいちばん男らしい戦場であった時代でしたからね。

屋嘉比　なにをつくっていたんですか。

池田　当時はディーゼル・エンジンをつくっていて、現場は二交代、三交代のフル回転でした。ともかく活気があった。みんな〝お国のため〟死にもの狂いでした。

屋嘉比　なにか思い出はございますか。

池田　いつも自分の健康と病気との闘いだった。当時はいい薬もないし、栄養もとれない。そこで、いつも『健康相談』という本を読んだものです。そのとき、病気の知識もあるていど知ったんです。

父親にも母親にも、ずいぶん心配をかけました。

屋嘉比　医師はどういう判断でしたか。

池田　肺結核です。

数年間へていたもので、肺浸潤（はいしんじゅん）とか肋膜炎とか、いろんな症状の変遷（へんせん）もありました。

屋嘉比　当時では、施設も不じゅうぶんでしょうし、診断も、こんにちほど精密にできなかったかもしれませんね。

池田　いや、たいへんに親切なお医者さんで、よい人でした。

屋嘉比　工場にも診療所はあったんですか。

池田　ありました。

屋嘉比　そこではどうでしたか。

池田　やはり肺結核でした。

そこで結論として、寝汗はひどいし、血たんもでる。体力もないから、茨城県の鹿島のほうになにか養生先があったようで、そこに二、三年静養するようにいわれました。

屋嘉比　そんなにひどかったんですか。

池田　ところが、四月十五日未明の蒲田の大空襲で会社も爆破され、ほとんど再開不能の状態になったわけです。そこで、鹿島でゆっくり静養という状況も一変してしまった。

屋嘉比　寝汗は、気持わるいらしいですね。

池田　体験したものでなければわからないでしょう。寝汗は本当にいやなものです。しかし、寝汗で目ざめたとき、汗はまことにキラキラ光って、きれいなもんです。

屋嘉比さんは、寝汗の経験はありますか。

屋嘉比　ありません。

池田　お医者さんだから、身体の管理はうまいわけですね。（笑）

そんなわけで、私の青春時代のはじまりは、病気との闘いだった。その近所の医者が私の

母親に、あの身体では二十五、六歳までもつかどうかと、もらしておったようです。

なにかのキッカケで、そんな話をちょっと耳にはさみ、いや、悲しかったですね。

そんなこともあって私は、身体の弱い人、病人には敏感な反応をするようになった。

本当に、その人の気持がわかる自分となることができた。

屋嘉比　その後は、身体のぐあいはズッといいんですか。

池田　いや、それからも十年、二十年と、自分と病気との闘いがつづきました。

そんなわけで、戸田前会長にも、〝三十で人生終わりかな〟と、たいへんに心配をかけたこともありました。

屋嘉比　大いなる精神力、また信仰力が、大きく身体を変革したひとつの証拠といえますね。

たしかに人間は、医学的、科学的次元だけでは解決できない不可思議な存在と思います。

しかし、私は医学者ですから、すべてを医学的にみますけれども。（笑）

――現代社会は、完全なる健康体の人よりも「半健康人」の時代といわれていますね。

屋嘉比　そう思います。ドイツのある学者も、

「健康は現代の主問題である。しかしながら以前よりも患者数は多い。われわれは患者の時代に生を受けている」

といっております。

たしかに、いろいろな病気をもっている人が、増えているのは事実です。

池田　ですから仏法は、この厳しき人生の実相をとらえ、

「三界之相とは生老病死なり」（「御義口伝」七五三）

と説いている。

これはつまり、「三界之相」とは人生の実相の表現である。この「三界之相」を如実に知見していくならば、「生」と「老」と「病」と「死」というものは、避けられない生命の理である。ゆえに、その現実を度外視しての幸福もありえない。この根本的次元から、真実の幸福を確立しゆく法が仏法と、私は思っております。

屋嘉比　健康な人は、健康のありがたさはわからない。しかし、一度病気になれば、健康ほど大事なものはないと考える。私も、多くの患者さんを診て、いつもそう実感しています。

池田　私も医者だったら、もっと仏法と生命の奥深い連関性がつかめるような気がしますが。（笑）

ともかく、たしかに健康な人でも、あるていどの年齢に達すれば多少の疲れもでる。

ときには、身体の調子がおかしくなるのもやむをえない。

やはり「病」も、人生の本然的な問題でしょう。

屋嘉比　病気というのは、長い人生にあっては、ひとつのリズムということもいえますからね。

――屋嘉比さん、一見、健康な人でも、一生のうちに何回か、ガン細胞が発生している可能性があると聞きましたが、本当ですか。

屋嘉比　そのとおりです。たとえば、胃ガンや前立腺ガン、皮膚ガンなどは、健常者にも、かなりの率で潜伏していることがあるようです。

ただ多くの場合、免疫の力などによって、増殖が抑えられていて、発病しないのです。いわば、健康と病気が渾然一体化しているのが、「生命」という存在といえますね。

池田　そう思います。また、たとえ病気であっても、偉大な仕事をした人はたくさんいる。逆に健康であっても、無為に人生を過ごしてしまう場合もある。

ルソーの言葉ではないけれど、生きるうえにおいて「節制と労働とは、人間にとって真実なる二人の医者」ともいえる。

――たいへん含蓄ある言葉と、私も感銘を受けたものです。

池田　ですから、多少の病気があっても、絶対に負けてはいけない。健康になっていこう、人々のため社会のために働いていこうという、強靭な一念が大事となりますね。

私の人生は、自然のうちに「健病不二」ということになっていました。

人生観の昇華につながる「病」

――以前、先生はアメリカの著名な生物学者ルネ・デュボス博士と、対談されましたね。

池田　いたしました。デュボス博士はトインビー博士の友人です。そこでトインビー博士から、ぜひ会うようにすすめられたひとりです。

ＮＨＫの招待で来日されたとき、わざわざ来訪してくださったんです。

もう早いもので、十数年前になるでしょうか。すばらしいご夫妻でした。

屋嘉比　もう亡くなったんですか。

池田　博士は亡くなられました。日本でも有名な著書があります。それは『人間であるために』『環境と人間』などでしたか。

とくに『健康という幻想』では、健康と病気の問題の本質をいいあてておりますね。

屋嘉比　その本は有名です。私も学生時代に読んだものです。

博士はその本の結びに、

「人間はどこでも、その安全に対する新しい脅威と新たな試練に出合うものだ。心配のない世界で、ストレスもひずみもない生活を想像するのは、心楽しいことかもしれ

ないが、これは怠けものの夢にすぎない」とまで書いています。

池田　すばらしい哲学です。すばらしい現実の人生のあり方です。ともかく立派な学者でした。

ところで、仏法でも「仏は少病少悩」といって、仏様でも、病気のない架空の仏など説いていない。（笑）

要するに、自分の健康は自分がいちばんよく知っているだろうし、健康のために、それなりの努力と注意も当然必要である。さらに、色心ともに生きいきと生きゆくために、自分自身の根本的な生命力を、いかに発現しゆくかということが、不可欠となってくる。

そこに、仏法のひとつの意義があると、私は思っています。

屋嘉比　同じ人間であるということからいえば、ブッダも、多くの仏も、みな凡夫と私は思います。そうでなければ、現実味はない。

生身であり、凡夫であれば、病気はつきものでしょう。

――そうでなければ、現代人は信じられない。

池田　その「少病少悩」を転換しながら、多くの人の悩みを知りながら、いかに人類を済度の方向にもっていくかが、カギとなるわけでしょう。

――デュボス博士も、先生との対談で、広い意味で、偉大なる未来宗教の出現こそ、人類の危機を救う唯一のカギであると、明快に述べておりましたね。

屋嘉比　それで、私は一医学者として、多くの患者さんを診てきて、たいへん興味深く思うことがあります。それは、長い闘病生活を耐えぬいた人は、人間が変わったように人生を大切にします。また、人への思いやりも強い。物事の見方も、深くなっていくように感じられることです。

池田　いい話です。スイスのヒルティ（哲学者）でしたか、

「河の氾濫が土を掘って田畑を耕すように、病気はすべて人の心を掘って耕してくれる。病気を正しく理解してこれに耐える人は、より深く、より強く、より大きくなる」

といっておりますね。

私はたいへんに深い示唆のある言葉と思ってきました。

屋嘉比　私も好きな、すばらしい言葉です。

――仏法では何か説かれておりますか。

池田　あります。その一つに、

「病によりて道心はをこり候なり」（「妙心尼御前御返事」一四八〇）

とあります。

簡単にいえば、「病」も、より信仰を深める因とすることができるということです。

戸田前会長も、よく、

「大病を患った人は深い人生の味をもっている」

といっておられた。

私も、まったくそのとおりと思っております。戸田前会長も、大病を患ってきた人です。大病と闘いながら、法のため、社会のために、行動しぬいてこられた人です。

ま、要するに、「病」が、その人の人生観、目的観の昇華へと延長されていくことが大切でしょう。

生きることの〝質〟が問われる時代

池田　そこで、屋嘉比さん。医学では、人間の寿命をどうとらえますか。

屋嘉比　いや、その点は、むしろ池田先生にうかがいたいところです。医学では、まだ結論は出ておりません。

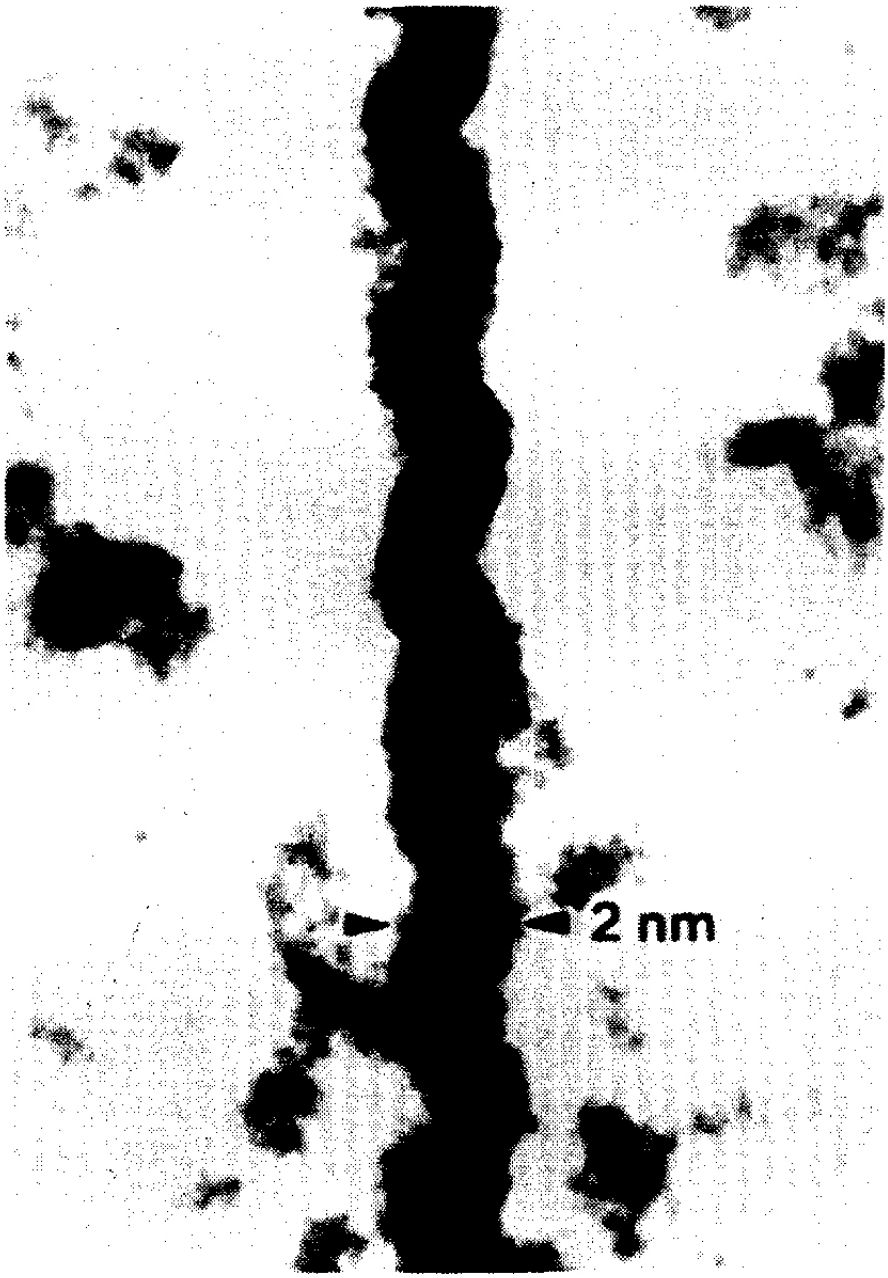
ただ解明の手がかりとして、前にも申しあげたように遺伝子*のなかのDNA*の障害が集積していくとか、細胞の分裂回数があらかじめ定まっていて、年をとるごとに残り少なくなっ

ていくという考え方などがあります。

池田　脳の神経や心筋なんかは、細胞分裂しませんが。

屋嘉比　ええ、そうなんです。その場合も、大ざっぱにいうと、あらかじめある耐用年数が定まっているのではないかという考え方になります。

池田　免疫の問題も関係があるようだと聞きましたが。



最近、直接観察にも成功し、解明が進むDNA。

屋嘉比　それは、「自己免疫説」といいます。

年齢とともに、免疫をコントロールする力は低下します。したがって、外からの侵入物に対してだけでなく、自分自身の身体のタンパク質などにも、間違って免疫反応を生じ、身体に害をあたえてしまう傾向が増加し、これが、身体組織の衰えにつながっていくというのです。ほかにもいろいろな学説がありますが、定説は残念ながらありません。

池田　この寿命の問題は、〝老化〟の解明とあいまって、今後、研究がさらに進んでいく分野になりますか。

屋嘉比　現段階の医学は、老化の原因について模索していますが、寿命自体の解明はまだまだです。

ただ、いくら寿命を延ばしても、幸福という問題とは、別次元の場合もあるわけです。

アメリカの老年研究の専門医学誌『老年学ジャーナル』は、冒頭に、こんなモットーを掲げていました。

すなわち、「ただ寿命を数年延ばすだけでなく、老年期を生きいきと過ごすために」と。

池田　大事な観点だね。

これからは、いよいよ生きることの〝質〟が問われる時代となるでしょう。

――今年（一九八五年）の五月、新潟県で、県内最長寿であった百四歳の老婆が入水自殺

したという、痛ましいニュースがありました。

この老婆は、昨年秋ごろから寝たきりで、「家族に迷惑をかけたくない」と、もらしていたようです。ところが、その息子も、すでに八十一歳になっていたというんです。

この話を聞いたとき、私はなんともいえない気持でした。

仏法の寿命観、延命観

屋嘉比　仏法では、寿命はどうとらえますか。

池田　日蓮大聖人の仏法では、いわゆる「定業」というとらえ方になります。ですから、この寿命などの「定業」以外のものを、「不定業」と説いています。

屋嘉比　すると、「不定業」とは……。

池田　当然、「定業」よりも軽い。

また寿命などと違って、まだ定まっていない業因のことを指します。

屋嘉比　すると、「定業」である寿命は変えられない、ということになりますか。

池田　いや、そうではないんです。ここが大事なんです。

日蓮大聖人は、

「定業すら能く能く懺悔すれば必ず消滅す何に況や不定業をや」（「可延定業書」九八五）

と断言されている。

――「懺悔」とは、よく、過去の罪悪を悔い改め、ひらき述べるという意義にいわれますが。

池田　一般的にはそうです。

しかし、法華経の結経たる「観普賢菩薩行法経」には、

「若し懺悔せんと欲せば　端坐して実相を思え」

と説かれている。また専門的になってすみません。（笑）

この「端坐して実相を思え」とは、結論していえば、末法今時においては、御本尊に南無しゆくことである。つまり、御本尊へ唱題しゆくことにより、自身の生命を浄化し、自己の宿命をも変革することができる。また、無限に幸福への因を積んでいくことができる。

これが真実の「大荘厳懺悔」となるわけです。

屋嘉比　すると、懺悔というと、なにか暗い、消極的なイメージがありますが、本当はそうではないわけですね。

池田　そのとおりです。

屋嘉比さん、医学的には「定業」とか「不定業」とかいうとらえ方はありますか。

屋嘉比　むずかしいと思います。

ただ、遺伝的なもので、定業性といえるものはあると思います。

たとえば、遺伝性の病気のなかには、ある年齢になると、時限装置が働くかのように発病するものもあります。

「家族性大腸ポリープ症」などは、十代で発病し、四十代でほとんどがガン化します。

しかしそれにしても、寿命の推定はむずかしいと思います。

池田　たしかに推定はむずかしい。仏法においても、われわれ凡夫には寿命はわからない。また、わかってしまったら、つまらない。(笑)

かりに自分は、三年後とか六か月後とかに死ぬとわかったら、こんな不幸はない。(笑)わからないところが「妙」であり、安心もでき、このへんに深い意味があると思います。

屋嘉比　そう思います。

いや、ガンの宣告も、医師として躊躇(ちゅうちょ)するのは、そこらへんの問題があるからです。

池田　つまり、どちらかといえば仏法は演繹(えんえき)法である。寿命は当然、長いにこしたことはない。だがそれよりも、人生の根本的軌道が永遠性の幸福へ、すなわち「仏界」へと向かっているかどうか、という本質的問題を提起している。

またそのために、具体的にどうしたらよいかを説いているわけです。

ただそこで大事なことは、法華経寿量品*に「寿命無数劫(じゅみょうむしゅこう)」とある。つまり、仏寿(ぶっじゅ)が今世だ

けではなく、無始無終、三世永遠であることが明かされていることです。

また、

「仏は衆生を教化するために病に託いて教を興し、入滅によせて三世の常住を説く」

といわれる。ですからつまり、仏であっても現実の姿は、私どもと同じく病を現じ、三世の生命を説くために、死という姿をあらわされるというのです。

屋嘉比　それならば、私もうなずけます。

池田　ですから私は、仏法の根本の目的は、この永遠の生命を覚知しゆくというか、確信しうる自身の「我」を、完成しゆくことにあると思っている。

また現実に、信心を貫き通した広々とした境涯になった場合、「これは寿命である」また「これは寿命を延ばした」と達観した自分自身を、感じとることもできる気がします。

まあ、生命といっても、主観に帰着せざるをえないものでしょうから。

戸田前会長は、

「信心が透徹した場合、多少の病気とか、苦労があっても、すべて乗り越えていける。根底が安心しきっているから、生きること自体が絶対に楽しいものだ」

とよくいわれた。含蓄のある言葉だと、私はつねに思っている。

屋嘉比　そういう意味では、この問題は、医学の次元を超えていますね。

池田　いや、その人生観の裏づけとして、当然、客観的ものさしである医学は、意義があると思います。

そこで法華経には、

「此の経は則ち為れ閻浮提の人の病の良薬なり」

と説かれている。それについて、釈尊滅後約一千五百年、陳臣という天台大師の兄は、仏法を行じて寿命を十五年延ばし、六十五歳で亡くなった、という記録もある。*

それはともかく、日蓮大聖人の御書には、

「法華経を行じて定業をのべ給いき」（「可延定業書」九八五）

といわれている。

そこで私は、仏法の寿命観、延命観というものをもっと深く思索し、一般的にも理解できるようにしなければと、悩んでいる昨今です。

――日蓮大聖人も、母親の寿命を四年延ばされたという話は、たいへんに有名ですが。

池田　そのとおりです。お名前を「妙蓮」といわれます。

ともかく、不老でありたい、長寿でありたいと願望するのは、人間のもっとも自然な姿でしょう。

ですから仏法では、

「命と申す物は一身第一の珍宝なり」（「可延定業書」九八六）

とも、

「一日の命は三千界の財にもすぎて候なり」（同）

とも説かれている。他の宗教はどう説いているか知りませんが、このひと言はすばらしい言葉と、私は感動したことがあります。

屋嘉比　仏法のすばらしさはここにもある、と私は感銘します。

――それにしても、「汝が殺さんとする相手は、実は汝にほかならず」といった哲学者がいたが、いまは本当に生命軽視の風潮がはびこっている。これは、もっとも恐ろしい傾向ですね。

池田　まったくそのとおりだ。

一般的には「地球より重い一つの生命」といいますが、大聖人は「宝算」という言葉も用いられている。これは広げていえば、私どもの寿命にも通じてくると思います。

寿命の長短と人生の価値

屋嘉比　仏法では、若くして病気などで亡くなっても、充実した人生をおくれるという御

文はございますか。

池田　あります。たとえば、南条七郎五郎という人がいた。

この人は、大聖人もよくご存じで、誰からも将来を嘱望されていた。しかし、この若武者は、弱冠十六歳で突然、亡くなっています。

夫に先立たれ、こんどは子供が亡くなり、悲しみにくれる母と、その七郎五郎の兄である時光に対し、大聖人は真心のお手紙を数々送られ、激励されておられた。

そのお手紙のなかに、私がまことに甚深の義を感じた一節があるんです。それは、

「をさなき心なれども賢き父の跡をおひ御年いまだ・はたちにも及ばぬ人が、南無妙法蓮華経と唱えさせ給いて仏にならせ給いぬ・無一不成仏は是なり」（「上野殿母御前御返事」一五七〇）

そのさまざまな因果のうえから、また生老病死という生命の理のうえから、ひとつの「病」という姿を現じることもある。

しかし、妙法を唱えていった場合は、成仏という人生の根本的幸福の軌道にはいっているから安全であり安心である、との深き法理のうえから諭されておられたわけです。

屋嘉比　いや、たしかに寿命の長短だけでは、人生の価値はわからない場合がありますね。

池田　つまり仏法は、さらに深い次元から「寿命」という問題をとらえるわけです。

それは、

「一生空しく過して万歳悔ゆること勿れ」（「富木殿御書」九七〇）

という、私がいつも思いおこす、まことに甚深のお言葉があります。

屋嘉比　要するに、三世というスケールからみなければならない……。

池田　そういうことですね。仏法は道理である。当然、懸命に信仰していても、さまざまな過去の原因から、また今世の使命を終えたという意味から、早く亡くなる人もいる。

凡夫であるわれわれには、どうしても解せない気持になる場合もある。

だが多角的、かつ深く追究してみるならば、凡下の眼にも、その一生は最大に生きぬいたものであったという証も、みえてくる気がします。

またそうでなければ、われわれ凡夫は、三世の生命といっても信じられない。（笑）

仏法は、「*現世安穏・後生善処」というがごとく、かならずなんらかの「後生善処」への証がある、というのです。

ですから、一時的な悲しみはあっても、結果的には残された人々も、幸福への上昇気流に乗っていけるというのが、仏法であり、信心なのです。

――七郎五郎が亡くなった後、兄の時光も、当時大流行した疫病にかかった。しかし仏法の信仰によって完治し、寿命を五十年も延ばしています。そして、七十四歳まで生きぬいた

といわれますが。

池田　そのとおりです。

――そこで、鎌倉時代の平均寿命は、どれくらいだったんでしょうか。

池田　さあ、それはどうでしょうか。ただ、考古学者の研究にもとづき、室町時代は二十歳まで生きた人は、平均の余命が十五、六年と推定した学者がいた記憶もあります。これは、私はなんともいえませんが。

屋嘉比　当時は疫病の大流行もあった。大地震とか自然の脅威もあった。ともかく、七十四歳というのはたいへんな長寿だったと思いますね。

池田　そう思います。そこで南条時光は、長命であったがゆえに、大聖人御入滅後も長く、二祖日興*上人にお仕えすることができた。そして総本山富士大石寺のある、大石ケ原一帯の土地（現在の静岡県富士宮市）を寄進し、未来への重大な使命を果たしている。ですから、弟の七郎五郎の寿命は、お兄さんの時光に継がれていったんでしょうかね。ま、私はよくわかりませんが。

屋嘉比　長い人生と信仰のうえから見きわめた場合は、なにかみえるものがあるんでしょうね。

池田　こういういい方は短絡的になるけれども、無始無終にして、大宇宙とともに存在し

ゆく永遠悠久の生命からみるならば、多少の長寿、短命ということも、ま、朝日の前の露に等しいといえるわけでしょう。当然、この現実の人生を生きて、生きて、生きぬこうとすることが大前提となりますが……。

屋嘉比　人生の本質を根本的に考えていけば、当然そういう問題にもなると思います。

池田　これは余談になりますが、私は「遺族」という言葉はあまり好かない。むしろ「後継者」という言葉が、ふさわしいと思っている。

屋嘉比　いや、すばらしい表現です。そうでなければ、親と子、先輩と後輩という、もっとも大切な心の絆の連続性がなくなりますね。

池田　いうならば、われわれは数学の極理はわからない。けれども数学の達人は、何千、何万倍も奥深い法則の真理を会得しているんではないでしょうか。

屋嘉比　万般にわたり、そういえるかもしれません。

――生命の方程式も、同じことがあるんでしょうね。

池田　これも、あくまでも仏法上からみれば、どんな人も、みな使命があるということが大前提となりますが、牧口初代会長は、ひとつのたとえとして、人には、

一つには、いなくてはならない人

二つには、いてもいなくてもよい人

三つには、いないほうがいい人
――がいると、よく指導していた。

屋嘉比　おもしろいお話ですね。事実、社会の中で、そう思わせることは多々ありますね。人を殺したり、強盗をしたり……。

池田　当然それはいけないが、しかし、いてもいなくても、どちらでもいいような中途半端な人生であってもならない。それぞれの立場で、人々のため、社会のために働き、堂々と生きぬかなくてはいけない、と指導されていたことなんです。

誤解されては困るんですが、いわんとすることはわかってください。（笑）

屋嘉比　いや、人生の本質をついているお話と思います。

――たしかに、いなくてはならない存在の一生で、人生を終えたいものですね。

池田　ともかく仏法は、死という厳粛なる事実を、永遠性の幸福観のうえから説き明かしたものといえるでしょう。

ですから、生と死の境界線を帰納的にどこに定めるかということ、つまり脳死とか、心臓死といったものは、どちらとも説いておりません。もちろん、御書にも断定はない。

むしろそれは、医学にまかせているといってよいでしょう。

屋嘉比　そうでしょうね。医学においても両説があり、いまだに、決定的結論はでません。

脳死による死の判定は、とくに臓器移植において重要となってくるわけですが、国民感情においても、まだまだ合意にはほど遠いようです。

――臓器移植の先進国といわれるアメリカでも、ある調査では、「脳死を法的な死の定義として使ってよい」と認めた人は五五パーセントで、「使うべきでない」が二六パーセントです。

屋嘉比　それだけに、医学的にも、性急な結論はだせないと思います。

池田　私の独断的な考えでいけば、まあ、法律で脳死を規定するだけの問題ではない。やはり、当事者ならびに家族の心情というものが、当然、大前提として考えられるべきでしょう。

――生命という問題は、単純なものさしだけではかる問題ではないと思います。

「八」がもつ多様な意味

――話は変わりますが、第七章での「蓮華」について、読者から、もう少し論じてほしいという投書がありました。なかでも「八葉の蓮華」の「八葉」ということについて、お願いしたいというのが多かったんですが。

池田　ま、ふつう、蓮華の花は二十枚から二十五枚といわれてますが。

屋嘉比　ああ、そうですか。数えたことはなかったもので。（笑）

池田　そこで、その蓮華の花には一重（ひとえ）もあるし、八重（やえ）もあるようです。その八重咲きの蓮華は、大小合計すると、百枚くらいの花弁になっているものもあるようです。

屋嘉比　いろいろあるんですね。

池田　ですから、一般的に、八重というのは「八」という実数ではなく、数多くある、という意味なんです。

屋嘉比　そういえば私は、沖縄の八重山（やえやま）の「八重」という意味も、数多くの山という意味をもっていると聞いたことがあります。

池田　そこで大事なことは、この仏法上の「八」という数字の意義なのです。

一義には、この「八」について「たまをひらくと読むなり」（「御義口伝」七四五）という御文がある。この「たま」とは一念、一心の生命をいっております。

つまり、わが一念を無限に開いていく、という意義と思います。

また、古今東西を問わず、この「八」の数は、一般的にも全体性とか、広がりとかいう意義が含まれてきておるようですね。

屋嘉比　歴史的にはどうでしょうか。

池田　たとえば古代エジプトや、バビロニア、またアラビアなどでは、この「8」の意義を「太陽」をあらわす数として使われてきたことが調べられています。

屋嘉比　これは数学の範ちゅうになりますね。

池田　私は数学者でも、天文学者でもありませんが、仏法で説く意義から延長して、「八」という数の不思議な意義を、興味深く思っていたんです。

そこで、この「8」というのは、調べてみると、それらの地では、「完全」とか「光輝」とか、「豊饒」などを意味する、聖なる数字でもあったようですね。

屋嘉比　すると、ギリシャにもなにかありますか。

池田　やはり、その意義は深められていったようです。

有名な数学者ピタゴラスの著書のなかでは、太陽が生み出す「増大」と「知恵」とをあらわす数として記されています。

――ピタゴラスは誰でも知ってますが、大したもんですね。（笑）

池田　数学者として、また哲学者としても世界的に有名であるが、いまから二千数百年前の彼の幾何学が、いまもって不動であるということはたいへんなことでしょう。

屋嘉比　仏法では、どういう立場になりますか。

池田　当然、偉大なる「*声聞」でしょう。

長い人類貢献の歴史のうえから追究していった場合、菩薩の一分の働きをなしたとみることもできるでしょう。これは私の我見ですが。（笑）

――どんな門下がいますか。

池田　門下というより、影響をうけたのは、ソクラテス、プラトンなどが有名ですね。

屋嘉比　よくいわれますね。

池田　また、古代ギリシャにおいては、「8」は「all」つまり「すべて」を意味しておったようです。少々ややこしいんですが（笑）、これは哲学的には意識と無意識を調和させる「完全な知性」とか、「知識と愛」ともとらえていたようです。

また、「作用と反作用」「進化と退化」を止揚する完全な機能をあらわす数である、というようなとらえ方にも発展していったらしいんです。

――「8」を「聖数」とする伝統は、その後もなにか特徴的なことがありますか。

池田　ひとつの例として、音楽でも、よく〝オクターブ〟といいますが、これも「八音階」ということですね。

これは、初めの音調が一段階たかくなることから、「蘇生」を意味するようです。

ともかく、この点からみても、仏法の「八葉の蓮華」という深い意義も、おわかりいただけると思います。

法華経は「開結」合わせて「八万四千字」

屋嘉比　では日本ではどうですか。

――私も調べてきたんですが、『日本書紀』のなかで、日本国は「大八洲国（おおやしまぐに）」とよばれていますが、この点どうでしょうか。

池田　そうですね。

まだ当時は、日本の島数は不確定であったかもしれないが、たしかに「大八洲国」とありますね。

――これは、いわゆる大日本豊秋津洲（おおやまととよあきづしま）（本州）、伊豫二名洲（いよのふたなのしま）（四国）、筑紫洲（つくしのしま）（九州）、億岐洲（きのしま）（隠岐島）、佐度洲（さどのしま）（佐渡島）、越洲（こしのしま）（北陸）、大洲（おおしま）（山口県屋代島）、吉備子洲（きびのこしま）（岡山県児島半島）の八洲の総称であったようです。

池田　と同時に、この「大八洲国」という名称の「八」は「弥（や）」のことで、多数の島から成り立った国、という意義もあったわけでしょう。

――『古事記』や『万葉集』などにも、「八」という数は、「末広がり」とか「多い」とか「称賛」「優れた」という意味で使われているようですね。

屋嘉比　すると、これは中国の漢字の影響ですか。

池田　いや、私は学者ではないので、たしかなことはわかりませんが、もともとは、どうもそうではないような気がします。日本独自の発想のようです。

まあ、よく一般にいわれているのは、江戸時代の有名な本居宣長（もとおりのりなが）の説が登場するところでしょう。

彼は、外来文化以前の古代日本人の心にふれ、いわゆる「やまとごころ」を論じている。

――そのとおりです。本居宣長の研究で有名なのは、小林秀雄氏、丸山真男氏などでしょう。これはたいへんに評価されています。

池田　そうですね。小林秀雄さんとは、一度お会いしたことがあります。丸山真男氏は存じあげておりません。

そこで宣長は、かなり古くから、日本には「いやまして」とか「いやさか」という言葉があるが、これは漢字の伝来以前からの言葉であったことに、着眼しているようですね。

――この意味は、「さらにいっそう」とか、「ますますの繁栄」ということになりますが……。

屋嘉比　日本にも共通の「八」の概念があったんでしょうかね。

池田　どうもそのようです。ですからこの「いや」が漢字の「八」につながっていったこ

とも、じゅうぶん考察されるようです。

屋嘉比　すると隣国中国はどうだったんですか。

池田　私はよくわかりませんが、ただいえることは、中国でも元来「八」を尊崇する風習があったことは事実のようです。

――それは、中国に仏教が伝来した以前からのようです。

池田　有名な『漢書』とか、仏教伝来以前の『礼記』や『書経』など、古代の文献にも、「八」をもってすべてをあらわす意義もあったようですからね。

屋嘉比　そうすると「八」の意義は、世界的に普遍的な成り立ちの背景があるわけですね。

池田　そうなりますね。中国では季節の総称を「八節」というし、また「八洲」といって、これが「全国土」を意味していた。また世界を「八紘」「八方」「八維」といいましたからね。

屋嘉比　それでは、インドでは……。

池田　これは梵語学の研究であかされているようです。日本では、梵語学は東大になるでしょう。また英国などの、著名な世界の大学でも、研究がつづけられているようです。

屋嘉比　梵語学なんて、初めて聞きました。

池田　そうでしょうね。いや、私もよくわからないんです。

ただもう十年ぐらい前になりますか。ソ連に行ったとき、モスクワ大学のホフロフ前総長

を通し、ソ連科学アカデミーから、梵語の法華経「授記品」の写本を贈られたことがある。七、八世紀のもので、シルクロードのコータンというところから出土したものということでした。それを東洋哲学研究所で翻訳してもらったことがあります。

――ええ、そうでした。

池田　そこで、古代インドの考え方にも、「八」という字は深い意義があったようです。これは屋嘉比さんの分野ですが、古代インドの医学は、人間を「八術」という八つの分野から診断するという考えもあったようです。

屋嘉比　ああ、そうですか。いっぺん調べてみなければなりませんね。

池田　屋嘉比さんも若いんだから、いろいろ研究してみてください。これは「八分医方」ともいわれております。

ほかにも、音声は「八音」、身体は「八処」といっています。

また胎児にも「八念」の精神活動があるように、さまざまな次元で「八」をもって「充足」「完備」ととらえております。

屋嘉比　興味深いとらえ方ですね。すると、古代インドの「八」に対する普遍的な観念が、いわゆる仏教でさらに止揚されていったと、とっていいんでしょうか。

池田　私もそう思っております。

ですから、その「八」の義が集約されていったのが、仏法の「八」ならびに「八葉の蓮華」である、という意味も、そのへんからわかっていただきたいと思います。

――たしかに仏教は、古代インドの思想や文化をふまえながら展開されておりますね。

池田　そこで、教義という根本問題は別として、イスラム教がなぜ仏教をしのぎ、中近東、アフリカ、アジアの一部までも広がったか。その理由のひとつは、途上における功罪もありますが、それぞれの土地の文化を大事にし、用いようとした。

――よく「右手にコーラン、左手に剣」といいますが。

池田　そうですね。一面ではたしかに、仏跡なども破壊している。だが、もう一面では、イスラム文化と土着の文化、風俗とを融合させる努力をしたともいわれている。

この点も、私は研究すべき重要課題と思っております。

屋嘉比　伸びゆく宗教、伸びゆく文化というものの流れがわかる気がします。

池田　歴史の流れを、どう概観から本質へ、どう正統をふまえながら柔軟にみていくかが大事でしょう。

私どもも、多く誤解されてきましたが、そのへんの根本の軌道と柔軟性とをよく見きわめ、また深く知っていかねばならないと思います。

――なにごとも、柔軟性がなければ発展しないことを、私も見、痛感します。

先生は、根本は厳のごとく、本質を鋭く見きわめ、また、時の流れを深く洞察しながら、柔軟性をもった方だから、正法がこれだけ興隆したと思います。

池田　いや、私のことはいわないでください（笑）。そこでさらに申しあげれば、仏法では多く「八万由旬」「八恒河沙」「八正道」「八十種好」「*八万法蔵」等々とあります。

屋嘉比　漢字は深い。英語はちょっとそこまでいきませんね。

池田　屋嘉比さん。医学では、この「八」の意義に通ずる、なにか基本的なたて方はありますか。

屋嘉比　いま、ちょっとわかりませんので、研究します。（笑）

池田　そこでまあ、いままで申しあげた大乗仏典の最高峰である法華経は、開経である「無量義経」と、結経である「普賢経」を合わせて、「八万四千字」となっています。

屋嘉比　不思議なことですね。偶然の一致か、それとも、それ相応の考えをもって成し遂げたものでしょうかね。

池田　法華経二十八品の文字は、「六万九千三百八十四字」が定説になっている。これは有名です。そこで、うちの資料室長の古賀君のところで、丹念に調べてもらいましたが、開結の両経を合わせた字数は、「一万四千三百五十二字」です。ですから、合計すると「八万三千七百三十六字」となる。

ま、総じて「八万四千字」であり、「八万四千」の煩悩に通ずるわけです。

このことについて、「御義口伝」には、

「八万四千とは我等が八万四千の塵労(じんろう)なり南無妙法蓮華経と唱え奉る処にて八万四千の法門と顕(あらわ)るるなり」（七七五）

と説かれております。

屋嘉比　本当に深い意義がこめられていますね。

池田　要するに、全世界の「八」という意義は、釈尊の仏法にすべて包摂(ほうせつ)されながら、より普遍的な方向へ、止揚されているということになるでしょう。

屋嘉比　当然そうなりますね。また、そうであってこそ、仏法は普遍的な真理をふまえながら、根本的な「法」というものを展開しているといえるんでしょうね。

私は、それがいかに大切なことかということもよくわかります。

世界の蓮華を一堂に咲かせる夢

――そこで、各地でハス便りを聞きますが。

池田　ま、花が開花するのは、六月中旬からこの七月になるでしょう。

私は、この不思議なハスを研究したいのですが、多忙でできないもんで、ハスの好きな、関西創価学園の野崎教諭にお願いして、研究していただいております。

いまでは、そのハスの池は八つになっています。

――交野は、松田先生ですか、ホタルの研究も盛んですね。

池田　ええ。付近の市民も見にきたりするようです。一般紙も取材にきております。

屋嘉比　それこそ生きた学問で、たいへんによい学習になりますね。

池田　もうひとつ、ついでに申しあげます。（笑）

八王子の創価大学の「文学の池」には、睡蓮がかなりあります。先日、満開の写真を送ってくれました。高貴な花ですね。

――ああ、そうですか。

たびたびおじゃましておりますが、そのことは見落としておりました。

池田　それにしても私は、因果倶時の法に譬えられる蓮華が好きで、世界の蓮華の花を一堂に集めて咲かせたいという夢もあるんです。（笑）

その話を、第六十六世日達上人に申しあげたところ「たいへんにすばらしいお話ですね」と、呵々大笑されていたのが懐かしく思い出されます。

屋嘉比　日本全国の人が、上野駅を知っていますが、あの上野の不忍池のハスも有名では

ないでしょうか。

池田　たいへん、有名ですね。古い上野山の絵には、池の蓮華が、きれいに描かれているということを、聞いたことがあるが。

屋嘉比　誰が植えたんでしょうか。

池田　よくわかりませんが、寛政（かんせい）の改革で知られている老中、松平定信（まつだいらさだのぶ）が関係しておったことは間違いないようですね。寛政といいますから、いまから二百年ぐらい前になりますか。

――そのようです。しかし、あのあたり一帯は、紀元前ごろは、東京湾につながる入り江の奥になっていたようです。ですから、海水がはいりこんでいたんではないでしょうか。

池田　まあ、そうなるでしょう。

現在の日比谷も、〝ひび（洲）〟を立てて海苔（のり）をとった入り江〟であったようである。

屋嘉比　すると、上野駅あたりは、昔は海だったんですか。

池田　詳しいことは、矢田挿雲（やだそううん）の『江戸から東京へ』を読めばよくわかります。

――『江戸から東京へ』を読むと、いろいろなことがわかりますね。

そこで、徳川家康が江戸にはいったころは、どんな状態だったでしょうかね。

池田　そのころは、池の周囲が三キロもあったという記録もあるそうではないですか。

――ええ。ですから、舟で、往来もしていたようです。

屋嘉比　すると徳川家康は、なにか蓮華に関係があったというんでしょうか。

池田　詳しくはわかりませんが、家康はどうも、「蓮華」を天下人にふさわしい花として、江戸城の中枢である本丸の西南に、壮大な「蓮池堀」をつくったということは事実のようですね。

屋嘉比　はじめて聞きました。

池田　その本丸は、家康が、政務を行うところだったようです。

目を転じると、蓮華がすぐ見える。

この江戸城の設計は、藤堂高虎がしたといわれている。その絵図面を見て、家康自身が朱や墨で訂正を入れながら、この本丸の近くに蓮華の池をつくったと伝えられているようだ。

ただ、現在もその「蓮池堀」があるかどうかは、私はわかりません。

もう、二十年ちかく前になりますか。宮内庁の方々の特別のご好意で、あるていど、皇居の中を見せていただいたことがありますが、そのあたりまでは行けませんでした。（笑）

――それだけの頭脳の持ち主であった家康は、方角的には、なにか考えていたんでしょうか。

池田　いろいろ考えていたでしょう。ただいえるのは、家康没後ほぼ二百年ぐらい経って、江戸城の北東、つまり丑寅の方向に、不忍の蓮池がつくられているということです。

なにか家康の考えを、後世の人が受けとめておったんでしょうか。どうでしょうか。

屋嘉比　本当の英雄は、天文、地文、よく考えておりますね。憎らしいくらいですね。（大笑）

「八葉の蓮華」の意味するもの

――そこで本題の、仏法で説く「八葉の蓮華」について、ぜひ掘り下げてお話をおうかがいしたいのですが。

屋嘉比　ぜひ私も、おうかがいしたいところなんです。

池田　そうですね。

「十如是事（じゅうにょぜじ）」という御書に、

「妙法蓮華経の体のいみじくおはしますは何様（いかよう）なる体にておはしますぞと尋ね出してみれば我が心性（しんしょう）の八葉の白蓮華にてありける事なり」（四一一）

と、説かれております。

つまり、「八葉の白蓮華」とは、われわれの生命それ自体のことであり、それは妙法蓮華経の当体のほかにないというのです。

屋嘉比　これがつまり「当体蓮華」ですね。

池田　そのとおりです。そこで、結論していえば、

「然れば則ち依正・因果、悉くこれ我等衆生の心性の八葉の白蓮華、本門の本尊なり」（「当体義抄文段」）

とあるごとく、この「八葉の白蓮華」の当体とは即一幅の御本尊となる。

少々、御書の文がむずかしいかもしれませんが、根本的な法理の結論はおわかりいただけると思います。

屋嘉比　いわゆる一般仏教の世界では、うかがうことのできない深淵な定説と思います。そこでもう少しうかがいたいのは、この何度もうかがってきた「八葉の蓮華」の「八」について、仏法ではどのように定義づけているんですか。

池田　日蓮大聖人は「御義口伝」という秘伝書に、

「八とは三千なり三千とは法華の八巻なり」（七四五）

と説かれています。ですから、まず「八」という意義は無限に「ひらく」義となります。

屋嘉比　なにを、どうして「ひらく」んですか。

池田　結論していえば、私どもの、瞬間、瞬間の一念の生命を、「三千」すなわち森羅万象、宇宙全体の次元に開いていくという意義です。

そこで、この「三千」とは「法華の八巻」となる。

そしてこの一念三千の法の法体が「南無妙法蓮華経」の一法なのです。

屋嘉比　すると、仏法で説く「八」という義は、「全体性」とか「無限性」とか、すべての意義の、その一歩奥深い人間の生命という次元の法理と、とってよろしいわけですか。

池田　そう思います。ですから私は、この究極の生命の法理からみれば、古来、各国のさまざまな人々が、その「法理」は知らなくとも、「八」という数を、自然のうちに共通して重んじてきたことも、よくわかる気がするんです。

屋嘉比　たしかに、そうですね。

池田　また他の「御義口伝」の御文には、

「八とは色心を妙法と開くなり」（七四五）

とあります。

そこで他の「御義口伝」には、

「成（じょう）は開く義なり」（七五三）

とも説かれている。

簡潔に申しあげれば、一般世間でも、よく「成仏」という言葉を使うが、その真意は、「仏と成る」と読みがちですが、そうではなく、もともと「仏なりと開く」と読むのが正し

い。その理由は、「成は開く義」で、一念を三千に開くからです。

つまり「開く義」とは、仏法の真髄になるわけです。

屋嘉比　なにか、他のものにすがるのでもない。神の恩恵をこうむるのでもない。内なる自身の「仏」を開くのである、というわけですね。

私にとっては、驚きの仏法です。あまりにも、私どもは仏法を知らなすぎた。

――そうなると、「死ねばみな成仏する」（笑）というのは、間違いになってくるわけですね。仏法の本義からみなければ、真相はわからない。

池田　ま、そうなりますね。たいへん厳しいです。

――生命論を深く探究していかなければ、仏法に到達もしなければ、仏法の真義もわからないもんですね。こわいことです。

池田　そこで「御義口伝」には、

「開とは信心の異名なり」（七一六）

とあるのです。

そこに私どもの信心、信仰の必要性が提起されてくるわけです。

屋嘉比　そうなりますと、真実の信心というのは、他力本願または自力本願、どちらになるんですかね。

どうしてもインテリは、なにか拝むということを軽蔑する傾向がある。また、他力本願的な古くさいイメージがありますが、どちらになるのでしょうか。

池田　自力、他力の両者を含めているようにみえるが、

「自力も定めて自力にあらず（略）他力も定めて他力に非ず」（「一代聖教大意」四〇二）

とあるごとく、両者を超克した根本次元の法理、法則そのままのあり方なんです。つまり当然、合掌という、もっとも尊い行為はある。また、自分の意志を最大限に発揮しようという、自発的意志も含まれる。

しかし結論するに、宇宙根源の法則にのっとった、その人の生命本源よりほとばしる自分自身の開覚が、仏法の信仰の本来的目的となるわけです。

屋嘉比　信仰と法の関連性における、より本来的意義というものがわかった気がします。

池田　この「合掌」についても、何度も申しあげている「御義口伝」には、

「合掌とは法華経の異名なり」（七二二）

とも説かれている。また、

「合とは妙なり掌とは法なり」（同）

ともある。さらに、

「合とは仏界なり掌とは九界なり」（同）

ともあります。そして、

「十界悉く合掌の二字に納まって森羅三千の諸法は合掌に非ざること莫きなり」（同）

とも、重々の意義が説かれております。またご質問があったらいってください。

屋嘉比　そうですか。ひとつひとつに裏づけがありますね。裏づけがないと、われわれはなかなか納得できない。

いまのお話をうかがうと、深い裏づけと、崇高なる精神があることが、わかる気がします。

広々とした境涯を開く仏法

――私も、現代という時代性からみても、いまのお話を聞いて、感ずることがあります。それは、管理社会の弊害でしょうか。

いわゆる「豊かさ」と「便利さ」の反面には、かならずといっていいくらい、人間疎外、無気力化、利己主義というものがあらわれる。つまり、時代の流れは、自分自身というもののこの大切な心を、狭い範囲へ、小さなものへと、閉ざしていくような気がしてなりませんね。

その意味からも、いまのお話の、無限大に開きゆく一念の作用が、どれだけ大事になって

くるか痛感します。

池田　現代は、〝孤独地獄〟ともいわれる。仏法は、いかなる境遇にあっても、広々とした境涯を開くことができる。名誉や財産や便利さなどでは、人間は不満足である。

屋嘉比　まったくそうです。自分も、医師として好きな研究もできる。家族にも恵まれ、たしかに幸せではあるが、将来、自分がいつガンになるか、子供がどうなっていくかと思うと、不安でたまらなくなる。

――万人共通のことです。

屋嘉比　この閉塞化への傾向は、政治だけでも、科学だけでもどうしようもありませんね。それはそれとして、医学的にみても、人間が一生のうちに使う脳の神経回路は、全体の一部分といわれます。残った大部分は予備ということもありますが、もっともっと開き、使えたらすばらしい。（笑）

池田　まあ、凡人は全部使いきれない（爆笑）。ですから、なんとか最大限に脳を使いきれるように、また、生命力を発揮したいために、仏法はあるんです。

そこで、仏法に、

「智水測り難き故に無量と云う」（「曾谷殿御返事」一〇五五）

とある。

これは、信仰の対境である御本尊の力用のことでありますが、即私どもの全智、全能をどれだけ発揮し、自分自身の人生のために、さらに、社会のために発光させることができるかどうか、という意義にも通ずると思います。

屋嘉比　そういうことでしょうね。人間は、善の方向へ、幸せの方向へと、まだまだすばらしい創造性と可能性を秘めていると、私も信じている。

――私は、ある学者と話して感じたことは、学問も象牙の塔では、もはや時代遅れである。それでは進歩はないし、人々に貢献できない。開かれていかないと、ますます民衆との遊離の溝が深まってしまうと……。

屋嘉比　そう思います。時代の流れを知らないというのは、恐ろしいことだ。

すべての分野の人々が、孤立しては存在しない。また、時代の大河の流れのなかに生きている。その意味からみても、その学者のいうことは正しいと思います。

池田　いや、宗教界も同じなんです。

宗教の「宗」とは、根本ということになる。宗教といった場合、さまざまな意義があるが、大勢の人ということにつながる。

学校も大勢の人で成り立っている。信仰も学問も、一人だけというわけにはいかない。

上下左右と切磋琢磨しながら、深化されていくものである。そうでなければ、自分がわからなくなってしまう。他者がみえなければ、自分もみえないからです。それでは当然、社会から疎外されてしまう。

屋嘉比　歴史的にみても、社会も文化も、開かれた相互の交流がない場合、行き詰まってますね。

世界平和は民衆次元の交流で

――国家と国家の交流も、「開く義」ですね。（笑）

池田　そういってもいいでしょう。（笑）

たしか物理学者のボーアでしたか、「開かれた世界」すなわち、各国の人間と思想の交流こそ、核兵器の抑止に不可欠であると提唱しておりましたね。

――つい最近（一九八五年六月）も、池田先生はデクエヤル国連事務総長と会見し、米ソ首脳会談がこんにちほど要請されることはない、という意味のことを話されたようですが。

池田　そのとおりです。事務総長は、ともかく米ソの首脳会談が先決であり、それ以外に、こんにちの世界的諸問題解決の糸口はない、と強調していた。



米ソ首脳会談を提唱した、デクエヤル国連事務総長との会見。

私も、一貫してそれを主張してきた。

――そのことは有名です。やっと実現の見通しがたちましたが、今後の進展を見守りたいですね。

屋嘉比　五月（一九八五年）に、ブルガリアのジフコフ国家元首と再会されたときも、核の問題について、同趣旨の意見交換をされていますね。

――ともかく、二十数年間、先生は各国に行かれて、会談や講演でつねに主張してこられたことは知悉（ちしつ）しております。

また民間団体として、強力に国連支持の活動をつづけられていますね。

池田　いやいや、それはそれとして、もっと大切に思っているのは、各国の、民衆と民衆との交流が必要であるということです。

これは『人間革命』にも、私ども日本人の体験のうえから書きましたが、日中戦争、太平洋戦争が勃発したのも、民衆と民衆との深い交流がなかったため、歯止めとなるものがなかった。ここに根本的原因があった。

この苦い教訓を、広く世界に知らしめなければならない責務があると、私は思ってきた。その民衆次元の、長期的かつ強靭な友好は、文化の交流であり、教育の交流であると思います。

これは、決して政治、経済を度外視するものではありません。

ただ政治、経済のみでは、力の論理、利害の論理に走り過ぎてしまうからです。

屋嘉比　また、その交流の根底に拠って立つべき理念とか、哲学とか、宗教とかが、必要となってくることも道理でしょう。当然、その内容が前提であることは、いうまでもありません。

池田　そういえる。おうおうにして、売名になってしまったり、その場かぎりの短期的なもので終わってしまう場合があるからです。

フランスのある思想家が、〝平和とは、貪欲に対抗する力の道徳的勝利である〟という意味のことをいっていたが、この問題は畢竟するに、人間へと帰着するでしょう。

屋嘉比　たしかに、自然科学は未曾有の進歩を成し遂げた。しかし最近、つねに思うこと

は、肝心要（かなめ）の人間の精神世界の進歩が、ますます追いついていかなくなっている。

その意味においても、時代を先取りしたこの対談は、私にとっても、たいへん重要な勉強と経験だと思っております。ともかく現代は、この一点が悲劇である。

池田　私は、政治、経済、科学の次元ではない。ただ、その拠って立つところの哲学、理念、宗教というものをもっているつもりです。

結論して申しあげれば、この日蓮大聖人の仏法は、「末法万年尽未来際（まっぽうまんねんじんみらいさい）」「一閻浮提総与（いちえんぶだいそうよ）」となる、根本中の根本義を示しておられるからである。

つまり、この太陽の仏法を根本とするならば、「末法万年」、さらに「閻浮提」、これは世界と訳しますが、世界の人々が、平和への強き連帯を広げていくことができることは間違いない。これこそ、歴史上かつてなかった、生命蘇生の大文化運動ととらえることができる、と思っております。

――新たなる大運動には、かならずといってよいくらい誤解や中傷、さらに迫害があるものです。

それらを超克し、いっさいは歴史が証明するところでしょう。

池田　そのとおり、そう信じております。

第十章　「生命」と「環境」を考える

環境世界と人体の関係

池田　それにしても暑い日がつづきますね。東大病院は、夏休みがあるんですか。（笑）

屋嘉比　ええ、交代で休みます。ただ例年、この時期は研究会がいくつかあります。そのための実験もあり、休暇はなかなかとれません。（笑）

池田　診療は毎日されるんですか。

屋嘉比　一週間のうち、だいたい三日は、外来や入院している患者さんを診（み）ます。

池田　その他の日は、なにをするんですか。

屋嘉比　レントゲンや、内視鏡検査（ないしきょう）（胃カメラなど）を担当し、臨床検討会をやっています。

池田　夜中でも、病院に呼ばれることはありますか。

屋嘉比　担当している患者さんに急変があった場合、自分の車で駆けつけます。

池田　たいへんですね。すると、その合間に、研究の時間を見つけるわけですか。

屋嘉比　そうです。私はおもに、胃酸が分泌（ぶんぴつ）されるメカニズムの解明に取り組んでいます。

池田　どういう実験をするんですか。

屋嘉比　試験管の中で、胃の細胞を培養し、いろいろな実験を繰りかえします。

池田　根気がいるんでしょうね。

屋嘉比　ええ。失敗の連続ですから（笑）、ヘタをすると、自分の胃がやられます。（笑）

池田　前にも、人間の心と身体は密接不可分である、というお話をされておりましたね。

屋嘉比　おっしゃるとおりです。

池田　それと環境の問題も、たいへんに関連性があるようですが。

屋嘉比　当然あると思います。ですから、天候や季節、また社会環境などが人体におよぼす影響もいろいろと研究されています。

池田　そうでしょうね。そこでまず、この章では、環境世界と人体の関係を、医学ではどうとらえているか、ということからはいりたいと思うんですが。

屋嘉比　たいへんに重要な問題です。

ただ結論していえることは、これも密接不可分という考え方が確立しつつあることです。

――「気象医学」という分野もあると聞いたことがありますが、その点どうでしょうか。

屋嘉比　ええ、すでに九州大学の研究所には、「気候内科」ができています。

池田　よく新聞の天気予報のコラムにもありますね。

「曇天の日が多いと、紫外線の刺激が少なくなり、気分がめいる」とか（笑）、「低気圧が近

づいてくると、傷痕がとくに痛む」といった記事を見かけますが。

屋嘉比　これは医学的にも事実です。

池田　外国ではどうですか。

屋嘉比　とくに西ドイツでは、その日の気象と病気の関係を、毎日、天気予報のようにラジオで放送している地域もあります。

池田　具体的には、どんな……。

屋嘉比　「不安定な気圧の谷が近づいており、心臓、循環器系の障害がいちじるしく増加するから気をつけるように」とか、「気圧配置は北東風型で、冷却力のある乾燥した冷たい空気となるので、ぜん息や偏頭痛の人は気をつけるように」といった内容です。

これを「医学気象予報」といいます。

池田　すると、転地療法の意義もわかりますね。これは、かなり具体的に進んでいく分野ではないでしょうか。

屋嘉比　そう思います。

池田　人間が生きぬいていくうえで、どれほど外界と微妙な関係になっていることが重要か。私なども、気象の変化が敏感に影響するのを、いつも体験してきた身ですから。

季節的変化はどうですか。

屋嘉比　たとえば、ぜん息は秋がもっともわるい。リューマチは、夏が少なく、冬がもっともわるいようです。あるデータによれば、リューマチ患者の七四パーセントは季節の影響がある、といっておりますね。

池田　では、季節の変化は、人間の心にも影響を与えるかどうか。

屋嘉比　あると思います。ひとつの例として、十九世紀のフランスのエスキュロールという精神科医のデータがあります。それによると、入院患者の数は春に上昇し、初夏に最高になる。そして、その後は減少するとなっています。

この点に関しては、他のヨーロッパ各国や、日本でも同様の報告がなされております。

池田　これは多少極端な例でしょうが、一般的にも、なんらかの影響性があるということは否定できないと思います。

屋嘉比　常人でも、気温が下がると、体内のアドレナリンの分泌が増加し、きげんがわるくなる人がいます。（笑）

池田　アドレナリンというのはよく聞きますが、自律神経を興奮させるホルモンと考えていいんですか。

屋嘉比　専門的にはいい方がありますが、けっこうだと思います。

池田　そこで、森林浴は健康によいだけでなく、頭の働きをよくするというのは本当です

か。（笑）

屋嘉比　そういわれています。樹木は「フィトンチッド」という微小の物質を空中に発散します。

池田　仏法では、いわゆる草木等を「非情（ひじょう）」と説きますが、この「非情」と「有情（うじょう）」である人間との連関性も、医学の重要なテーマのひとつではないでしょうか。

屋嘉比　そう思います。

池田　これは屋嘉比さんの専門の分野と思いますが、日本人は一般的に胃ガンが多い。大腸ガンは少ないといわれている。ところが、アメリカに移住した日系人は、二世、三世、四世となるにつれ大腸ガンが多くなり、胃ガンは減少すると聞いていますが。

屋嘉比　そのようです。先日、レーガン大統領が手術して話題になりましたが、アメリカ人は日本人と反対で、大腸ガンが多いそうです。

これはおもに食事内容が原因と思いますが、環境による違いは、たしかにあると思います。

――よく旅行すると、便秘になりやすいといいますが。（笑）

屋嘉比　いや、それは慣れないところにいくと、交感神経が緊張し、胃腸の運動を抑えるからです。帰宅すれば大半は自然に治ります。（笑）

池田　これらはほんの一例でしょうが、人間の「生命」と「環境」との関連性のバランスは、まったく微妙であるといえますね。

屋嘉比　同感です。アメリカのクッシングという有名な医学者は、

「医師は、人間を、その人の世界のなかでとらえて認識しなければならない」

といっております。ですから私は、仏法で説く「依正不二（えしょうふに）」の法理をぜひ一度、池田先生におうかがいしたいと思っておりました。

池田　いや、これはわかったような、わからないような、あまりにも深くして、広がりのある論議になるので、困っているんです。（笑）

――しかし、この対談の流れでもありますし、あるていどの次元までではけっこうですので、お願いします。

池田　よくわかっています（笑）。たいへんに深遠（しんえん）な仏法哲理の範疇（はんちゅう）となりますもので、ほんの常識的なところから論じさせていただきます。

仏法が説く「依報」と「正報」

屋嘉比　まず「依正」とはどういうことですか。

池田　「依」とは「依報」、「正」とは「正報」ということです。

この「正報」とは、人間のような、生命活動を営む〝主体〟。

「依報」とは、それがよりどころとする環境としての〝客体〟といえると思います。

これが「不二」つまり、「二にして不二」という一体性の関連にある、ということです。

ともかく仏法では、「不二」論ということが特徴なんです。

これは他の西洋哲学とか、近代の思想には少ない。どちらかといえば、精神と肉体、人間と自然といった〝主体〟と〝客体〟を分離する構造であった。

そこにやはり、現代の行き詰まりの根本的な問題がある、と私はいつもみております。

屋嘉比　仏法の「不二」という概念は現実を厳しく凝視し、なおかつ広がりのある考え方というのがよくわかります。

池田　たとえば「依正」が「不二」であるとか、「色心」が「不二」であるとか、さらに「仏と衆生」が「二にして不二、不二にして二」という、生命の本源的関連性をとらえたのが仏法なんです。

ですから、いちおうは別々であるが、その究極の次元において両者は一体である、という意義になると思います。

屋嘉比　肉体と心も、たしかに別々であるけれども、絶対的ともいえる連関性は否定でき

ませんものね。

――「依報」「正報」の「報」とはどういうことでしょうか。

池田　一般的には「報」という字は、「罪人を裁く」という字義がある。「報」の字の象形は〝ひざまずいた人が、後ろで手かせをはめられた姿〟である。ですから絶対的服従性とか、逃れることができない模様を象徴していると思います。ここから「むくいる」という意義も出てきたんでしょう。

屋嘉比　すると、仏法では……。

池田　仏法のうえでは、生命の全体像を、法華経の方便品*で「十如是」（如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等）と説いている。そのなかの、「如是報」の「報」が、「依報」「正報」の「報」となるわけです。

屋嘉比　より深い、広義からの生命のとらえ方となるわけですね。

池田　要するに、生命全体の働きに即し、姿・形にことごとくあらわれる結果を「報」というわけです。

屋嘉比　なにか御書には、「依正不二」論について説かれておりますか。

池田　あります。そのひとつとして、

「夫十方は依報なり・衆生は正報なり譬へば依報は影のごとし正報は体のごとし・身なくば

影なし正報なくば依報なし・又正報をば依報をもつて此れをつくる」（「瑞相御書」一一四〇）

とあります。

屋嘉比　すると、この御文は、「主体と客体」、「人間と環境」の関係は、あくまで影が身に添うがごとく、人間があっての環境世界となりますか。

池田　結論すればそうなります。

また、それであって「正報をば依報をもつて此れをつくる」である。

これは、われわれの身体の例をとってみても、よくわかることです。

この自分自身を、ひとつの「正報」ととらえた場合には、それに相対する事象はことごとく別々のようであるが、関連性、一体性という面からみると、「而二不二」ということになります。好むと好まざるとにかかわらず、否応なしに、相互の影響性はかならずあるもんです。

屋嘉比　いや、たしかにそうですね。

「不二」というのは、ひとことにして、鋭く真理をついた表現と思います。

池田　そこで、一個のわが生命体だけをとらえた場合、「正報」は「一念」である。

肉体である個々の細胞や分子の働きは「依報」となり、これも「不二」の関係になります。

屋嘉比　たしかに個々の細胞や分子の働きをいくら組み合わせても、一個の人間としての働きはできませんからね。

池田　ですから、主体である生命それ自体がもつ発動力というか、発現力というものに触発されながら、客体である細胞や分子が、調和された統合体として、生きいきと活動を持続している、ともいえるのではないでしょうか。

屋嘉比　まったく、そのとおりです。医学的にみても、生きているとは、この相互の強い関連性の、絶えまなき繰りかえしの状態をさします。

あくまで、人間なら人間という生命の主体が軸となって「生命環境」がある、ということが私はうなずけます。

池田　さらに、人間の細胞を見たときも、六十兆ともいわれる細胞が集まり、組織体として、秩序ある運動を維持している。

それであってせんじつめれば、別々の独立したものともとらえられる。

屋嘉比　一個の細胞だけでも、産業複合体のようなものです。（笑）

池田　また、数えることもできないほどのわれわれの身体の分子は、その働きだけをとってみても、一つひとつが完璧（かんぺき）にちかいほどの、不思議な相互の関連性をおよぼしている。

その分子も、一つひとつ、別個のものである。

この小さな世界にあっても、「依正不二」の姿がわかるものです。

屋嘉比　そうなんです。

池田　つまり、生命は「依正不二」ではじめてとらえられるものである。ですからこんどは、自分自身の生命を「正報」とした場合に、「依報」であるすべての外的環境との関連においても、やはり「不二」的に広がっていくわけです。

ひとつの例として……。

青空であれば、さわやかになる。

美しいものを見れば、心はなごむ。

ウグイスが鳴けば、春の訪れを知る。

小川のせせらぎを聞くと、平和を感じる。

一家がなごやかであれば、幸せである。

これは万人に共通の理（ことわり）でしょう。

――反対の場合も多い……。

池田　そのとおりです。

灰色の空であれば、心は重い。

家庭が不和であれば、心は暗く閉ざされる。

嵐や火事などになれば、修羅である。

戦争であれば、地獄の「正報」となる。

ですから、よい意味での「依報」である環境は万般にわたり大事となる。

実りある環境であれば、生命は美しく輝くんです。

屋嘉比　まったく同感です。

池田　刹那、刹那、生命というものは「依正不二」として変化していく。この関連性は、一生涯つづいていくものである。多少、飛躍した論議かもしれませんが。

屋嘉比　いや、わかります。健康という問題も、つねに環境からの挑戦に適応できるかどうかである、ともいえますからね。

池田　教育においても、青少年の非行化を防ぐために、「依報」はたいへんに重要な力である。ですから、哲学的にもこの環境論をどうとらえるか、ということが重視されなければならないでしょう。

屋嘉比　これは大切な問題です。

池田　要するに私どもの生命は、社会との関連もある。自然との関連もある。また当然、対人間との関連もある。避けようのない現実の職場にも、また生活にも、さらにすべての環境にも関連性があるわけです。

それを現実的に把握し、いかによき方向にもっていくかが、信仰の本義なのです。

宇宙の運行も「わが身」に関連

屋嘉比　たしかに現代の学問も、環境医学とか、科学の総合化とか、個々のものを、もういちど全体から巨視的にとらえることが志向されています。

――そうですね。もはや、これは時代の趨勢です。

屋嘉比　すると「依正不二」というのは、分子や細胞などのミクロの世界と反対に、マクロの世界にも無限大に広がっていくことになりますか。

池田　そのとおりです。宇宙大の連関性と無限大の広がりをもっていく法理です。そのひとつの証左として、あえて申しあげれば、有名な医学者のなかにも〝地球の公転や月齢といった宇宙の運行が、人間の脳のある働きと関連する〟という人がおりますね。

屋嘉比　ええ。先月、東京医科歯科大の角田教授の実験が発表されています。

教授は、

「宇宙環境に同期する小宇宙である脳の変動」

といった表現も使われています。

池田　また科学的にも、私どもの身体は、はるか二百億年昔の、宇宙空間の簡単な構造の元素の渦に源があった。

この事実ひとつをみても、宇宙全体の作用がさまざまな事象においてわが身に関連する、ととらえられてきているのはご存じのとおりです。それを反対に考えてください。（笑）

その「正報」から「依報」へ、つまり主体である人間の一念をいかに無限大に開き、「幸」と「充実」、「安全」と「平和」への広がりにもっていくか、ということが仏法の法理なのです。これは何度も申しあげる「一念三千」*論にはいってくるわけです。

そこでたとえば、「依正不二」の原理からみても、環境というものは、人間に重大な影響があることは論をまたない。しかし、その環境を人間が変革してきたことも事実といってよい。

ひとつの例として、北海道も何百年か前は、たいへんな荒野であったにちがいない。しかしいまでは、「正報」である人間が開拓して住みよい土地になった。

これも「依正不二」で価値をつくったひとつの例である。このような歴史は、古今東西を問わず枚挙にいとまがないでしょう。

――そのとおりです。

池田　また個人にあっても、親が早死にしたり、貧乏であったり、恵まれない環境に育っ

た人のなかにも、社会に貢献し、立派な人間になった例はいくつもある。

それらは、「正報」の強靭（きょうじん）なリズムを自分自身で築きあげて、ひとつの環境をつくりあげた例といえるでしょう。

反対に、裕福な家に生まれ、よい両親にも、環境にも恵まれ、なにひとつ不自由のない人であっても、その人生が最後はみじめな敗北となっていく場合も多々ある。

これは環境はよかったが、「正報」と「不一二」になりえなかった結果といえる。

本来、自身の向上のための環境であるべきものが、反対に環境に流され、敗北者となっていった例である。

屋嘉比　なるほど……。

池田　つまり〝正報は体、依報は影〟である。

要するに、生命の主体は、いわゆる「正報」の健全なる「リズム」と「力」といってよい。

さらに今度は、よき「依報」が、よき影響を「正報」にあたえる場合も、当然、多々ある。

また反対に、悪（あ）しき「依報」が、「正報」の向上の因となるときもある。

つねに「依報」というものは、二面性を具しているわけです。

ですから、あい関連しながらも、その「依正」をよりよくする力は、つまるところ「正報」の一念に帰着すると、私は考えます。

屋嘉比　これは人生万般に通ずることと思います。

池田　しかし、いわゆる人間の力には限りがある。生命の力にも限りがある。そこに「正報」と「依報」を貫きゆく「南無妙法蓮華経」という宇宙そのままのリズムというか、力用を発現し、「依正」あい調和させていくことが、いかに大切かということもよくわかるわけです。

ですから、自分の身体を丈夫にしていくことも、わが生命のなかの「依正不二」のひとつの所作、力用であるにちがいない、と私は考えます。

その「依正」ともに根本的に調和させながら、幸の価値、美の価値をつくりゆくことが、私どものひとつの信仰の目的と思っております。

そこで、死後の生命にも、「依正不二」があるが、これは略させていただきます。

屋嘉比　仏法では、ほかにも「不二」論はございますか。

池田　あります。*妙楽の「十不二門」があります。

これはもう三十年くらい前になりましょうか。第六十五世*日淳上人が、東京の常泉寺におられたとき、戸田前会長がお願いして、わざわざ教えていただきました。

――要するに「十不二門」とは、どんな内容なんですか。むずかしいんですか。

池田　いや、やさしくはないよ。（大笑）

理論的すぎるもんで、いまの人たちには、あまり勉強させてないんです。

私どもは、あくまでも御書を根本としています。そのなかに全部含まれているからです。

そこで、この「十不二門」を少し申しあげれば、「色心不二」「内外不二」「修性不二」「因果不二」「染浄不二」「依正不二」「自他不二」「三業不二」「権実不二」「受潤不二」があります。

屋嘉比　壮観ですが、仏法はたしかに論理性をおびている。他の宗教はかないませんね。

池田　いちおうの意味を申しあげれば、この「十不二門」とは、天台の明かした法華経の「十妙」を、さらに展開したものです。十種の相対する「法」が、「不二」の関係にあることを示し、「妙法」の絶対性を説いたものなんです。

「色心」とは、色法と心法

「内外」とは、一念の内境と外境

「修性」とは、修行と諸法の本性

「因果」とは、修行における因位と果位

「染浄」とは、無明と法性

「依正」とは、依報と正報

「自他」とは、能化の仏と所化の衆生

「三業」とは、身口意の三業となります。これらがすべて「不二」という関係になる、というのです。

――すると「権実」とは……。

池田　権教と実教です。権教も実教も、仏の一念においては冥合しているんです。それが、衆生の機根に応じて、それぞれ説かれるわけです。

つまり、どちらも「妙法蓮華経」という一法より生じたということになります。

妙楽の説の全体をみればすぐわかるように、権教も実教も同じであることではありません。権教の「権」とは「かり」という意味です。専門的になりますが、権教も実教からみれば、それを説明し、通ずるものがあるという義なんです。

この本義を知らずに、間違って解釈している宗派もある。ここらへんがむずかしいんです。

――それは当然ですね。

池田　最後の「受潤不二」とは、ひとことでいえば、仏の説法を受ける衆生も、衆生を潤しゆく仏も、「妙法蓮華経」の当体にして差別がないという意義といえます。ほかにもいろいろいえると思いますが、忘れてしまったので、いつか勉強してください。（笑）

屋嘉比　わかりました。

池田　そこで日蓮大聖人の重要な相伝書である「百六箇抄」のなかでは、

「日蓮が十不二門は事上極極の事理一躰用の不二門なり」（八六八）

とあります。

屋嘉比　文相だけでも、この大聖人の「不二門」というのが、さらに深く、どれほどか極地の法門であるか、わかるような気がします。

池田　この御文は、

「久遠元初・自受用報身如来」即「末法の御本仏」たる日蓮大聖人御自身の、宇宙開悟の現実の原点より展開された、絶対の法理をさしておられる。これ以外に森羅三千の「不二」の真実相はありえない、という極理が秘められておるわけです。

屋嘉比　まことに深秘な意義をもっておられることはわかります。

すると「色心不二」と「依正不二」というのは、どういう関連になるんでしょうか。

池田　これは、とらえる次元の問題なんです。「正報」にも、「依報」にも、「色心」が含まれます。「色心不二」もこれまた、生命の真実相だからです。

この地球は全生命共通のオアシス

――そこで、もう少し話を進めさせていただきますが、「核の冬」とか、「核の夏」という

ことが盛んにいわれておりますが。

屋嘉比　この研究もかなり進んでいますね。先日の『朝日新聞』にも、カナダでの実験がでていたとおりです。

池田　半年ぐらい前、アメリカの学者が、広島で発表したデータもありましたね。それによると、欧米の都市で核爆発が起こると、北半球で十五度も気温が下がるということのようですね。

屋嘉比　そうでした。

池田　「核の夏」というのは、核爆発により、地球をとりまくオゾン層が破壊された場合、起こる現象ですね。

――いわゆるSDI*（スターウォーズ計画）で問題になるところです。十分以内に皮膚に水泡ができるほどの日焼けが起こるという説もあります。

池田　日本では、こうした研究は進んでいるんですか。

屋嘉比　あるていどは行われていると思いますが、外国のほうが多いようですね。

池田　それはいけませんね。（笑）

――そこでちょっとうかがいたいのですが、鎌倉時代は天変地天（てんぺんちよう）が多かった。これについては、どういうふうにとらえておられますか。

池田　私は専門家ではないので、詳しいことはわかりません。ただ、日蓮大聖人のご活躍の時代は、たしかに地球は「小氷河期」の二回目のヤマにはいっていたという学説が強いようです。ですから、冬ばかりでなく、夏も寒かった。『北条九代記』をお読みになれば、そのへんの状況はよくわかります。

屋嘉比　すると、一時代前の、平安時代はどうだったんでしょうか。

池田　温暖だったようです。

通気性を考えた木造家屋の様式も、平安時代に完成したといわれている。『源氏物語絵巻』などを見ても、部屋は広々として、のちに廊下になる〝ぬれ縁〟が大きく庭にでているのも、こういう理由からでしょう。

屋嘉比　日蓮大聖人の御文のなかにも、なにかたいへんに寒かったという記録はありますか。

池田　あります。想像を絶する厳寒だったようです。

たとえば、

「寒風頻(しきり)に吹て霜雪更に降ざる時はあれども日の光をば見ることなし、八寒(はっかん)を現身に感ず」（「富木入道殿御返事」九五五）

また、

「ふるきをきなどもにとひ候へば八十・九十・一百になる者の物語り候は・すべて・いにしへ・これほどさむき事候はず」（「兵衛志殿御返事」一〇九八）

ともおっしゃっておられる。

――世界的にも、この時期は、モンゴル・トルコ遊牧民の南下に象徴されるように、北半球がしだいに寒冷化したといわれておりますね。

屋嘉比　そうした、地球的規模の気象異変は歴史上、何回もあったんでしょうか。

池田　じつは、その点を私も関心があって、少々調べてもらったことがあるんです。そこで、いろいろな説がありますが、大阪大学の故川井直人博士の学説では、近くは、紀元前三八〇〇年ごろから今世紀にいたるまでに、三回の寒冷期があったようです。

第一寒冷期は、紀元前三八〇〇年から紀元前二四〇〇年ごろまで。

第二寒冷期が、紀元前一三〇〇年から紀元前一〇〇〇年ごろ。

そして第三寒冷期が、いわゆる紀元四五〇年ごろからの「小氷河期」である。その前あたりから、有名なゲルマン民族の大移動も起こっておりますね。

屋嘉比　すると、「小氷河期」というのは、いつごろまでつづいたんですか。

池田　途中、何回かの寒暖を繰りかえしながら、十九世紀末ごろまでつづいたようです。博士は、江戸時代に飢饉が頻発したころが「小氷河期」のピークだったのではないか、と

推論しております。なかでも、「天明の大飢饉」は、有名な浅間山の噴火があって、被害を大きくしたようです。

――浅間山の大噴火となりますと、長野県の有名な「鬼押出し」がありますね。

池田　そうです。じつは先日、長野に研修に行ったおり、何人かといっしょに、勉強のために行ってきました。

屋嘉比　私も行ったことがあります。驚きましたね。

――溶岩の下に、村ごと六百人もの人が、埋められてしまったという記録もあります。

池田　そうです。それは、ほぼ同時期のアイスランドの火山の大爆発とも重なった。一万メートル上空の、成層圏まで噴き上げられた灰塵は、地球全体に広がったともいわれる。これが太陽の光線をも妨げた、と論ずる学者もおりますね。

天候が激変するのも当然でしょう。自然の力はものすごい。

――大冷害による飢饉がつづいたのも、やむをえないでしょうね。

屋嘉比　すると、次の寒冷期はいつごろになるんでしょうか。（笑）

池田　それは、まだ明快ではないようです。ただ学者のなかには、三年前のメキシコのエルチチョン火山の爆発が前兆ではないか、と憂慮している人もおりますね。

しかしまだ、結論は出ていないようです。

屋嘉比　ああ、そうですか。

池田　あの爆発の影響で、日本でも、夕焼けがいちだんと赤味をおびて見えるという現象がありましたね。

屋嘉比　ヨーロッパでは、いま季節はずれの大雪や豪雨のようですね。つい最近も、アルプスやオーストリアのチロルで、雪崩（なだれ）や洪水のため十数人が死亡した、という報道があり、驚きました。

池田　そうらしいですね。さきごろ、パリにある創価大学の語学センターがオープンしました。そこにフランス語の勉強に行った学生たちも、だいぶカゼにやられたという報告を受けました。

――最近は、なんだか異常気象が多いですね。

屋嘉比　科学や医学の発達も、絶対に重要であるが、それこそ、人智ではどうしようもない次元の問題があるということも事実です。

――いま、お話のあった次元からみても、天災は人間の生命を左右する。また、その生命が人災をつくるという悪循環は許せませんね。

池田　当然です。さきに結論をお話するようになりますが、ともかく、小さな地球という「生命環境」のなかに、われわれ人類は生きている。

それを破壊し、生命、人類を衰亡させ、死滅させるような人災は絶対にあってはならない。また、誰人もその権利はない。全人類、全生命共通のオアシスであるからだ。

屋嘉比　こわいことです。

池田　つまり、地球、ひいては宇宙とわが身との関連も「依正不二」である。ですから結論していえば、この両者の大調和を永遠ならしめていくのが「妙法」であり、その「法味（ほうみ）」をいかに広げていくか、ということになると思います。

これが、大聖人の壮大にして永遠なる大仏法なのです。

まあ、この点は順次、論じることにしましょう。

屋嘉比　たしかに、生物が生きていくためには、さまざまな条件と環境が不可欠です。

池田　そうなんです。

生命がこの地球上で生きながらえていることは、微妙なバランスのうえにたっている。ドイツの有名な心理学者クルト・レヴィン博士は、それらを「生活空間」と名づけている。それは生命の〝外的環境〟とともに、生物自体の〝内的環境〟を重視した、たいへんに仏法にちかづいた理論体系と、私は思っております。

屋嘉比　そうですね。私も読んだことがあります。

環境を単なる客観的世界ではなく、生物の生存との相互関連でみようとしておりますね。

池田　まあ、新しく鋭い視点から物事をとらえようとする人が出てきたことは、まことにうれしいし、仏法の範疇にちかい。「依正不二」を説明するのに、たいへん便利と思っております。（笑）

少々、複雑な論議かもしれませんが、博士は地上に生息するあらゆる生命には、その個体数と等しい数の「環境」が存在する、といっておりますね。

屋嘉比　ええ、たとえば同じ一軒の家であっても、そこに住む人間と、そこに飼われているネコやイヌとでは、やはり「生活空間」はおのずと異なります。

ネコはネコなりの、イヌはイヌ独自の〝生活環境〟をつくりだすというのです。

池田　これは、私は仏法で説く「世間」ということに通ずると思っております。

――仏法でよく「五陰世間」「衆生世間」「国土世間」という言葉をつかいますが、この「世間」というのは、どういう意味になりますか。

池田　端的にいえば、前にも申しあげたように、「世間」とは「差別」という意味です。

環境世界はその主体によって千差万別のものとなる。ですから、「差別の義」と説いている。

しかも、十界の衆生は、それぞれが呼吸し、それぞれが調和し、それぞれが親和、あい関連しながら生きぬいている。この実相です。

屋嘉比　そのとおりです。

池田　なにかを食べなければ生きられない。呼吸をしなければ生きられない。緑がなければ酸素がつくられない。生命のそれぞれの真実の姿は、森羅三千の宇宙空間のなかで、親和しながらのすばらしい関連性をもっている。

屋嘉比さん、これは誰人も否定できないでしょうね。

屋嘉比　そうした人間と環境の関係を媒介（ばいかい）しゆくものが、相互の「感受性」や「精神性」である、と指摘する学者も増えてきております。

池田　ああ、なるほど。当然そうでしょう。私はよくわかります。

血液循環にも影響あたえる環境の変化

――そこで余談になりますが、最近は医療設備もどんどん新しくなって、人間の身体のすみずみまで写し出す機械もあるそうですが。

屋嘉比　ええ、コンピューターを駆使したＸ線ＣＴ検査やＮＭＲ－ＣＴ（核磁気共鳴（かくじきょうめい）コンピューター断層（だんそう）撮影装置）などが使われています。

池田　最近よく聞きますね。

屋嘉比　簡単に説明しますと、これまでのX線や超音波では、骨やガスなどがじゃまになって写らない部分が出てくる。それが、身体のどんな断面も、あるていど細かいところまで、鮮明に撮影できるようになりました。

池田　すると、その装置のおかげで、ずいぶん患者さんは助かることになるでしょう。

屋嘉比　ええ。頭や身体については、どこでも撮影できます。なかなか診断がつきにくかった頭がい底、脊髄（せきずい）のなかの疾患にも威力を発揮します。

池田　どういう原理なんですか。名前からすると、なにか磁気を利用しているようですが。

屋嘉比　そうなんです。じつは人間の身体を構成している元素のなかでも、水素などの原子核は、強い磁場のなかでは、核磁気共鳴というエネルギー現象を生じます。それをコンピューターで計算します。

――それが断層写真になるわけですね。

屋嘉比　そのとおりです。要するに私たちの身体は、肉眼では外界と見分けがつく形がありますが、原子というミクロの眼では同一元素でできており、外界との境界線がなくなるんです。

――これも「依正不二」ですね。（笑）

池田　そういうことですね。（笑）

それに関連して、私たちの体液中の塩分の割合も、海水によく似ているといわれますが。

屋嘉比　そうです。その人間の体液の塩分と似せてつくられたのがリンゲル液です。これは十九世紀末に、イギリスの生理学者シドニー・リンガーが発見しました。

池田　そうそう、偶然の発見だったようですね。

屋嘉比　ええ、彼は苦心惨憺（さんたん）して、生理食塩水を使い、カエルの心臓を動かす実験を繰りかえしていた。そしてついに、ある溶液を使ったら、カエルの心臓が動きつづけた。ところがそれは、助手が間違って普通の水道の水を使ったものだった。それがあとからわかった。（笑）

池田　当時のイギリスの水道は、カルシウムかなにかが多かったようですね。

屋嘉比　そうです。そこでカルシウムなどの無機物質を加えればよいというヒントを得た、有名なエピソードがあったんです。

池田　私どもは素人ですが、いままでの通念として、人間は、この宇宙のいたるところに存在する水素や酸素や炭素などの元素からつくられている、といわれてますが、具体的にはどういうふうになっているんですか。

屋嘉比　たとえば私は体重が七十キロです。この場合の男子ですと、いちばん多い成分が酸素で四十四・一キロ、つぎが炭素で十三・

三キロ、水素六・三キロ、窒素三・五キロ、これだけで六十七・二キロになります。

池田　ほかにはどういうものがあるんですか。

屋嘉比　残りは、カリウム、カルシウム、リン、イオウなどでほとんどを占めていると考えられます。

池田　人間の身体には、金も含有されているようですが。（笑）

屋嘉比　ええ、私の場合は、〇・〇〇七グラムほどです。（笑）

池田　おもしろいですね。金歯は別だね。（爆笑）

ともかく、

「九山・八海も我が身に備わりて」（「蒙古使御書」一四七三）

という御文はたいへん深い意味があると、私はつねに思っております。

さらに、

「此の身の中に具（つぶ）さに天地に倣（なら）うことを知る」（「総勘文抄」五六七）

という一節もあります。「宇宙即生命」の原理です。

屋嘉比　いつも思いますが、御書には深義が含まれておりますね。

池田　人間の血液も、環境の変化と微妙な関係にあると聞きましたが。血圧なんか、どうなんですか、屋嘉比さん。

屋嘉比　血圧は、一日のうちでは、昼間は高く、夜は低い。また季節でいえば、冬は高く、夏は低いとよくいわれます。

――気温十九度の部屋から、八度の寒い部屋に移動しただけで、健康な三十代の人でも、血圧が一〇～二〇ミリメートルHgあがるという実験もあるようですが。

屋嘉比　あります。これは、おもに自律神経による血管の収縮・弛緩に関係しています。

池田　高山地帯の人は血圧が低いそうですが。

屋嘉比　気圧が低いためでしょう。

また、空気の希薄な高地の人々は、呼吸機能がすぐれています。

あるデータでは、南米ペルーの海岸都市リマ（海抜一五六メートル）と、アンデス山中のモロコカラ（海抜四五四〇メートル）の住民を比較すると、高地の住民は身体は小柄だが、全血液量も、また酸素を運搬する赤血球の数も多いんです。

池田　この血液の循環も、身体と外界をつなぐ、重要な媒介となっていますね。

屋嘉比　そうです。ごく小さな動物では、体の表面から、じかに酸素を吸収して、それが体全体に拡散していきます。

しかし、高等な動物になってくると、ひとつのネットワーク、すなわち、血液の循環がどうしても必要となってくるわけです。

池田　御文にも、

「脈は江河に法とり」（「総勘文抄」五六七）

とあるんです。

まさに、血液は「流れる」ということに、その特質があるといえるでしょう。

屋嘉比　そのとおりと思います。

――血液の循環を発見したのは誰ですか。

屋嘉比　十七世紀のイギリスのハーベイです。

当時は、血液は、潮の満ち干のように、血管をいったりきたりすると考えられていた。

彼は、ガリレオ*力学の新理論に刺激をうけ、いわば〝円運動〟のようなものではないかと着想したといわれています。

池田　それでは、血液の人体一周はどれくらいかかるんですか。

屋嘉比　約二十秒といわれています。

池田　下等動物のなかには、開放式循環とよばれ、血液が自由勝手に流れていくものもある、と聞いたことがありますが。

屋嘉比　そのとおりです。

池田　血液の循環と同じように、人間の社会も、また循環というか、連繋ともいうべきか、

それがないと複雑にして高度な仕事はできませんね。（笑）

――魚にも血圧はあるんですか。（笑）

池田　当然、血液がある以上、血圧はあるんでしょうね。

屋嘉比　魚は専門ではないんですが、興味があって調べてみたことがあります。（笑）ある研究では、魚が暴れたり、泳いだりするときは、血圧が五〇ミリメートルHgも上昇したという報告もあります。（笑）

池田　水深八〇〇〇メートルあたりで発見された深海魚が、もっとも深いところに住む魚だそうですが。すごい顔をしているね。（笑）

屋嘉比　たいへんな水圧ですから、血圧のバランスも、体型も、厳しい環境に耐えられるようになっているようです。

池田　水深一〇〇〇メートルぐらいになると、缶詰（かんづめ）もペシャンコになってしまう。八〇〇〇メートルだと光も届かない常闇（とこやみ）の世界でしょうね。

屋嘉比　太陽の光は一〇〇メートルぐらいしか届きませんから、深海魚はだいたい目が大きく、体の大半が口のようなこわい顔をしたのが多いらしいんです。（笑）

池田　しかも、一回くわえたエサは、絶対逃がさないように、鋭い歯がある。まさに〝修羅（しゅら）は海の底に住む〟といいますから、その形相（ぎょうそう）がうかがえますね。（爆笑）

屋嘉比　深海魚は胃も大きいんです。（笑）

――どうしてですか。

屋嘉比　深海にはエサが少ないので、胃にたくわえておく必要があるんです。ですから、腹が異常に大きいのが多いですね。これも、魚の「依正不二」なんでしょうね。（笑）

人間生命誕生の本来的意義

――ちょっとうかがいたいんですが、「依正不二」論から進化論はどうみますか。

池田　進化論といえば、有名なのはダーウィンでしょう。しかし最近では、分子生物学や生態学などさまざまな分野から、どうも違った考え方も提示されてきておるようですね。

屋嘉比　その先駆的な論議は、日本の今西錦司博士などが早くから主張されています。

――今西博士は「平和の灯よ永遠（とわ）に輝け」という映画のなかで、仏法を基調とした平和運動を、たかく評価されていましたね。

池田　私どものために、わざわざ登場していただいたことがあります。今西先生は、まだお目にかかったことがありませんが、私が尊敬している学者のおひとりです。

屋嘉比　ダーウィン以来の正統派進化論は、突然変異と自然淘汰という二つの柱からなりたっています。

つまり生物の個体が、ランダムな突然変異を起こし、環境にもっとも適応したもののみが繁殖する。

そうでないものは淘汰されるという、適者生存の原理が進化の要因であったと説明するわ



深海魚の一種、ウルフフィッシュ(上)とグーズフィッシュ。

けです。

池田　おおざっぱな論議になりますが、それに対し、今西博士は、生物それ自体に進化の主体性を認めた進化論となるわけですね。

屋嘉比　ええ、いわゆる「種」というものが棲み分けをしながら、環境の変化に対し、変わるべくして変わっていく。

いわば進化の主導権を環境から生物の側におき、しかも、環境と生物進化とは密接不可分の関係にある、というような論議だったと思いますが。

――そうですね。ですから、自然淘汰というような考え方は、キリスト教的土壌の産物であり、もっと仏教的な生命観からの進化論もあっていいのではないか、という意味のこともいっておられるようです。

池田　私も、仏法者として、「依正不二」からみれば、今西博士の進化論は、よくわかる気がします。今後も、さまざまな論議が継続されていくでしょうが、注目していきたいと思っております。

ともあれ、これは、私は学者ではないのでその点ご了解いただきたいんですが、常識的にいわれてきた地球誕生の姿からみて、一般的には、いわゆる原初の地球は、チリやガスの凝縮した熱い塊であったと推定されている。

いろいろな角度からの論じ方があるでしょうが、ひとつ、そこに視点をおかせてください。

（笑）

――この点については『「仏法と宇宙」を語る』でも、詳しく論じていただきましたが、ぜひつづけてお願いします。

池田　いまから二百億年前ともいわれるビッグバン以来、その宇宙の大作用によって太陽系が形づくられ、約四十六億年前に地球が誕生し、位置づけられた。

屋嘉比　一般的にはそのとおりですね。

池田　そのときは、地球には花とか、木とか、鳥とか、魚とか、人間は存在しなかった。それが次第に冷えてきて、四十億年前から二十億年ぐらい前の間に、それぞれの条件が整って、ひとつの原始生命が誕生したといわれてきていますが。

屋嘉比　そうです。

池田　やがて、下等なバクテリアのような微生物や、光合成を行うものも発生する。さらには多細胞の生物が誕生し、さまざまな変化をへながら樹木も、魚も、動物も登場した。そしてついには人間が誕生した、となっている。

屋嘉比　壮大な生命のドラマですね。そうすると地球という惑星自体に、生命を生み育んでいく力というか、方向性が内在していたと考えていいんでしょうか。

池田　これらの種々の「依正」の条件によって、生命が誕生したのは間違いないでしょう。最初は〝火宅〟ともいうべき冷酷非情な物体とも思えるなかから、これだけの無数の生命が誕生したということは、「国土」と「生命」が〝一にして二ならず〟の淵源をみる思いが、私はするんです。

――それは否定できません。（笑）

屋嘉比　まさしく生命の発生ということは、科学の問題と同時に、すぐれて哲学的な課題となりますね。

池田　ゆえに、そうなさしめる原因を生物学的・遺伝学的、また物理学的・宇宙論的に追究していけば、やがては、その現象的な原因が、当然わかってくるであろうと私は期待しています。とともに、そうなさしめていくべき、より根本的な法則があるにちがいないということもわかることです。

――現段階の科学においても、「非情」なる地球から「有情」の生命が誕生し、進化していったことは事実ですからね。

池田　人類の誕生についても、当然、いわゆる進化論のうえからもさまざまな見方もある。しかし、現在この地球上に生息している高崎山のサル、上野のサルなどは、百年たっても、千年たっても人間にはならない（笑）。人間はあくまでも、人間として誕生した。ここに

「十界」という、生命の実相のうえからの意義づけがあることも、見逃せないでしょう。

屋嘉比　人間という「種」の誕生は、大きな謎のひとつです。

池田　〝E.T.〟のように、外部世界から来ることは別問題だけれども（笑）、ともかく、全生命が地球の国土世間から生まれ出た。

少々飛躍した話になりますが、私は、仏法で説く「法性の淵底・玄宗の極地」という意味にも、たいへんに深い生命と国土世間との関連性が感じられてならないんです。

屋嘉比　その「法性の淵底・玄宗の極地」というのは……。

池田　結論していえば、いっさいの万法が拠り所とする根本の真理であり、「南無妙法蓮華経」のことです。

この「法性の淵底・玄宗の極地」から出現する菩薩を「地涌の菩薩」といいます。

この地涌の菩薩の生命には、幸福と平和を確立しゆく大法を持ち、広めゆく使命がある。

私は、そこに、人間生命誕生の本来的意義がある、と結論づけられている気がしてならないんです。

屋嘉比　まことに重要な、単なる理論のみではない、人間生命の根本的な価値についてのお話と思います。

あらゆる生命を育む慈悲の法則性

――そこで、また環境の問題にもどりたいと思いますが、地球は砂漠化に向かって進んでいると警告する学者が多くおります。この点について先生は、ローマ・クラブの創始者である故ペッチェイ博士とも対談されておりますね。

池田　ペッチェイ博士とは、何回もお会いしました。二年前のパリが最後でした。

このときも、七十五歳の高齢にもかかわらず、その日の朝、アメリカのボストンを出発し、私のホテルに来てくださった……。本当に忘れられない方です。

ペッチェイ博士は、人類の未来をたいへんに危惧されていたひとりです。

森林の乱開発についても、このままつづければ、五十年後には、熱帯雨林は全面的に破壊され、事実上砂漠化してしまうであろうと憂い、力説しておられた姿を、いまでも覚えております。

――パリだけでなく日本でも、二回ほど会談なさっておりますね。

池田　ええ。この八月の中旬にも、ご子息がわざわざ訪ねてこられることになっております。

――ご子息は物理学者ですね。

池田　そうです。そこで、歴史的にみても、この砂漠化と人間の生活の営みは、まったく深い関連性があることは事実です。

――そうですね。

池田　あのアフリカのサハラ砂漠も、一万年ぐらい前から長い間、緑したたる大地であったことは、歴史的事実のようです。その証拠に、さまざまな古代の文化遺跡が散在している。それは「古代芸術のギャラリー」とも呼ばれるほどである。

また、ローマ帝国の時代にも、サハラの一部は一大穀倉地帯であったようです。

それが、気候の変化や、過度の放牧などが原因となって砂漠化していったことは、多くの学者の説くところです。

――メソポタミアも、肥沃な土地が砂漠化してしまったといわれております。

ところで現代は、アマゾンやアメリカ大平原、またインドやエジプトなど、広範囲にわたり、砂漠化や洪水等の現象が起こってきている。

屋嘉比　これは天災もあるが、人災も大きい。やはり、自然と人間を対峙させ、人間の欲望を無制限に解放しつづけてきた文明の結果でしょう。その意義においても、仏法の「依正不二」の視点はたいへん重要と、私は思えてなりませんね。

池田　詳しくは、略させていただきますが、いわゆる地球と人間とのかかわりあいというものを、より長期的に、もっと本源的に、見直さなければならない時代にはいったと思う。心ある人々は、みなそう思っているにちがいない。

屋嘉比　歴史をみても、平和と安定は、つねに経済の問題と不可分であり、いわゆる自然の災害とか、飢饉（ききん）といった問題も大きなウエートを占めてきたわけですからね。

――自然の脅威（きょうい）ほどこわいものはない。

池田　その自然の脅威を、人類がみずからの手でつくりだすことほど、愚かなこともない。ですから、私どもはつねづね、「地球一体感」「運命共同体感」をもたらす哲学、宗教が大切であると主張しているわけです。

――ペッチェイ博士も、

「われわれ自身の資質（ししつ）の向上を基盤とした全面的な〝人間革命〟が、いまこそ必要不可欠である」

と強調しておりましたね。

屋嘉比　そうです。もはや、そこから出発しなければならないと思います。

池田　そこで、私がいつも深く思索しなければならないと思っている御文があるのです。それは、

「されば法界のすがた妙法蓮華経の五字にかはる事なし」（「諸法実相抄」一三五八）

また、

「法界の依正妙法なる故に平等一子の慈悲なり」（「御義口伝」七九二）

という、一節です。

屋嘉比　「法界」とは、どういう……。



ローマ・クラブ創始者ペッチェイ博士と。（1983年、パリで）

池田　ひとことでいえば、全宇宙、森羅三千のことである。ですからいっさいの森羅万象は「依報」も、「正報」も、ことごとく「南無妙法蓮華経」の一法の当体のほかにありえないというのです。

屋嘉比　これは、はっきりした法則性ですね。

池田　そう思います。この宇宙には、科学の法則もある。それなりの政治、経済の法則性もある。

しかし、さらに奥深い、無始永遠なる大宇宙そのものにも、あらゆる生命を育みゆく慈悲の法則性があることが、仏の眼から見ればわかってくる。

それを「本因妙」の仏法、「事の一念三千」即「南無妙法蓮華経」といわれるわけです。

その法則の当体が、「一閻浮提第一」の御本尊となるわけです。

この御本尊とは、「根本尊形」「輪円具足」「功徳聚」とも名づけます。

この御本尊を信じ、行じていったとき、はじめて自身の生命も「事の一念三千」の当体となりゆくことができる。

それこそ社会に、国土に、宇宙までも、「法味」を与えながら、よき環境をつくり、守りゆく原動力となるわけです。ゆえに仏法では、正信の人をば最大に大事にしております。

仏法根底に文化の創造

池田　その意義で、初座（しょざ）という儀式において、東天に向かって、これまた十界三千の国土世間である大宇宙の運行に、「法味」を送っていくというのは重大な意味があると、私は思っております。

屋嘉比　仏法は本当に一つひとつが明快であり、そのうえで深義が感じられますね。

池田　ですから、大宇宙に「南無妙法蓮華経」という「法味」をあたえゆく人々が多くなればなるほど、その力用は確実に広がり、大宇宙という「依報」と、題目を唱える人の「正報」が、確かになることでしょう。

これは、余談になりますが、明治時代の著名な人がよく話していたことがある。まことに素朴なかにも含蓄（がんちく）のある話と、私は思ってきた。

それは、中国の東北地方には雷がなかった。日本人がはいるようになってから、雷が見られるようになった、というんです。

――それは私も聞いたことがあります。

偶然の一致か、なんらかの因果関係のなせるものか。それにしてもなにか心の奥に感ずる

ものがある話ですね。

池田　これはまた、アラスカに住むある日本人から聞いた話ですが、まだあまり人間がいなかったころのアラスカは、本当に人間が住めるような場所ではなかった。ところが、人が多く住むようになってから、多少なりとも温度が上がってきた、といわれているというんです。

屋嘉比　人間は火を使うから、気温が上がるということもあるんでしょうが、私は、もっとなにか大きな、生命が生きようとするとき、自然もそれに応じていくものがある気がします。

池田　科学的にどうなるか、私にはわかりません。ただ、なんとなく不思議なものを感ずるんです。

――いや、東京でも、昔から比べると、雪なんかもたいへん少なくなっている。

屋嘉比　台風もほとんど来ませんね。

――これも、ひとつの現象でしょうね。

屋嘉比　それはそれとして、仏法が、もっとも現実を厳しく踏まえながら、人生と社会と、そして宇宙をも包みゆく広がりの法であることは、私には驚きです。

池田　ただ私は、信仰すればそれでよいというようなことは、まったく考えておりません。

その大仏法を根底に、即政治・経済の発展、また科学・技術の進歩、さらに文化の創造へとつねに連動しゆくのが、私どもの運動の目的である。それがまた仏法の真髄であり、仏法たるゆえんなのです。

――トインビー博士も、

「一文明における宗教は、その文明の生気の源泉である」

と述べておりますね。

池田　キリスト教でも、何世紀にもわたる人類的規模の実験がなされてきたと思う。また近くは、マルクス主義も実験されてきた。

しかし、高度な科学文明が発達し、人類全体が絶滅か、共存共栄かが問われる時代は、第三の法門たる日蓮大聖人の仏法が、これから何百年、何千年と実験、証明されゆく段階にはいっていると、私は信じております。

第十一章　人間の「生と死」のドラマ

医の根本は医者と患者の信頼関係

池田　屋嘉比さん、アメリカに行かれたようですが。

屋嘉比　ええ、ミシガン大学医学部の視察と、研究の打ち合わせに、十日間ほど行ってきました。

池田　アメリカは、心臓手術とか、ガンの研究とか、医学の分野においても第一人者なんでしょうね。

屋嘉比　そう思います。アメリカは世界中から人材を集めています。また、研究にかける予算、時間も比較になりません。研究体制の面では、日本はまだかなわないと思います。

池田　そうでしょうね。医学も日進月歩ですから、競争社会の最先端をいっているともいえるでしょう。

屋嘉比　きびしいです。大学教授でも、いい論文をどんどん発表していかないと、解雇されてしまう場合も、ままあるようです。

池田　そういえば、先日、アメリカの宇宙飛行士が、故障のため漂流している衛星の修理を、見事に成し遂げた、というニュースがあった。

この飛行士も、もともとは外科のお医者さんであったそうですね。

屋嘉比　ええ、フィッシャー博士ですね。私も医学者のひとりとしてうれしい話です。（笑）

池田　私はよくわかりませんが、スペースシャトルの船外に十時間もでて作業した。これはアメリカの新記録のようですね。

――小さなドライバーで、電気回路の細かい配線をやったり、お医者さんというのは、本当に勇気もあるし、手先が器用だ。（笑）

屋嘉比　いや、外科医は、沈着冷静な判断力、そして、すばやく適切な処置ができなければ、務まらないと思います。（笑）

池田　最近は、本当に小さな神経や、血管をつないだり、脳の腫瘍を取り除いたり、まったく驚くべき技術の進歩ですね。いったいどうやるんですか。

屋嘉比　数倍から数十倍の顕微鏡を使って手術をします。

池田　そうでしょうね。

屋嘉比　これをマイクロサージャリー（微小外科）といいます。しかし、いくら医療器具が発達しても、毛細血管や神経などの縫合手術は、医師の腕ひとつできまります。

池田　やはり、医学が進歩しても、治すのは人間であることに変わりはない……。

屋嘉比　ですから外科の医者というのは、気分転換もうまいんです。ゴルフやったり、マ

ージャンやったり、お酒を飲んだり（大笑）。一面からいえば、やはり〝医学は医術〟です。

池田　当然でしょう。ともかく医学は〝理性の座〟である。屋嘉比さん、どうでしょうか。

屋嘉比　そう思います。

池田　しかし、それは〝人間の座〟でもなければならないでしょう。

屋嘉比　そのとおりです。

池田　そうなると、結局は〝生命の座〟といってよいわけでしょう。

屋嘉比　まったく、ご洞察のとおりです。

――すると仏法では、医師についてなにか説かれておりますか。

池田　医師とは断定できませんが、四条金吾という方が医術に通じておりました。そのことについてはございます。

――四条金吾は、武士の心得として、ある程度の医術の心得はあった。それを深めていったと考えてよろしいでしょうか。

池田　私も深く研究したわけではありませんが、正しいと思う。

そこで、大聖人が身延の沢で、健康を損なわれたとき、彼がその地を訪ね、真心からの治療をしたというのは有名な事実です。

屋嘉比　当時は、仏教医学や漢方医学が伝わっていましたね。

池田　いまみたいな西洋医学とは違う。また、大勢の医者がいたとはいえませんからね。当時は、いわゆる指導者の多くが、それなりのものを身につけていたことは考えられる。

屋嘉比　そう思います。近代西洋医学は、日本では本格的には、幕末の長崎からといわれますからね。

池田　その、信徒である四条金吾に送られたお手紙のなかに、このような言葉があります。「今度の命たすかり候は偏に釈迦仏の貴辺の身に入り替らせ給いて御たすけ候か」（「四条金吾殿御返事」一一八五）

つまり、四条金吾よ、あなたのなかに釈迦仏がはいったのであろうか。私をこのように慈愛深く治療してくださってありがとう、という意味でしょうね。

ともかく、たいへんなお言葉です。

屋嘉比　勉強になるお話です。医師の姿勢を示しておられる。本当に、患者から感謝されているという模範を、私は感じとれます。四条金吾はすばらしい方ですね。

池田　また大聖人は、この四条金吾に対して、

「死生をば・まかせまいらせて候」（「四条金吾殿御返事」一一八二）

とまでいわれております。

屋嘉比　たいへんなことです。

医者として、患者さんから信用され、信頼されるということは、医の根本です。

――私も、患者側の代表として、そう思いますね。（笑）

屋嘉比　それにしても、アメリカの医学生が卒業にあたって宣誓する、有名な〝ヒポクラテスの誓い〟があります。そのなかに、医者になるためには、まず、

〝病人の秘密は、絶対に他人には漏らさない〟

という言葉があります。

池田　大切なことです。人格と教養の第一条件です。これは人生万般の道理です。心ないひと言が、どれほど人を傷つけることか。上に立てば立つほど、絶対に心しなければならないことです。

――いまは、そのような人が少なくなった。

自分中心の風潮があまりにも強く、他人の不幸のおしゃべりが多すぎる。

屋嘉比　かりに医者が、その人の病気を、軽々と外にしゃべることがあれば、まったく医師としては失格です。

――当然ですね。恐ろしいことです。

池田　いや、宗教の世界にあっても同じです。その人のプライバシーは絶対に守るべきです。

――これは、一般的にいわれていることですが、ある宗派の歴史において、人々が不信を抱くようになったひとつの原因に、聖職者のなかに、信者の懺悔（ざんげ）、告白の内容を漏（も）らすものがいた。ひどいのになると、第三者に伝え、利用しようとした、と聞いたことがあります。

屋嘉比　権威主義の乱用は、どこの世界にもあるものです。

ある著名な医学者が指摘していた。それは、

〝医師は強者の立場であり、患者は弱者の立場である。このことを医学にたずさわるものは、深く自覚しなくてはいけない〟

と……。

航空機事故の連鎖反応で思うこと

――それにしても、この夏（一九八五年）、日航ジャンボ機の事故は、世界中の人々に衝撃を与えましたね。

池田　たいへんに痛ましいかぎりです。

この事故のことを聞いたとき、私は、法華経「譬喩品（ひゆほん）」の一節を思い起こしました。

それは、



アメリカ・ダグラス空港での航空機墜落事故現場。

「今此の三界は　皆是れ我が有なり
其の中の衆生は　悉く是れ吾が子なり
而も今此の処は　諸の患難多し
唯我れ一人のみ　能く救護を為す」

という経文です。

屋嘉比　どういう意味でしょうか。

池田　これは仏法上からみれば、*文上においては、一切衆生は釈尊の子供である。*文底から、現代でいえば、日蓮大聖人の子供である、と拝するのです。その意味において、信仰している、していないにかかわらず、すべての方々が尊い仏子である。

ですから私は、信仰者のひとりとして、唱題、回向させていただきました。

屋嘉比　じつは、私の親しい友人も乗っていたんです。知らせを受けて、二日間というもの

は、ほとんど眠れませんでした。本当に残念でなりません。

――ああ、そうでしたか……。

私も、一夜明けて、テレビが映し出すなまなましい現場の状況に、息をのむ思いでしたね。

屋嘉比　一瞬にして、五百人以上もの人が亡くなるなんて、衝撃ですね。いったい、「生きる」ということの意味はなんなのか。また、「死」とはなんなのか……。あらためて考えずにはいられませんでしたね。

池田　ある元機長が、

「私はパイロットになったときから、つねに〝死〟を考えた。普通の人の何十倍も〝死〟について考えている」

と語っていた。本当に「死」というものが、今度ほど身近に感じられたことはない……と、多くの人がいっておりますね。

――なんですか、ジャンボ機が事故を起こすのは、百万分の一以下の確率だそうです。

池田　たしかにそのようです。しかし、これらの重大問題は、そのような統計や科学の次元だけではわりきれないものがある、と私は思います。

要するに、世界で一年間に九億人もの人々が飛行機を使っている。こんな悲劇的な事故が絶対にあってはならないということです。

屋嘉比　そういえば、ある人の遺書のなかに、「本当に今迄は　幸せな人生だったと　感謝している」という、胸を衝く一節がありましたね。

――そうでした。

四人の生存者がいたことは、夢みたいだった。奇跡ですね。

屋嘉比　生存者が女性と子供だけであったことは、なにか意味があるんでしょうか。

――これはむずかしいですね。

屋嘉比　なにかデータはありますか。

――あえて申しあげれば、ある人が調べたひとつに、一九六六年から七一年までの五年間に、世界で起きた飛行機事故の資料があります。

それによりますと、一人だけ生存者がいた事故が、統計的に六度もありました。

池田　一人だけですか。

――そうです。乗っていた人は、乗客、乗員あわせて、

六六年　フィリピンでの事故が、二十八人

六七年　コロンビア、十八人

サウジアラビア、十七人

六九年　ベトナム、七十六人
七〇年　ペルー、百人
七一年　ペルー、九十二人

となっています。

屋嘉比　他の全員が亡くなるような大惨事で、なぜ、その一人だけが生き残れたか。考えれば考えるほど、不思議な気持になりますね。

池田　七一年のペルーの事故は、アンデス山中でしたね。助かったのは女の子だったんではないでしょうか。

――ええ、まだ十七歳だったと思います。彼女は、事故現場からたった一人脱け出し、九日間もアマゾンの密林の中を歩き続けたそうです。いや、驚きましたね。

屋嘉比　たしかに女性のほうが、生きぬく力が強い気もしますからね。(笑)

――ですが、この六度の事故では、女性が多く助かったという結果にはなっていません。女性は、身体が柔らかいこともあるようですが、それだけではやはり納得できない……。

屋嘉比　そうですね。飛行機のどこに座ったか、といったような、さまざまな要因もありますからね。

池田　いや、これは科学でも、医学でも、どうしようもない。深い深い、因果律のうえか

ら見る以外ないんでしょうね。

――ある記者から聞いたんですが、今回の事故で、十二歳の少女を発見した消防団のひとりは、「生きている……」といったまま、ヒゲだらけの顔を涙でくしゃくしゃにして、呆然と立ちすくんでおったようですね。

池田　生死の際に立ち会って、なにか言葉にならない激情がこみあげてきたんでしょう。

屋嘉比　私も、危篤状態の患者さんが、突然、蘇生したとき、うち震えるような感動を経験したことがあります。

池田　ああ、そうでしょうね。わかるような気がします。

――たしかに私も、そう思います。

「生きている」というこの事実ほど、不思議なことはない。ふだんはそれを忘れている……。

池田　御書の一節にも、

「人命の停らざることは山水にも過ぎたり今日存すと雖も明日保ち難し」（「松野殿御返事」一三八八）

とありますからね。限りあるこの一生を、私は、また私たちは、悔いることなき、最高に価値ある日々をおくりたいものです。

屋嘉比　本当にそう思います。

池田　その意味から、ゲーテの、

「生の歓びは大きいけれども、自覚ある生の歓びはさらに大きい」（「西東詩集」）

という言葉は、たいへんに含蓄があると、私は思ってきた。

屋嘉比　示唆に富んだ言葉です。私も大好きです。

――こうした大事故が起こると、また同じような事故が起こる。

今回も、十日前の八月二日、アメリカのダラス空港で、百二十九人の犠牲者がでた。また十日後の二十二日、イギリスのマンチェスター空港で、五十四人の方が亡くなっています。かならずといっていいほどの連鎖反応がありますね。

屋嘉比　まったくそうです。科学で説明できるものも多少あるが、その根本的原因は、科学の次元をはるかに超えている。

池田　「災害は忘れたころにやって来る」といったのは、物理学者の寺田寅彦でしたか。彼の場合は、「科学的宿命論」とまでいっておりましたね。

――寺田寅彦のエッセイがまた、ブームを呼んでおりますが……。

池田　彼は文学者としても著名ですが、

〝人間がけがをしたり、遺失物をしたり、病気が亢進したり、あるいは飛行機が落ちたり、汽車が衝突したりする「悪日」などは、現在の科学から見れば、単なる迷信であっても、未

来のいつかの科学では、それが立派に「説明」されることにならないとも限らない〟ともいっておりますね。

屋嘉比　科学者として、直観的に、なにかしら科学の力だけではどうしようもない、人間の不可思議な因縁というようなものを感じていたんでしょうかね。しかし、わかる気がします。

池田　それにつけても御書のなかに、

「人の寿命は無常なり、出る気は入る気を待つ事なし・風の前の露尚譬えにあらず、かしこきもはかなきも老いたるも若きも定め無き習いなり、されば先臨終の事を習うて後に他事を習うべし」（「妙法尼御前御返事」一四〇四）

という御文があります。

まったく現実は、この御文のとおりと思います。それをどのように生き、どのように納得しながら生きぬいていくか。そこにも信仰のひとつの深い意義があると、私は思っております。

屋嘉比　人生と生命の根本的課題であり、これは医学以前の、大前提となる問題です。

――そこまで深くとらえておられる人は少ない。あまりにも日常が繁多で、なにかに追われながら、私は四十代になってしまった。（笑）

仏法では「死」をどうとらえるか

屋嘉比　そこで人の死というものは、仏法ではいろいろと説かれていると思いますが、どうでしょうか。

池田　千差万別です。ただ、

「命已(すで)に一念にすぎざれば」（「持妙法華問答抄」四六六）

と御文にあるように、そのもっている「一念」の姿勢が、どういう方向になっているかが、重大な問題となるのです。

たとえ仏法を持(たも)っても、若くして病気で亡くなる場合もある。また、事故などで亡くなる場合もある。

しかし、

「大苦逼迫(ひっぱく)し……、身受は有るも心受は無い」

また、

「唯能(ただよ)く身を壊(やぶ)りて心を壊(やぶ)る能(あた)わず」

という経文もある。

これは小乗、大乗、共通したとらえ方になっております。さまざまな解釈がありますが、結論して、妙法という絶待妙から見たならば、それなりの感じがわかるような気がします。

屋嘉比　ああ、なるほど。そうですか。はじめてうかがいました。

池田　その「唯能く」云云とは、釈尊が最後に説いたといわれる「涅槃経」にあります。この「涅槃経」には「転重軽受」という法門が説かれております。

屋嘉比　「転重軽受」というのは……。

池田　読んで字のごとくです。正法によって、過去からの重き罪業を転じ、今世において軽く、その報いを受けることができるという法理を説かれております。

このことについて大聖人は、

「先業の重き今生につきずして未来に地獄の苦を受くべきが今生にかかる重苦に値い候へば地獄の苦みぱつときへて死に候へば人天・三乗・一乗の益をうる事の候」（「転重軽受法門」一〇〇〇）

と明快におっしゃっておられるわけです。

屋嘉比　いや、たしかに仏法は深いですね。「地獄の苦みぱつときへ」とまで断定されるとは、すごい仏法と思います。

池田　つまり、仏の生命は「三身常住」である。私どもの生命も、これまた無始無終、永

遠であると仏法は説いています。

ですから、仮諦としてとらえられるこの身が、一時的に「苦」を感じても、この生命、すなわち「一念」が「四悪趣」の方向へ、方向へと下がっているのか。

それとも「二乗」（声聞・縁覚）へ、さらに「菩薩」へ、そして「仏界」へと上昇しているかどうか。その傾向性が根本的な問題であるとみております。

屋嘉比　根本的な「一念」の軌道がどうかを、説いているわけですね。

池田　これは、仏は別として、修行中の弟子はさまざまな死の姿がある。しかしこの場合も、経文には仏の「*記別」が明快にあたえられていることからも、おわかりいただけると思います。

――飛行機でも、電車でも、車でも、かならず行く方向が定まっていますからね。（笑）

屋嘉比　目的地が、どこへ向かっているかですね。

池田　ひとつの例として、釈尊の場合、優秀な弟子であった目連は殺されている。ですが、この目連に、「多摩羅跋栴檀香仏」という仏の「記別」を与えております。

屋嘉比　まだおられますか。

池田　蓮華比丘尼という女性は、*提婆達多に殴られ、死に至ったといわれています。

屋嘉比　ひどいですね。

――釈尊の晩年、釈迦族は、舎衛国の波瑠璃王によって、ほとんど全滅されておりますね。

池田　これは、歴史的に有名な事実です。

一説には、七万七千人もの人が殺されたと記述されております。

屋嘉比　ああ、そんなこともあったんですか。

――この点について、先日、先生がどこかで指導なされておりましたが。

池田　いたしました。じつはこの悲惨極まりない波瑠璃王の虐殺も、まことに他愛のないことが原因となっているんです。

波瑠璃王の母親は、釈迦族の卑しい身分とされる下女であった。彼は、あるとき、釈迦族の人間からそのことを侮辱され、復讐を誓ったという。

その復讐心のすさまじさは、側近に「王よ、釈迦族から受けた恥辱を忘れるな」と、一日三回、自分に向かっていわせつづけたほどであった、といわれております。

まあ、現代では考えられない階級差別です。

――人間は利口そうに見えて、まったく愚か者であるという証拠です。

人間のどろどろした怨念のすさまじいことを、語ってあまりある事実と思いますね。

池田　彼のおこなった釈迦族の殺戮は、凄惨そのものだったようです。

人々の足を地面に埋めて、逃げられないようにする。そこに、荒れ狂う象を放って、踏み

殺させたともいわれている。

その場面は御書にも、

「血ながれて池をなせし」（「顕謗法抄」四五三）

とあるほどですからね。

そこでじつは、この事件の背景にはもうひとりの人物がいたわけです。

屋嘉比　誰でしょうか。

池田　*阿闍世王です。彼は当時、マカダ国をインド第一の強国にしたといわれる人物です。波瑠璃王は、その彼にそそのかされ、この殺戮に至ったともいわれている。

――こうした事件には、いつの世でも、陰で糸を引く人間がいるもんですね。

池田　この阿闍世王もまた、象に酒を飲ませ、それを放って、釈尊を殺そうとしたのは有名な史実です。この彼も、提婆達多にそそのかされ、父を獄死させてまで、王位についた。提婆達多は釈尊を亡きものにし、自ら「新仏」になろうとしたわけです。

屋嘉比　すると、その提婆達多というのが、おおもとですか。（笑）

池田　そういわれています。

余談になりますが、この提婆達多の別名を「調達」といいます。どちらも音訳の名前です。この「調達」の「調」とは、「あざける」「からかう」、また「あざむく」という字義もあ

る。また「達」は「さとい」である。

ですから、本当によくぞ「調達」と訳したものだと、私は感心しております。（笑）

――たしかに本当の悪人というのは、言葉たくみに、人をだますのがうまいですからね（笑）。最近も、経文どおりの人物が出ました。（笑）

池田　だが、この阿闍世王も、後に仏教に帰依しています。

五十歳のとき、彼は全身に大悪瘡（あくそう）ができ、死にかかったが、釈迦のもとへ行き、助けられる。その後の彼は、仏滅後の第一回の経典結集（けつじゅうげ）を外護（げご）しております。

当時は、まだ現在のような濁りきった時代ではなかったんでしょうね（笑）。いまは、そういう人物はなかなかいませんが。（爆笑）

屋嘉比　悲しいかな、人間は時代とともに邪智（じゃち）にたけていく。また、社会も濁っていくものですね。

池田　そう思います。この阿闍世王について、大聖人は、

「父を殺せども仏涅槃の時・法華経を聞いて阿鼻（あび）の大苦を免れき」（呵責謗法滅罪抄」一一三一）

とおっしゃっております。

――たしかに仏法は、「三界は皆是れ我が有なり」ですね。

敵も味方もないというのは、すばらしいことと思います。

池田　そう思います。仏法は大きいです。宇宙大です。

屋嘉比　まだ、なにかそういう史実はありますか。

池田　跋迦利という仏弟子は、重病に倒れ、最後は自殺したといわれます。

屋嘉比　そういう人もいたんですか。

池田　しかし、釈尊は、この跋迦利をあたたかく包みこんだといわれる。また、法華経において「記別」をあたえられている迦留陀夷という仏弟子は、バラモンの婦人のために殺され、馬糞の中に埋められたという記録もあります。

――智慧第一といわれた*舎利弗は、どういう死に方をしておりますか。

池田　病死のようです。

――釈尊より先に亡くなったといわれますが。

池田　そのとおりです。

屋嘉比　なんの病気でしょうか。

池田　『大智度論』では、「風熱病」であったとされます。ですから、結核ではないかといわれています。

これまた、明快に仏の「記別」をあたえられているわけです。

仏における難の意義

屋嘉比　すると、大聖人の仏法ではどうでしょうか……。

池田　熱原の農民であった神四郎、弥五郎、弥六郎の三兄弟が刑死しております。

屋嘉比　誰によって……。

池田　これは、侍所の所司であった平頼綱によってです。つまり殉教です。

屋嘉比　ほかにもございますか。

池田　現在の千葉県鴨川市で、地頭の東条景信の一派の襲撃があった（小松原の法難）。そのときに、弟子の鏡忍房は即死しております。

また、地元の領主であった工藤吉隆という青年も、瀕死の重傷を負い、それがもとで、まもなく亡くなっている。

こうした難については、大聖人が、

「其の外に弟子を殺され切られ追出・くわれう（過料）等かずをしらず」（「聖人御難事」一一八九）

とおっしゃっておられるとおりです。

屋嘉比　まだ、ございますか。

池田　千葉県の天津小湊に住んでいた光日房の子供は、若くして横死したといわれております。そのような不幸な母親に対し、大聖人は、

「霊山浄土へ参り合せ給わん事疑いなかるべし」（「光日上人御返事」九三三）

とおっしゃっておられます。

ですから御書のなかに、生命観のひとつとして、

「浄土と云うも地獄と云うも外には候はず・ただ我等がむねの間にあり」（「上野殿後家尼御返事」一五〇四）

という有名な御文がある。

目に見えない根本の「一念」の方向性が、いかに大事であるか。そのための「法」と、勇気ある「信仰」がいかに必要であるかも、おわかりいただけると思います。

――そうなると思います。

池田　ともかく大聖人は、

「我並びに我が弟子・諸難ありとも疑う心なくば自然に仏界にいたるべし、天の加護なき事を疑はざれ現世の安穏ならざる事をなげかざれ」（「開目抄」二三四）

と仰せである。信仰の真髄は、そうでなければならない、と私は実感します。

屋嘉比　共鳴できる御文です。

医学でも科学でもどうしようもない因果律は、凡夫ではわからない……。

――謙虚な姿勢で、生命の実相を説きあかしておられる経文に、学ぶべきでしょう。

池田　じつは先日、今回の日航機事故で、亡くなられた女性のご主人から、お手紙をいただきました。また昨日は、ご両親からいただきました……。

肉親の方々が、それぞれ深い意味を感じとられながら、力強く立ち上がっておられる姿に、私は感動もし、安心もいたしました。

屋嘉比　そういうこともあったんですか。やはり、人間の幸、不幸の深い実感は、外面的な姿だけではわからない。近親者の方々が、いちばんよくわかるものなんでしょうね。

池田　つまり、生命は、

「きびしきなり三千羅列なり」（「御義口伝」七一四）

である。この厳たる因果律はまぬがれがたい。

しかし、妙法の大力用によって、それぞれの宿命なり、宿業をば、転換、超克しゆくことのできるのが、じつに「本因妙」の仏法なんです。

「本因妙」とは、わかりやすくいうと、今の瞬間から未来に向かって、力強いうねりで「仏界」への方向を決定づけていける法則と、私は思います。

屋嘉比　きょうから明日へ、また未来へと前進できる仏法はすばらしいと思います。

池田　要するに、釈尊の仏法においてすら、さきほど申しあげたとおりである。

いわんや、

「この本尊を受持すれば、自然に彼の自行化他の因果の功徳を譲り与え」（「観心本尊抄文段」）

とあるとおりですから、その一点の確信を、いかなることがあっても、失ってはならないと思う。

つまり、末法のこんにちは、いわゆる釈尊時代のような、何世にもわたり修行していく仏法ではない。

＊「受持即観心」といわれるとおり、これが正しい根本法則なのです。

ですから、いわゆる「記別」はないし、必要もないわけです。

大聖人の仏法を信行にわたり励んできた功徳は、広大であり、深遠です。そのうえに立って、もろもろの事象、現象を見ていくことが、根本的な納得となるのではないでしょうか。

――ところで、大聖人は、生命にもおよぶ大難に、何度もあわれましたが。

池田　有名な「開目抄」のなかにも、

「少少の難は・かずしらず大事の難・四度なり」（二〇〇）

とおっしゃっておられます。

屋嘉比　すると、大法難の連続のごようすだったわけですね。

池田　そう思います。

具体的には、四度の大難とは、

一つには、松葉谷（まつばがやつ）の法難（草庵の襲撃）
御年（おんとし）三十九歳（文応元年）

二つには、伊豆流罪
御年四十歳（弘長元年）
〜御年四十二歳（弘長三年）

三つには、小松原（こまつばら）の法難（東条景信の襲撃）
御年四十三歳（文永元年）

四つには、竜（たつ）の口（くち）の法難ならびに佐渡流罪
御年五十歳（文永八年）
〜御年五十三歳（文永十一年）

となります。

屋嘉比　ふつうの人間では耐えられない。

いずれの時代でも、大先覚者というものは、かならず難や迫害の連続がみられる。これはどうしようもないんでしょうね。

池田　ここで仏法上大切なことは、法華経「勧持品」に「数数擯出せられ」とある。「数数」とは、二度流罪にあうという意義です。

大聖人は、伊豆と佐渡の二度の流罪という迫害を受けられ、末法の御本仏として、この経文を身をもって読まれたという事実なんです。

――仏法上、こうした大迫害を受けられた方は、他にはおりませんね。

池田　そう思います。大聖人は、

「今までもいきて候はふかしぎなり」（「南条兵衛七郎殿御書」一四九八）

とまで仰せである。

屋嘉比　「竜の口の法難」のことは『「仏法と宇宙」を語る』でくわしく語られ、感銘をうけました。

池田　「小松原の法難」ひとつ見ても、大聖人は重傷を受けていらっしゃる。

屋嘉比　どういう難……。

池田　後に、大聖人御自身が、このときの模様を、こう記されております。少々長くなりますが、

「今年も十一月十一日安房の国・東条の松原と申す大路にして、申酉の時・数百人の念仏等にまちかけられて候いて、日蓮は唯一人・十人ばかり・ものの要にあふものは、わづかに三四人なり、いるやはふるあめのごとし・うつたちはいなづまのごとし、(略)自身もきられ打たれ結句にて候いし」(「南条兵衛七郎殿御書」一四九八)

とあります。

屋嘉比　これは、明確なる歴史書ですね。大聖人のお怪我は、どんな具合だったんでしょうか。

池田　定説としては、東条景信の太刀で、右の額に深手の傷を受けられたようです。そこで、その傷を治癒された後にも、四寸の傷痕が残るほどであったといわれております。

屋嘉比　ああ、そうでしょうね。

池田　そればかりか、左手を骨折されております。不思議なのは、かりに右手を骨折されておられたならば、数々の重大な御指南書をお残しになることができなかったわけです。

屋嘉比　ましてや、一歩間違えば、命にかかわる重傷となりますね。

池田　また、佐渡におられたときのごようすについては、

「今年・今月万が一も脱がれ難き身命なり、世の人疑い有らば委細の事は弟子に之を問え」

(「顕仏未来記」五〇九)

との仰せからも、その状況が推察されます。

――そうですね。

池田　しかし、

「種種の大難・出来すとも智者に我義やぶられずば用いじとなり」（一三二二）

という有名な「開目抄」の一節がある。

これが、御本仏としての根本の御精神であったわけでしょう。

屋嘉比　なるほど。

池田　屋嘉比さんがおっしゃったとおり、歴史的にみても、それなりの変革や物事を成した人々には、迫害や難はかならずある。

これは、人間世界の避けられない現実の姿といってよいでしょう。

――キリスト教であっても、難と迫害の連続であった。キリストも殺されておりますね。

池田　しかし、釈尊も天台も、難はあった。また大聖人の場合、大難の連続であられたが、結論は、殺されていない、ということに意義があることを申しあげておきます。

屋嘉比　すると仏様にとっての難とは、どういう意義があるんでしょうか。

池田　仏法上、仏が出世の本懐を遂げるための、重大な契機になっているんです。

屋嘉比　すると、釈尊の場合は……。

池田　いま、申しあげたように、釈尊の晩年は、最愛の弟子のひとりである目連が竹杖外道に殺されている。また、舎利弗の病死。さらに、一族同胞の虐殺等が相次いだ。七十歳を超え、老いた釈尊にとってはこれほどの悲劇はない。

だがそうした難のなかにあって、七十二歳にしてはじめて、自らの本懐たる「法華経二十八品」を説かれたともいわれております。

屋嘉比　すると大聖人の場合は……。

池田　熱原の法難を機縁として、「一閻浮提総与」の「大御本尊」を御図顕されておられる。

ですから、よく世間では、難を忍んだから偉いといいますが、そうではないんです。一切衆生を救済せんとされんがために、難に耐えられ、「法」を説いてくださったという意義を知らねばならないのです。その大慈大悲をしのばねばならないでしょう。

――有名な、

「余は二十七年なり」（「聖人御難事」一一八九）

とは、この事実を指しているわけですね。

池田　そのとおりです。

ですから、「大御本尊」の願主は、「弥四郎国重」とあるんです。これには、重々の深義が

ありますが、私の立場では論ずる資格がありませんので、略させていただきます。

屋嘉比　わかりました。

池田　それにつけても、私が思いおこすお言葉があります。

それは、私が青年時代に読んだ、第六十五世日淳（にちじゅん）上人の、

「妙法の行者には災難がこないとか命が延びるとかもいひ得ない。（中略）信仰は活命である。善につけ悪につけ信仰にゐてこそ其の中に無限の意味を発見することができる」

という一節です。つまり簡単にいえば、いくら妙法を信じていても、災難がないとはいえない。また、かならずしも命が延びるともいえない場合がある。

――たしかに、私ども凡夫の眼（まなこ）では、また現象面だけでは、判断できないものもありますね。

池田　要するに、信仰は、瞬間、瞬間を最大に生きゆくための活力であり、源泉であるという意味にもとれますね。ですから信心しぬいていくことが肝要であって、そのうえのさまざまな現象は、すべて深い意義があることを知らねばならない。

それこそ、信心の真髄となりゆくとの御指南と、私には感じとれますね。

屋嘉比　皮相（ひそう）的に論じがちな現世利益論を、さらに深い次元でとらえられておりますね。

仏法の根底は「因果論」

池田　いわゆる〝奇跡〟ということは、仏法では説かれていない。その説く根底は、すべて「因果論」であり、「因果倶時論」なんです。

屋嘉比　科学文明の世界にあって、いわゆる奇跡のみを唱える宗教は、どんどん取り残されて、バカにされるでしょう。

池田　そのうえで戸田前会長は、経文を引用し、「信心をしている場合は、たとえ横死のような場合があっても、現世の少苦、軽苦である」とまで断言されていた。

当時は、若い私どもにはなかなか理解しがたかったけれども、長い信仰のうえから、大勢の人の姿を見てきて、昨今、私はその深い意味がよくわかるようになってきました。

ただいえることは、鎌倉時代においても、正法を持った場合、その実証は当然明らかであった。

そのひとつの例として、大聖人は、当時大流行した疫病について述べておられる。

それは、

「いかにとして候やらん彼等よりもすくなくやみ・すくなく死に候は不思議にをぼへ候」（「治病大小権実違目」九九七）

という御文です。

――これは歴史的事実です。

池田　それにつけても、いまは、これだけ多くの人々が妙法を持つようになった。なおかつ、全部が全部といってよいほど、真面目に信仰に励んできた人が守られてきたというのは、たいへんなことであると、私は思っております。

――たしかに、そのとおりですね。

屋嘉比　ともかく今回の日航機の大事故は、仕事柄、多くの「生」と「死」に立ち会う私にとっても、本当に考えさせられることが多くありました。

池田　ま、自分というものを見れば、あるときは疲れ、あるときは生きいきとしている。また、あるときは病気になり、死を感ずることもある。親友の死に、痛恨（つうこん）の思いにかられることもある。

また、あるときは、子供が生まれ、飛び上がらんばかりに喜ぶ（笑）。また、後輩の結婚式を見て喜ぶ。また今度は、親戚の訃報（ふほう）を聞いたりする。

本当に、瞬間、瞬間が、「生」と「死」の変化の人生と思います。

まさに人生は、凡夫であるわれわれが、つねに「生と死」のドラマを演じゆく、宿命的な舞台といえますね。

――そのとおりです。すばらしい言葉です。

池田　ところで、屋嘉比さん。こうした事故や、さまざまな偶然と思われる出来事にも、なんらかの法則を見いだそうと、一歩踏みこんで思索している学者はおりますか。

屋嘉比　スイスの偉大な精神病理学者、カール・ユング博士は有名ですね。

――ほかにはおりますか。

屋嘉比　この問題を、ユングと共同執筆した、ノーベル物理学者のパウリ博士は、よく知られています。また、ドイツの哲学者のショーペンハウアーなどもおります。

池田　これは古くは、ヒポクラテスも同じようなことをいっていた。最近では、亡くなった世界的ジャーナリストの、アーサー・ケストラーなんかも本を出しておりますね。

屋嘉比　その他、ニュー*サイエンスの思潮で有名な、デヴィッド・ボームなども、こうした方面への研究にも踏み出そうとしているようです。

池田　具体的には、どんな研究ですか。ユングなどは、「意味のある偶然の一致」といった原理を提起しているようですが。

屋嘉比　「共時性（きょうじせい）」の原理ともいいます。くわしくは略させていただきますが、偶然にし

ては、あまりにも意味深い偶然と考えざるをえない現象に出合うことがある。これらの偶然と思われる現象の間に、内的法則、連関性を見いだそうとしています。

池田　博士の研究は、最近、ますます注目されているようですね。

屋嘉比　そうです。すでに、十九世紀のショーペンハウアーは、違う人同士の運命の糸を、意外な形で結び合わせるものがあると考えたひとりです。

――昔の学生は、「デカンショ」といって（笑）、デカルト、カント、ショーペンハウアーでしたね。（笑）

屋嘉比　ちょっといまは、時代が違いますかね。（笑）

池田　するとユングなどは、哲学ではなく、心理学の立場から、それらを一歩進めた研究となっているわけですか。

屋嘉比　そう思います。

池田　私は、よくわかる気がします。じつは、このユングにしろ、またショーペンハウアーにしろ、東洋の仏教に、たいへんな関心をもっていた。

ショーペンハウアーなどは、自ら〝仏教徒〟といっていたほどですからね。

これはまさに、〝意味のある偶然の一致〟と私は考えております。（大笑）

屋嘉比　こうした動きは、ひとつの時代の流れであることは間違いない、と私は思います。

「宗教」とは生命根本の教え

屋嘉比　いつからかがいたかったのですが、「宗教」という言葉は、いつごろから使われたんでしょうか。

池田　よくわかりませんが、まあ一般的には、明治の初期とされております。

屋嘉比　すると、英語の「リリジョン」（religion）を翻訳したことからでしょうか。

池田　そうです。なにかの本で読んだ記憶がありますが、翻訳には、たいへん苦慮したようですね。

屋嘉比　たとえば、どういう……。

池田　当初、福沢諭吉などは、「宗旨」とか「宗門」と訳していたようです。

屋嘉比　すると、誰が「宗教」としたんでしょうか。

池田　のちに文部大臣になった森有礼（もりありのり）が、明治六年に『明六雑誌（めいろくざっし）』に書いた「宗教」という論文が初めてのようです。

――その雑誌は、当時の啓蒙（けいもう）思想家の集まりであった明六社が出したものです。

この明六社を中心に、洋行帰りの西周（にしあまね）とか、中村敬宇（なかむらけいう）とかいった論客が集まって、文明

論を真剣に交したようです。

池田　私は、中村敬宇はよく知っておりますが、西周はあまりよく知りません……。

――西周という人は、「哲学」とか、「主観」「客観」とか、「演繹」「帰納」といった用語をつくったことも知られています。

池田　中村敬宇は、東洋哲学を探究した人のようですね。

――そうです。

池田　幕末のころでしょうか、たしかイギリスに留学している。そして帰国してからは、当初、さかんに西欧思想を訴えはじめたんではないでしょうか。

――そのとおりです。

池田　しかし晩年は、たいへん「法華経」に魅了され、サンスクリットの勉強までやっているようですね。

――それは『史談会速記録』に載っていると、なにかで読んだことがあります。

この中村敬宇は、東大の教授になったときに、学生の試験答案を見ることが、いちばんの楽しみだったようです。これは、自分が教えた以外の答案があるか、ないかということを楽しみにしていたんでしょう。

池田　その話は、有名ですね。なぜ私が知っているかというと、私の恩師、戸田第二代会



ありし日の第59世堀日亨上人(右)と戸田第2代会長。

長が、よくこの話を、試験のたびにいっておられたからです。

屋嘉比　ユニークな先生ですね。

池田　中村敬宇は、答案用紙に、自分の知らないことを書いていれば、点数をたくさんあげたということなんです。つまり、いわゆる権威でなくして、その人のもつ深い境涯と、子弟を思う慈愛からの発露なんでしょうね。

屋嘉比　ロマンがありますね(大笑)。いまは、そのようにおもしろい教授には、なかなかお目にかかれませんね。(爆笑)

ほかにまだ誰か、そのようなエピソードはありますか、先生……。

池田　そうですね。お叱りを受けるかもしれませんが、忘れ得ぬひとつのエピソードがあるんです。総本山の第五十九世堀日亨(ほりにちこう)上人のこと

なのです。

日亨上人*は、たいへんな碩学であられた。

第二代会長、戸田先生もたいへん尊敬され、日亨上人も、戸田先生を大事にしてくださった。

――お二人が談笑なされておられる場面も、たいへん懐かしい写真になっておりますね。

池田　ある日、御書の監修を賜るために、戸田先生とともに、私たちもお目通りをさせていただいた。

当時、御隠尊であられて、伊豆の畑毛であったと思います。

さまざまな懇談のときに、笑みを含められながら、

「わしは、宗門のある数学試験のときに、百点満点のところ、百二十点をつけてあげたことがあるのじゃ」

とおっしゃった。皆が大笑いをして、誰かが、その理由を尋ねた。上人は即座に、

「その答案には、わしの知らないことを、しっかりと書いておったのじゃ」

と答えられた。あのお言葉は、おもしろさのなかに、深い意味を思わせ、皆の心に残ったものです。

屋嘉比　学者のひとりとして、傲慢さを叩かれ、はっとするお話です。

ところで仏法では、「宗教」という言葉は、いつごろから使われたんでしょうか。

池田　いや、これはもともと、仏法を指す言葉ともいわれております。

屋嘉比　一般的にも、宗教というのはたくさんある。そのなかで、仏法を中心とした場合、宗教という言葉の意義づけは、どういうふうに解釈すればよろしいんでしょうか。

池田　宗教の「宗」とは、「おおもと」「根本」という意味にとらえられています。

――原則として、辞典でもそうなっています。

池田　ほかには、「尊」であるとか、「主」であるとか、さらには「要」であるとか、とらえています。

屋嘉比　すると、人間の根本……。

池田　そのとおりです。人間にとって、生命にとって、根本の教えということになります。

第十二章　現代語のルーツ「法華経」

人間のための宗教

――まず、前章の続きである、「宗教」の意義からお願いできればと思いますが。

屋嘉比　私もちょっと、うかがいたいことがあったんです。この「宗教」という意義について、ヨーロッパなんかでは、どうとらえられてきたんでしょうか。

池田　英語の「宗教」（リリジョン）という言葉は、もともとはラテン語の〝Religio〟が原語となっている。このラテン語は「畏怖（いふ）」の念を指していた、という学説があります。

屋嘉比　すると、仏法上の「宗教」の意義とは異（こと）なるわけですか。その人間が抱く「畏怖」のなかでも、根本は「死」という問題なんでしょうね。

池田　そう思います。

――英語の「宗教」の語源は、神と人間を「再び結びつける」ことだと、なにかで読んだ記憶がありますが。

池田　一般的には、そういわれてきたようです。ただ、これはどうも、後代のキリスト教的解釈であるというのが、現在の通説となっておるようです。

屋嘉比　しかし、このヨーロッパの〝神と人間の結合〟という宗教観も、時代とともに変遷してきているようですが……。

池田　ヨーロッパの宗教観は、どうやら近代になって、キリスト教神学から離れ、どんどん開かれ、深められていったようです。

屋嘉比　誰か、そうしたことについて、はっきり指摘している人物はおりますか。

池田　その有名な先駆者にカントがいるでしょう。

――カントこそ、独立した自由な人間を志向した、近代哲学の祖といわれますからね。

屋嘉比　前に先生が、カントは法華経の存在に注目していたといわれましたが。「宗教」について、たとえば、カントは、どんなことをいっておりますか。

池田　有名な著作である『宗教論』のなかでは、彼は、

「理性に対して無思慮に戦いを宣する宗教は、長くはそれに対抗し続けるわけにはいかない」

というのです。ちょっとむずかしいかもしれませんが……。つまり、真実の信仰というものは、理性を否定しない。また、そうでなくてはならないということでしょう。

屋嘉比　他にもおりますか。

池田　有名な言葉ですが、

「信仰は理性の延長である」

これは、十九世紀のアメリカの作家ウィリアム・アダムスです。

私は、青春時代、この言葉がたいへんに好きでした。

――私も好きです。はじめは信仰と理性は別個のものと思っていたが、たしかに、このとおりですね。また、そうあらねばならないと思います。

池田　また、いわゆるマルクス、エンゲルスに最大の影響をあたえたといわれるドイツの哲学者、フォイエルバッハも有名ですね。

彼の宗教観は、唯物史観を台頭させる引き金にもなっている。

屋嘉比　たとえばどんな考え方がありますか。私は、そちらのほうはあまり強くないもので。(笑)

池田　たとえば、

「人間が宗教の始めであり、人間が宗教の中心点であり、人間が宗教の終わりである」(「宗教の本質」)

と、人間のための宗教という視点を打ち出している。

仏法を基準としてみれば、たしかに正しいと私は思います。

屋嘉比　当時としては、革命的な発言だったんでしょうね。

池田　時代環境からいえば、そうなるでしょう。ですから私たちは幸せです。正宗の教義、学会の理念というものは、ここから出発し、ここに帰着していることが最大の強みです。

――彼は人間を、神への服従者と位置づける宗教観から、解放しようとしたんでしょうね。

屋嘉比　ヨーロッパはキリスト教の独壇場でしたからね。

――宗教ほど、わかったようでわからないものはない。宗教ほど、人を救うと同時に、人々を現実から遊離させ、盲目的にさせるものはない。であるけれども、宗教は存在する。

池田　歴史的にみても、人間を軸にすえることによって、より柔軟な、より本質をついたものの見方、価値観が展開されていったのは事実でしょう。

仏教は「唯心」「唯物」を超克

屋嘉比　そこで前からうかがいたいと思っていたのですが、仏法は「唯物論」と「唯心論」をどうみますか。

池田　大乗仏法の極理は、「唯心論」でもない。また、いわゆる「唯物論」でもありません。

結論からいえば、そのどちらにも偏せず、両面を止揚し、「中道法性」という、生命の真

実にして、不変の実相を明かしているということです。ただ、そうした次元に至る過程では、当然、さまざまな価値観の展開をふまえておるわけですが。

詳しく論ずるには、時間がかかってしまいますので、これも結論から申しあげますと、小乗教においては、「物」と「心」の現象論が説かれております。また大乗教にも、「心法」を中心に立てる経典もあります。

屋嘉比　重層的な法門の展開がなされているわけですね。

池田　しかし、大乗仏教の真髄たる法華経にはいってからは、「連持色心」という生命の実相を明かしているわけです。

――すると、「唯物論」は小乗教の部分観となりますか。

池田　多くの場合、宗教は「唯心」中心であり、科学は「唯物」から出発していると思われてきた。

しかし生命は、「唯物」でもなければ「唯心」でもない。「色心不二」が一極の実相である。

要するに、偏った思想、哲学であっては、「生命」の全体観はとらえきれない。

また、正しき人間観、社会観も確立できない。かならず行き詰まりがあるもんです。

それに対し、「中道一実」の妙法とは、生命を「一念三千」として完璧にとらえた「法」である。ゆえに、善の価値、幸の価値を無限につくりゆくことができると、私は思います。

――トインビー博士も、

〝人類は自己を見つめ制御する知恵を獲得しなければならない。そのためには「中道」を歩む以外にない〟

と、名誉会長との対談で論じておりましたね。私はたいへんに印象的でした。

そこで、こうした宗教観の変遷とともに、西欧の「生命観」も、大きく変化していったわけですが。

池田　そうです。こうした、人間へ、生命へという、新しき時代の勢いを大きくとらえていったひとりに、十八世紀のドイツの大文豪ゲーテがいるでしょう。

屋嘉比　たとえば、彼はどんなことを……。

池田　ゲーテは、

「なぜ、人間こそ宇宙の究極目的だと考えてはいけないのか」（「形態学」）

という鋭い問題提起をしている。

屋嘉比　「神の意志」という大義名分から、ようやく解放された自由な人間の叫びが、私にも感じられますね。

池田　そのとおりです。いわゆる近代西欧における生命観の淵源は、十七世紀のデカルトから始まったという説があります。さらにその後、唯物的な立場を徹底したラ・メトリー、

ラボアジエなどがこれを受け継いでいます。

これは人間を〝動く機械〟と同じような存在とみなす考え方です。

――そうですね。しかし、これにはどうしても矛盾がある……。これらと対峙したのが、十九世紀末の生物学者、ハンス・ドリューシュの「新生気論」です。

彼は、人間には〝機械論〟では説明しえない生命力があると考えたわけです。

このへんは、池田先生の『生命を語る』に詳しく述べられていますので、省略させていただきますが（笑）、これらが出発点であったことは事実と思います。

池田　まあ、むずかしくなるから、この論議はこのへんにさせていただきますが、やはり、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて新たな生命観の展開がなされております。

屋嘉比　この時期、微生物研究草分けのパスツール、〝生の飛翔〟のベルグソン、*深層心理学のフロイト、ユングが登場しています。

池田　おもしろいことに、これは仏教がヨーロッパに影響を与えた時期と相前後しておりますね。このへんは、今後の興味深い研究課題のひとつと私は思っております。

現代科学も「生命」に接近

――現代科学の最高峰といわれるアインシュタインも、仏教に深い関心を示していましたね。

池田　そう思います。彼の仏教観は有名です。彼は、

「宇宙そのものの理性的構造に対する、なんという深い信仰」（「宇宙的宗教」）

という次元を志向しておったわけでしょう。

――ただ、彼らと仏法の出合いは、まだ入り口みたいなものだった。大乗教もあったが、いわゆる小乗教を中心とした〝ロンドン仏教〟の限界もあるのではないでしょうか。

そうした事実に気づいていた人はおりますか。

池田　大乗仏教に着眼したトインビー博士はそのひとりでしょう。

屋嘉比　他には誰か有名な……。

池田　イギリスの世界的文明批評家、H・G・ウェルズもそういっていいと、私は思います。

彼は、二十世紀に原子爆弾が出現することを予言したことでもよく知られている。

――日本でも全集が出ています。「E・T・」の映画を作ったアメリカの監督が、最近、彼の名著『タイム・マシン』を、ふたたび映画化したようです。

池田　じつは、このウェルズにも、「仏教論」があるんです。

――それは知りませんでした。

池田　私も最近知りました。早速、英文を訳してもらいました。

屋嘉比　学生のころ、ウェルズの『生命の科学』という論文を読んだことがありますが、仏教については彼は、どんな……。

池田　たとえば、

「世界が始まって以来、仏教がもっとも深遠な倫理であることは誰も異存がない。釈尊の滅後、その教えは、精密巧緻な思弁哲学になり、煩瑣哲学という安価な地上の電燈のために、肝心な釈尊の教えという星の光は、おおい消されてしまった」

というような内容も、論じておったと思います。

――釈迦仏法を「星の光」にたとえるなんて、なかなか的をついている。（笑）

池田　ともかく仏法は、「大乗」と「小乗」、「実教」と「権教」、「*本門」と「*迹門」、そして「下種」と「脱益」、「文底」と「文上」という相対の規範のうえから、厳密に見ていくことが肝要であることだけは、申しあげておきたいですね。

――わかります。

屋嘉比　すると、法華経以外の経典は、完全に否定されるわけでしょうか。

池田　いや、そうではありません。その点についても、明快に御文にあります。

「所詮成仏の大綱を法華に之を説き其の余の網目は衆典に之を明す、法華の為の網目なるが故に法華の証文に之を引き用ゆ可きなり」（「観心本尊得意抄」九七三）

と説かれているとおりです。

「大綱」とは、根本、基本となるもの。「一切経の根本」という意義です。

「網目」とは、いわゆる細事網目ということでしょう。妙楽大師はこれを、

「円教（法華経）の行理骨目自ら成ず、皮膚毛綵衆典に出在せり」（「法華文句記」）

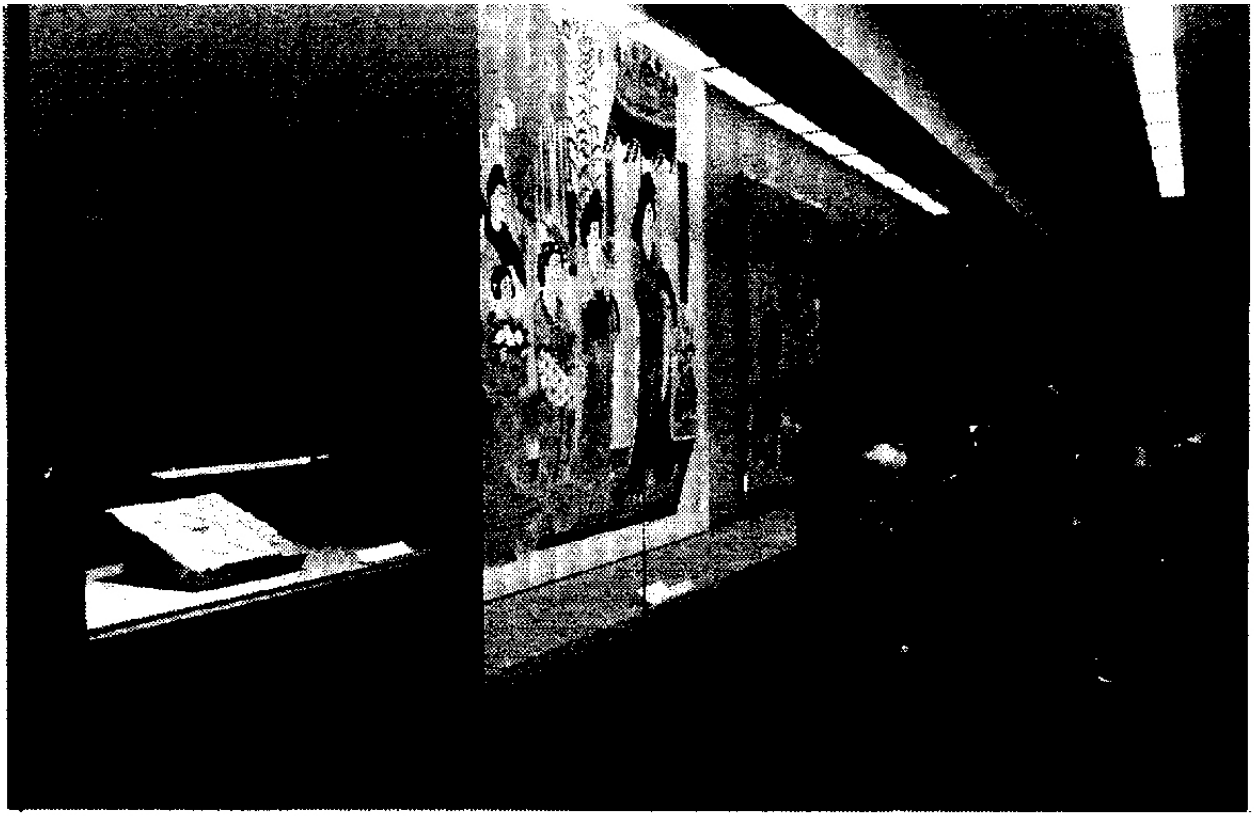
と論じています。

つまり、「生命」の全体観、「成仏」の法門は法華経である。文底から拝すれば、「事の一念三千」の法門である。

今度は、その文底の法華経から見れば、すべての衆典は、その法門の証明としての「序分」「流通分」となり、分々の理が明かされている、というわけです。

屋嘉比　仏法は広い……。ある物理学者がいっていた。それは、

〝現代科学の進歩以前に、宗教の直観は「生命」の本質に関して、重要な点を洞察してい



連日にぎわった「中国敦煌展」。（東京富士美術館）

た〟と……。

この学者は、とくに仏教について詳しく考察しておりました。

池田　謙虚な言葉です。しかし、実感でしょうね。

あこがれの地「敦煌」

――まったく話が前後して申しわけありませんが、世界初公開の「*中国敦煌（とんこう）展」が開幕され、おめでとうございます。私は、まだ行ってませんけど、この点について、ぜひ少々、おうかがいしたいんです。

屋嘉比　本当にすばらしいことです。私は初日に行ってきました（笑）。本当に見ごたえある展示内容で感銘しました。

池田　敦煌は、私にとっても、少年時代からのあこがれでした。

屋嘉比さんは、実際に敦煌に行かれたことがあるんでしょう。

屋嘉比　ええ、恥ずかしい話ですが、最初はよく知りませんでした。しかし、影響をうけて（笑）、二年前に行きました。

池田　どういう目的で……。

屋嘉比　北京と蘭州（らんしゅう）の医学院視察団の一員としてです。

池田　北京からどのくらいかかるんですか。

屋嘉比　飛行機を乗り継いで、約七時間です。

遠かったけれど、敦煌の空港に着いたときは、感動がこみあげて……。（笑）

池田　とくに印象に残ったことは……。

屋嘉比　そうですね。たくさんありますが、私は医師ですから、莫高窟（ばっこうくつ）の一五八窟だったと思いますが、釈尊の涅槃像（ねはんぞう）はたいへんに興味をもちました。

池田　どんな像……。

屋嘉比　その涅槃像の背景には、釈尊の死を悲しむ各国の王侯、貴族などの姿が描かれているわけです。ところが、そこにいる菩薩たちは泰然自若として描かれているんです。

池田　それは有名ですね。

屋嘉比　案内をしてくれた研究員の方に、「なぜ悲しんでいないのか」とたずねたところ、「菩薩は、永遠の生命を知っているからです」と説明してくれました。

――他にもなにかありましたか。

屋嘉比　じつは、敦煌の行く先々で中国の方々が、池田先生のことをご存じでした。「ぜひ一度、先生に敦煌に来ていただきたい」と話していました。（笑）

――そういえば、日本の敦煌研究の権威といわれるある教授が、〝敦煌に行っても、写経などはなかなか見せてもらえない。前代未聞といえる今回の敦煌展は、池田名誉会長と中国との強い信頼関係のひとつの証（あかし）である〟と語っておりましたね。

池田　それは、どうも（笑）。私のことはともかく（笑）、なにか他にもありますか。

屋嘉比　敦煌へ行く途中の蘭州では、水虫がまったくないそうです。（笑）どうも私はこういうことに目がいってしまって……。（笑）

池田　水虫の人は多いですからね。（笑）

屋嘉比　この話は蘭州の医学院の教授が教えてくれました。その教授の説によると、蘭州は砂漠のオアシスで乾燥しているからだ、ということでした。風土と病気も大切な問題です。

池田　水虫は世界各国にあるんですか。（笑）

屋嘉比　専門家によると、菌は、アジア、アフリカに分布するものと、欧米に分布するものがあるようです。この菌を中国では、人間が半分しか理解できないので、謙虚に「半知菌」と呼んできました。

ところがヨーロッパでは、人間が解明できないようなものは、「不完全菌」であるといわれてきた。（笑）

――おもしろいもんですね。同じ水虫にも、東洋と西洋の見方がある。（笑）

屋嘉比　砂漠といえば、大砂丘の鳴沙山からは、地平線のかなたに広がるゴビ砂漠が一望できます。私はそこでラクダに乗ってみました。（笑）

池田　感想はどうでしたか。（笑）

屋嘉比　こわかったですね。揺れるんです。（笑）大月氏のガンダーラから敦煌まで約三千キロ……。仏法伝来のため、昔の人々は険難の道をこうして越えて行った。

仏法がいかに人々に重みをもっていたかと――、私は思いを馳せました。

――そこで、敦煌は古来から、日本においても憧憬の地であった。

それが身近に見られることは、夢のような気がします。

屋嘉比　敦煌の壁画には、当時の医者の姿が描かれているものもあるんですね。

池田　そうなんです。屋嘉比さんの興味をもたれたのは、「諸徳福田経」という経文を描いた風俗絵巻になるでしょうね。

横になった病人を、一生懸命に介抱する医者。また、弱ったラクダに薬をあげている獣医など、当時がしのばれる壁画なんですね。

――私もアフガニスタンの砂漠の村々で、いまの壁画そのままの姿を、目にしたことがあります。

池田　それはすばらしい体験でしたね。

ともかく敦煌は、仏法東漸の中継地として有名です。

私ども仏法者にとっても、たいへんに興味をひきます。

――まだいくつもの街が、埋まっていると、なにかで読みましたが。

池田　そうです。まだまだ、埋まっていることは事実のようです。これから発掘し、研究していけば、たいへんなことです。おおげさにいえば、歴史を一変させるほどの発見も期待できるような気がします。

屋嘉比　まったく、敦煌にはたくさんのロマンがありますね。

池田　そのとおりです。

屋嘉比　そこで先生、ひとことでいって、敦煌をどうとらえておけばいいのでしょうか。

池田　詳しいことは、『敦煌を語る』（角川書店刊）をお読みいただきたいと思います。

（大笑）

インドで誕生した仏法の正統が、西域をへて中国へ、朝鮮へ、そして日本へと伝来した事実を明確に示す仏教遺跡ということになる。またそこに、あの「大きく（敦）輝く（煌）」人間文化が興隆したという事実を、見逃してはならないでしょう。

屋嘉比　仏法の正統とは、法華経を中心とした流れととらえてよろしいんですか。

池田　そう思います。

今回も、有名な莫高窟から発見された、古代法華経の写本が三十五点ほど、出品されている。それらをみても、古来、大乗仏教が仏法東漸の主流であり、法華経が最勝経として人々の間にいきわたり、いかに尊重されていたかが、私はよくわかります。

屋嘉比　今回の招来品も、法華経から題材をとったものが、じつに多いですね。

池田　そうです。いわゆるシルクロードの文化はもちろんと思いますが、当時の、ギリシャやローマなどの世界文明にも、滔々たる法華経信仰の潮流が押し寄せていったように思えてならないんです。

屋嘉比　日蓮大聖人が、シルクロードについて、なにか述べられたものはございますか。

池田　あります。「シルクロード」とは、ドイツの地理学者が命名したもので、古くは「西域」と呼ばれていました。

そこで大聖人は、漢の時代からの西域にまつわる故事を、しばしば御文に引かれております。

これらの故事は、孫悟空の物語でも有名な*玄奘三蔵の『大唐西域記』にもある。また、この西域を探険した班超の兄である班固の『漢書』、さらに司馬遷の『史記』にも記録されておりますね。

屋嘉比　わかりました。

池田　ですから大聖人が、そうした書物を通じて、遥か東西文明の接点となった仏法揺籃の地について、たいへんに関心をもたれていたことが、私にはうかがえるのです。

大英博物館で「ブッダ展」

――そこで、ちょっと紹介したい話があるんですが、よろしいでしょうか。（笑）

池田　どうぞ、どうぞ。（笑）

――じつは先日、友人のジャーナリストが、今、ロンドンの大英博物館で開かれている

「ブッダ展」を見に行き、その内容を電話してきてくれました。

屋嘉比　たしかにニューサイエンスにも見られるように、仏教は世界的に関心が高まっておりますね。

――この展覧会の特徴は、大英博物館の所蔵品を中心に、仏法の流れがよくわかるように構成されているそうです。

池田　大英博物館には世界中の文化財が収められている。なかなか充実した展示になっているんでしょうね。

――注目すべきは、仏法も時代が経つにつれ、法華経に関係した流れに集約された構成になっているそうです。

池田　具体的にはどんな……。

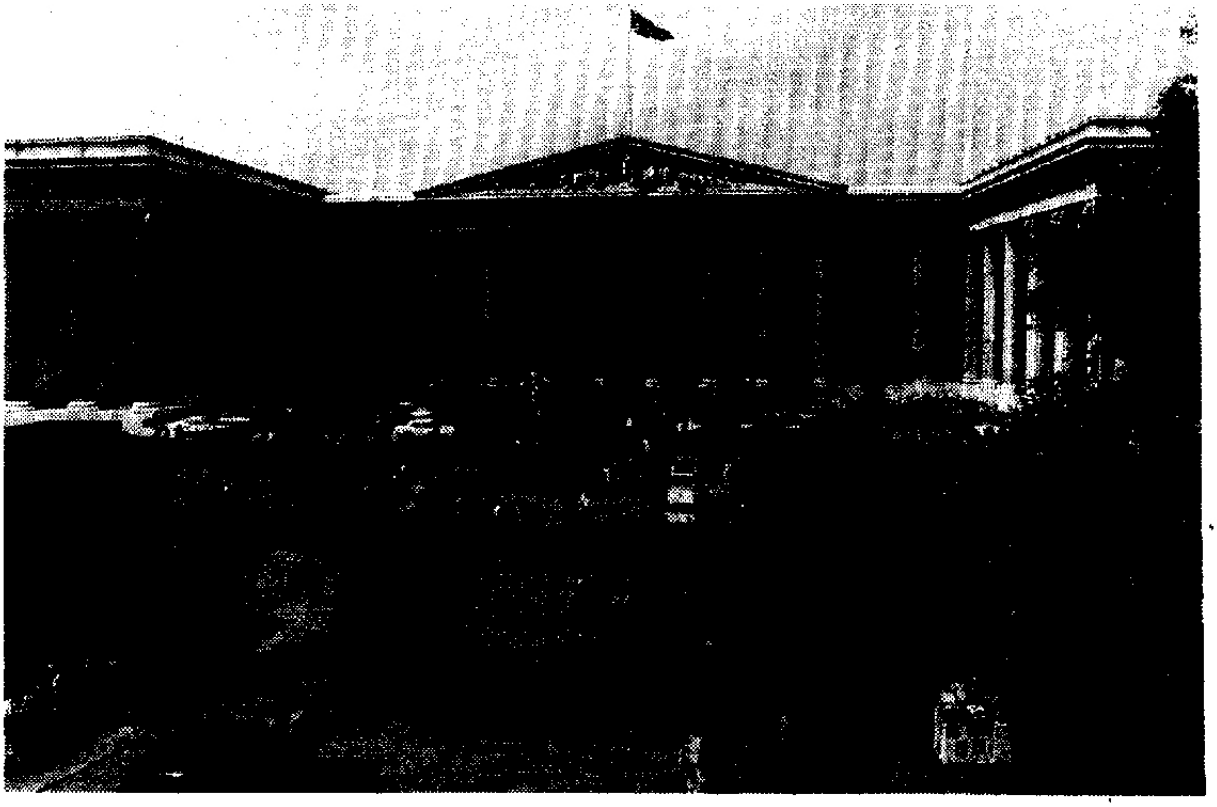
――たとえば、展示の終わりのほうには、鎌倉時代の仏法が考証されています。

それについて大英博物館が解説した文章は、

〝現代においては、宗教グループである創価学会によって、受け継がれ広められている〟

というような趣旨であったそうです。

池田　そうですか。その「ブッダ展」については、私どもはなにも関係しておりませんが……。



「ブッダ展」が開かれた大英博物館。（BTA提供）

屋嘉比　すると、仏法志向というものは、世界的に広がっているともいえるわけですね。それについても、その歴史的淵源はどういう流れになっておりますか。

池田　時間がかかるので、若干飛躍的になると思いますが……。十九世紀に、法華経が、フランス語に翻訳されております。いまから約百三十年前になるでしょう。

――幕末のころです。

池田　そうなりますか。ヨーロッパでは、ルイ・ナポレオンの時代でしょう。

――たくさんの仏典のなかから、法華経を選び出したのは、ビュルヌフという教授です。

池田　たしかその教授は、コレージュ・ド・フランスで梵語の講座を担当していたんではな

いでしょうか。

屋嘉比　コレージュ・ド・フランスは私も知っています。いまでも権威あるアカデミーのひとつです。

池田　教授は、法華経を読みこんで、その真理の深い洞察に驚嘆したようですね。よく、「驚きは哲学のはじめなり」というが、教授は、驚いたその心の響きをもちながら、すぐ翻訳にとりかかったという話がありますね。

――すばらしい心の出発だ。

屋嘉比　いや、その心境は学者としてわかります。

池田　そこで教授は、法華経の翻訳のために下準備を始める。具体的には、他の数多くの仏典を一つひとつ通読し、その内容をつかみ、その筋道を把握しながら、各仏典の精髄を抜き出す作業から進めたようです。

その労苦は、有名な『インド仏教史序説』に結晶されている。

屋嘉比　大学者のもつ基本です。

それから何年後に、法華経の全訳は完成しておりますか。

池田　七年後になります。教授の訳した「妙法蓮華経」（Lotus de la Bonne Loi）が、当時の欧米にあたえた影響ははかりしれないものがあったようだ。

また、そうした教授の厳しき研鑽の姿をみて、すぐれた弟子が巣立っていったようですね。

屋嘉比　たとえばどんな人物が……。

池田　有名なオックスフォード大学の梵語学の大権威者といわれた、マックス・ミュラー博士などはそのひとりです。

屋嘉比　法華経の翻訳の影響は、どんなだったんでしょうか。

池田　まあ、いろいろあるようです。たとえば、このフランス語訳は、その後、英訳され、ドイツ語訳されていることからもおわかりいただけると思います。

当時のヨーロッパにおける、仏法志向のひとつの例として、おもしろいエピソードがあります。それは、法華経が翻訳された約二十年後に、明治政府の遣欧使節（明治四年）として、岩倉具視がイギリスに行っている。

彼は、そのお土産として「一切経」を持参し、大歓迎されている。

屋嘉比　驚きです。たいへんなエピソードです。初めて知りました。

池田　そうです。ところが、そのころの日本は、廃仏毀釈で仏教弾圧事件がつづいていたわけです。

――それらは一部の国学者などが、政治と結託して起こした運動なんですね。しかし当時の仏教界も、幕府の庇護や特権をあたえられ、ずいぶん堕落していたのも歴史的事実だった

ようです。

池田　たしかにそうした面もあった。だが、岩倉のような維新の元勲が、それらに付和雷同せず、時代の流れと物事に対する本質を見失わなかったことが、いまでも嬉しいと私は思っている。

――なにかで読んだんですが、徳川家の菩提所である芝の増上寺は、廃仏毀釈の運動が起こるとすかさず門前に鳥居を立て、本尊を脇にずらして神鏡を置いたそうです。（笑）

屋嘉比　いつの時代でも、毀誉褒貶にとらわれるものは信念なく、見境がないもんですね。

――いまの時代も、あちらこちらにありますね。（笑）

「法華経」を志向した明治の文人

屋嘉比　日本ではどういう人々が、法華経を志向していますか。

池田　有名なのは宮沢賢治でしょう。

しかし賢治は、むしろ石川啄木が法華経に傾倒した影響をうけたような面もあるようです。啄木にも、青春のさすらいのなかで、「真の宗教とはなにか」、また「信仰とはなにか」を考え、苦しんだ時期がありましたね。

屋嘉比　私はあまり文学は得意ではないのですが、賢治は有名ですね。啄木のことは、知りませんでした。

池田　啄木は、友人たちにも、「法華経を読み給え」と説得までした文が残っていたと、記憶している。

しかし、法華経といっても、彼らの場合はいわゆる「文上」の法華経である。

何回も申しあげたとおり、仏法上、「文底秘沈」の法華経と優劣があることを前提とさせてください。

屋嘉比　よくわかります。しかし、法華経までいくということは、思想遍歴として偉いと思います。

池田　彼の場合は、とくに「一念三千」論に触れ、驚嘆したようです。

直接はまあ、高山樗牛の影響をうけたのではないかと、私は考えています。

屋嘉比　なにか石川啄木のなかで、宗教に関して書いた文がありますか。

池田　「真の宗教とは、説教や教諭の意味ではなくして、その人の人格に体現せられたる表示の謂である」

といった文があったようです。

屋嘉比　まだなにか記憶にある文がありますか。

池田　多少表現が違っているかもしれませんが、

「宇宙の中に我の遍満するを見、若しくは我の中に宇宙の呼吸を聞きて、人と宇宙の融合する境地、これを信仰とはいう」

というような文章もあったような気がします。

屋嘉比　おもしろいですね。ちょっとヨーロッパの学者からみれば小型ですが。（笑）

池田　最近は、石川啄木を読む若い人も、少なくなったようですね。

――高山樗牛の法華経研究は有名ですが。

池田　そうですね。戦後すぐのころ、私も神田の古本屋で、『樗牛全集』を安く手に入れた思い出があります。

屋嘉比　私は名前ぐらいしか知りませんが……。

池田　当時は一世を風靡した感があったね。いまの人は、もう読まなくなったんでしょうね。

――文庫本にも、たしか『滝口入道』くらいしかはいっていないと思います。

屋嘉比　樗牛は、若くして死んだんではないでしょうか。

池田　たしか三十一歳でしたね。たいへんな勉強家であったようです。彼の生涯を彗星のごとき一生であったと評する学者もおります。

私の恩師である戸田前会長は、よく私に「樗牛のように、書いて書いて書きまくれ」と厳しくいわれたことを、いまもって覚えております。

しかし、戸田先生は、彼の生命観は、

〝人が偉大な仕事をする。その偉大な仕事は後世にも残る。その後世に残した偉大な仕事に自分は生きている〟

というところまでしかいえなかった。法華経に説かれた究極の「法」、すなわち永遠の生命の実相には、ついに迫ることはできなかったと、よく話されていた。

そこがじつはむずかしいんです。

――樗牛の友人であった姉崎嘲風（正治）博士も、日蓮研究の先駆者のひとりではないでしょうか。

池田　姉崎博士は、樗牛の影響でしょう。

博士は「日本宗教学会」を創設したことで知られている。

――博士の学問のバックボーンは、日蓮大聖人の御書を綿密に研究したところにあると、読んだことがありますが。

池田　私も聞いたことがあります。いまから約七十年ほど前、博士は、アメリカのハーバード大学から招へいされている。

そのとき、日本文化の講座で、そのへんについて講義したようですが。

――博士は、その講義を『日蓮伝』（Nichiren, the Buddhist Prophet）と題し、英文でハーバード大学から出版していますね。

池田　博士については、このぐらいでどうですか。

私は、こうした学術的な仏法への志向も大切であると思いますが……。

しかし、もっともっと大切なことは、法華経「法師功徳品」に「於大衆中（中略）説是法華経」（大衆の中に於いて……是の法華経を説かん）とある。

その意義からいうならば、厳しきドロドロとした現実社会、生活のなかに、この法華経を説き、広めていくことは最大に重要であり、誇りとすべきでしょう。

――そこでいわゆる、日本の古代においても、法華経の影響があったことは、歴史的事実のようです。たとえば、『古事記』『万葉集』『源氏物語』等も、たいへんに法華経の影響があったととらえられていますが。

池田　そう思います。たしかに、著名な古典文学に対する法華経の影響は大きい。

法華経が、幾重にも、文化の層をつくったことも、これまた事実でしょう。

――「能」や「狂言」なんかにも、法華経の影響があるという説もありますが。

池田　よくわかりませんが、文上の法華経の「七譬」なんかがはいっていることは事実です。

――いわゆる有名な後白河法皇が選んだ『梁塵秘抄』なんかは、法華経の影響があると聞いたことがあります。

池田　私はよくわかりません。ただ、『梁塵秘抄』は、日本の童謡や謡の原型ではないかといわれております。

屋嘉比　これは……、『梁塵秘抄』は、受験のときに勉強したんですよ。（笑）

ここで話が出るとは驚きました。（大笑）

池田　そこで、その『梁塵秘抄』は、平安時代、広く貴族、さらに庶民の間で歌われていたものを、後白河法皇が選し、収録したものといわれている。そのなかに「法華経二十八品歌」と名づけられた百十五首の歌があるともいわれてきています。あまり、突っこんで意識したことはありませんが。

日常化している仏教用語

――文上、文相とはいえ、調べれば調べるほど、聞けば聞くほど、この法華経の影響は大きいような気がします。

池田　それは、たしかです。文上においても、時代とともに、それなりの影響があった。

いわんや、文底の法華経の全世界に対する影響が、どれほど大きいかは確信できますね。

屋嘉比　医学に関してありますか。

池田　屋嘉比さんは医学博士ですが、「医」という言葉や、また「患者」の「患」という言葉も、もともと仏教用語という学者もおります。これは法華経「寿量品」にもあります。

屋嘉比　すると「薬」は……。

池田　それこそ有名な法華経「寿量品」の「此薬」「良薬」とあるとおりです。

また、「病」も「救護」もみな、「寿量品」にあります。

――たしか『広辞苑』を編まれた新村出博士が、その出典を法華経にもとめられている言葉として、考証しています。

池田　それは知りませんでした。

ただ、日常なにげなく使っている言葉が、ずいぶん経典にあることはたしかです。

屋嘉比　どんな言葉がありますか。

池田　よく使われている、「疾病」「代謝」「人民」「国民」「大衆」「自由」「頂戴」「迷惑」「根性」「意識」は、法華経の開経である「無量義経」にあります。

「見聞」とか「演説」という言葉は、法華経の「序品」にあります。

「平等」「我慢」「正直」「一大事」は、私どもと関係の深い、法華経の「方便品」にありま

す（笑）。「人間」とか「娯楽」とか「宣伝」とか「堕落」は、「譬喩品」にあります。

屋嘉比　多いですね。

池田　「大志」「志願」「宣言」「財産」「計算」は「信解品」。「道楽」「差別」は、「薬草喩品」にあります。

また、「親友」「言論」という言葉は「五百弟子受記品」。「過失」「嫉妬」は「安楽行品」。

「世間」「出世」「寿命」「一心」は、先ほどの「寿量品」にあります。「重病」は「普賢品」。「機関」は、法華経の結経である「普賢経」にあります。

まだまだありますが、また、いつかの機会に……。（笑）

屋嘉比　いやよくわかりました。たいへんなものですね。

ところで、そうした言葉の意味は、いま、使われている意味と同じだったんですか。

池田　ほとんど同じでしょう。多少、その真意とニュアンスが違う場合もあるでしょう。ただ、「大衆」という言葉は仏法上、国王であろうが、庶民であろうが、万人万物すべて平等である、という意義になります。

また、「道楽」とは、現代の意味とは違い、仏道修行のなかから生まれた喜び、楽しみを意味しております。

屋嘉比　言葉というものは、時代の流れとともに、意味も変わることは当然でしょう。

――フランスの哲学者アランが、

「言葉は社会の子供である」

といっていますが。

池田　そうです。言葉は、社会と融合（ゆうごう）したところから生まれる。そして広く、万人に使われ、伝えられていくものですね。

ですから、仏典の用語がこれほど日常化していることをみても、いかに法華経が人々の生活や心にはいっていったかがうかがえる、と私は強く思っております。

屋嘉比　たしか、ガリレオだったと思いますが、

「最初に事物（じぶつ）が存在し、言葉はその後に従うものだ」

といっていたと思いますが……。

池田　それは有名な言葉ですね。科学者としての実証精神をあらわしたものでしょう。ですから、法華経の文々句々も、生活の実感や日々の行動のなかで、納得性が生まれていったのではないかと、私はいつも考えております。

屋嘉比　そうでしょうね。私にも、よくわかります。

日蓮大聖人は、「言葉」については、どう説かれておりますか。

池田　いくつかの御文があります。

なかでも、「三世諸仏総勘文教相廃立」では、

「言と云うは心の思いを響かして声を顕すを云うなり」（五六三）

とあります。私は、この一節を拝するたびに、どれほど私どもの日常の「言語」「音声」が、大切な「心」の発露となっていることか。またその「心」、ひいては「一念」をどうもつかが重要かと感じます。

――たしかに言葉というのは大切ですね。人によっては地獄の声のような人もいたり（笑）、春風のような爽やかな、生きいきとした声であり行動でありたいものです。私なんか反省ばかりですが。（大笑）

屋嘉比　短い言葉のなかに深い真理をついた一節と思います。その他にもございますか。

池田　「書は言を尽さず言は心を尽さず事事見参の時を期せん」（「太田入道殿御返事」一〇一二）

と、より意思の疎通をはかり、万事をつまびらかにするには、直接の交流対話がいかに重要であるかも、説かれているんです。

屋嘉比　よくわかります。次元は違いますが、医者も問診が大事です。

最先端の学問を修学された大聖人

――ところで、これもいつかおうかがいしたいと思っていたんですが、大聖人の御書には、いたる箇所で、当時の学問上の文献を引用されていますが……。

池田　大聖人が、当時の最先端の学問を修学されたことは、歴史的にも、よく知られるところです。

また御文にも、

「鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の国国・寺寺あらあら習い回り候し程に」（「妙法比丘尼御返事」一四〇七）

と、そのご様子を述べておられる。

――これは有名な史実ですね。当時は、いまのような印刷技術も発達していなかった。各地の寺院を訪ねて、古今の蔵書を閲覧する以外なかったわけでしょう。

池田　当時の名刹・古刹といわれた寺院は、いまの大学のような役割を果たしておりましたからね。大聖人は、貴重な文献は、書写もされておられるようです。

屋嘉比　どんな書物を読まれておられたんでしょうか。

池田　ひとつの例を申しあげると、佐渡の地で、「外典書の貞観政要すべて外典の物語八宗の相伝等此等がなくしては」（「佐渡御書」　九六一）

とおっしゃっておられる。

――『貞観政要』は、当時の指導者が読んだ、中国の政治書であり、歴史書です。

屋嘉比　他には具体的には、どんな……。

池田　いま、思いつくものだけでも、御書に引用されているものでは、「孝経」「春秋左氏伝」「易経」「史記」などもございますね。

屋嘉比　「史記」は読んだことがありますが、あとは馴じみのない書名ばかりです。（笑）

――いや、私も専門的な文献のように思います。

屋嘉比　他にもございますか。

池田　出典は明記されておりませんが、その文献をふまえておられると推察されるものをあげれば、たいへんな数になるでしょう。

屋嘉比　たとえば……。

池田　私がちょっと調べてもらっただけでも、「論語」「韓詩外伝」「文選」「尚書」「周礼」「礼記」「漢書」「後漢書」「唐書」「鄴中記」「列子」「韓非子」「淮南子」「牟子」「神僊伝」

「老子」「荘子」「晋書」「孔子家語」「礼記集説」「顔氏家訓」「荀子」「孫子」「管子」などがあります。

まだまだあると思いますが、いま、全部は思い出しませんので、ご了承ください。（笑）

屋嘉比　壮観です。当時は、中国の文献が、いまでいう貴重な学問書だったんでしょうね。

池田　そう思います。万般の哲学、道理、そして現実の社会の動向をいかに大聖人が重視されたか。そのひとつの証左と私は推察します。

――正宗の中興の祖といわれる日寛上人も『徒然草』『水戸光圀』、また中国の『白楽天』などを引かれた箇所がありますね。

池田　「仏法は道理」です。秀でたものとは、不思議に相通ずるんです。

それにつけても、私が青年時代に読んだ、第六十五世日淳上人の論文のなかに、たいへんに思索しなくてはならないお言葉があった。それは、

「宗教が一切世間を対象とするといふのは生命そのものを対象とするが故である。（中略）『寿量品なくしては一切経徒事なるべし根なき草は久しからず』と仰せられしは、強ちに一切経のみに区切られたことではない。ありとあらゆる教法も学問も此のうちに包含さるべきである。世人は従来の偏見を捨て宗教を見なほす必要がある」

という一節であった。

これこそ、仏法の宗教観の真髄のうえからのお言葉と、私は思ってきた。

屋嘉比　それこそいわゆる「宗教」と「学問」、また「宗教」と「科学」の明確なる位置づけのうえからも、仏法で説く「宗教」が〝根本〟という意義であるということが私にも納得できます。

第十三章　ミクロとマクロ・「生命」の不可思議

はじめての精密検査

――今回は十日間の入院精密検査、本当にご苦労さまでした。

屋嘉比　ドクターからは、長年の疲労の蓄積（ちくせき）なので、まだじゅうぶんに静養されたほうがよい、という話とうかがっています。

私もドクターのひとりとして、この際、ぜひお願いします。（爆笑）

池田　ご心配をかけました。多くの方からも、励ましやご心配をいただき、またご親切なお言葉を頂戴し、感謝しております。おかげさまで大したこともなく、十日間で自宅養生（ようじょう）を命じられました。（笑）

――はじめての入院だそうですが。

池田　そうです。

――東京女子医大でしたね。

池田　そうです。私は、はじめて精密検査を受けましたが、心臓血圧研究所の先生方には、たいへんにお世話になり感謝しています。みなすばらしいお医者さんであることを感じました。

また病院も、病院でないような感覚をだした、なかなかのシステムで、感銘しました。

――屋嘉比さん、女子医大は、心臓等の循環器などで優れていると聞きましたが。

屋嘉比　とくに二十四時間中、心臓病の患者に、なにが起きても対応できるＣＣＵなどの施設と、医師と看護婦の体制ができているようです。私も、なかなか進んでいる部分を感じます。

池田　私も、じつはご存じのように、大きな会合がずっと重なり、（一九八五年）十月下旬から、ちょっと疲れがたまっていたんでしょう。また、カゼ気味だったんですかね。いっさいの行事を終え、岡山で胸に圧迫感を感じたんです。

それが二、三日つづいたもので、私が信頼しているお医者さんから、女子医大がいいから、きちんといっぺん診てもらったほうがよいと、きびしくいわれたんです。

それで十月の三十一日の午後、ちょっと不快感がぬけなくて入院いたしました。

――ああ、そうでしたか。

池田　結論としては、多少、成人病の傾向はあるが、根本的には大したことはないということで、また、ご奉公したいと思っております。

屋嘉比　本当によかったですね。

私も対談でお会いするたびに、お疲れではないか、と心配しておりました。

――私は約三十年間、先生のお姿を拝見しております。なにしろ一日の休みもないし、つねにいろいろな圧迫がある。

本当に激務の連続でしたから、はじめはわれわれ編集部も、ショックでした。しかし、お元気な姿で、こんなに嬉しいことはありません。

屋嘉比　なにか入院の感想はございますか。(笑)

池田　私が入院したのは、心臓血圧研究所の二階です。入院すると、すぐ若手の三十代のお医者さん数人と看護婦さんがはいってきて、そのすばやい治療のチームワークには驚きました。真夜中も、廊下をかけ足で働いていたということを聞き、その訓練の行き届いた姿は、私の想像以上のものでした。

――女子医大は、なんといっても心臓外科の故榊原仟(さかきばらしげる)博士が有名ですね。

池田　そのようです。屋嘉比さん、女子医大はいつごろの創立ですか。

屋嘉比　今年が創立八十五周年といいますから、明治三十三年ではないでしょうか。当時は東京女医学校と呼んでいたようです。

池田　いまでこそ、日本一ともいわれるが、はじめはたいへんだったとうかがいましたが。

屋嘉比　おっしゃるとおり、昔は地域の人々から〝河田町診療所〟と呼ばれるくらいの規模だったようです。しかし、昭和二十年代、榊原博士が外科教授に就任したあたりから、本

格的な設備を備えていくようになりました。

学閥よりも実力主義であり、人材育成に力を入れてきたことはよく知られています。

池田　そのへんは私学の強みですね。

たしかにそういう学風というか雰囲気を、私も感じとることができましたね。

――榊原博士には、もう十四、五年前になりますか、『潮』に寄稿していただいたことがあります。

池田　そういえば、岡山での行事を終えた晩、久方ぶりに数人で月下の岡山城を散歩したんですよ。あんなにゆっくり歩けたのは数年ぶりでした。

そのお城の入り口にも榊原病院がありました。

屋嘉比　それは榊原博士の関係の方がやっている病院です。なにか縁があったのでしょうかね。（笑）

池田　看護婦さんもたいへんに洗練され、大したもんだと強く感じましたね。

私のフロアは、たまたま二十四時間体制だったもので、夜中も血圧の検査とか、見回りとか、たいへんな看護でした。

患者にとっては、天使のようなあの慈愛の行動が、忘れることができない思いでしたね。

屋嘉比　たしかに患者さんは、医師よりも看護婦さんに親しみを感ずるもんなんでしょう

ね。（笑）

池田　医師も看護婦さんも、生命を守るという真剣な姿は、神々（こうごう）しくも感じました。いわゆる利害をこえた重労働に、頭が下がる思いでした。むしろ看護婦さんこそ、身体を大事にしてもらいたいという、強い思いがしたくらいです。

健康の基本は食事と運動

池田　そこで、私の短い入院体験であったが（笑）、今回少々、屋嘉比さんにうかがいたいと思ったことがあるんです。

大学病院の場合、本当に若いお医者さんが多く、活気がある。これは、どの大学も同じ傾向ですか。

屋嘉比　病棟の第一線は、二十代後半から三十代です。救急の患者が多い大病院は、一週間ぐらい、徹夜、徹夜がつづく場合もあります。体力的にも若くないとつづきませんね。

池田　すると夜勤（やきん）明けは……。

屋嘉比　そのまま働きます。

池田　それは昔のわれわれと同じだ（笑）。よく戸田前会長は、若い人に、「仕事はなんでも十年頑張りなさい。十年やり通せばなんでもできる」といわれていた。若い医学の最前線の人たちを見ても、今回は本当にそう思いましたね。

――自分も若い若いと思ってきたが、もう四十代半ばになって、無理がきかなくなった。本当にこれからの人はうらやましい。（笑）

池田　検査をする場合、前日の夜八時以降は、どうして食事してはいけないのですか。

屋嘉比　それは、深夜食事をとると、早朝の血糖値、中性脂肪の値が変わり、正確な検査ができないからです。

また胃の検査の場合は、食べ物が残っていると、腫瘍と間違えられることもあります。

池田　そこで頭ではわかっても、辛いのが日常の食事制限です（笑）。戦前に育った私たちは、「たくさん食べろ、食べた分だけ頭がよくなる」と、よくいわれてきたんですがね。（笑）

夜は病院の前の通りを、石焼きイモ屋さんの屋台がよく通るんです（爆笑）。そっと買ってきてもらって、食べた焼きイモはおいしかったなあー。（爆笑）

屋嘉比　食べ過ぎは、中年になったらいちばんいけません。

カロリーを摂り過ぎると、肥満や動脈硬化のもととなり、いろいろと循環器の障害を起こ

しやすくなります。とくに夜食というのは、注意しなくてはいけませんね。

池田　反省します。（爆笑）

すると、あとはどういうことに気をつけることが大事ですか。

屋嘉比　その人によって個人差があると思いますが、基本は食事の問題と、運動をしっかりやることです。

池田　私は、よく自宅の近くの外苑（がいえん）の森を車で通ります。若い人たちに混じって、中年の人がジョギングをしている姿を見かけ、うらやましく思うんですが。（笑）

屋嘉比　これも一概にはいえませんが、中年になった場合、散歩などのゆったりした運動を増やせばよいと思います。

急激な運動は、身体の中の糖分は消費しますが、動脈硬化の原因となる脂肪分は消費しません。むしろ、ゆったりとした運動を持続することが、脂肪を消費します。

池田　わかりました。それでは年をとると、血圧はなぜ上がるんですか。

屋嘉比　血圧が上がるのは、主に二つの理由があります。

一つは、塩分の摂り過ぎなどで、ナトリウムや水分が蓄えられ体液が増加するため。

もう一つは、血管の抵抗性が高まるためで、主に腎や副腎からのホルモンや、自律神経（じりつしんけい）の影響などによります。

池田　塩分の話はよく聞きますが、ホルモンや自律神経の影響というのは……。

屋嘉比　血圧のコントロールについても、脳が重要な働きをしております。疲労やストレスなどで神経が過敏になると、脳からの影響で交感神経や内分泌系が刺激され、血管を収縮し、血圧が上がります。

池田　いろいろ原因があるんですね。

屋嘉比　近年、アメリカ社会の大問題であった心臓疾患による死亡が減少しております。これは、肉食などの動物性の食事を避け、スポーツの機会を増やすことを、社会全体が努力してきたからといわれております。

池田　すると、前にもうかがったことがあるが、食べ物はなにがよいですか。

屋嘉比　やはり肉食や甘い物を少なくし、野菜を多めにとることです。またイワシ、サンマ、サケ、マグロ、サバ、ハタハタなどの魚がよいようです。

魚は油の成分が肉とは異なり、身体によいからです。

池田　よくわかりました。ところで屋嘉比さんも、若干太り気味ではありませんか（笑）。私も運動不足で肥満型になってしまいましたが。（笑）

屋嘉比　そうなんです。私は沖縄なもんで、肉が好きで、この前アメリカへ行ってから、ステーキを食べ過ぎて胃の調子がどうもおかしいんです（笑）。いつも女房に、「あなたは対

談でいっていることとやることが違う」といわれるんです。（爆笑）

池田　私も同じだ。（爆笑）

遺伝を決定するDNAの正体

――そこで先ほど、池田先生が若手医師のチームワークを誉められていましたね。この前、初の日本人宇宙飛行士が三人決定し、先生も関心をもたれていたのでいわせてもらいますが（笑）、この選考基準も、チームワークが重視されておりますね。

池田　屋嘉比さん、宇宙飛行士には、医学的にはどんな条件が必要なんですか。

屋嘉比　私も専門家ではないのでよく知りませんが、簡単な資料によると――

血圧は上は一四〇以下と下が九〇以下

視力は〇・二以上

虫歯のない人（笑）

便秘でない人

汗かきでない人

めまいを経験したことがない人

――等々、相当きびしいですね。

私は失格です。（笑）

池田　アメリカですから、英語も堪能でなければなりませんね。

屋嘉比　そうです。それとチームワークは、孤独な宇宙船の中での協同作業ですから不可欠です。ですから、人格的にどうか、協調性があるかどうかも、心理テストなどで厳格に調べるようです。

――スカイラブのカー船長たちが、名誉会長を表敬訪問した際、私も同席させていただきましたが、たしかにみな優秀な科学者であり、かつ紳士で、いい人たちばかりでしたね。これは不思議と一致しておりますね。

池田　いや、これはどこの世界も同じです。御文にも「賢きを人」（「崇峻天皇御書」一一七四）とある。

ですから、賢明であり、立派な人格になっていくことが、真実の信仰者の証であり、また条件である、と私は思っております。

――よくわかります。

池田　私も入院中、そばにいた人たちが、心臓や血管の話をいろいろ調べてきては聞かされた（笑）。そこで、よく入院した患者さんは、両親が同じ病気だったかどうか調べると聞

きましたが、屋嘉比さん、本当ですか。

屋嘉比　そのとおりです。遺伝性が強い病気が多いからです。

池田　そこで、顔が親に似るとか、肥満型とか（笑）、われわれの体の遺伝を決定していくのが、いわゆる「ＤＮＡ」（デオキシリボ核酸）である。

余談になりますが、ひとりの人間のなかの、すべての「ＤＮＡ」をつなぎ合わせると、これまたたいへんな長さになると読んだことがありますが、どれぐらいになるんですか。

屋嘉比　「ＤＮＡ」は、二重らせん状の微細（びさい）な繊維構造です。一個の細胞の中の「ＤＮＡ」のらせんの直径は、わずか五百万分の一センチです。ところが長さは、約一・八メートルもあるんです。

池田　すると人間全体では、どのくらい……。

屋嘉比　人体の全細胞が約六十兆個ですから、ほぼ一千億キロ以上と思います。

この数字は、ちょっと感覚的には想像できませんが、たとえていえば、太陽と地球の距離が一・五億キロですから、そのほぼ七百倍にもなるんでしょうか。

――これはこれは……。われわれの身の丈（たけ）五尺三寸の身体というのは、本当に不思議なものんですね。（笑）

屋嘉比　しかも、この人体のＤＮＡ分子の記号に含まれる情報量は約五十億。百科事典の

およそ千巻分に相当するという説もあります。

池田　すると仏法では、わが身を「宇宙即我（うちゅうそくわれ）」「我即宇宙」という生命観からとらえますが……。

ここでも心だけでなく、肉体的にみても、人間は宇宙大の広がりをもつと考えてもよいですか。

屋嘉比　そう思います。

池田　先ほど、宇宙飛行士のお話が出たので、ついでに申しあげますと（笑）、地球や月ができたのは、約四十六億年前という、われわれの想像を絶するはるか昔である。この地球や月の年齢も、「元素」というミクロ（極小）の世界から解明されたものではないですかね。

――そのとおりです。なぜ、そんな遠い過去のことまでわかるかというと、現在あるウランなどの放射性元素を調べて計算すると、大まかな数字が出てくるそうです。

屋嘉比　宇宙それ自体の解明も、じつはミクロの素粒子*論と大きく関係しているようです。しかし、このへんはまだまだの分野で、これからの研究の進展が期待されるところですね。

――ミクロの世界のなかに、マクロ（極大）の宇宙の謎（なぞ）が隠されているともいえるんでしょうね。本当におもしろいもんです。

池田　遺伝子*工学の成果が、医学の分野で一般的に使われているものはあるんですか。

屋嘉比　かなりあります。薬では――

リューマチなどの炎症の治療に用いられる副腎皮質刺激ホルモン

糖尿病治療のインシュリン

小人症治療の成長ホルモン

血友病治療の血液凝固因子

――などが実用化されています。

池田　だいたいわかりますが、まだ、研究中のものは……。

屋嘉比　ガン、動脈硬化、肝炎、貧血症などの薬品が、さかんに開発されています。このバイオテクノロジー（生命工学）による開発のひとつの特徴は、薬品がたいへんに安く手にはいるようになることです。

ひとつの例として、白血病のL―アスパラギナーゼという薬品は、バイオによる増産化によって、治療の一過程あたりの単価が、一万五千ドルから三百ドルになった（「米国議会OTA資料」）ということです。

――まったくもって人間というのは、次から次へと新しいものを発見し、つくりだしていくもんですね。（笑）

池田　すばらしいことです。人間の英知は偉大だ。私はいつも思うのです。この人類の英知を、もっともっと「平和」のために、「生命」と「健康」のために結集できないものかと……。

屋嘉比　まったく同感です。先日、「核戦争防止国際医師の会」がノーベル平和賞を受賞し、世界中から注目されました。こうした動きがあることは、一医師としてもたいへんに喜ばしいことです。

池田　たいへんに嬉しいことです。結構なことです。だいたい「核戦争防止国際医師の会」というのは、一般的には知られていなかったんではないですか。（笑）

――このグループは、米ソを含む、世界四十一か国、約十四万五千人から構成されているそうですね。私もジャーナリストとして、今後の動きを注目していきたいと思っています。

ところで南米のアルゼンチンでは、上院で「平和週間設定法」が可決されました。この法案には、池田先生の「平和提言」が引用されていることを聞き、ここにそのゼロックスをもってきました。

屋嘉比　アルゼンチンですか。ちょうど、地球の反対側の国ですね。（笑）

池田　私は知らなかったんですが、たしかにその通知はうけました。

屋嘉比　いや、本当に見てる人は見てますね。

二十一世紀は余暇の時代

――ところで、遺伝子のような不可思議な生命の実体に、一歩迫っていったバイオテクノロジーの話題は、医学のみならず多方面に広がっていますが。

池田　そうですね。私も仏法者のひとりとして、たいへんに興味あるところです。

屋嘉比さん、バイオテクノロジーは二十一世紀の科学のひとつの焦点といえるでしょうね。これはいま、どのくらい進んでおりますか。

屋嘉比　意識するとしないにかかわらず、じつは、私どもの日常生活に、かなりはいりこんでいます。

池田　たとえば……。

屋嘉比　私たちが毎日食べる、お米や野菜などの食べ物からはじまって、「健康」「エネルギー」などの分野にも、広くバイオテクノロジーの産物が進出しています。

池田　一回接種すると数種類の病気を予防できるワクチンもあると、聞きましたが。私なんかすぐ熱がでてしまうので、注射やワクチンが本当にきらいだった。これからの子供たちは助かりますね。（笑）

屋嘉比　それは多価ワクチンですね。

池田　どこの国の研究ですか。

屋嘉比　アメリカのB・モス博士などです。

池田　やはりこの分野も、アメリカは最先端なんでしょうね。ほかにもありますか。

屋嘉比　薬草なんかも、細胞を人工的に増やす実験も行われています。

――〝虫歯にならない〟チョコレートやガムもできるんですか。（笑）

屋嘉比　ええ、ある種類のカビは、虫歯防止の物質をつくります。これをお菓子に添加しようという研究もあります。

――最近は、バイオにとどまらず、科学技術の進歩はめざましい。今後、私どもの生活にどんな形となって変化をおよぼすか、ジャーナリズムでも大きなテーマです。（笑）

池田　そのひとつの例として、二十一世紀には、日本人の余暇の時間は、労働時間よりもはるかに長くなる、という研究もあるらしいですからね。

――そうです。「働きバチ」と外国から非難される日本でさえ、「新世紀は余暇の時代」といわれております。（笑）

屋嘉比　最近、そんな話をよく聞きますが、なにか具体的なデータはあるんですか。

――内閣総理府統計局の資料に基づき、余暇開発センターというところがだした推計があ

ります。それによれば、西暦二〇〇〇年には、日本人の年間の平均労働時間は、現在の二千百時間から千五百時間まで短縮され、反対に余暇の時間はその約二倍の二千八百時間にもなるだろうといっております。

池田　それは私も聞いたことがあります。すると、休日は何日くらいになりますか。

――完全週休三日、一か月の長期休暇が平均的になるというのです。

屋嘉比　思索と休養時間の少ない私どもには朗報ですが（笑）、しかし休みというと、横になってテレビを見たり、受動的な休息に慣れている現代人は、あまり休みが増えるというのも、苦痛になるかもしれませんね。（笑）

――ええ、その論文も、結論として、〝大型余暇を人生の充足として享受（きょうじゅ）するためには、一人ひとりが、人生の目的をどこに求めるか、労働はなんのためなのかといった、哲学的な命題（めいだい）を問いかけることからスタートしなければならない〟と提起しております。

屋嘉比　当然ですね。しかし、どうしたら価値的にしかも有意義に時間を使うことができるかは、これまたむずかしい。（笑）

池田　私どもは忙しくて、あまりピンときませんが（笑）、私は、生物学者ベルタランフィの言葉を思い出します。

屋嘉比　ベルタランフィですか。彼の理論は医学の分野でも注目されています。どんなこ

とをいっております。

池田　ちょっとむずかしいいい方をしていますが（笑）、〝生命とは、前もって定められた筋道どおりに安楽に落ち着いていくことではない。生命は、その最高のあり方においては、容赦なく、より高次へと進まざるをえない「生の躍動」である〟という内容のことをいっておったと思います。

つまり彼は、人間はただ安楽のみを追い求め、きまったレールの上を走るような人生では本当の満足感はない。より進歩へ、より高次元の人生観へと志向するところに、真実の「生の躍動」があることを、いいたかったのではないでしょうか。

これは、私どもが日夜主張し、行動していることでもあるのはご存じのとおりです。（笑）ともかく一流の人の見識は、みな仏法に近い。

――名誉会長が数年前、九州のある高校の生徒会から、「あなたの信条は」とのアンケートに対して、「波浪は障害にあうごとに、その堅固の度を増す」というひとことを、次代をになう青少年のためにあげられていたことを思いおこします。

屋嘉比　私も好きな言葉です。本当に人間は、忙しいから不幸なのか、時間があり、恵まれているから幸福なのかは、一概にいえませんからね（笑）。その意味でも、これからます〝人間とは〟〝人生とは〟という質が問われる時代と思います。

――ところで屋嘉比さん、バイオテクノロジーというのは、ひと言でいうとどういう原理ですか。ひとつ、われわれ素人にもわかるように説明してくれませんか。（笑）

屋嘉比　簡単にいえば、生物の「遺伝子」や「細胞」の機能を人工的に操作し、自然を改造したり、また工学的に応用したりするわけです。

たとえば寒さに弱い植物の遺伝子を、人工的に寒さに強い遺伝子に取り換えると、耐寒性の植物ができます。バイオは、小さな遺伝子に集積された情報に基づき、「生命」が物質を生産する力用と原理を応用したともいえます。

――どうも私どもには、わかったようでわからないような部分もありますが……（笑）。仏法では、こうした原理に関したものはございますか。

池田　そのままあてはまるかどうかわかりませんが……。

「大海の一滴の水に一切の河の水を納め一の如意宝珠の芥子計りなるが一切の如意宝珠の財を雨らすが如し」（「法華経題目抄」九四四）

という御文もあります。

――「如意宝珠」というのは……。

池田　現代風にいえば（笑）、読んで字のごとく、意のままに宝物や衣服、食べ物を取りだすことができる宝珠のことと思います。

この宝珠は芥子のような小さなものである。しかし、あの大海の一滴の水のなかには、流れこむすべての川の水が納められている。それと同じ原理である、というのです。

屋嘉比　なかなかおもしろい譬えであり、しかも鋭く真理をついた御文と思います。

池田　これは仏法上は、「妙法」の功徳の力用の大きさ、広さを譬えた御文なんです。

――このバイオ研究の草分けは、だれになりますか。

屋嘉比　十九世紀のフランスの細菌学者パスツールだという学者もおります。

――パスツールですか。私は二十年ほど前、フランスのパスツール研究所にジャック・モノー博士を訪ねたことがあります。あの研究所は、キリスト教神学が医学の進歩に介入することに対して、砦の役割を果たしてきたことで有名ですが。

屋嘉比　そのとおりです。それは医学史の夜明けともいえる輝かしい一ページとなりました。

――すると本格的な展開は、いつごろから……。また、なぜ進歩したんでしょうか。

屋嘉比　一九五三年にＤＮＡの構造が発見されてからです。

さらに、近年の分子生物学*の進歩が大きく貢献しております。

池田　でしょうね。私はまったくの素人ですが、昨年夏、長野県へ行った折、信州大学で三十数年来研究を続けてこられた方と、木陰で一時間ほど懇談しながら、いろいろお話をう

かがいました。

――なんのご研究の方ですか。

池田　桑の実と葉を質、量ともに改良する研究一筋でやってこられたようです。私はよくわからないんですが、日本では珍しい、試験管の中でたった一つの細胞からつくったドラセナというブラジルの花を、説明書付きであとから送ってくださいましたよ。その方の研究室には、二人の中国の留学生がいて、いっしょに来ておりました。一人は女性でした。二人ともたいへんに頭のよさそうな学生でした。またインドからも来ていたといってました。

――各国とも、こぞってこの分野には力を入れておりますからね。

屋嘉比　バイオでは女性の活躍がめざましいんです。とくにアメリカでは、トップクラスの研究者の半数は女性だといわれます。

新たな価値観求められる生命の世紀

――この分野の研究は、今後どのような方向へ進みますか。

屋嘉比　たいへんな生活革命、環境革命をもたらすと思います。しかし同時に、〝生命の

不可思議〟が、ますます奥深く広がっていく気が、私はしてなりません。

池田　ともに、ご存じのように、医学の倫理という大問題が不可避となるわけです。謙虚な言葉です。しかし真実でしょうね。仏法では「不可思議の法」、また「不思議実理の妙観」とも説かれている。

屋嘉比　「不思議実理の妙観」とは……。

池田　少々専門的になりますが、「教相」上の浅い法門を破して「観心」の法門を立てることです。この「妙観」あるいは「観心」という法門によって、はじめてとらえられた宇宙と生命の究極の姿を「不思議実理」というのです。

結論していえば、この法門とは「事の一念三千」の当体たる「南無妙法蓮華経」の一法となるわけです。

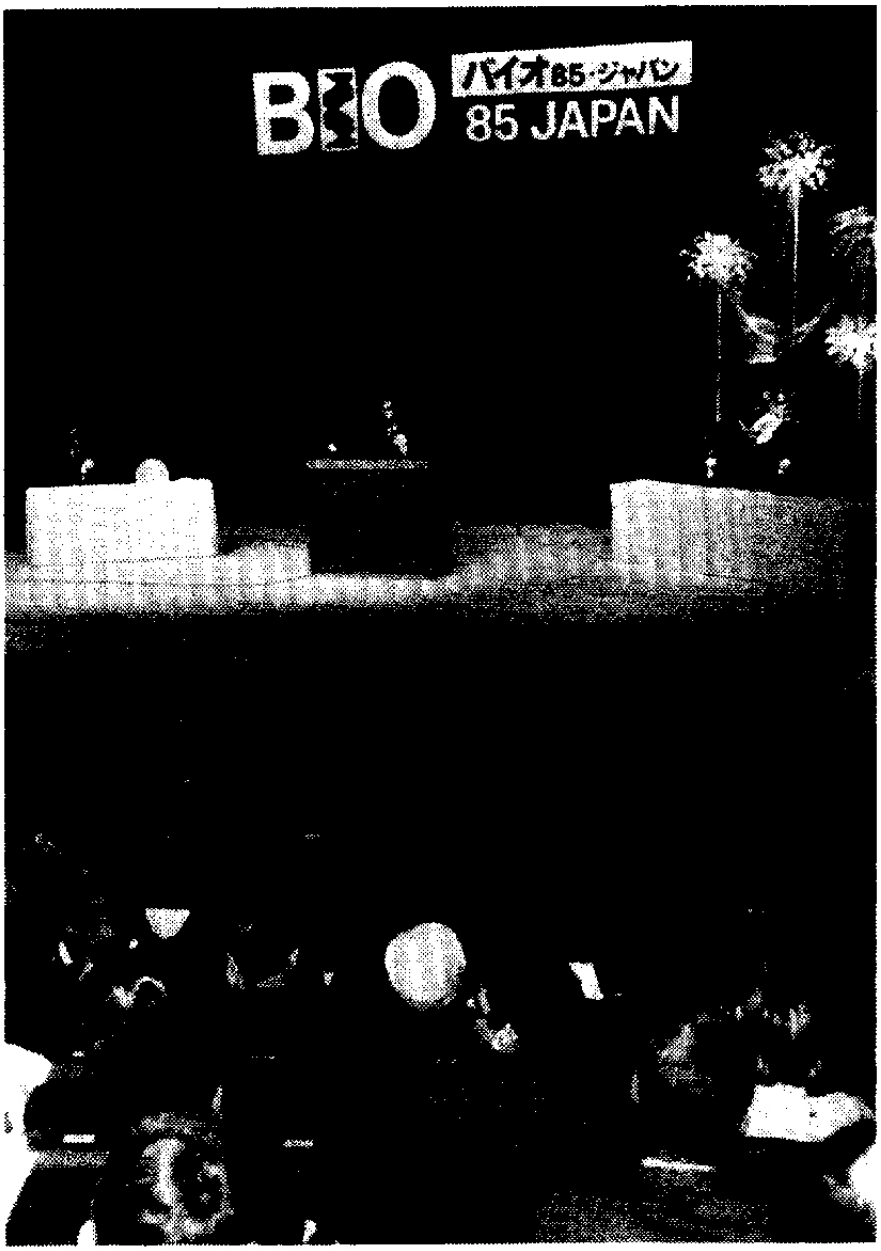
つまり、これはまた、科学などの現象論の範ちゅうでは、近づくことはできるが、全体観、実在は、どこまでいってもとらえきれないのが「生命」の実理、実相であることを説かれている、とも私は思います。仏法では、これを「妙」ととらえるわけです。

――『「仏法と宇宙」を語る』でも、さまざまな角度から論じていただきましたが、本当に、生命とは、宇宙とは、という問題は深くつきつめればつきつめるほど、深淵な問題ですからね。

池田　あるイギリスの有名な物理学者に、「宇宙は、大いなる機械より大いなる思想に近い」という言葉があります。この宇宙に存在しゆく生命もまた同じであると……。

屋嘉比　私は一医学者として、たいへんに感動する言葉です。

――ところで先日、日本ではじめて、バイオテクノロジーの国際会議が大阪で開かれまし



盛況だった第1回国際バイオテクノロジー会議。

た。この会議はソ連も含め、世界二十数か国、六百三十人もの関係する学者が会したそうです。

最近はますます、「生命」という問題への関心が、世界的に高まっているひとつの証左と思います。

池田　屋嘉比さんは行かれましたか。

屋嘉比　いや、私は忙しくて行っておりません。（笑）

日本からは、大阪大学の山村前学長が感銘深い基調報告をしたようです。

――山村雄一博士ですか。博士は、昨年の甲子園の世界平和文化祭に、来賓として出席されていましたよ。私も会場でご挨拶させていただきました。

池田　うかがっています。博士はどんな……。

屋嘉比　博士は会議の冒頭、「生命科学の光が強くなるほど、その影も濃くなる。人間とは何か、科学技術と医学的治療の向かうゴールは何かを問うべき時期に来ている」と問題提起されていました。

――すると、多少の観点の違いはあっても、この対談で私どもがいつも論じてきたことと同じになりますね。（笑）

屋嘉比　これはもはや、現代の心ある科学者に共通の実感です。

池田　ところで私は、トインビー博士の言葉を思い出しますね。博士は、「人間のもつ力が増大すればするほど、宗教は必要になってくる」といっておりますね。これは、新しい科学時代の生命の哲学、宗教を志向した言葉と、私はこんにちまで思ってきたひとりです。

――トインビー博士は、先生との対談でもたびたび、先生の信条と仏教の生命観に共感をもつと語っておられましたね。私も強くこの言葉が胸に残りましたね。

屋嘉比　たしかに科学者自身も「全人格的な幸福を求める新しい価値観」（『生命工学』新井俊彦著）が求められることに気づいております。

また、そこにこなければならなくなってきたようです。

第十四章　仏法の眼・医学の眼

医学に必要な確固たる生命観

――インドのガンジー首相と会見（一九八五年十一月）されたようですが。

池田　いたしました。

――赤坂（東京）の迎賓館でしたね。

池田　そうです。私どもにとって、インドは仏教発祥の恩人の国です。またこの（一九八六年）一月、「核の脅威展」を首都ニューデリーで開催しますもので、その御礼にいって参りました。

屋嘉比　インドでですか。それはすばらしいことです。

――すると、世界で何か国めの開催になりますか。

池田　たしか十二か国めと思います。

――ガンジー首相は、弱冠四十一歳とのことですが……。

池田　そうです。首相のお母さんは、たいへんに残念なことをしました……。その遺志を継がれた若き指導者が、世界の檜舞台に登場したことは、私は本当に嬉しく思いましたね。じつはインドは、私の恩師、戸田前会長も、非同盟諸国の中心として、高く評価しておっ

たんです。

会談の内容は機関紙に出ていますので、詳しくはそれを読んでください。（笑）

ところで屋嘉比さん、やはり年末は病院も忙しいんでしょうね。

屋嘉比　ええ、寒さが増すと、カゼをひく人が多くなりますし、入院している患者さんの具合が悪くなる場合があります。

また年末年始で、飲み過ぎ、食べ過ぎの人も増えますからね。（笑）

――わざわざ東大病院に来るんですか。

屋嘉比　付近の人がみえますし、せっかく胃腸がよくなったのに、暴飲暴食でまた来る人もいるんですよ。

――休暇はとれるんですか。

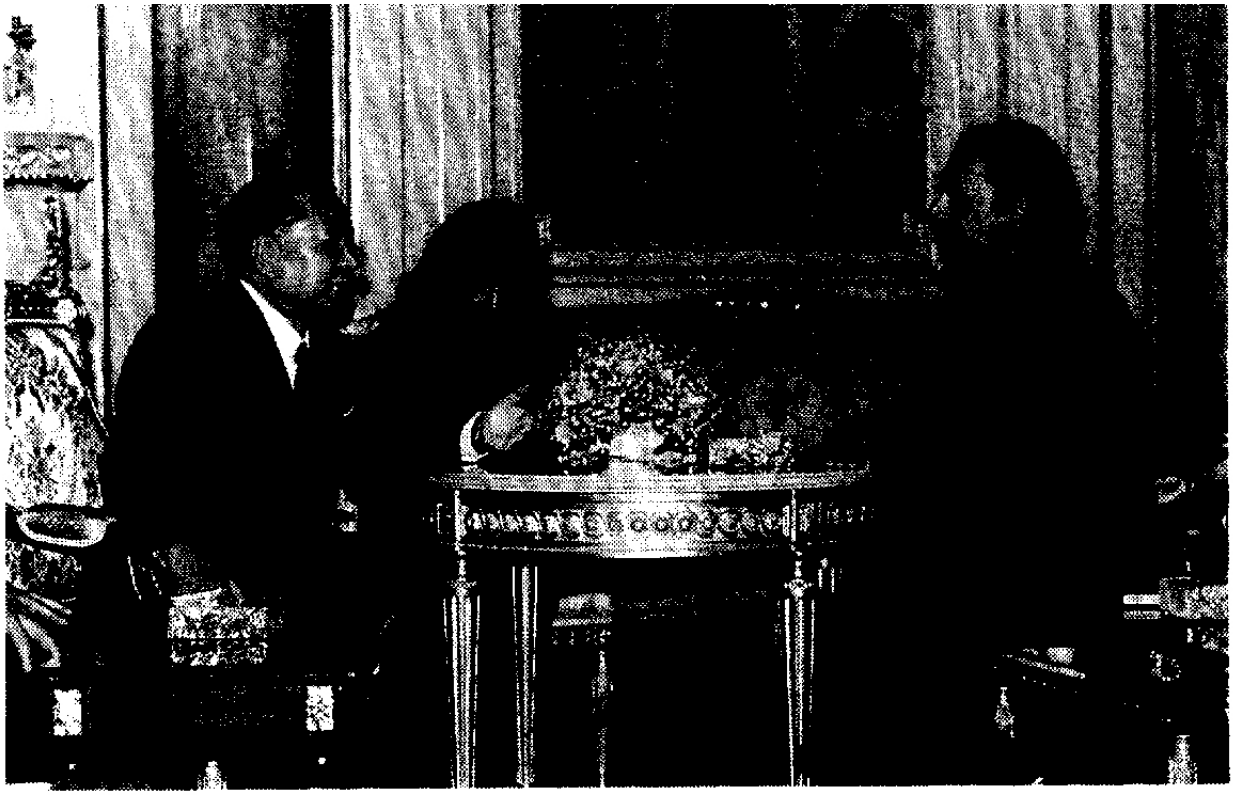
屋嘉比　交代でとります。お正月の当直はクジ引きで決めるんです。（笑）

池田　冬場の患者さんの傾向性はありますか。

屋嘉比　お年寄り、血圧の高い人、心臓の悪い人は、要注意です。

池田　そこで今回も屋嘉比さんに、いろいろおうかがいしたいんです。

なぜ、私がこのような質問をするかというと、仏法では、病気治療についても、「重病を療治するには良薬を構索し」（「曾谷入道殿許御書」一〇二六）



インドのガンジー首相と会見する池田名誉会長。

と、あくまでも現実の医学の観点を重視したとらえ方もしているからなんです。

また、われわれの身体についても、

「我が身は天よりもふらず地よりも出でず父母の肉身を分たる身なり」（「出家功徳御書」一二五二）

と、現実の姿をありのままに見ていくわけです。

屋嘉比　すると人間の身体を、「天よりもふらず地よりも出でず」というように合理的にとらえるのは、仏法の基本的な考え方とみてよろしいんでしょうか。

池田　結構と思います。ですから御文には、「転子病」ということも説かれております。

屋嘉比　「転子病」といいますのは……。

池田　現代風にいえば、「遺伝病」といって

いいと私は思います。

「転子と申すは親の様なる子は少く候へども此の病は必ず伝わり候なり」（「弥源太入道殿御返事」一二二八）

と説かれておりますから。

屋嘉比　驚きましたね。仏法は医学とも相反しないと、よく先生がおっしゃる意味が、私にもわかります。

他にもそうした御文はございますか。この際、勉強のため、ぜひおうかがいしたいんですが。

池田　少々、断片的で申しわけありませんが、屋嘉比さんのほうが、よくご存じなのでは。

「人に皆五臓あり一臓も損ずれば其の臓より病出て来て余の臓を破り終に命を失うが如し」（「新池御書」一四三九）

という御文もありますね。

屋嘉比　おっしゃるとおりです（笑）。心臓の悪い人は、肺の病状や肝障害が出てきますし、腎臓の悪い人は、血圧も高く、心不全や貧血も併発します。

池田　また、

「鳥の卵は始は水なり其の水の中より誰か・なすとも・なけれども觜よ目よと厳り出来て虚

空にかけるが如し」（「新池御書」一四四三）

という御文もございます。

「なすとも・なけれども」というのは、生命それ自体のもつ働き、力用をいわれているわけでしょう。

屋嘉比　たいへんに興味深い、しかも納得のいく御文ばかりです。生命のもつ無限の発動性、能動性を見事にとらえられている。

池田　お母さんが赤子を育児する姿についても、

「胸にかきつけ懐きかかへて三箇年が間慇懃に養ふ、母の乳をのむ事・一百八十斛三升五合なり、此乳のあたひは一合なりとも三千大千世界にかへぬべし」（「刑部左衛門尉女房御返事」一三九九）

ともおっしゃっておられます。

屋嘉比　まさに、三歳育児が大切なことがわかりますね。（笑）

それにしても、「此乳のあたひ」云云というのは、なにものにも代えがたき母と子の絆、そして〝生命の尊厳〟さを実感します。

池田　さらに、

「法は分別に名く法眼は仮なり分別の形なり」（「十八円満抄」一三六五）

という御文もありますね。

「法眼」とは菩薩の慈悲の眼です。つまり、人々の救済のため、生命の仮諦の姿である肉体、物質の世界をはじめとするいっさいの諸法を、智慧の眼で分別していく働きを指すわけです。

屋嘉比　すると、医学もそのひとつととらえてよろしいですか。

池田　結構だと思います。これに対し仏法は、

「妙は不思議に名く故に真空冥寂は仏眼なり」（「十八円満抄」一三六五）

と立てております。

簡潔に申しあげさせていただければ、「真空冥寂」の「真空」とは、通常の私どもの認識・判断を超えたというか、一切の相対差別を絶するというか、しかもそれらを動かしゆく生命それ自体の「妙理」をいいます。また、この「妙理」を形容して、「冥寂」ともいうわけです。これがつまり、仏の「悟り」の眼であるというのです。

要するに、菩薩の「法眼」は、一切の諸法を分別して、形を見ていくことにあったのに対し、いちだんと深い究極のとらえ方が「仏眼」といってもよいと思います。

屋嘉比　医学が、慈悲の眼でなければならない。

また、そのために確固たる生命観をもたねばならないということも、よくわかります。

池田　まだまだあると思いますが、今回は私が質問する番ですから、これぐらいにさせて

ください。（笑）

生命のすばらしき力用と創造性

池田　そこで、いままでの補足の意味で、少々うかがいたいんです。

まず、法華経には「薬王（やくおう）」「薬上（やくじょう）」という菩薩が説かれております。

これは〝良薬〟を衆生（しゅじょう）に施（ほどこ）し、心身の病苦を治す菩薩といってよいと思います。仏法上、〝大良薬〟とは「南無妙法蓮華経」の一法です。

またしばしば仏法では、仏を〝医師（くすし）〟に譬（たと）えております。

そこでいったい、「薬」というのはどのくらいつくられているんですか。

屋嘉比　日本では、一年間の生産額が四兆三百億円（昭和五十八年度）。国民一人あたり、約三万円強のようです。これはますます増えていくと思います。

池田　いま、薬はどんどん増えるとおっしゃいましたが、御文にも、

「疾（やまい）の前に薬なし」（「蓮盛抄」一五三）

と説かれております。これは病気になれば、医者から薬を調合してもらわねばならない。医者は、病気に対応して薬をつくっていくという意味にもなります。

いまはそれだけ、病気が切実な時代ともいえるんでしょうね。

屋嘉比　そのとおりです。

池田　先日も、アメリカのガン研究所で、ガンに非常に効果的な薬がでてきたという大きなニュースがありましたが。

屋嘉比　ええ、「インターロイキン2」のことですね。

池田　日本でも使っているんですか。

屋嘉比　使用しています。ただ今回の場合、使い方に新しい工夫があるようです。「インターロイキン2」は、体内のリンパ球が産出するもので、免疫機能を活発化させる物質です。発表によると、肺ガンなどの二十五人の患者のなかで、十一人に効果がでて、アメリカではトップニュースになりましたね。これは遺伝子工学のひとつの成果です。

池田　同じ薬であっても、使う条件によって効果も違うというわけですか。

屋嘉比　おっしゃるとおりです。また、ガン治療における大きな問題点は、ガンと正常な細胞の識別がむずかしいところにあります。

少々、我田引水になりますが、私の所属する医局では、最近、ある種の肺ガンの早期発見を可能にする〝モノクローナル抗体〟をつくることに成功しました。

――お医者さんが、ちゃんと検査しろ、検査しろというのもわかる気がします。（笑）

屋嘉比　これはまた、抗ガン剤をガン細胞のみに命中させる〝ミサイル療法〟にも応用でき、副作用もずっと少なくなることが期待されております。

池田　ところで、私どもの遺伝子のなかには、〝冬眠〟しているものもかなりあると聞きましたが。（笑）

屋嘉比　ヒトの遺伝情報で、実際にたんぱく質をつくるのは、全体の一〇パーセントほどのようです。

池田　すると、その冬眠しているものを起こすと、さらに新しい発見もできそうですか。

屋嘉比　そう思います。

――先日、ハエの冬眠遺伝子を人工的に目覚めさせ、まったく未知のたんぱく質を、二種類生産させることもできたというニュースがありましたが。

屋嘉比　これは食中毒防止や、ガンに効果がありそうだといわれておりますね。ともかく生命というのは、知れば知るほど、次から次へと驚くべき新事実がわかってくるものです。

――われわれも取材が大変ですよ。（笑）

屋嘉比　もうひとつ、私が数年前から興味深く思ってきた実験があるんです。

それはマウスを使った実験ですが、大ざっぱに説明すれば、悪性奇形腫を、分割しはじめた受精卵に混ぜて母親の子宮へ着床させても、なんと正常なマウスが誕生するのです。

池田　母親の胎内では、悪性腫瘍も浄化され、正常化されるわけですか。仏法では、母の胎内を「宝浄世界」と説きますが……。そうした事実からも、その深い意義もわかる気がしますね。この生命のすばらしき力用と、無限の創造性を活用すれば、もっともっと医学は進歩する。また、その時代にはいったといえるでしょう。

と同時にますます、その科学を扱う人間自身の生き方が、問われる時代でもあるわけでしょうね。

屋嘉比　スイスの生物学の権威である、バーゼル大学のポルトマン元総長も、この点について、「ますます強力になっていく科学を、人間の生き方のもっと大きな、科学を超えた全体のなかに意義深く組みいれるという、日ごとに重要さを増していく課題」といっておりますね。

――そういえば、先日ある評論家の方とお話していたら、日本の医学界の事情をよく知っているヨーロッパの学者が、〝日本人の医学者はたいへん優秀である。しかし哲学がないからノーベル賞をとれない〟ともいっていたそうですよ。

池田　それは残念なことです。これからの人は、ぜひその点も深めてもらいたいもんです。

屋嘉比　わかりました。私どもは忙しすぎて、耳が痛いです。（笑）

人間の営みと大宇宙の運行

――ところで、今年（一九八六年）はインフルエンザが過去五年間でもっともひどいようです。

インフルエンザというのは、どのくらいの速さで広がるんですか。

屋嘉比　ジェット機よりも速いという人もいます。

池田　よく香港型とか、アジア型といいますが、インフルエンザはアジア大陸から来るわけですか。

屋嘉比　これは諸説あります。おっしゃるとおり、アジア、シベリア、中国西部の〝静寂（せいじゃく）な土地〟に源がある、とする学者も多いようですね。

ケンブリッジ大学のビヴァリッジという教授も、インフルエンザは歴史上、この地域に頻繁（ひんぱん）にあらわれている、といっておりますね。

ところがおもしろいことに、昔の人々は、この病気には〝星の影響〟があると考えたようです。もともと「インフルエンツァ」というイタリア語は、〝影響〟という意味だったわけです。

――現代でも、有名なイギリスの天文学者、フレッド・ホイル氏らは〝宇宙からインフルエンザなどの病原体がやってくる〟と主張していますが。

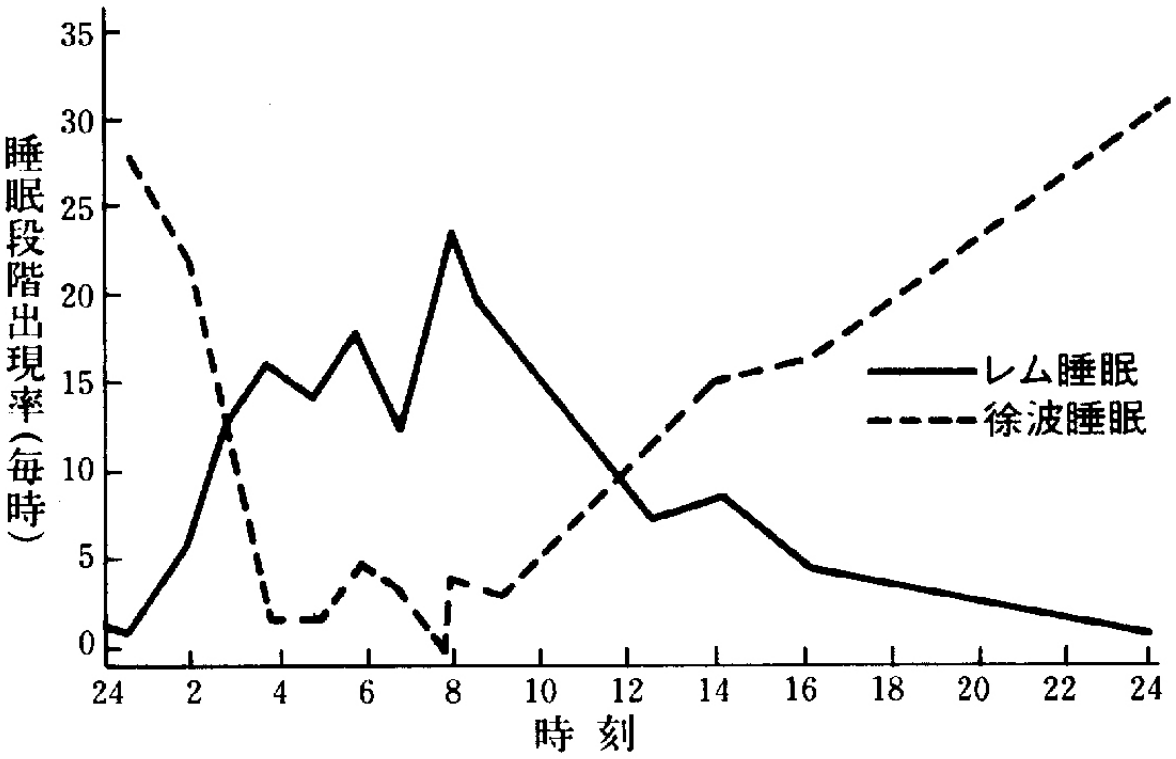
池田　私は専門外ですが、ホイル氏の説は、一般的には否定的にとらえる人が多いのではないでしょうか。

屋嘉比　おっしゃるとおりです。

池田　ただそれであっても、私は、人間生活の営みが、大宇宙の運行それ自体となんらかの深い連関性をもっていることまで否定しえないと、考えておりますが……。

屋嘉比　その点に関しては、私も同感です。といいますのも、人間の睡眠の内容ひとつとってみても、太陽と地球の運行に、人間の生理が深く関係することは明確です。朝起きて、夜眠ることは当然として（笑）、医学上、睡眠は二種類に分類されます。一つがレム睡眠――浅く夢みるような眠り、反対のノンレム睡眠――熟睡のような状態です。興味深いことに、人間の熟睡度は午後から日没にかけて上昇し、深夜の十二時ごろ、最高点に達します。しかしその後は急激に低下し、日の出のころは最低になります。

池田　すると、十二時前に寝るのがいちばんよいわけですか。弱ったな、これは……。（笑）



(注)徐波睡眠とは、ノンレム睡眠のなかでもっとも眠りの深い段階をいう。
(『睡眠障害』より)

屋嘉比　理論上はそうなります。反対に、浅い眠りは日没とともに度合いが下降し、深夜十二時ごろから上昇しているんです。

池田　戸田前会長は、「十二時前の睡眠は、それ以降の二倍の深さがある。早めに休むようにしなさい」と、私たちによくいわれていた。当時は、ひとりで何人分もの仕事をやらなければならないし、本当に忙しかった。

その意味で、疲れないような生活のリズムを、自分で工夫してつくっていかなくてはいけないという、先生の指導だったんです。

屋嘉比　睡眠は単なる休息ではなく、積極的な建設の面があります。病気に対する免疫や治癒力は、睡眠中につくられるともいわれています。

――ところで御文では、カゼについてなにか

ございますか。

池田　私が記憶しているのでは、「日蓮鎌倉に罷上る時は門戸を閉じて内へ入るべからずと之を制法し或は風気なんど虚病して罷り過ぎぬ」（「教行証御書」一二八三）と記された件がありますから、「風気」という言葉が、当時すでに使われていたんでしょう。

これはもっとも、大聖人との「法論」を避けたい一心に、極楽寺良観という人物が「虚病」をつかって逃げていた事実を述べられたものなんです。

――いつの時代も、都合悪くなると仮病をつかう偽善者はおりますからね。（笑）

池田　一説によれば、日本で「カゼ」という通称が定着したのはこの鎌倉時代である、という研究もあるらしいですね。

屋嘉比　ともかくカゼは、人が大勢集まるところが要注意です。

それとともに、寒い屋外へ行く場合は、当然のことながら、厚着をしたり、うがいや手洗いなど、それなりの準備と対応が必要です。

池田　昔の人の言葉ではないが、〝大勢の人がいる場合、寒い所、暗い所へは絶対に連れて行くな〟というのは、たしかに理にかなっている。

私は、カゼをひかない工夫をすることは、大切な人生の智慧のひとつと思ってきたひとりです。

そこで、もう少し屋嘉比さんにうかがいたいのですが、現代人にこれから多くなる病気はなんでしょうか。

屋嘉比　いわゆる成人病です。西暦二〇〇〇年にも、死亡順位は、成人病のガン、心疾患、脳血管疾患であろうと予想されます。

なかでも、近年、循環器系の疾患が急上昇しています。

池田　それでは、年代別には病気の傾向はありますか。

屋嘉比　発病する人についていえば、

三十五歳未満では「呼吸器系の疾患」

三十五～四十四歳では「消化器系の疾患」

四十五歳以上では「循環器系の疾患」

の率がもっとも高くなります。

池田　しかしどうでしょうか。ある程度の年齢に達すれば、肉体的にはなんらかの「病」は避けられない。また疲れもでる。それが自然の道理でもある。

――そう思います。高齢化社会を迎え、新聞の論調でも、

「若者のように無病息災とはいくまい。むしろ病気と積極的に同居する『一病息災』の心でいたい」（『朝日』'85・7・1）

という視点がでてきておりますね。

池田　私も今回、こういう体験もし、なんとか病気の方々を激励してあげたいという気持の昨今です。

私は仏法者ですから、その方々のご健康を、毎日ご祈念させていただいております。要するに、「妙法」という人生の根本軌道に則ってさえいれば、すべては深い意味があることは間違いないし、さらに信心を強め、見事な勝利の人生を歩まれていった方々を、私は数多く知っております。

戦争こそ地獄の行為

――先ほど、インドでの「核の脅威展」開催のお話をうかがいましたが、今年（一九八六年）は〝国際平和年〟でもあり、その幕開けを飾るものとして、国連関係者の方々も力を入れていると聞いておりますが。

池田　そううかがっております。アジアでは、インドの次は中国で行う予定になっており

ます。

屋嘉比　先生はつねに、「世界不戦」の意志の流れを、深く大きくしていくことの重要性を強調され、また実際に行動しておられますね。

――これはじつに大切なことです。というのは、過去に人類はどのくらい戦争を経験してきたか、人間の歴史を辿ってみると、驚くべき事実がわかってくるからです。

池田　これは意外と知られておりませんね。ドイツの歴史学者に、そうした研究をした学者がおりましたね。なんという名前でしたかね。記憶してますか。

――ウェリー・クレイグでしょうか。

池田　そうかもしれません。その歴史学者の説では、エジプトのトトメス三世のアジア遠征が終了した紀元前一四九六年から、アメリカの南北戦争（一八六一年）までの約三千四百年間というもの、戦争があったのが三千百年くらいで、平和の時代は三百年くらいしかなかったという結論がでているようです。

これを計算すると、「戦争が十一年」に対し、「平和は一年」となるんでしたかね。

――そのとおりです。別の学者が研究したのでは、紀元前三六〇〇年から現代まで、一万四千五百四十二回戦争があったというデータもありますよ。

屋嘉比　恐ろしいことです。かのアインシュタインは、「ナショナリズムは幼児の病気で

ある。それは人類のハシカである」といっておりますね。

まったくもって人間は、賢いようで愚かな証拠です。

池田　過去だけのことではない。戦後四十年だけでも、世界で百五十もの戦争もしくは武力衝突が現実に起こっている。

――おっしゃるとおりです。死者は、一千六百万人以上です。

屋嘉比　こうなると、人間と戦争との関係も、宿命的のように思えますね。

池田　ですから仏法は、ひとつの生命観のうえから、

「地獄と云う二字をばつち（土）をほ（穿）るとよ（読）めり」（「上野殿後家尼御返事」一五〇五）

と説かれている。

人類が、みずからの手でみずからを滅ぼすような戦争こそ、〝地獄〟の行為と私は思います。

――私、ちょっと思い出したんですが、米ソ首脳会談の実現については、四年前の五月、先生が、当時のソ連のチーホノフ首相に〝スイスかどこかの第三国を選んで、まず第一回を行うべきだ〟と、モスクワで提言されておられたんですよね。きょう、その新聞の切りぬきを持ってきました。

屋嘉比　それは、私も記憶があります。

といいますのは、当時は米ソ関係も冷えきって最悪だった。また日ソ関係もかんばしくないときで、日本の要人で、はじめてチーホノフ首相に会見したのが、先生だったからです。

池田　私のことはいわないでください（笑）。私は、一民間人ですから……。

私どもはただ、「平和」こそ仏法者の最大の使命と、強く思っているだけです。

――いや、むしろ民間人であるところに、意義があると思います。

先日も、ジュネーブの米ソサミットを取材した記者たちが、「あれは劇のようなものだ」と印象を語っていました。これからの時代は、民衆レベルの草の根の対話を、どうつくりあげていくかが本当のカギだと、心ある人々は考えています。

宗教は「生命」の病気を治す

池田　屋嘉比さんに、もう少々うかがいたいんです。

医師として、医療の最前線で心がけていることはなんですか。

屋嘉比　いろいろありますが……、なんといっても、医師と患者の信頼関係という基本が大事だと思います。

池田　そうでしょうね。私も今回の入院中、何人かの先生とお話しましたが、本当に、いい先生というものはすぐわかるものです。

屋嘉比　たとえば、ある循環器病の大家は、〝急患の患者ならば若い医師でも、一定のパターンに従って治療すればよい。しかし、何年もの慢性の病気の人は、医師とのコミュニケーションが大切となる〟と話されています。

また、〝私は、七十歳以上の老人でも「おじいさん」とか「おばあさん」と呼ばないようにしている。必ず「〇〇さん」と呼ぶ〟とも話しておりました。

なにげないことのなかに大事なことがあると、私は思いましたね。

池田　大切なことです。よく〝臨床（りんしょう）のできる医師は人柄だ〟と聞きますが、信仰の世界も同じです。

ある意味で、医学は、身体の安全と完璧性を通し「心」の安定をもたらす。どちらかといえば、宗教は、「心」を通し、生きゆく力、そして肉体の安定をもたらす、ともいえるかもしれませんね。

屋嘉比　その意味において、医学も患者に、生きる自信と希望を与えていくことが使命です。

ですから、医学を中心として人間を見るのではなく、人間を中心として医学をどうするか、

という観点がたいへんに重要であると私は痛感しますね。

池田　御文に、

「譬えば七子の父母平等ならざるに非ず然も病者に於て心則ち偏に重きが如し」（「曾谷入道殿許御書」一〇三二）

という一節があります。これは、七人の子供がいれば親は皆平等に愛情をもって育てる。それであっても、病気がちであったり、不憫な子供ほど、親というものはかわいいものである。それほど親はありがたい。と同じように、仏の慈悲は広大無辺であることを譬えられたことなんです。

次元は違うが、私どももつねにこの御文を身に体していかねばならないと――。

――感銘します。だからこそ、正法がこれほど広がったんだと思います。

人の心は、氷のように固く閉ざされていても、真実と誠意にはかならず開かれるものです。

屋嘉比　ある経験豊かな先輩が、〝医師は、患者がいるから医師たりうることを忘れてはならない。患者と共感できるところに、その人の病気も見えてくる〟と語っていました……。どちらかというと、頭だけでやってきた若い私どもには、本当にいい勉強になります。

（笑）

池田　もう一点うかがいたいんです。今後の医学は、どのような方向へ進むんでしょうか。

屋嘉比　それは、池田先生がつねづねいわれてきた「守りの医学から攻めの医学」を目指していくべきと、私は思います。

――具体的には……。

屋嘉比　〝守り〟というのは、現在ある病気を治したり、予防することです。〝攻め〟とは、現在ある健康をよりよい状態へともっていくことです。「未病に治す」というように、今後の医学はますます病気の予防へ、健康の増進へと力が注がれていくと思います。

――ただ、どうでしょうか。肉体的な〝病〟は仮に減少したとしても、人生の悩み、精神的なストレスとは別問題でしょう。

屋嘉比　おっしゃるとおりです。このストレスが現代人の病気におよぼす影響については、またあらためてお話したいと思いますが、多くの人々が指摘するように、現代ほど〝人間の本性が求めてやまない生命の全き開花〟が抑圧された時代もないと思いますね。

――目に見える身体の破壊も怖いが、この目に見えない人間の内面の破壊は、もっと恐ろしいものです。

池田　仏法のひとつの時代観に、

「減劫と申すは人の心の内に候」（「減劫御書」一四六五）

とありますが、まさにその姿そのままが、私どもの社会と感ずるのは、私ひとりではないでしょう。

屋嘉比　鋭い仏法の眼ですね。

現代社会の最大の〝病〟は、人間の「心」の病といえるかもしれません。それにつけても、私はある医学者の、〝ストレスを避けて、一生なにも有効な社会生活をせずに過ごして、病気を予防する人よりも、むしろ社会的に積極的な生活を送って、仮に病気になる場合があっても、そのほうがより有意義な人生を送ったといえるのではないか〟という言葉を思い出しますね。

これは誤解されては困りますが、「健康」というものが、単に病気でないことではない。人生に積極的な価値をつくりだすことが、真の意味での「健康」であろう、というほどの意味と思います。

池田　よくわかります。そうなると今度は、泥沼のような現実社会にあって、確固たる自分自身の人生観をいかに築きゆくか、ということになるでしょうね。ですから、その根本的な「法則」を知りえた私どもは幸せです。

ご存じのように仏法は、人間の心身を煩わし、悩ませる諸々の精神作用の総称を「煩悩」ととらえます。現代語でいう〝ストレス〟があたえる心身の苦痛も、この「煩悩」の範ちゅ

うといえると思いますね。

いうならば、医学は「肉体」の病気を治す。宗教は「心」つきつめれば「生命」の病気を治す、といってよいでしょう。

第十五章　ストレスと「衆生所遊楽」の境涯

科学の進歩が仏法を証明

屋嘉比　『「仏法と宇宙」を語る』の英訳本が出版されましたね。おめでとうございます。

池田　いや、どうも。私は英語が苦手（にがて）ですし、全部出版社の方にお任（まか）せしているんです。（笑）

屋嘉比　英国のマクドナルド社でしたね。

天文学では世界的権威のウイクラマシンゲ博士（イギリス）が、書評を寄せておられるようですが。

池田　そううかがっています。

――私が出版社の関係者から取材した話では、ウイクラマシンゲ博士を推せんしたのは、ケンブリッジ大学のホーキング博士のようです。

屋嘉比　ホーキング博士は、アインシュタインの再来といわれる、今世紀最大の科学者の一人です。

――ホーキング博士は、自分は仏教を学んだことがないので、仏教に通じ、秀（ひい）でた天文学者であるウイクラマシンゲ博士を推せんしたそうです。

屋嘉比　ウイクラマシンゲ博士も、「宇宙論、また物理学の成果と仏法を結びつけるなかに、明らかになってくる英知の輝きは、控えめに言っても驚嘆すべき素晴らしさである」と最大の評価をしておりましたね。

私もあらためて日本語版を読み返しました。（笑）

――国際宗教社会学会のカール・ドブラーレ会長（ベルギー）も、「宇宙の問題はどの宗教にとっても挑戦不可能な領域でした。宇宙につきあたると宗教は限界にきてしまう。それをSGI会長が真摯に挑戦されておられる姿勢は誠に意義深く、時代の先端を切り開くものであると確信いたします」と語っておりますね。

私は、たいへんに印象に残った言葉です。

池田　いや、浅学な上、多忙で体系的な論議もできず、もう少し時間があったならと思っているんです。

それにしても仏法には、

「やがて世間の法が仏法の全体」（「白米一俵御書」一五九七）

という御文があるんです。

ここでいう「世間の法」とは、万般にわたる事物、事象の道理のことと思います。

科学の進歩が、ますます仏法を証明していることは、私はたいへんにうれしく思いますね。

屋嘉比　歴史的にも、仏法は、科学を柔軟に受け入れ、現実の学問として評価する合理性、実証性をもっている、という学者がおりますね。

――十七世紀、西欧でガリレオが「地動説」を唱えたら大問題になった。ところが江戸時代でしたか、仏教的土壌の日本に伝来したときは、自然な形で受け入れられていったのは事実ですからね。

屋嘉比　「進化論」もそうですよ。

池田　ましてや仏法の真髄においては、もっと徹底しております。ですから、もう四十年近くも前になるんでしょうか。戦後まもなくのころ、私の恩師戸田前会長が、よく、「科学が進歩すればするほど、何倍も仏法が理解しやすくなる時代がくる」といわれていたことは記憶に新しいんです。

屋嘉比　たしかにいまになって考えてみると時代を先取りした言葉であったと思いますね。

――戸田先生は、政治、経済、科学等、本当に何でもご存じの方でしたね。

池田　先生は数学の天才でした。いわゆる万般の道理に通じた大学者と私は思っています。しかも戸田先生は、何よりも「大法」のため、人々のため、稀有の実践者であったことはご存じのとおりです。

先生の場合、思索即実践であった。いや、実践がそのまま生命への深き思索となっていた、

といえるかもしれませんね。

この偉大な人生の師をもちえたことが、私の人生のすべてであり、最大の誇りです。

――たしかに理論はどこまでいっても理論です。そこに実践という画竜点睛がなければ、価値は生じない。池田先生もまったく同じですね。

池田　いや、とんでもない。私と戸田先生とは天地雲泥の差です。

屋嘉比　宗教は科学を重視する。科学は宗教を必要とする。この、人類の二つの知的遺産を結合する壮大な試みは、未来への重大な課題です。その意味でも、仏法のような、現実を重視し、かつ普遍的な哲理は、時代とともにますます光を放っていくと思いますね。

現実社会を変革しゆく本源の「法」

――『日本経済新聞』の今年（一九八六年）の元旦号にも、「ストレスと上手につきあう」という特集がでておりました。今年は、カナダのセリエ博士がストレス学説を世に問うてから、ちょうど五十年目になるそうですが。

屋嘉比　セリエ博士の論文は一九三六年ですから、そうなりますか。これは、イギリスの

科学雑誌『ネイチャー』に掲載された、わずか七十四行の論文だったんです。

池田　前の章で、ストレスは病気の大きな要因であるといわれてましたが。

屋嘉比　アメリカのある調査では、家庭医に相談に来る人の症状の三分の二はストレスが関係する、というデータもあるほどです。

池田　セリエ博士が、のちのち有名になったこのストレス学説の着想を始めたのは、弱冠十八歳のときであったと聞きましたが。

屋嘉比　おっしゃるとおりです。彼は、教授や先輩たちが関心を示さなかった、《まさに病気である》という身体の共通の反応に着眼したわけです。

池田　すばらしいことです。何事にあっても、若い新鮮な感覚、意見を常に大切にしなくてはならない。その一つの証左ですね。ともかく若い人の成長は早い――。

余談になりますが、先日たまたま、私が創立した創価学園出身の二人の医師が、私のことを心配してくれて、「先生、その後、お体の具合はどうですか」と訪ねてきてくれました。うれしかったですね。

――どこの病院の方ですか。

池田　一人は成見君といって、慶応のお医者さんです。もう一人は藤乗君といって、東大です。二人とも本当に立派に成長し、驚いたんですよ。

――若い人にとって、自分の人生を本当に見守ってくれる人がいることは幸せですね。いまはそういう人が少ない……。

池田　ところで、これは聞いた話ですが、ちょうど五年前（一九八一年）の二月、ギリシャでマグニチュード六・六の大地震があり、首都アテネではパニック状態になった。その直後から心臓病の発作発生率が急激に上昇したというんですが、こういうことは本当にありえるんですか。

屋嘉比　考えられます。地震や戦争などの「死」の恐怖の下では、さまざまなストレス症状が起こるという報告が、現にいろいろあるんです。

アメリカの『タイム』誌に載っていた例では、南北戦争当時、兵士の中に、原因不明の動悸が頻繁に起きたことが伝えられています。

これは、あまりに多いので、〝兵士の心臓〟と呼ばれていたようです。（笑）

また、別の研究書によれば、第二次大戦のとき、ドイツ軍の激しい空襲が始まると、ロンドンの十六の病院で、消化性潰瘍が著しく増加したそうです。

池田　たいへんな精神的重圧だったんでしょう。仏法では、その生命観のうえから、より深く、

「軍起れば其の国修羅道と変ず」（「秋元御書」一〇七五）



アテネの地震後、心臓の発作発生率が急上昇したという。（WWP提供）

ととらえた御文があるほどですからね。

――戦時下でなくても、現代のようなストレス社会では、夜空を見ていると、ストレスのない宇宙空間に飛んでいきたい気持になるときもありますが。（笑）

屋嘉比　いや、残念ながら、心身医学で有名であった、東大の故・石川中博士もいっているように、〝孤独な宇宙飛行も、これまたストレス〟なんですね。（笑）

池田　仏法ではこの私どもの世界を、「娑婆とは堪忍世界と云うなり」（「御義口伝」七七一）

と説かれた御文もあります。

「堪忍」とは、あらゆる苦難を堪え忍ばねばならない世界ということでしょう。

その意味からもストレスということが、私は

理解できる気がするんです。

しかし「*娑婆即寂光（じゃっこう）」というがごとく、この厳しき現実社会をば、変革しゆく本源の「法」を明かしたところに、仏法の仏法たる所以（ゆえん）があると私は思っております。

屋嘉比　「娑婆即寂光」とは、深義はわかりませんが、文相（もんそう）からでも、発想の大転換がせまられる気がしますね。

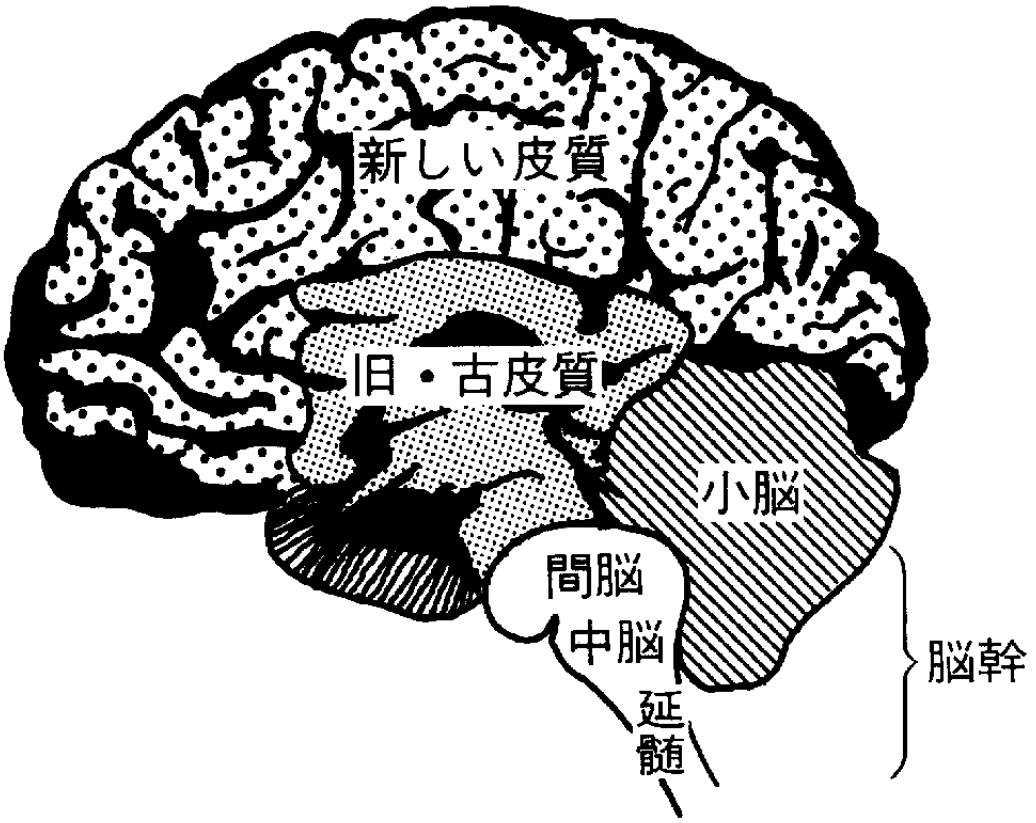
池田　生きていればかならずストレスはある。しかし、反対に、ストレスのない環境では、生命は十全には生きられないとも、読んだことがありますが。

屋嘉比　おっしゃるとおりです。セリエ博士も、〝すべてのストレスからの解放は死である〟というとらえ方をしていたと思います。

ですから博士は〝ストレスを人生のスパイスに〟といっておりましたね（笑）。広義のストレスは、適当な刺激という意味で重要です。

池田　よくわかります。しかし、人間の宿命、運命といった次元は、また別問題でしょうね。ところで、ストレスを解明していくと、人間の脳の働きと密接に関係してくるといわれますが。

屋嘉比　そうです。たとえば、ストレスが起こると、脳の内臓中枢の働きに〝歪（ゆが）み〟が生じ、自律神経の働きやホルモン分泌に変調をきたします。その結果、胃酸過多や高血圧など



が生じるわけです。

池田　すると、おおまかにいうと、人間の脳の働きはどうなっているんですか。

屋嘉比　脳を系統的に大きくわけると、脳幹（のうかん）部と、左右の大脳半球にわかれます。

大脳半球の表面はほとんど「新しい皮質」で覆（おお）われ、「古皮質」はその内部に押しこめられ、「旧皮質」はさらに「古皮質」の底へと閉じこめられています。

それぞれの働きを一応、分類すると次のようになります。

脳幹――呼吸、心拍、血圧、ホルモンの分泌等の、無意識に行われている生きるために必要な働き。（植物的生）

旧・古皮質――本能的な欲求、情動などの座。（動物的生）

新しい皮質――他の領域の働きを統合し、人間的な「知」「情」「意」にわたる創造性をもたらす精神活動。（人間的生）

池田　よくわかります。この人間の脳の構造は、生物進化の歴史が刻まれているといいますからね。

とくに「旧・古皮質」の〝古い脳〟に対して、「新しい皮質」の〝新しい脳〟は、過去五十万年に、爆発的なスピードで発達したともいわれますが。

屋嘉比　そのとおりです。脳進化の研究で世界的に有名なポール・マクリーン博士は、人間の脳を比喩（ひゆ）的に表現しております。

それによりますと、「旧皮質」を〝ワニ〟（は虫類）、その上に「古皮質」の〝ウマ〟（ほ乳類）が重なっている。そして、その二匹に象徴される本能的な心の働きを、上位に位置する「新しい皮質」の〝ヒト〟がたづなをもって、暴走をコントロールしている姿になっております。（笑）

「九識論」と大脳生理学の成果

池田　すばらしい科学の発見です。この大脳生理学*は、客観的に大脳の仕組みや働き方を

分析して、人間の感覚、感情、意識、記憶などの心の領域までも探っていくものである。

それに対し、仏法は、どこまでも主体的に自己の内奥へ、内奥へと探究の視線を伸ばしていった、といえるかもしれませんね。

しかし、その発想の基盤は異なっていても、また、その客観的分析と主体的探究の成果はただちに一致しないにしても、相互に連関しあうということは、当然いえると思います。

その意味で、仏法で説く「九識論」などは、大脳生理学の成果をも大きく包み込んでいく、壮大な体系といえるのではないでしょうか。

――「九識論」については、『「仏法と宇宙」を語る』でも種々、論じていただきましたが。

屋嘉比　私もたいへん勉強になりました。

池田　これまでもさまざまなところで論じてきましたので、ここでは簡単に触れさせていただきますが、「九識論」は、私たちの物事を識別する心の作用を、仏法の生命観から掘り下げたものと思います。つまり、

五識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識）

――感覚器官である五官にともなう識。

第六識（意識）

――外界の情報を総合し、記憶とも比べあわせながら判断する思慮。

第七識（末那識）

――「末那」とは〝思い量る〟という意。

意識の奥で絶えず活動しつづけ、強く深く自我に執着する心の作用。

また〝真理〟とか〝美〟の探究のような、人間の高度な精神活動の範ちゅう。

第八識（阿頼耶識）

――〝一切法〟を含蔵するので「蔵識」ともいう。

前七識の根底・基盤となる深層の心。

「染浄の二法」を含む。

第九識（阿摩羅識）

――「根本浄識」ともいう。

生命のもっとも奥底にあって、一切の汚れに染まることのない常住不変の究極的実在。

と一応、申しあげておきます。

――そうしますと、「第六識」までは私どももよくわかりますが（笑）、「第七識」のあたりは、脳のどの部分の働きになるんですか。

池田　いや、大脳皮質の働きについては、種々の学説があるようです。

一応、仏法で説く「第七識」の働きは、たとえば、「新しい皮質」の中でも、主に前頭葉の働きとして顕れるとも考えられます。

また、いわゆる右脳と左脳でいえば、無意識の深層から顕在化してくるので、右脳を場としても働くと考えられないこともないわけです。

――屋嘉比さん、最近では、脳は各部分が相互作用しながら全体として働くととらえる〝ホログラフィ理論〟というものが、注目されているようですが。

屋嘉比　ええ、スタンフォード大学の神経科学者、カール・プリブラム（アメリカ）の提唱した理論ですね。

これは、脳の一個の細胞にも全体の働きが備わり、〝ミクロの脳とマクロの宇宙は同調する〟ととらえてもいます。

ですから、〝星が爆発すれば、心は震える〟と詩的にたとえられてもいるんですよ。（笑）

池田　このへんはじつにおもしろいところですね。

今後も脳科学の発展につれて、ますます多くの理論が提出されることを期待したいですね。

――そうすると、「第八識」というのは……。もちろん、こううかがうのは、あまりにも図式的すぎるかもしれませんが……。

池田　おっしゃるとおりです。ですから、大脳生理学の成果と仏法の洞察は、それぞれの

次元は異なってはいても、ともに「心」、つきつめれば「生命」というものが、表層から深層へ、さらに重層的かつ立体的な構造を成すことをとらえているといえる気がするんです。

ただそれは、部分と部分とが一対一で、直接的に対応するということではないわけです。その点をご了解願いたいんです。

それであってなお、両者が相互に連関することは、先ほど申しあげたとおりです。

この点からすれば、「第八識」は生命全体を支えているといってもよいでしょう。

屋嘉比　わかります。ともかく人間も、その大脳に、いわゆる本能的衝動が主体となる〝ワニ〟と〝ウマ〟がおり、〝ヒト〟との力関係の微妙なバランスによって、支えられている。このバランスはたいへんに崩れやすく、ここに、こんにちの人類の解決すべき最大の問題があると指摘する学者もいるくらいです。

――しかし屋嘉比さん、いかに脳の構造がわかっても、肝心要（かなめ）の自分自身の「心」の苦悩や葛藤（かっとう）をどうするかという問題とは、別なんではないでしょうか。（笑）

屋嘉比　おっしゃるとおりです。それが、じつは一番問題なんです。（笑）

池田　ですから私は、屋嘉比さんのおっしゃる〝ワニ〟〝ウマ〟をコントロールしていくというんでしょうか（笑）、四聖（しせい）（声聞・縁覚・菩薩・仏）へ、とくに菩薩界へ、仏界へといかに上昇するか。さらにその菩薩界、仏界の境涯によって、いかに本能的衝動や情動を生

かし、昇華しゆくかという哲理と実践とを完璧（かんぺき）に明かしたところにも、仏法の卓越性の一端があると思っているんです。

屋嘉比　その理論と実践の一つに「九識論」があるということですか。

池田　そうとらえていただいてもよいと思います。

先ほど屋嘉比さんも、〝人間の脳は宇宙と同調する〟とおっしゃっておられた。いわば「九識論」の要は、われわれ人間は本来、「宇宙即我」の巨大な領域（第九識）をみずからの心身のなかに有している。にもかかわらず、いまだ狭小というか、低い境涯というか、そうした自我意識（第七識）によって、自己を小さく限定して生きてしまうという点を鋭く指摘したところに、その一つの特質があるといえるのではないでしょうか。

「宇宙即我」の次元まで広がる境涯

池田　少々、寒くて本調子でないもので（笑）、うまく表現できなくて申しわけないのですが……。

「第七識」の領域は、深い理性の座であるとともに、常に煩悩に汚されている。

そのために自己を狭く限定し、エゴイスティックになっていると思われるのです。ですか

ら、これを「汚染識」とも呼びます。仏法的にいいますと、「我癡」「我見」「我慢」「我愛」の四煩悩が渦まいているということになるわけです。

屋嘉比　鋭い洞察ですね。大脳生理学の知見でも、理性の座ともいえる前頭葉には、同時に〝殺しの血潮〟も脈打っているととらえています。このことと、見事に一致しますね。

――するとわれわれの社会の危機とは、まさにこの理性と〝殺しの衝動〟がともに渦まく前頭葉の産物ともいえますか。（笑）

池田　まったくそのとおりです。ある経文では、

「我等衆生の一日一夜に作す所の罪業・八億四千の念慮を起す」

とあります。

つまり、人間はより多くの知識を得ても、それが故に傲慢であれば、自分自身はじつは何も見えなくなる。

仏法は、この煩悩に汚され、本来の自己を狭く限定する自我意識（第七識）が、一体どこから生ずるかを追究しているわけです。そこにさらに奥の、第八・「阿頼耶識」を見いだしたともいえると思います。

この「アラヤ」とは、〝住居〟という意味です。

つまり、五識、六識、七識での体験がことごとく潜在エネルギーとなり、種子（しゅう

じ）として蓄えられるとでもいうんでしょうか。また、この「第八識」が、第七の自我意識や六識、五識を生じるとも思われるんです。

――なるほど。

池田　また、少々むずかしくなってすみません。（笑）

ですから、「第七識」（自我）、そして五識、六識と、この「第八識」は宿命的な循環を繰りかえしていくというんでしょうか。

この、誰もがほとんど意識していない、しかし、自身を縛りつけている〝自己限定の枠〟を突き破って、本来の「宇宙即我」という次元にまで広がりゆく力強い大境涯、とでもいうんでしょうか。これを「九識心王真如の都」と、仏法ではいうのです。

「心王」とは、心の作用の根本。

「真如」とは、虚妄を離れ、不変、不改ということです。

そして「都」とは、「心王」の住処。つまり、広大にして無辺なる境界世界です。

屋嘉比　驚きです。じつに、人間の生き方を根源まで掘り下げた仏法の理論といえますね。

池田　この「九識」を「本覚」とも「仏性」ともいいます。

このへんが仏法の難解中の難解なところで、釈尊も、衆生が誤解を生じないように、ある場合は「六識」まで、またある場合は「八識」までという法門の説き方をしております。

しかし、最高峰の「法華経」に至って「九識」が完結しております。

屋嘉比　たしかにそのとおりでしょうね。

それにしても、論理的かつ否定しようのない明快さを仏法はもっておりますね。

――するとその「九識」とは具体的には……。

池田　結論から申しあげれば、御文には、

「只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり、是を九識心王真如の都とは申すなり」（「日女御前御返事」一二四四）

と明快に説かれております。

末法における「法華経」とは、もうおわかりのように「南無妙法蓮華経」即「御本尊」であられる。この御本尊に南無しゆくことにより、私どもの生命それ自体が即「九識心王真如の都」とあらわれ、人間最高の英知を輝かせていくことができるというのです。

この「第九識」の英知に基づいてこそ、第七の自我意識を自在にコントロールし、自我の〝囚われ〟を排することもできる。そして理性の働きも十全に発揮される、ということでしょうか。人生と世界をありのままに見ていくことができる境涯とでもいいますか。

この法則を知ったが故に、またさらに深く、より確かに自分自身のものにしたいがために、私どもは信仰しているわけです。ですから、そのための「信」と「行」と「学」がどれほど

大切か、ということもおわかりいただけると思います。

屋嘉比　まことに深い哲理と裏づけがあることがわかります。

池田　現代的にいうならば（笑）、生命は、常に外境と因縁和合しながら、「六根」*をとおし、それぞれの情報を受けている。そのなかには、ストレスの苦悩を生むものも少なくない。しかし妙法によって、「九識」の太陽が胸中に輝きわたれば、それらの苦はすべて霜露のごとく消え去っていく、ともいえるかもしれませんね。

要するに、人はいくら社会的な地位や名誉があっても満足しない。いくら財産があっても、それだけでは本当の心の充実はない。

このわが胸中の「宮殿」というか、広々とした境界世界を開ききっていってこそ、真実の人生の価値も、幸福感もあるのではないでしょうか。

この自己変革即社会の変革をめざしゆく運動を、私どもは「人間革命」といっております。

――池田先生の小説『人間革命』は有名ですが、最近、学術書などでも「人間革命」という言葉をたびたび見かけますね。

池田　私はあまり意識したことはありませんが、「人間革命」というのは、いまから三十数年前、私の恩師である戸田先生が使われた言葉です。

当時は聞きなれないせいもあってか、「人間改造」と間違える人もいるくらいで（笑）、な

かなか理解されなかった時代でした。

屋嘉比　「人間革命」なら、私もついこの間、ハイデルベルク大学の神経・精神医学の権威であるH・シッペルゲス教授（西ドイツ）が書いた医学史の本でも、目にしました。

池田　そうですか。言葉の多少のニュアンスの違いはあるんでしょうが。しかし、私はうれしく思いますね。（笑）

――有名なのは東大の伊東俊太郎教授です。教授は、文明論的な次元から「人間革命」ということを主張されていますね。

屋嘉比　私も、お名前はうかがっております。教授はどんな……。

――切り文で失礼ですが（笑）、メモをもってきましたので……。

氏は、「今日要求されているこの変革期の性格についていろいろ論じられていますが、それは結局『科学革命』に対する『人間革命』という言葉でしめくくりうるかと思います。それは、人間中心というのではなく、生きとし生ける人間の生、つまり、われわれの『生ける生活世界』を根底に据えた新しい思考の世界をつくってゆくということです」と語っておりますね。

屋嘉比　そういえば、毎日新聞社の昨年（一九八五年）の読書調査で、〝この一年間に読んで、よいと思った本〟のトップに、小説『人間革命』があげられておりましたね。

――本当にまじめに人生を考える人は、やはりその一点を志向していくのではないでしょうか。

胎児の最大のストレスは「家庭環境」

――もう少々、ストレスについてうかがいたいのですが、人間はすでに胎児のときからストレスは始まっていると聞きましたが。厳しいものですね。(笑)

屋嘉比　そうです。

池田　では、屋嘉比さん、胎児にとって最大のストレスとは……。

屋嘉比　やはり「家庭環境」のようです。これは『朝日新聞』でも紹介されておりましたが、カナダの心理学者の調査では、母親のストレスが胎児に及ぼす影響を点数で表すと、貧血や高血圧を「一」とすると、なんと夫婦げんかは「六」となるそうです。

――不思議なもんですね。

屋嘉比　胎児が母親の愛情を感じとれれば、自分の周りに一種の防護壁ができて、外部のストレスから受ける衝撃は和らげられるともいわれているんです。これは出生してからも変わりませんね。

――家庭が大事だという点について、仏法にも何か説かれたものはございますか。

池田　私がいま思いだすのには、法華経に「田宅（でんたく）」とあります。

これについて大聖人は、深き生命観の上から、

「田は米なり、米は命をつぐ、宅は身をやどす是は家なり、身命の二を安穏にするより外に財宝は無きなり」（「御講聞書」八一九）

とおっしゃっておられますね。

――「宅」には、「やすらか」「やすんずる」という字義もありますね。

屋嘉比　「家貧しくして孝子（こうし）あらわる」ともいわれますが、ある研究者は、一般的には、「平穏」「信頼」「安定」という雰囲気の家庭で育った子どもは、その後の人生のストレスに対して、比較的強くなれるといっておりますね。

池田　これは、子どもも大人の世界も同じです。（笑）

ドイツの著名な教育学者のボルノーでしたか、「広い世界から自分の仕事を果たした後に、いつもまた自分の家の平和に戻っていって、そこで新たな力を集めることのできる者だけが、おそらくは広い世界のなかに住むことができるのである」といっておったのを記憶しておりますが。

屋嘉比　実感としてよくわかりますね。（笑）

池田　そこで、私も立場上、それこそ多くの青少年を知っております。なかには、ご両親を若くして亡くした人もいる。片親の人もいる。またさまざまな家庭状況の人もいる。

そうであっても、立派に成長した人を数多く私は知っております。

要するに、いかなる困難な環境であっても、それを乗り越え、その環境をも変える自分自身をつくりゆくことができるのが、信仰の真髄と思っております。

――まったくそのとおりですね。

池田　それから、法華経「法師功徳品」に、前にも申しあげた、

「安楽にして福子（ふくし）を産まん」

という経文があります。

晩婚で、高齢出産であっても、立派な子を産み、立派な家庭を築いている女性は数多くいる。外見的な尺度で幸福は計れないものです。幸福は、統計ではない。（笑）

ゆえに、いっさいを転換しゆく、信仰の力があるということほど強いことはないと、私どもはいつも主張しておるわけです。

屋嘉比　若くして幸せそうな結婚をしても、そのまま幸福がつづくとは限らない場合もありますからね。

池田　また、子どものないご夫婦もいる。しかし、いつも円満で、生きいきと活躍されて

いる方々も多い。

――たしかにそうですね。

池田　大聖人の門下にも、池上という兄弟の弟夫婦は、子どもがいなかったといわれています。その夫人に対し、あるとき大聖人はお手紙の中で、

「御子どもはなし・よにせけんふつふつと・をはすると申され候こそなげかしく候へどもさりともとをぼしめし候へ」（「兵衛志殿女房御返事」一一〇八）

と激励されております。

これは、子どもがいないので、さびしく過ごしていらっしゃると聞きましたが、この信心を貫きとおせば、絶対に幸せになるのであるから、少しも嘆く必要はない。自分らしく、この一生を生き抜きなさい、といわれたと私は拝します。

屋嘉比　本当に、細かなところへ心くばりをされておられる。これが大事なんですね。

人生を楽しむために生まれてきた

――適度なストレスがないと子どもの知能も発達しない――とも聞いたことがありますが、屋嘉比さん、どうなんですか。

屋嘉比　そういわれておりますね。動物社会でも、一人ぼっちで育てたものよりも、仲間も多く、変化に富む環境で育てたほうが、知能の発達もいいことがわかっています。ですから、一面ではストレスがあると、感受性や興奮性など生体の適応力が発達強化し、ダイナミックに恒常性を維持する能力が増大するのでしょう。まさに、それが「生」でもあるわけです。

――親の過保護は、子どもにとってプラスにはならないということですね。

池田　ところである統計調査には、人間の寿命も、適度な刺激が絶えずあるほうが長生きする、とはっきりでているようですが。

それとともに、何らかの知識を常に吸収し、社会的活動に積極的にかかわっていく人のほうが、記憶力も落ちないとよく聞きますが。

屋嘉比　これも医学的見地から立証されつつあります。とくに女性も、活動的な人のほうが記憶力が落ちないようです。

――あるアンケート調査では、〝マメに掃除する主婦は健康〟といっていましたよ。（笑）

池田　屋嘉比さん、他にもストレスのいい解消法はありますか。（笑）

屋嘉比　これは人それぞれでしょうね。（笑）

ただ、フロイトは、「夢は願望の達成である」といってますね。

大脳生理学の権威であった故時実利彦博士は、人が睡眠中、夢を見ることは、「『新しい皮質』の眠りのすきに乗じて、『古い皮質』にひしめくもろもろの欲情が代償的に満足される」と夢の効用をいっています。

――しかし、同じ夢を見るなら、本当にいい夢を見たいもんですね。（大笑）

屋嘉比　いずれにせよ、お酒や趣味などによる解消は一時的なものでしかないことは、私どもがよく経験するところです。根本的な解決はその人の生き方の問題であり、どんなに外界の変化やショックがあっても、希望や生きがいを見いだしていけるような人生の姿勢が大切になるわけです。

――だからでしょうか。最近、サラリーマンも仕事以外の生きがいをもつべきだという、〝二つの生き方論〟がさかんにいわれますが。

池田　よく聞きますね。ある評論家もいっていたが、これからの社会は、仕事だけでなく、自分自身を向上させる、もう一つの生き方が必要といわれる。

しかしまた、その生き方の内容が何であるか、ということが問題になるでしょう。その意味で、最高に価値ある生き方を知りえた私どもは幸せです。

――まったくそのとおりですね。

池田　有名な法華経「如来寿量品」には、「衆生所遊楽」とあります。

「所」とは「娑婆世界」であり、この現実社会のことです。つまり私どもは、この地球上に「遊楽」するためにきたというんでしょうか。生きていくことそれ自体が楽しい境涯とでもいうんでしょうか。生きて、生きて、生きぬいて、何らかの自分なりの価値をつくっていくという意義にもとれましょうか。

よく戸田先生が、「とにもかくにも、瞬間、瞬間の生きていく人生が楽しいことが、この『衆生所遊楽』の意義に通ずるかもしれない」といわれていた言葉が、私は忘れられません。

屋嘉比　まったく人生の真髄をひと言で述べられておりますね。

池田　何回も申しあげますが、そのために、私どもがみずからを苦しめる宿命を打開しながら、永遠にわたる幸福境涯を築きゆく源泉として、大聖人は「大御本尊」を御図顕くださったわけです。

屋嘉比　なるほど。

池田　また「遊楽」の「遊」の字には、いわゆる〝遊ぶ〟の意義の他に、「ほしいまま」「心にかなう」、また「高く飛ぶ」「ひろがり」といった意義もあります。

――字音の「ユウ」には、水の波が進行するように、「前に進む」という意味があると聞いたことがありますが。

池田　そうです。とともに「楽」とは、「楽法（ぎょうぼう）」ともいうがごとく「法」を楽（ねが）う、

すなわち〝願う〟という意義もある。

この〝願う〟の根本義とは、最高最善、無量無辺の崩れざる境涯を感得するために、大御本尊に祈っていくことと私は思います。

ですから「遊楽」とは、何の障(さわ)りもなき自在の生命の力といいましょうか。また、満足しきった広々とした境涯ということになりましょうか。

むずかしいい方になりますが、これを仏法上では「一念三千・自受用身(じじゅゆうしん)」といいます。

まあ、ここにも、御本仏としての別しての次元と、私ども信仰するものの総じての次元からとのとらえ方があるわけなんです。

第十六章　「宇宙即我」と「一念三千」の法理

宇宙の情報が集約している人間の脳

――先生は、「忘れ得ぬ同志」という週一回の連載を機関紙で始められたようですが。

池田　前々からの約束だったんです。多忙のため、二、三年延期してきたもので、やむなくこの（一九八六年）二月から再開しました。（笑）

私には、長年の信仰を通して、いつも変わらず苦楽を分かちあってくださった、それこそ兄弟、親戚以上の多くの友人がおります。その尊き方々の真実の姿を、少しでも後世に残すことが私の使命と思うからです。

屋嘉比　私も毎週楽しみに読ませていただいております。

さまざまな人生の縮図がそこにはある。しかし、いずれの方々も、人々に生きゆく勇気と希望を与えながら、自分自身の悔いない今世を走り抜かれておりますね。

その人生ドラマは神々しくもあり、一医学者としてもたいへん勉強になります。

また医学的にみて、短命で亡くなった方も、不思議と寿命を延ばされている……。

池田　そうなんです。またそうでなければ私どもも信仰しません。（笑）

本当は、なるべく大勢の方々のありのままの姿を書いてさしあげたいのです。

紙面の都合で、代表の方々に登場していただいておりますが、何千、何万という、深き体験に裏づけられた確かな人生の軌跡があることを、私自身が見、また知っていることだけは申しあげておきます。

屋嘉比　事実ほど強いものはありませんね。

またそうでなければ、これだけの人々が納得することはなかったでしょう。

――ところで屋嘉比さん、この春、昇格で他大学へ赴任されるとうかがいましたが。

池田　それは、それは。おめでとう。

屋嘉比　ありがとうございます。

若輩ですし、仕事も忙しくなると思いますが、これからが勉強だと思っております。

池田　若いんだから、身体に気をつけて頑張ってください。

よく青年時代、恩師である戸田先生からも、「大きな仕事は二十代、三十代でやる決心が大切だ」と厳しくいわれたものです。

三十代は四十代の十倍、四十代には五十代の十倍の仕事ができるもんです。また、そうでなければ自分が損をする……。私も先生の年代になり、よくわかります。

屋嘉比　わかりました。ありがとうございます。

池田　そこで屋嘉比さん、二十一世紀の医学の焦点は「脳」と前にいっておられたが、す

でに、脳の活動を目で見る技術が開発されていると聞きましたが。

屋嘉比　ええ、カリフォルニア大学で数年前から行われています。

池田　具体的に、どういう……。

屋嘉比　脳細胞が働くとき糖分がエネルギー源として消費されます。この糖分に放射線を出す物質をつけ、体内に入れます。その人が思考をめぐらすと、活動している脳細胞が、糖分をより多く吸収し、ある装置で見ると、その部位が赤色を帯びて見えるようになります。

――すると、きちんと栄養をとっていないと、頭の働きに影響することが、この実験でも証明されるわけですか。（笑）

屋嘉比　そうなりますね（笑）。しかも、脳の活動内容によって、違う場所に色を帯びてくるわけです。たとえば、音楽を聞くときと、計算したりするときとは違うのです。

池田　よく戸田先生も、「栄養を摂らないと頭が悪くなる」といわれていた。（笑）戦後まもないころで、みな若かったし、お金なんかなかった時代です。屋嘉比さんなんか、ご存じないでしょうね。

――私は北海道の貧乏育ちで、子どものころ、毎日お昼はイモかカボチャでしたよ。（大笑）

池田　しかし先生は、「ふだんの食事は質素でも、貯金して、たまには一流のレストランに行って、社会の勉強をしなさい」ともいわれていた……。

私も、何回もそういう場所で、先生からご馳走になり、一つひとつ身をもって教えていただいたことをいまでも懐かしく思い出すんです。

屋嘉比　いいお話ですね。

――人間の頭脳といえば、コンピューターも大脳生理学の産物ともいえますね。

屋嘉比　ええ、アメリカのウィーナー博士が、人間の脳の記憶に関する研究成果を応用しました。

――しかし、いくらやっても、人間の頭脳をすべて代行するようなコンピューターはつくれませんね。本当にわれわれの頭脳というのはたいしたもんですね。（笑）

屋嘉比　コンピューターの機能は情報処理ですが、最近では、人間の頭の中にある〝情報〟は宇宙全体の情報と密接不可分という説が唱えられています。

池田　いま最先端の理論ですね。おおざっぱにいえば、はるか彼方の昔、ビッグバン（現代宇宙論でいう宇宙の始まりの大爆発）によってつくりだされた宇宙のあらゆる情報が基となって、無数の星々が生まれ、地球のような、人間が存在する天体も生まれた――。

現代科学においては、私どものこの身体も、頭脳も、精神も、すべて源はそこにあるといえるようですね。

屋嘉比　おっしゃるとおりです。人間の頭脳に含まれる情報というか、すなわち精神は、

人間によってつくりだされたように見えるけれども、つきつめればじつはそうではない。

池田　ですから、私どものこの頭脳も、もともとは宇宙の情報を収集したものと考えていかねばならない。（笑）

そのわれわれの頭脳が、いままた、宇宙を認識しているということにもなりますね。

ですから、脳科学では、「頭脳は宇宙の自己認識である」といっておるわけですね。

飛躍するかもしれませんが、これを時間論としてとらえると、「久遠即末法」という意味も「瞬間即永遠」という論理も、よりうなずけてまいりますね。

――すると、「宇宙即我」という仏法の「一念三千」の法理にも接近しつつある、ということにもなりますか。

池田　そのとおりです。

また、九識論でいう「第九識」も、この「頭脳は宇宙の自己認識である」という知見を手がかりにしていくと、いちだんと理解しやすいということはいってもよいと思います。

しかし、「一念三千」というのは、より幅広く、深い次元からなる論議であることもご了承願いたいのです。

――すると……。

池田　つまり、

「一心法界の旨とは十界三千の依正色心・非情草木・虚空刹土いづれも除かず・ちりも残らず一念の心に収めて此の一念の心・法界に徧満するを指して万法とは云うなり」（「一生成仏抄」三八三）

とあるとおりです。ですから、「法界」の「万法」ことごとくを収めながら、つまり、宇宙のあらゆる情報が一個の人間の頭脳を形成し、影響をあたえている。

それと同時に今度は、どこまでも私どものこの「一念」が大宇宙に広がっている……。

この生命の一念の中に、「総在一念」として、宇宙全体に連動している法則性というか、妙なるリズムがある。その〝二にして一体〟の連動性が、相互にあることを普遍的真理として究め、説き明かしているのが仏法の仏法たる偉大さであり、深遠さであります。

屋嘉比　なるほど……。

池田　さらに、甚深の口伝書である「御義口伝」には、

「大地は色法なり虚空は心法なり色心不二と心得可きなり」（七四二）

とあります。この文を拝して、私は驚嘆したことをいまでも覚えております。

宇宙といっても、生命といっても、すべて「色心不二」の当体が究極の真理であるというのです。その当体が、また「色心の二法」として顕在化し、〝物質宇宙〟〝心的宇宙〟を形成していく。またしているという意義だと思います。

しかも、宇宙万物において「色法と心法」つまり〝身体と心〟といってもよし。〝物質と精神〟といってもよし。それらはみな〝一体不二〟が正しい姿であるという展開です。

私は感激しましたね。

――壮大な未知の世界に遭遇したような感激ですね。

屋嘉比　大なり小なり、人間はそういった場面にぶつかることがありますね。

池田　ですから、「色法」「心法」どちらかの見方は、部分観といわざるをえないわけです。「事の一念三千」たる日蓮大聖人の大仏法によって、はじめて両者を統合、かつ止揚しゆく「宇宙即我」「我即宇宙」の生命観、宇宙観が確立しているのです。

屋嘉比　わかりました。ともかく、生命が宇宙と一体不可分であるとの仏法の認識が、ますます証明されていることは間違いないと私も思います。

――まったく時代は進歩しておりますね。時の流れほど怖いものはない。いまのお話ではないが、昔は〝非常識〟のように思われたことでも、時代の進歩とともに〝常識〟になることはよくある。（笑）

屋嘉比　アインシュタインの相対性理論も、ニュートンの時代は〝非常識〟だった。（笑）この世で万物流転の法則を免れるものはない（笑）。科学の世界も同じです。

池田　そのとおりですね。理性の発達によって矛盾を生ずるような宗教は別として、いう

ならば信仰は、生命全体の姿勢の問題である。

いわゆる理性一辺倒の〝科学万能主義〟がどこまで正しいか、いつまで通用するかは、はなはだ疑問ではないでしょうか。

――一時代前、科学の進歩が人類にこれだけ貢献することを、同時に、人間自身をこれほどまでに脅かす存在になることを想像した人は少ない……。

池田　私たちも多く誤解されてきたが、百年先、二百年先は、誰もわからない。

戸田前会長は、「二百年先を目指せよ」「二百年先になれば、いま、われわれが批判されている仏法の展開も、みな証明され、みな納得することは絶対間違いない」とよくいわれていた。

ですから、人はこの新しき「哲理」「法理」というものを、いっさいの偏見を捨てて、真摯に見つめていく時代がかならずくると、私は大確信をもっておりますから、一喜一憂はいっさいいたしません。

――不動ですね。

「信仰」と「理性」の関係

屋嘉比　仏法は、「信仰」と「理性」の関係について何か説かれたものはございますか。

インテリはどうしても「信仰」というと抵抗があるのです。（笑）

池田　いろいろあると思いますが、法華経に「信解品」という経文があります。この「信解」ということについて、「御義口伝」には、

「信の外に解無く解の外に信無し」（七二五）

という関係にあると説かれておりますね。また、

「解とは智慧の異名なり」（同）

とありますから、この「解」のなかには、いわゆる理性の働きも含まれてくると考えてもよいと思います。

屋嘉比　すると、一般的に「信」は「解」をもたらす、そのまた「解」は「信」を深める、と考えてもよろしいのでしょうか。

――薬も、医師から、これはよく効くといわれ、信じて飲むと、本当によく効く。（大笑）

屋嘉比　いや、それは本当にあるんですよ（笑）。さらに、その薬についていろいろ説明すれば、患者さんはいっそう安心してくださるわけです。

――何ごとにおいてもいえますね。電車に乗るにも、ご飯を食べるのも、また飛行機に乗るにも、最近はいろいろありますが。（笑）

お医者さんに注射を打ってもらうのも、手術を受けるのも……。みんな同じ方程式ですね。

池田　一つの次元ではそういっても間違いではないと思います。要するに、人は何かを信じて生きている。また、信じなければ生きられない。しかし、それが不完全であったり、偏頗であったときに不幸を感じるのではないでしょうか。

屋嘉比　道理です。

池田　仏法は、万人が信ずるに足る、生命と人生と社会への「法則」を明かし、「仏界」という人間の最高最善の英知を顕現しゆく具体的方途を提示しております。結論から申しあげれば、御本尊への「信」それ自体がその極理となるわけです。それを知ったがゆえに、またさらに深めたいがゆえに、私どもが日夜「信」じ「行」じているのはご存じのとおりです。しかし、「信心の厚薄によるべきなり」（「日女御前御返事」一二四四）が大前提となるのはいうまでもありません。

――当然です。なんでもそうです。

池田　最近の医学でも、人間の脳が最高に進化した結果として、「信ずる」とか「信念」といった機能が強まってきたという説があるようですが。

屋嘉比　ええ、イギリス医学界の権威、ヤング博士（神経生物学、解剖学）の研究なんかもそうですね。

――博士は、医学界のトインビーといわれる方です。博士にも、何かそうした研究があり

ますか。

池田　博士の理論を簡単に申しあげれば、脳には「感情」つまり感じること、また「ひらめき」の働き、というものがある。

それはさらに、「理解」や「納得」、また、価値や意味の「分析」という働きに高められる。

――このへんが人間たる所以ですね。

池田　しかし、こうした働きは、さらに「決断」へ、「創造」へ、「感動」へと、より高度な段階にまで高められる。そして最終的には、自己の「信念」を形成していくのではないかというのが、どうも博士の結論のようです。

つまり博士は、「〝うたがわしさ〟を超えて〝確実さ〟をみつけ出してゆくという人間の脳の働き」に注目しているわけでしょう。

――すると、信念をもち行動することが、つきつめれば、正しき宗教をもつことがいかに大切かが、脳の働きからも結論されますか。

池田　そう思います。博士は、「脳の知識がすぐれていれば、それだけすぐれた信仰を私たちは与えられる」といっておりますからね。

――余談ですが、最近の心理学では、赤ちゃんも、生後一年間に母親との信頼関係ができないと、その後の発育が妨げられると聞きましたが。

屋嘉比　そのとおりです。言葉が覚えられなかったり、反応がにぶくなったりします。人間は、生まれたときから「信」がないと生きてゆけないことがわかっています。（笑）

池田　最近日本で翻訳された本でも、物理化学者で〝知識の源泉に信念がある〟とハッキリ主張して、注目されている人がいたようですが。

――マイケル・ポラニーです。彼は哲学者でもあります。

池田　私はいつも思うのです。西洋のこうしたすぐれた科学者、哲学者たちは、真実の仏法は知らない。かりに知り得たならば、彼らはいったい何というであろうかと――。

――まったくそう思います。ヨーロッパはキリスト教の独壇場でしたからね。

池田　ある学者が生物の進化において、「動物」と「人間」の境目（さかいめ）は、道具をもったことと、宗教心をもったことだといっていたが、私は、科学の進歩とともに、いかに正しき宗教観をもつかが、人間の人間たる証（あかし）になると考えている一人です。

仏教があたえたキリスト教への影響

――本当に仏法は知れば知るほど、深いものだと思います。

というのは、先日、ヨーロッパへ行ったときに、大英博物館で、たいへんに興味深い資料

のコピーを手に入れてきました。

それは、「カトリック」という言葉の成立についてなんです。

池田　以前、私が調べてもらったのでは、カトリックという言葉の語源は、ギリシャ語の「普遍的」とか「万人の」「全体的」という意味の「καθολος」がラテン語に入ったことに由来する、となっていたと思いますが。

――ええ、たしかに医学者のヒポクラテスや、哲学者のアリストテレス、ゼノンなどは、著書のなかで、先生がいまいわれた意味で使っているようです。

ところが、私が調べたギリシャ語の語源辞典では、どうやら、このギリシャ語の「καθολου」の「καθ」は「～に従って」という意味の前置詞です。「ολος」のほうは「全部」「全体」「総体」を意味するサンスクリット語――インドの仏典を記述した言葉――の「Sarva-」から由来しているとなっていました。

池田　たしかに、アリストテレスは仏教の教えを初めて東ヨーロッパに伝えた、という学者の研究もあるらしいからね。

――え、アリストテレスですか。それは初耳です。（笑）

池田　百年くらい前、アメリカの科学者が書いた『宗教と科学の闘争史』という本にでているようだから、いちど読んでみてください（笑）。この人は、ニューヨーク大学の化学と

生理学の教授をやり、医学部長もやったらしいよ。

ともかくこのへんの問題は、今後の解明を待ちたいですね。

私の友人であるフランス屈指（くっし）の美術史家、ルネ・ユイグ氏も、「地中海文明には東洋の仏教の影響がある」といっていたことがあるそうです。

屋嘉比　すると、紀元前の当時、すでに、アジアとヨーロッパは交流がかなりあったんですかね。そういう話は本当に胸躍（おど）りますね。（大笑）

池田　いや、キリスト教は仏教から影響を受けたとする、ヨーロッパの学者は意外と多いことも事実なんです。

――ええ、今回、私もいろいろ調べたんですが、イギリスのケンブリッジ大学のマックス・ミュラー博士、またH・C・ウォーレン博士の『翻訳の仏教』

ドイツのS・ハルデ博士の『仏教概論』

他にも、

R・ザイデルの『イエスの福音と仏陀伝説および仏陀の教義に対する関係』

G・エイシンガの『福音書の物語に対するインドの影響』

A・エドマンズの『仏教とキリスト教の福音』

G・グリムの『仏陀とキリスト』

などがあります。

屋嘉比　日本で翻訳されたものはありますか。

――私の調べた限りでは、残念ながらあまりないようです。

池田　ドイツのH・L・ヘルドという研究者も、「イエスの伝記が、仏伝の影響を受けたことはまず疑いない」といっておりますね。たしか、この人は神学者だったんではないでしょうか。

大げさにいえば（笑）、このへんは人類の歴史観を一変し、新しい東西両文明の融合をもたらすひとつの手がかりとなるようにも、私には思えるんです。

仏典に説かれた「死」の姿

――先日（一九八六年二月十一日）も、静岡県熱川温泉のホテルで痛ましい火災事故がありました。新聞の社会面では、連日そうした記事がつづいています。

屋嘉比　交通事故、火災、病死、殺人、自殺、またさまざまな不慮の死等々……。本当にきりがないですね。

――以前ある学者が、夕方以降のアニメやドラマなどのテレビ番組で、一週間にでてくる

「死者」を数えたら、五百五十七人もでたといってましたが。（笑）

現代人は「死」を直視するより、客観視することにあまりにも慣れてしまったともいえるんでしょうね。その意味では不幸な時代です……。

屋嘉比　「死」の姿について説いた仏典はございますか。

池田　あります。「時節死」「不時節死」とあります。

屋嘉比　それは……。

池田　「時節死」とは、「寿命尽き乃至老死す」。「不時節死」とは、「あるいは自殺、あるいは他殺、あるいは病死をもって、あるいは関係なくして中間に死す」とありますね。

――すると、やはり「時節死」が望ましいことになりますか。

池田　一般的には、そう思います。また、寿命をまっとうした場合には、多少の病気があっても、やはり「時節死」といえる気が私はしますね。

屋嘉比　そうでしょうね。

池田　ただ、信仰しても、さまざまな姿があることも事実でしょう。

しかし、「法華経」の流通分である「涅槃経」には、

「横に死殃に羅り（中略）是くの如き等の現世の軽報を受けて地獄に堕ちず」

とありますね。

「死殃」とは死の禍のことです。つまり、それらは「転重軽受」という深き意義があるというのです。ですから、妙法を持ち、貫いていった場合、「一念」の方向が定まっているがゆえに、安心、安全なんです。

総本山第二十六世日寛上人は、たとえ重病であっても、また不善相であっても、

「法華本門の行者は不善相なれども成仏疑ひ無き事」（「臨終用心抄」）

と明快におっしゃっておられます。

さらに、「追善」という仏法上の深き方軌の意義もここにあるわけです。

――幸福になるためのものが、反対に一次元の姿をもって心が縛られるのでは、何の意味もない。これは一生を通してみなければわからないと思いますね。

池田　当然です。日寛上人は、亡くなる半年前、

「予平日蕎麦を好む正に臨終の期に及びて蕎麦を食し一声大に笑つて題目を唱えて死すべきなり」（『富士宗学要集』）

といわれ、そのとおりのお姿で亡くなられたのは有名な史実です。

屋嘉比　不思議なお姿ですね。

池田　それとは次元が違いますが、あるとき戸田先生は、「人間は、何かの病気で死なないと都合が悪いんです。私は肺病であったが治った。だから肺病ではもう死ねない。心臓も

悪かったけれども、丈夫になって心臓病でももう死なないだろう。そうなると、何の病気で死ぬか考えねばならない。私はお酒をよく飲むから。寿屋のウイスキーででも死のうかと思っている」（爆笑）と呵々大笑されながら語っておられたことがあった。私はいまでも鮮明に思い出すんです。

屋嘉比　すごい先生ですね。

池田　ですからたとえば、大聖人の門下においても、さまざまな「生」と「死」の姿があった。そのなかで、夫に先立たれ、幼い娘一人をかかえた女性がいた。

大聖人は、その方へのお手紙のなかで、

「故入道殿も仏にならせ給うべし、又一人をはする・ひめ御前も・いのちもながく・さひわひもありて・さる人の・むすめなりと・きこえさせ給うべし」（「窪尼御前御返事」一四八一）

とおっしゃっております。

この意味は、あなたはつねに変わらず正法への信仰を、健気に貫きとおされている。ゆえに、御主人の成仏は間違いない。また可愛いお嬢さんも、きっとお父様の分まで幸せで長生きをされることでしょう。「さすがはあの方のお子さんだ」とみんなからいわれるような、立派な人に育つことは間違いありませんよ、とおっしゃっておられると私は思います。

屋嘉比　人というのは、いざというときにわかりますからね。

池田　私はこうした姿を数多く知っております。

いかに幸福そうに見えても、人生の「諸行無常」は誰人も避けられない……。反対に、いかに不幸に見えても、そこから築きあげた自分自身の幸福観は絶対に壊れない。一歩深く見れば、そこに幸福の「実像」があるのではないでしょうか。

屋嘉比　そのとおりです。

子どもは何歳から「死」を意識するか

――屋嘉比さんは肉親の死に立ちあったことはありますか。

屋嘉比　私の母は十一年前、四十五歳で亡くなりました。

池田　ああ、そうでしたか。ご病気ですか。

屋嘉比　胃ガンです。当時、私は東大の五年生でした。知らせを受け、急遽（きゅうきょ）、大阪の病院に駆けつけた夜は一睡もできませんでした。私はそれが契機で、専門に胃腸科を選んだんです。

池田　いいお母さんだったんでしょうね。

屋嘉比　先生のご両親は……。

池田　父は六十八歳で亡くなりました。心臓が弱ったためのようです。母は、十年前の九月、八十歳で老衰で亡くなりました。忙しくて親孝行らしいこともできなかったけれど、母は会えば、病弱だった私のことを気づかって「体だけは丈夫にね」とだけいってました……。母親はいつまでたっても母親でしたね。

――ところで最近は、小児医学、周産期医学が、目覚ましい発展を遂げていると聞いています。

そこでうかがいたいのですが、一体、子どもというのは何歳ぐらいから、死を意識するのか……。

池田　私が聞いたのは、五歳から九歳であるという説がありましたが、屋嘉比さん、どうでしょうか。

屋嘉比　大体、そのくらいの説が強いようです。

アメリカのA・バーゼルという社会学者の調査では、五歳くらいですと、親しい人が亡くなっても、その意味がよくわからず、「また帰ってくる」と思うらしいんです。

池田　すると六歳以上では……。

屋嘉比　六歳では悲しみの反応はある。しかし病気とか老齢とか、具体的原因と結びつけ

ることはまだできないらしいんです。

七歳になると、自分を含め、すべての人がいつかは死ぬという自覚があらわれ、ハッキリ自覚するのは八歳から九歳となっています。

池田　私の次男坊は一昨年急死しました。四歳と二歳の二人の子どもがいましたが、たしかにその子どもたちは、父親が寝ているととったように、私はうけました。

五歳以下の幼児では、他人の死を眠りととらえることはあるようですね。

屋嘉比　ええ、アメリカのある報告では、三歳の幼女の母親が心臓の発作を起こし死んでしまう。ところが、それを見ていた幼女は、ベッドに横たわった母親のとなりに横になったというんです。その子は、保母さんか誰かに、〝お母さんが眠ったので、自分もその横で眠ったの〟と幸せそうに話したそうです。

池田　その世代の幼児にとっては、「死」とはまだ白紙の状態なんでしょうね。

ある人がいっていた。「普通の子どもは死を病気や老衰が原因だと思う。しかし、社会に暴力、殺人、自殺、事故などが増えてくれば、幼い子どもの心には、それが『死』というものだと知らず知らず潜在化（せんざいか）してしまう」と――。

――恐ろしいことです。純粋な子どもの心に、深い傷を残してしまうのでしょうね。大人は、もっともっと考えねばならないと思いますね。

屋嘉比　ちょっとうかがいたいんですが、今年（一九八六年）は、ハレー彗星が再び接近しますが、彗星を仏法上どうみますか。（笑）

――東洋では陰陽道。西洋では〝剣が飛ぶ姿〟〝戦乱の兆〟とも見ていたようですが。

池田　現代では、科学的また文明史的にとらえておりますが、前時代にあっては〝凶〟、〝吉瑞〟というよりは、当然〝凶瑞〟ととらえられてきたわけです。仏法のなかにも、そうした例証はあります。また、「大法興廃の大瑞」ともとらえられているわけです。

屋嘉比　地球の公転、自転。また月との関係をみても、宇宙の運行と人間とが、何らかの深い因果関係にあることは、当然でしょうね。

とくに医学では、「脳」の分野でこの点が着目されているわけです。

池田　日蓮大聖人御生誕の年（一二二二年）の秋も、ハレー彗星が接近したようです。

今回は、それから十回目の回帰になると思います。

ま、これは『「仏法と宇宙」を語る』のほうだったんですが。（大笑）

仏法は「三世の生命観」が大前提

屋嘉比　ところで最近の医学界でも、高齢化社会を迎え、「人間いかに老い、死ぬか」と



あちらこちらで見うけられたハレー彗星ブーム。

いうことが、大きなテーマになっています。

池田　屋嘉比さん、日常の老化の目安なんかありますか。（笑）

屋嘉比　研究した人がいます（笑）。たとえば、

一、最近のことを忘れやすい
二、急ぐときイライラしてくる
三、自己中心的に考える
四、昔のことをよくしゃべる
五、愚痴っぽい（笑）

まだ他にもあると思いますが。（大笑）

池田　いや、お年寄りでなくとも、ときどき見かけますね。（笑）

あるフランスの作家が、

人生を川の流れに譬（たと）えるなら――

青年時代は「ほとばしる急流」のごときも

のである

中年は、「滔々とした流れ」になる

そして老年は、すべてを包みこみ、悠々と景色を川面に映しゆく「鏡のような大河」となり、〝大海〟へそそぎ込むようなものだ

と言っていた。

私はたいへんに感銘を受けた言葉です。

――本当にそうした充実した一生を歩みたいものですね。

池田　御文に、

「法華経の功力を思ひやり候へば不老不死・目前にあり」（「経王殿御返事」一一二五）

とあります。これは身体が「不老不死」ということではありません。（笑）

ともかく人生は限りがある。この限りある一生を瞬間、瞬間、いかに楽しみながら、いかに価値あるものにしゆくかが人生の目的といえるのではないでしょうか。

さらに、その瞬間、瞬間のなかに、永遠をもはらみゆく自分自身を覚知しながら、この人生を満喫していくことができるのが、「妙法」なんです。

――ある著名な学者は、「各人が非常に平静な気持で死を迎えられるような社会をつくりあげてゆくことも必要である」と語っていましたね。

屋嘉比　どちらかというといまの社会は、ますます逆行している感がある。人を人と見ない経済優先、利害優先の弊害でしょう。

池田　重大問題です。当然、それは政治、経済次元の問題でもある……。しかし、一歩つきつめてみれば、哲学、宗教の問題ではないでしょうか。

なぜならば、生死を直視しないことは、他ならぬ自分自身を直視しないことになる。それでは、確固たる自分観の確立も、心広々とした生き方もなしえなくなってしまうからです。またそれは、その人自身の人間観、社会観と表裏一体の問題であることを、人は知らねばならないでしょう。

仏法では、

「生死を見て厭離（えんり）するを迷と云い（略）本有（ほんぬ）の生死と知見するを悟と云い」（「御義口伝」七五四）

と、人生の根本問題として説かれておるわけです。

屋嘉比　鋭いです。すると、仏法は「三世の生命観」を大前提としていると考えてよろしいのでしょうか。

池田　そのとおりです。この「三世」という生命観を、見事にとらえ、宇宙と生命の完璧なる法理・法則をうち立てたのが「妙法」と私は思います。

このへんはまたいつかお話したいと思いますが、つまり、人間も、動物も、植物も、地球も、さらに宇宙もが「成（じょう）」「住（じゅう）」「壊（え）」「空（くう）」の法理に則（のっと）り、永久に流転している……。

しかし人は、物質の世界の法則はわかっても、根本の生命の「因果の法」はわからない。

そこに明確なる解答と、人生の生きゆく指標とを提示しているわけです。

西欧の学者が迫った生命の「我」

池田　私が感心したのは、西欧の学者のなかにも部分観であっても、仏法の生命観に迫っていった学者がおるということです。

たとえばイギリスの生物学者、ジュリアン・ハクスリーは「死」について、「あらゆる働きが非物質エネルギーとして精神的実在の貯蔵庫へと戻っていく」といったことを述べておりますね。

――ハクスリーには、仏教の「業（ごう）」についての著述がありますからね。

ドイツの作家、ヘルマン・ヘッセは、「死ぬことは、一人の人間を超えた集合的な無の一部である」ともいっておりますが。

池田　そのとおりです。けれども、スイスのユング博士などは、一歩進んで、「肉体的な

死を超えて、心のなかの何ものかがつづいていく可能性がある」と主張しておったんではないでしょうか。

私は、たいへんに鋭い洞察と思ったことがあるんです。

屋嘉比　ユング博士は、生命の「我（が）」の存在をすでに信じていたといわれておりますね。

池田　ロンドン大学のリス・デービッズ教授は、「われわれは、エネルギー不滅の法則を熟知している。ゆえに仏教の教理をも容易に了解することができる」といっている。まあ、「了解」という言葉の意義が西洋流でおもしろい。（笑）

――信ずるといわないのが学者らしいですね。（笑）

池田　まだまだいろいろあると思いますが、長くなりますので、何かの機会にお話したいと思います。

屋嘉比　じつは私も、たいへんに興味をもったことがあります。それは、東大附属病院の院長であった方が、親友の医師の死について語っていたひと言なんです。

〝自分も彼も、無宗教である。霊魂も、肉体を離れた精神も信じない。しかし、じつをいうと私は、彼個人とはまったく別の彼の「我」が存在すると考えている〟と話していたんです。

――何か経験と思索の上から、直観的なものがあったんでしょうか。

池田　それにしても、かつてトインビー博士が私にいわれていたことを思い出しますね。

それは、「社会の指導者たちは、生死の問題を真正面から解決しようとせず、すべて避けてとおっている。ゆえに、社会と世界の未来の根本的解決法は見いだせない。私はこの道を高等宗教、なかんずく大乗仏教に求めてきた」と――。

この言葉は、終生忘れることができませんね。その課題に真正面から取り組んでいるのが、私たちであると思えば、無量の誇りが湧いてきます。

屋嘉比　わかりました。

池田　三世の永遠の生命の探究と、その大法を弘めていくことに生命を捧げていることを思えば、現世の無認識な批判とか中傷などは、まったく小さなことと私は思っております。なんとも思っておりません。

――二十数年間ずっとお姿を拝見して、よくわかります。

池田　この大法を、日本はもとより、世界百十五か国以上の何十万、何百万という青年が受け継いでくれることを考えれば、私の胸中は所願満足の日々なのです。

付記

この企画は、月刊『潮』で、十六回（一九八五年一月号～一九八六年四月号）にわたり、連載されたものです。

対談は、毎月、池田先生の多忙なスケジュールをぬって行われましたが、連載開始時から読者の反響が多大であったため、ご無理をお願いし、当初の予定を大幅に上まわる長期連載をしていただくことができました。

このたび、上下二巻で上梓（じょうし）するにあたり、池田先生、屋嘉比先生に、より読みやすくするために、多少の手を加えていただきました。

前回の『「仏法と宇宙」を語る』にひきつづき、今回は、現代科学の進歩が、生命の不可思議性をどこまで解明してきたか、という成果を踏まえながら、仏

法の説く生命観を、具体的にわかりやすく展開されております。

ここに両先生に厚く御礼申しあげます。

一九八六年九月

編集部

注解

〈あ行〉

阿闍世王　未生怨と訳す。釈尊在世から滅後にかけての中インド摩訶陀国の王。提婆達多と親交を結び、仏教の外護者であった父・頻婆娑羅王を監禁し獄死させて王位についた。釈尊や弟子たちを、悪象に酒を飲ませ、けしかけて殺そうとしたが失敗した。しかし、その後阿闍世王も父を殺した罪に悩み、釈尊のもとに帰伏して釈尊の教団の大檀那(施主)となり、王子も夫人もみな仏弟子となった。

一念三千　一念とは、瞬間の生命をいい、三千とは現象世界のすべてをいう。一念三千とは、一瞬の生命に十界を具し、十界が互いに具わり合って百界となり、百界は実相の十種の面(十如是)を具して千となり、これが三種の世間を具して三千世間となる。一瞬の生命に現象世界のすべてが欠けることなくおさまっているということ。

遺伝子　遺伝情報(遺伝形質の特異性を指定するために生物がそなえている情報)をになう構造単位のこと。染色体中に一定の順序で配列され、生殖細胞を通じて親から子に遺伝情報をつたえる。その実体は遺伝子を構成するＤＮＡの分子で、このＤＮＡの塩基配列の順序が遺伝情報となり、細胞内で合成されるたん白質やリボ核酸の一次構造を指令する。

遺伝子工学　遺伝子組み換えや細胞融合などの方法を用いて、有用生体物質の生産、種の人工的改

変などを目的とする技術。病気の治療など幅広い応用範囲を含む。

インターフェロン　ウイルスの感染を受けた動物細胞が産生する、ウイルス感染の阻止作用をもつたん白質のこと。つまり、細胞の一つのウイルスが感染すると、その細胞は他のウイルスの感染や増殖を阻害する。その阻害作用を仲立ちする因子のことで、ウイルス抑制因子という。ウイルス感染によって起こると思われる肝炎やがんの予防ならびに治療にこの特質を利用しようという考え方がある。

依正不二　依報と正報が二にして不二であること。正報とは生命活動をいとなむ主体をいい、その身がよりどころとする環境・国土を依報という。この二つは、ともに自己の過去の業（行為）によって招いたものであるから同じく報という。両者の関係は而二不二（二にして二にならず）であり相関性を成していることを依正不二という。つまり、主体である自己と生活環境である自然とは観念のうえでは区別できるが、実際には区別できないものであり、互いに関係性をもっているということ。

SDI　戦略防衛構想。Strategic Defense Initiative の略。ICBM（大陸間弾道ミサイル）やSLBM（潜水艦発射弾道ミサイル）を弾道飛行の途中で人工衛星を利用して迎撃破壊すること。スター・ウォーズ計画とも呼ばれている。一九八三年、アメリカのレーガン大統領の演説で提唱された。

〈か行〉

ガリレオ力学　ルネサンス末期のイタリアの天文学者・物理学者・哲学者ガリレイの提唱した力学

のこと。かれの力学の中心問題は、アリストテレス流の運動の原因の探究ではなく、慣性の法則、真空中の弾道などのような運動の数学的記述にあり、分析と合成との経験的・実証的方法を用いる近代科学の方法論の端緒を開いた。力学上の諸法則の発見、望遠鏡の発明による天体の研究など、功績が多い。近代科学の父といわれる。

観心　教相に対する語。己心を観ずることで、心を対境として思索し明らかにみていくこと。教相が仏の教説の理論的究明をさすのに対し、観心とは教相の肝要、奥底を己心に観じていく実践修行をいう。

記別　仏が弟子の未来の成仏を明らかにすること。仏が弟子にこれを授けることを授記という。

玄奘（六〇二―六六四年）　中国唐代初期の僧、法相宗の開祖。西域、インドの大旅行家、多くの経典の翻訳家として有名。著書に『大唐西域記』（十二巻）がある。この書物に基づいて後世、『西遊記』が作られた。

現世安穏・後生善処　「現世安穏にして後に善処に生ず」と読む。法華経薬草喩品第五の文。妙法を聞いて信ずる人は現世では安穏な生活をし、来世には善処に生まれ妙法を受持することができるということ。

〈さ行〉

慈悲　一切衆生を慈しみ憐むこと。「大慈は一切衆生に楽を与え（与楽）、大悲は一切衆生の苦を抜く（抜苦）」（大智度論）とあるごとく、慈悲とは抜苦与楽を意味する。

迹門　法華経二十八品のうち、前半の序品第一から安楽行品第十四までのこと。本門に対する語

で、迹門は池水に映る月影に、本門は天の月そのものに譬えられる。（本門の項参照）

娑婆即寂光　人間の住む娑婆世界がそのまま寂光土であること。娑婆とは凡夫の住む世界、寂光とは寂光土、すなわち仏国土のこと。心が清らかになれば、住む世界も清らかになり、正報（主体）としての衆生の開悟によって依報（環境世界）の娑婆世界が即寂光土と変革されることをいう。

舎利弗　釈迦十大弟子の一人。仏説の真意をよく理解したので、智慧第一といわれた。梵語シャーリプトラの音写で、舎利子とも書き、訳して身子ともいう。

受持即観心　日蓮大聖人の仏法における修行の究極を述べた語。すなわち三大秘法総在の本門戒壇の大御本尊を受持することそれ自体が成仏（観心）の極理であることをいう。

寿量品　法華経巻六如来寿量品第十六の略。釈尊の本地久遠実成をあかした重要な品。その奥底には、日蓮大聖人こそ末法の御本仏であり、南無妙法蓮華経のみが一切衆生を救済できる唯一の法であることが説かれている。

成住壊空　成劫・住劫・壊劫・空劫の四劫のこと。宇宙、生命その他いっさいのものの流転をあらわす。成劫は成立、形成する期間、住劫は安定期間、壊劫は壊滅していく期間、空劫は壊滅が終わり消滅して空となる期間をいう。そしてまた成・住・壊・空を繰りかえすのである。

声聞　声を聞く者の意で、十界のうちの二乗（声聞・縁覚）の一つ。すなわち仏の声教を聞いて解悟する出家の弟子のこと。元来、仏弟子を意味したが、自利のみを求める小乗の修行者との意

もふくむ。

常楽我浄　仏の境地にそなわる四つの徳のこと。常徳は仏の境地が永遠に不変不改であることをあらわし、楽徳とは無上の安楽のことを意味し、我徳とは生命が自由自在で他からの束縛を受けないことであり、浄徳は煩悩のけがれなき清浄な完成をいう。また衆生も本来仏性をそなえているので、一切衆生の生命にそなわっている徳ともいえる。

生老病死　人の一生における避けることのできない根本的な四種の苦しみのこと。①生苦（生まれ出る苦しみ）②老苦（年老いていく苦しみ）③病苦（病気による苦しみ）④死苦（死ぬときにおこる種々の苦しみ）。

深層心理学　十九世紀の終わりころより、フロイト、アードラー、ユングらによって創始された心理学。人間はみずから意識しうる心的過程のみではなく、無意識的な心的過程をもつことを前提とし、この無意識の部分について研究する心理学のことをいう。

素粒子論　物質の究極的構成要素である素粒子の性質や構造、素粒子間の相互作用などを研究する学問とその理論をいう。日本の研究者ではノーベル賞を受賞した湯川秀樹、朝永振一郎博士（二人とも故人）が有名。

〈た行〉

大乗仏教　小乗教に対する語。大乗とは大きな乗りもののことで、小乗（小さな乗りもの）よりも多くの人々を迷いの此岸から悟りの彼岸に至らせることをいう。小乗教が声聞・縁覚を理想として阿羅漢果を得させることを目的としたのに対し大乗教では利他の菩薩道を説き、一切衆生を成仏

させることを目的とする。

大脳生理学　人間の精神活動をつかさどるといわれる大脳を生理学的なアプローチから研究する学問。これまでに、大脳皮質、大脳辺縁系の働き、言語活動の領域等明らかにされてきたが、まだ未知の分野が少なくない。

提婆達多　釈尊の弟子となりながら退転して、逆罪を犯し、釈尊を迫害した悪比丘。また阿闍世王をそそのかして、その父王を殺させ、釈尊に敵対させたが、後に阿闍世王は釈尊に帰依し、提婆達多は生きながら地獄に堕ちたといわれる。しかし、釈尊が過去世に修行中、阿私仙人として釈尊の善知識となったのが提婆達多であったとされ、成仏の記別を与えられ、悪人成仏の例とされている。

DNA　デオキシリボ核酸のこと。おもに細胞核のなかにあり、生物が生きていくうえでの重要な遺伝情報を保持、発現する役割をになっている物質。遺伝子の本体をなすもので、二重のらせん構造をもつ。

中国敦煌展　東京富士美術館（八王子）などで一九八五年秋から翌年春にわたって開催された。敦煌からの出土文物と莫高窟の壁画模写絵、それに『法華経』写本などを展示。なかには、二千年以上も昔の前漢代の麻紙・絹織物・木簡など、学術的にも貴重な文物が数多く含まれ、中国から海外にだされるのは初めてのことで、話題をよんだ。

天台（五三八―五九七年）　中国南北朝・隋代の天台宗の開祖。智者大師ともいう。中国の南三北七の十師を破り、五時八教の教判を立てて迹門の法華経を中国にひろめた。主著に法華三大部である『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』など。

戸田城聖（一九〇〇―一九五八年）　創価学会第

二代会長。石川県に生まれ、北海道で少年時代をすごす。その後上京し、創価学会初代会長牧口常三郎に師事しともに創価教育学会（創価学会の前身）を設立。戦時中治安維持法違反で牧口会長とともに投獄される。牧口会長は獄死し、戸田は二年間の獄中生活をおくる。戦後、創価学会の発展につくす。主著に『推理式指導算術』『戸田城聖全集』など。

〈な行〉

日寛上人（一六六五―一七二六年）　日蓮正宗総本山大石寺第二十六世の法主。御書五大部の文段、六巻抄の著作をはじめとする教学の興隆、堂塔伽藍の建立等に力を尽くし、宗門を隆盛に導き、第九世日有上人とともに中興の祖と仰がれている。

日亨上人（一八六七―一九五七年）　日蓮正宗総本山大石寺第五十九世の法主。編著書に『富士宗学要集』（百二十四巻）、『身延離山史』『新編日蓮大聖人御書全集』など。

日淳上人（一八九八―一九五九年）　日蓮正宗総本山大石寺第六十五世の法主。明治三十一（一八九八）年長野県に生まれる。「御開山日興上人の昔にかえれ」との精神で信心の厳正、宗制の改正、教学の振興等をはかられた。『大日蓮』『大白蓮華』等の雑誌や『聖教新聞』等に掲載されている論文、説法、破折等は多く、一周忌を期して『日淳上人全集』として出版されている。

日興上人（一二四六―一三三三年）　日蓮正宗総本山大石寺開山。第二祖。白蓮阿闍梨と号す。日蓮大聖人が武蔵国（東京都）池上で御入滅になるまで二十四年間常に随ってご給仕申しあげ、大聖人より「血脈の次第日蓮日興」と唯授一人の付嘱

を受けられている。

ニューサイエンス　フリッチョフ・カプラの『タオ自然学』やグレゴリー・ベイトソンの『精神と自然』、ジェレミー・リフキンの『エントロピーの法則』など一連の著作に代表される科学批判の動向。近代科学の方法に反省を加え、物質の世界と心の世界を再び結びつける道をさぐり、そこから人間と自然の調和を見いだそうとするもの。東洋思想への注目がその底流にある。

〈は行〉

八万法蔵（はちまんほうぞう）　釈尊が説いたすべての教をいう。八万は実数ではなく、多数の意味。八万四千の法門ともいい、八万蔵と略すこともある。また法蔵は、宝蔵とも書く。

ハレー彗星（すいせい）　イギリスの天文学者エドモンド・ハレーにより発見された彗星で、約七十六年の周期で太陽のまわりを回っている。一九八六年は、ちょうどこの近日点通過にあたっており、世界各地でハレー観測がなされた。

波瑠璃王（はるり）　釈尊在世の舎衛国（しゃえこく）の王。父は波斯匿王（はしのく）で、母は勝鬘夫人（しょうまん）。勝鬘夫人が釈迦族の使用人であったとの出生の秘密を知り、そのことで恥辱を受けたことに復讐を誓う。王となるや兵を出して釈迦族五百人を殺りくした。この殺りくは「瑠璃（るり）の殺釈（せっしゃく）」といわれ、釈尊が在世中に受けた九横の大難の一つに数えられている。

分子生物学（ぶんしせいぶつがく）　生物現象を、その分子の構造と機能にもとづいて解明しようとする生物学の一分野をいう。分子遺伝学と分子生理学を含み、分化・発生など広く細胞機能の基礎的な様相を探究する学問。

ベルグソン（Henri Bergson 一八五九―一九四一年）　フランスの哲学者。フランス唯心論の伝統に立ちつつ、スペンサーの進化論から影響を受け、生の創造的進化を説いて、生の哲学者として哲学のみならず文学、芸術の分野にまで影響を与えた。主著に『時間と自由』『創造的進化』『道徳と宗教との二源泉』など。ノーベル文学賞受賞。

方便品　法華経方便品第二のこと。迹門十四品のなかの要品であり、法華経のなかでも重要な位置をしめる。

法華経　釈尊が説いた八万法蔵（すべての教え、八万は実数ではなく多数の意）のうち第一の経典。一般には、中国の鳩摩羅什が訳した『妙法蓮華経』八巻二十八品のことをさす。

本門　釈尊が説いた法華経二十八品のうち後半の従地涌出品第十五から普賢菩薩勧発品第二十八までをさす。仏の本地をあらわした法門のことで、迹門に対する語。本門は相対して迹門より勝れる。（迹門の項参照）

〈ま行〉

牧口常三郎（一八七一―一九四四年）　明治四（一八七一）年、新潟県刈羽郡荒浜村に生まれる。創価学会の初代会長。創価教育学説の提唱者。半生を教育界に捧げ、その間、地理教育の改革、新教育学の樹立に尽力。昭和三年ごろ日蓮正宗に帰依し、以来、宗教革命の先駆者として不惜身命の活動を続け、昭和十九年十一月十八日、獄中で七十四歳の生涯を閉じた。

妙楽（七一一―七八二年）　中国・唐代の天台宗中興の祖。二十歳のときに玄朗（八祖）から天台教義を学び、三十八歳で出家した。著書には、『法

華玄義釈籤』（十巻）、『法華文句記』（十巻）、『摩訶止観輔行伝弘決』（十巻）など。

文上・文底　経文の上、表面の文々句々を字義どおりに読むことを文上といい、経文の奥底、根底をさらに深く読みとることを文底という。

〈ら行〉

六根　眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの感覚・認識器官のこと。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の感覚と意識をつかさどる作用をいう。根とは生命が対境に即応する作用を有するものの意。

「注解」作製にあたり、左記の文献等を参考にしました。

『遺伝学辞典』（共立出版）
『現代用語の基礎知識・一九八六』（自由国民社）
『広辞苑第三版』（岩波書店）
『コンサイス人名辞典』日本編・外国編（三省堂）
『大百科事典』全十六巻（平凡社）
『哲学事典』（平凡社）
『日蓮大聖人御書辞典』（聖教新聞社）
『日経バイオテクノロジー最新用語辞典』（日経マグロウヒル社）
『新版仏教哲学大辞典』（聖教新聞社）

モネ　㊤288
森有礼　㊦205
文上　㊤137㊦177, 221, 239
文底　㊤137㊦177, 221, 240

〈や行〉

薬草喩品　㊤191
火傷　㊦43
弥源太入道殿御返事　㊦282
柳田国男　㊤261
病　㊤93, 123, 163㊦73, 78, 87, 293, 301
闇は暁を求めて　㊤289
ヤング　㊦344
唯心論　㊦216
唯物論　㊦216, 217
ゆらぎ　㊤62
ユング　㊤17, 70, 203, 262㊦203, 204, 219, 360
予防医学　㊤103
四度の大難　㊦195

〈ら行〉

ライナス・ポーリング　㊤55
ラヴロック　㊤78
楽　㊤140
羅什三蔵　㊤98, 301
ランボー　㊤210
理　㊤240
リグ・ヴェーダ　㊤282
リス・デービッズ　㊦361
立正安国論　㊦45
歴劫修行　㊤322
竜樹菩薩　㊤300
流水　㊤97
梁塵秘抄　㊦239
令法久住　㊤192
輪廻観　㊤63
リンパ球　㊦15
リン・マーギュリス　㊤78
ルイス・キャロル　㊤206
ルーズベルト　㊤151
ルソー　㊦74
ルネ・デュボス　㊦75
ルネ・ユイグ　㊤289㊦348
ルノワール　㊤149
ルベルス　㊤85
霊魂不滅　㊤64
冷房病　㊦33
レーガン　㊤84㊦125
レーニン　㊤151
レオナルド・ダ・ヴィンチ　㊤50, 150
レム睡眠　㊦290
蓮華　㊤194, 279, 285, 303, 307㊦92
蓮華にちなんだ地名　㊤293
蓮盛抄　㊦285
老　㊤93, 123㊦73
老化　㊤80, 81, 88, 89, 122, 124, 146㊦57, 80
老化遺伝子　㊤88, 89, 168
老化現象　㊤82, 87, 88, 126
老人ホーム　㊤155
老年医学　㊤81
ローレンツ　㊤250
ロータス　㊤283
ロキタンスキー　㊦11
六道輪廻　㊤244, 247
六訳　㊤299
六根　㊦323
ロジ・ギョーマン　㊤226
ロペス　㊤85

〈わ行〉

ワーグナー　㊤16
ワイルダー・ペンフィールド　㊤222, 225
ワイルド　㊤210
渡辺格　㊤95
ワトソン　㊤55

法華経「譬喩品」 ㊦176
法華経方便品 ㊤51, 65, 255
法華経「法師功徳品」 ㊦238
菩薩 ㊤244, 245㊦30, 186
菩薩界 ㊤250㊦318
菩提樹 ㊤190
法華玄義 ㊤170, 311
法師功徳品 ㊤23
法性の淵底・玄宗の極地 ㊦159
法身・般若・解脱の「三徳」 ㊤256
法報応の三身 ㊤256, 316
ボツリヌス菌 ㊦20, 22
仏 ㊤124, 132, 192, 244
仏の十号 ㊤246
ホフロフ ㊦98
ホメイニ ㊤86
堀日亨 ㊦207, 208
ボルトマン ㊦288
ボルノー ㊦326
ホログラフィ理論 ㊦317
ホロン ㊤62
梵 ㊤281
本因 ㊤50
本因妙 ㊤259, 318, 320, 322㊦164, 193
本有 ㊤64
本果妙 ㊤259, 317
梵語学 ㊦98
本国土妙 ㊤259
本有の生死 ㊤139
煩悩 ㊤163, 173㊦301
煩悩濁 ㊦59
煩悩即菩提 ㊤173
本門 ㊤237, 240㊦221

〈ま行〉

マーギュリス ㊤78
マイクロサージャリー（微小外科） ㊦172
摩訶止観第五 ㊤238
牧口初代会長 ㊦90
牧口（常三郎） ㊤53
正岡子規 ㊤286
マッカラム ㊦25
マックス・ウェーバー ㊤150
マックス・ミュラー ㊦233, 348
松野殿御返事 ㊦181
末法 ㊤313, 316
末那識 ㊦316
マルコ・ポーロ ㊤253
丸山真男 ㊦97
曼荼羅 ㊤241
水虫 ㊦56, 226
宮沢賢治 ㊦234
妙 ㊤125, 139, 305㊦16, 83
命濁 ㊦59
妙心尼御前御返事 ㊤179㊦77
妙法 ㊤139, 141, 164, 276㊦16, 270, 294, 358, 359
妙法尼御前御返事 ㊤153㊦183
妙法比丘尼御返事 ㊦244
妙法曼陀羅供養事 ㊤165
妙密上人御消息 ㊤193
妙楽 ㊦136, 222
妙蓮 ㊦85
ミリンダ王の問い ㊤285
ムシ歯 ㊦37, 38
十字御書 ㊤254
ムッソリーニ ㊤151
無辺行 ㊦61
無明即法性 ㊤173
無量義経 ㊤133㊦101
メナカー ㊤20
メルロ・ポンティ ㊤203
蒙古使御書 ㊦150
毛沢東 ㊤151
モーツァルト ㊤150
モーパッサン ㊤150
モーレイ ㊤90
目連 ㊤174, 181㊦186
本居宣長 ㊦97

ヒポクラテス　㊦203
ヒポクラテスの「誓い」　㊤107㊦175
百六箇抄　㊦138
ビュルヌフ　㊦231
兵衛志殿御返事　㊤215㊦142
兵衛志殿女房御返事　㊦328
病気　㊤159㊦15, 17, 60
病気の数　㊤160, 161
開く義　㊦16, 109
ヒルティ　㊦77
ファウスト　㊤15
ファン・バン・ドン　㊤86
フィゲイレド　㊤85
フィッシャー　㊦172
フインケルシュタイン　㊤120
プーシキン　㊤260
風大　㊤162, 163
フェニルケトン尿症　㊤36
福沢諭吉　㊤50
普賢経　㊦101
不定業　㊦81, 82
不二　㊦136
蕪村　㊤286
仏界　㊤178, 181, 246, 250, 251, 252, 254, 305㊦83, 186, 318
仏眼　㊦284
仏教医学　㊤101, 102
フッサール　㊤203
「仏法と宇宙」を語る　㊤11, 12, 14, 68, 227㊦157, 196, 305, 315, 356
プラトン　㊤50, 64
フランコ　㊤151
ブルギバ　㊤86
フレーベル　㊤116
フレッド・ホイル　㊦290
フロイト　㊤70㊦219, 329
不老長寿の薬　㊤128
不老不死　㊤132, 140㊦358
不老不死の薬　㊤128
フロム　㊤203, 204
文王　㊤157
分子生物学　㊤55, 95㊦270
ベーカーマン　㊤147
ヘーゲル　㊤150
ベートーヴェン　㊤50, 150
ヘス　㊤225
ペスタロッチ　㊤150
ベッチェイ　㊤226㊦160, 162
ベラウンデ　㊤85
ベルグソン　㊤17, 52, 53, 54㊦61, 219
ベルタランフィ　㊦267
ヘルド　㊦349
ベロッキオ　㊤50
扁鵲　㊤97
ホイットマン　㊤17
報　㊦128
法界　㊦163
法眼　㊦284
宝算　㊦86
放射線　㊤33
宝浄世界　㊤66, 67㊦288
方便現涅槃　㊤137, 138, 139
方便品　㊤237
法蓮抄　㊤254
ボーア　㊤94㊦114
ホーキング　㊦305
ボードレール　㊤210
ボーム　㊤203
ホールデン　㊤130
ホーン　㊤146
法華経　㊤23, 107, 110, 133, 137, 154, 191, 192, 198, 237, 298, 300, 301, 303 ㊦59, 60, 82, 85, 101, 137, 199, 206, 214, 222, 231, 234, 322, 326, 327, 330, 343, 350
法華経「勧持品」　㊦196
法華経寿量品　㊤179㊦83, 240
法華経題目抄　㊦269
法華経の「七譬」　㊦238
法華経の方便品　㊦128

如説修行抄 ㊤132
女人成仏抄 ㊤270
如来 ㊤132
如来寿量品 ㊦330
如蓮華在水 ㊤297
人界 ㊤244
人間革命 ㊦116, 323, 324
人間の誕生 ㊤19
ネイチャー ㊦309
涅槃経 ㊤65㊦185, 350
ネルー ㊤102
念根 ㊤49
脳 ㊤115, 219, 233, 264, 265, 266, 274 ㊦11, 336, 356
脳細胞 ㊤83
脳死 ㊦91, 92
脳神経細胞 ㊤228
脳卒中 ㊦53
脳と心 ㊤233, 270
脳の重さ ㊤115, 265
脳の解明 ㊤227
脳のシワ ㊤56
脳の働き ㊦12, 313
脳の話 ㊤262
ノーマン・カズンズ ㊤219, 220
ノッテボーム ㊤267
ノンレム睡眠 ㊦290

〈は行〉

バーシャイド ㊤221
ハーベイ ㊦152
バイオタイド理論 ㊤22
バイオテクノロジー ㊤169㊦263, 265, 269
ハイゼンベルク ㊤94
バイロン ㊤150
パウリ ㊦203
迫害 ㊦198
白米一俵御書 ㊦40, 306
ハシカ ㊦44
ハス ㊤196, 280, 281, 287, 288, 290, 291, 292, 293, 294㊦103
パスツール ㊤205㊦219, 270
八 ㊦93, 98, 99, 100, 107
八十種好 ㊦101
八分医方 ㊦99
八幡宮造営事 ㊤153
八万法蔵 ㊤299, 316㊦101
八万由旬 ㊦101
八恒河沙 ㊦101
八葉の蓮華 ㊦92, 95, 106
八苦 ㊤123
ハックスリー ㊤171
八正道 ㊦101
母親の育児態度 ㊤47
ハリー・ハーロー ㊤220
春 ㊤187
ハルデ ㊦348
波瑠璃王 ㊦187
ハレー彗星 ㊦356
斑固 ㊦229
万国博覧会 ㊤205, 207
ハンス・ドリューシュ ㊤130㊦219
バンダ ㊤86
PTC味盲 ㊤40
ピカソ ㊤149
ひきつけ ㊦41
ビクトル・ユゴー ㊤17, 150, 235
鼻識 ㊦315
非情 ㊦125
ピタゴラス ㊦94
ピタゴラス派 ㊤64
ビタミン ㊦26, 27
ビタミンA ㊦23
ビタミンAとCとE ㊦54
ビタミンC ㊦27
ビタミンD ㊦28
ビタミンB_1 ㊦23, 26, 29
ビッグバン ㊤307, 308㊦157
ヒトラー ㊤151

チーホノフ　㊤85㊦296
チェルネンコ　㊤84
畜生界　㊤244, 245
治水　㊤97
地大　㊤162, 163
千葉康則　㊤270
チャイコフスキー　㊤150
チャウシェスク　㊤85
中有　㊤64
紂王　㊤157
中国敦煌展　㊦223
中道一実　㊤276㊦217
中道実相　㊤235
中道法性　㊦216
陳臣　㊦85
月満御前御書　㊤24
DNA　㊤31, 55, 89㊦261, 270
デヴィッド・ボーム　㊦203
デオキシリボ核酸　㊤55
デクエヤル　㊦114
デサイ　㊤85
デュボス　㊦77
寺田寅彦　㊦182
天界　㊤244
てんかん　㊤222
伝教　㊤154, 312, 313
天才　㊤48, 264
転子病　㊦281
転重軽受　㊦185, 351
転重軽受法門　㊦185
天台　㊤153, 154, 241, 312, 313㊦85, 137
田宅　㊦326
天地創造説　㊤75
天明の大飢饉　㊦143
トインビー　㊤156, 248㊦75, 167, 218, 220, 275, 361
鄧小平　㊤85
当体蓮華　㊦107
動脈硬化　㊤89
時実利彦　㊦330
富木殿御書　㊦88
富木入道殿御返事　㊤111㊦141
徳川家康　㊦104, 105
戸田前会長　㊤29, 32, 61, 107, 108, 110, 133, 137, 149, 181 ㊦32, 72, 78, 84, 136, 201, 206, 208, 237, 256, 291, 307, 323, 336, 337, 342, 351
独覚　㊤245
トルストイ　㊤17
貪　㊤163
敦煌　㊦228

〈な行〉

ナーガ・セーナ　㊤285
内外不二　㊦137
中川米造　㊤201
中村敬宇　㊦205
夏カゼ　㊦31
夏バテ　㊦23, 24
難　㊦198, 199
南条七郎五郎　㊦87
南条時光　㊦89
南条兵衛七郎殿御書　㊤109㊦196, 197
新池御書　㊦282
西周　㊦205
二乗（声聞・縁覚）　㊦186
爾前経　㊤65
日寛上人　㊤197㊦351
日厳尼御前御返事　㊤320
日淳上人　㊤90㊦136, 200, 246
日女御前御返事　㊤157㊦21, 322, 344
日興上人　㊤260, 298, 302㊦89
新渡戸（稲造）　㊤53
而二不二　㊤221
二而不二　㊤221
ニューサイエンス　㊤62, 102㊦203, 230
ニュートン　㊤149
如意宝珠　㊦269

心臓病 ㊦53
秦の始皇帝 ㊤128
森羅三千 ㊤190
森羅万法 ㊤190
瑞相御書 ㊦129
水大 ㊤162, 214
水頭症 ㊤33
睡眠 ㊤103, 121㊦290, 291
睡眠時間 ㊦35
睡眠不足 ㊤120
睡眠量 ㊤120
スギ花粉症 ㊤213
崇峻天皇御書 ㊤175㊦260
ストレス ㊦13, 29, 54, 300, 308, 311, 312, 325, 328, 329
スペリー ㊤275
生 ㊤24, 25, 26, 27
性格 ㊤41, 42, 43, 44, 45, 46, 115
生活空間 ㊦145
世紀末 ㊤209, 210
清少納言 ㊤285
生物工学 ㊤169
生命 ㊤ 50, 65, 70, 90, 94, 130, 134, 136, 200, 221, 229㊦74, 16, 217, 222
生命科学と人間の会議 ㊤201
生命圏 ㊤78, 79
生命工学 ㊤89
生命操作 ㊤50
生命の尊厳 ㊤201
生命の誕生 ㊤62
世間 ㊦146
世間解 ㊤192
舌識 ㊦315
セリエ ㊦29, 308, 312
善業 ㊤167
染浄不二 ㊦137
染色体 ㊤30, 31, 37
ぜんそく ㊦42
全体的生命論 ㊤130
想陰 ㊤135
創価教育学体系 ㊤54
総勘文抄 ㊤24, 51㊦150, 152
像法 ㊤316
像法時代 ㊤153
側頭葉 ㊤271
ソクラテス ㊤50
蘇生 ㊦95
蘇生の義 ㊦16
曾谷殿御返事 ㊦112
曾谷入道殿許御書 ㊦280, 299
素粒子論 ㊦262

〈た行〉

ダーウィン ㊤150
ダーウィンの進化論 ㊤73, 74, 171
ターナー症候群 ㊤32
ダイアモンド ㊤147
大英博物館 ㊦229, 230, 346
第九識 ㊦316, 322
体質 ㊤39
大乗仏教 ㊤94, 107, 300㊦30, 220, 228
大智度論 ㊦190
大唐西域記 ㊦229
第七識 ㊦316
大脳生理学 ㊤56㊦314, 317, 330, 338
提婆達多 ㊦186
第八識 ㊦316
第六識 ㊦315
多因子遺伝 ㊤41
ダウン症 ㊤32
高山樗牛 ㊦235, 236
多価ワクチン ㊦266
伊達政宗 ㊤218
竜の口の法難 ㊦196
ダフティ ㊤117
多摩羅跋栴檀香仏 ㊦186
誕生 ㊤23, 29, 34
誕生の時刻 ㊤20
ダンテ ㊤150
癡 ㊤163

周恩来　㊤86
宗教　㊦113, 205, 209, 213
従地涌出の菩薩　㊤25
従地涌出品　㊤198
従地涌出品第十五　㊤297
十如是　㊤239, 255, 257
十如是事　㊦106
十八円満抄　㊦283, 284
シューベルト　㊤50
十文字遺伝　㊤46
受陰　㊤135
宿業　㊤39, 168, 320
宿命　㊤61, 93
受持即観心　㊦194
衆生濁　㊦59
衆生所遊楽　㊤58㊦330
衆生世間　㊤257㊦146
修性不二　㊦137
受胎　㊤20, 66
出家功徳御書　㊦281
出産　㊤20
出生　㊤61, 65, 67, 69, 70, 71
出生・誕生　㊤69
出世の本懐　㊦198
受潤不二　㊦137
地涌の菩薩　㊤25㊦159
寿命　㊦78, 81, 87
寿命無数劫　㊦83
修羅界　㊤244, 245
ジュリアン・ハクスリー　㊦360
寿量品　㊤137, 238, 259
寿量品得意抄　㊤137
生　㊤123㊦73
常　㊤140
浄　㊤140
生有　㊤64
障害児　㊤30, 35
貞観政要　㊦245
上行　㊦61
浄行　㊦61
生苦　㊤65, 66
定業　㊦81, 82
定根　㊤49
成・住・壊・空　㊦360
精進根　㊤49
小頭症　㊤33, 34
生得説　㊤44
生と老と病と死　㊦60
聖人御難事　㊦199
成は開く義　㊦109
小氷河期　㊦141, 142
成仏　㊦108
ショーペンハウアー　㊤16㊦203, 204
正報　㊤28㊦127, 132, 165
正法　㊤316
声聞　㊤244, 245, 246㊦94
常楽我浄　㊤250
常楽我浄の四徳　㊦61
生老病死　㊤38, 124
生，老，病，死　㊤93
諸行無常　㊤72
食中毒　㊦18, 19, 22
食物三徳御書　㊤119
ジョセフ・ニーダム　㊤102
徐福　㊤128
諸法実相　㊤51
諸法実相抄　㊦163
ジョン・ホールデン　㊤130
シラー　㊤15
白子　㊤36
信　㊤314, 315, 316
瞋　㊤163
進化論　㊦154, 307
心筋梗塞　㊦54
信根　㊤49
身識　㊦315
新生気論　㊦219
人生地理学　㊤54
心臓死　㊦91
深層心理学　㊤70, 202㊦219

五濁悪世 ㊤160
コスイギン ㊤85
コッホ ㊤50
子供の性格形成 ㊤47
子供の非行 ㊤117
小林秀雄 ㊤53㊦97
五味 ㊦24
権教 ㊦138
権実不二 ㊦137
根本浄識 ㊦316

〈さ行〉

再往 ㊤71
ザイデル ㊦348
佐渡御書 ㊦245
サリドマイド ㊤33
三界之相 ㊦73
懺悔 ㊦82
三業不二 ㊦137
三世 ㊤57, 140
三世間 ㊤238, 239, 257
三世諸仏総勘文教相廃立 ㊤24, 70㊦243
三毒 ㊤163
三妙合論 ㊤259
死 ㊤81, 93, 123, 178, 180 ㊦52, 73, 178, 184, 350
事 ㊤240
四有 ㊤64
死有 ㊤64
シェイ ㊤146, 147
潮の干満 ㊤21
色陰 ㊤135
識陰 ㊤135
色心不二 ㊤221, 274㊦11, 137, 139, 217, 340
色盲 ㊤46
地獄 ㊤247
地獄界 ㊤244, 245
自己免疫説 ㊦80
自殺 ㊦51
耳識 ㊦315
視床下部 ㊤273
四条金吾 ㊤97㊦173
四条金吾殿御返事 ㊤76㊦174
四相 ㊤93, 127
四大 ㊤162, 163, 214
自他不二 ㊦137
実有 ㊤68, 69
十界 ㊤238, 242, 243
十界互具 ㊤248, 249, 250, 316
十界互具論 ㊤238
十界論 ㊤248, 252
実教 ㊦138
しつけ ㊤116
躾 ㊤115
十不二門 ㊦136
シッペルゲス ㊦324
示同凡夫 ㊤110
シドニー・リンガー ㊦149
師との出会い ㊤49
シナプス ㊤266, 267
事の一念三千 ㊤241㊦164, 222, 272, 341
ジノワツ ㊤85
司馬遷 ㊤97㊦229
慈悲 ㊤26, 112㊦31, 283
治病大小権実違目 ㊤96, 162㊦202
ジフコフ ㊤85㊦115
持妙法華問答抄 ㊦184
始聞仏乗義 ㊤38
釈尊 ㊤38, 97, 98, 101, 137, 246, 312, 313, 316, 318㊦199
迹門 ㊤237, 240㊦221
迹門・爾前 ㊤17
シャクンタラー ㊤15
ジャック・モノー ㊤203㊦270
娑婆即寂光 ㊦312
ジャヤワルデネ ㊤86
舎利弗 ㊤197㊦190, 199

眼識　㊦315
観心　㊦272
観心本尊抄　㊤75, 249
観心本尊抄文段　㊤154
観心本尊得意抄　㊦222
ガンダーラ美術　㊤113, 284
カント　㊦214
観普賢菩薩行法経　㊦82
記憶力　㊤266, 270
気象医学　㊦122
北里柴三郎　㊤50
キッシンジャー　㊤85
帰納的　㊤94
耆婆　㊤96, 97, 98, 99, 100, 101
記別　㊦186, 190, 194
経　㊤311
行陰　㊤135
経王殿御返事　㊦358
教行証御書　㊦292
更賜寿命　㊤179
共時性　㊦203
経釈　㊤70, 236, 246, 311
教相　㊦272
鏡忍房　㊤174, 181
刑部左衛門尉女房御返事　㊦283
キューブラー・ロス　㊤202
キラー細胞　㊦17
空・仮・中の三諦　㊤256, 316
空論　㊤249
九識　㊤224㊦323
九識心王真如の都　㊦321
九識論　㊦315, 319, 339
具足（円満）の義　㊦16
クッシング　㊦126
求不得苦　㊤123
窪尼御前御返事　㊦352
鳩摩羅什　㊤298, 299, 300
クラインフェルター症候群　㊤32
クリック　㊤55
グリム　㊦348
クルト・レヴィン　㊦145
桑原武夫　㊤201
経験説　㊤44
希有　㊤65
仮有　㊤67, 72
ゲーテ　㊤15, 16, 210㊦182, 218
血液型と病気の関係　㊤42
血液型による性格判断　㊤43
ケネディ　㊤86
外用　㊤111
牽引の業　㊤72
現業　㊤167
減劫御書　㊦300
健康維持法　㊤104
健康ブーム　㊤51
玄奘三蔵　㊦229
見濁　㊦59
現世安穏・後生善処　㊦88
眷属　㊤170
健病不二　㊦74
顕仏未来記　㊦62, 197
顕謗法抄　㊦188
業　㊤35, 166, 168, 171, 172㊦360
業因　㊤173
業苦　㊤173
劫濁　㊦59
交通事故　㊤117, ㊦49
光日上人御返事　㊦192
業病　㊤166
高齢　㊤148
高齢化社会　㊤145
五陰世間　㊤257, 258㊦146
国土世間　㊤258, 259㊦146
心　㊤274
心と脳　㊤220
五根　㊤49
五識　㊤223㊦315
五時八教　㊤312
五盛陰苦　㊤123
五濁　㊦59

上野殿後家尼御返事　㊦192
上野殿母御前御返事　㊤111㊦87
ウェリー・クレイグ　㊦295
ウェルズ　㊦220
ヴェルレーヌ　㊤210
ウォーレン　㊦348
有情　㊦125
宇宙飛行士　㊤79㊦259
右脳　㊦317
右脳ブーム　㊤274
エイシンガ　㊦348
慧根　㊤49
依正不二　㊤28, 221㊦11, 50, 126, 128, 131, 132, 133, 134, 136, 137, 139, 146, 156, 161
エスキュロール　㊦124
SDI　㊦140
エックハート・ヘス　㊤221
エックルス　㊤55, 147
エドマンズ　㊦348
エドワード・ケネディ　㊤85
依報　㊤28㊦127, 132, 165
縁　㊤71, 170
演繹的　㊤94
縁覚　㊤244, 245, 246
閻浮提中御書　㊤139
円満の業　㊤72
老い　㊤147
大賀一郎　㊤194, 288
大賀ハス　㊤194
太田入道殿御返事　㊦243
大伴家持　㊦24
緒方洪庵　㊤50
御講聞書　㊤38, 230㊦326
淤泥不染　㊤297
乙御前御消息　㊤193
オルペウス派　㊤63
御義口伝　㊤25, 66, 72, 112, 123, 140, 180, 221, 251, 302, 304, 306, 307, 311 ㊦31, 73, 93, 102, 107, 108, 109, 110, 163, 193, 311, 340, 343, 359
怨憎会苦　㊤123

〈か行〉

我　㊤67, 136, 138, 140, 171, 173, 272, 318㊦30, 84
カール・ドブラーレ　㊦306
カール・プリブラム　㊦317
カール・ユング　㊦203
ガイア仮説　㊤78
壊血病　㊦26, 28
開目抄　㊤248㊦192, 194, 198
可延定業書　㊦82, 85, 86
科学と宗教　㊤76, 108
科学万博　㊤199
餓鬼界　㊤244, 245
覚醒剤　㊦50
核の脅威展　㊦279, 294
核の夏　㊦139, 140
核の冬　㊦139
呵責謗法滅罪抄　㊦189
カゼ　㊦291, 292
家族性大腸ポリープ症　㊦83
華陀　㊤97
火大　㊤162, 163
価値論　㊤54
合掌　㊦110
カトリック　㊦347
迦弐志加王　㊤113
カプラ　㊤203
カラン・シン　㊤280
ガリレオ　㊦242, 307
ガリレオ力学　㊦152
カロザーズ　㊤176
ガン　㊤89, 216, 218, 233㊦13, 53
ガン遺伝子　㊤169, 218
環境世界　㊦122
環境の影響　㊤40, 41
還元主義　㊤131
ガンジー　㊦279

索　　引

※㊤, ㊦は巻数をあらわす

〈あ行〉

アーサー・ケストラー　㊦203
愛別離苦　㊤123
アインシュタイン　㊤94㊦220, 295
秋元御書　㊦310
悪業　㊤167
芥川龍之介　㊤17
阿闍世王　㊦188
阿育大王　㊤113
熱原　㊤174
熱原の法難　㊦199
アドレナリン　㊦124
阿摩羅識　㊦316
阿頼耶識　㊦316, 320
アリストテレス　㊦347
アレキサンダー大王　㊤284
アレニウス　㊤20
アンデルセン　㊤23
安楽　㊦60
安楽行品　㊦60
安楽産福子　㊤23
安立行　㊦61
医学気象予報　㊦123
石川啄木　㊦234, 235
意識　㊦315
石毛直道　㊤26
イシドール・グナール　㊤261
以信代慧　㊤141, 314
以信得入　㊤141
一往　㊤71
一代聖教大意　㊦110
一念　㊤134, 136, 141, 181, 227, 229, 235, 237, 239, 240, 262, 321 ㊦30, 129, 184, 192, 340
一念三千　㊤228, 229, 234, 235, 237, 238, 239, 240, 242, 258, 259, 262, 316 ㊦134, 217, 235, 339
一念三千理事　㊤71
一念と宇宙　㊤227
一生成仏　㊤322
一闡提　㊤173
遺伝　㊤36, 39, 45
遺伝子　㊤30, 33, 37, 41, 45, 88, 168, 169㊦265
遺伝子工学　㊤50㊦263
遺伝子操作　㊤89
遺伝子の組み合わせ　㊤61
遺伝子の構造　㊤55
遺伝情報　㊤31
遺伝と環境　㊤48
遺伝の仕組み　㊤36
遺伝の法則　㊤38
遺伝病　㊦281
医方明　㊤103
今西錦司　㊦154
岩倉具視　㊦233
因　㊤71, 170
因果　㊤57
因果倶時　㊤297, 307, 309, 310, 312㊦103
因果倶時論　㊦201
因果不二　㊦137
インターフェロン　㊦17
インターロイキン2　㊦286
インフルエンザ　㊦289
ウィーナー　㊦338
ウイクラマシンゲ　㊦305
ウィリアム・アダムス　㊦215
ウィリアム・ブレイク　㊤150
ウィルソン　㊤151
上野尼御前御返事　㊤194

著者略歴

創価学会名誉会長、創価学会インタナショナル(ＳＧＩ)会長、日蓮正宗法華講総講頭。富士短期大学経済学科卒業。創価大学・(財)民主音楽協会・公明党他の創立者
1983年、国連平和賞受賞。モスクワ大学・ソフィア大学名誉博士。北京大学・復旦大学・サンマルコス大学名誉教授。
主な著書に『池田会長全集』(全10巻)、『人間革命』(現10巻)、『21世紀への対話』(Ａ・トインビーとの対話集)、『人間革命と人間の条件』(Ａ・マルローとの対話集)、『「仏法と宇宙」を語る』(全３巻)、『闇は暁を求めて』(Ｒ・ユイグとの対話集)、『二十一世紀への警鐘』(Ａ・ペッチェイとの対話集)、『社会と宗教』(Ｂ・ウィルソンとの対話集)など多数。

生命と仏法を語る　下巻
検印廃止
定価　一三〇〇円
昭和六十一年十月三十日印刷
昭和六十一年十一月十八日発行
著者　池田大作
発行者　富岡勇吉
発行所　株式会社　潮出版社
東京都千代田区飯田橋三―一―三
電話　東京(03)230一四六八(編集部)　230〇七四一(販売部)
東京五―六一〇九〇　郵便番号一〇二
(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。)

印刷　大日本印刷株式会社

©D. Ikeda 1986, Printed in Japan.
ISBN4-267-01096-X　C0015　¥1300E
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めて下さい。